

第2部

学部・研究科のFD活動報告

・ 法文学部、人文社会科学研究科	2
・ 教育学部、教育学研究科	11
・ 理学部	31
・ 医学部	35
・ 歯学部	50
・ 工学部	68
・ 農学部、農学研究科	103
・ 水産学部、水産学研究科	117
・ 共同獣医学部	131
・ 理工学研究科	147
・ 医歯学総合研究科	187
・ 保健学研究科	198
・ 司法政策研究科	205
・ 臨床心理学研究科	211
・ 連合農学研究科	219

法文学部・
人文社会科学
研究科

法文学部・人文社会科学研究科 FD 活動報告

法文学部・人文社会科学研究科においては、従前から取り組んでいる 1. 法文学部学生による授業評価アンケート調査、2. 法文学部授業公開・授業参観（研修授業）、4. 人文社会科学研究科授業評価アンケート調査、5. 人文社会科学研究科 TA アンケート調査を実施した。これらに加え、今年度は 3. 法文学部 FD 研修会を開催した。これらの成果は以下のとおりである。

1. 法文学部学生による授業評価アンケート調査

今年度の授業評価アンケートは、6月25日から7月13日の間、各教員が担当授業のいずれか一つを選ぶ形で実施された。調査方法等について、平成23年度に大きく2つの変更を行った。その一つは、アンケート用紙の質問項目を簡素化・整理し、より回答しやすいものとしたことであり、もう一つは、実施時期を授業公開・授業参観も実施される後期から前期に移し、業務の分散化と学生・教員・事務職員の負担の軽減に配慮したことである。平成25年度も昨年度に引き続き、これを全面的に踏襲し、実施した。実施率に関しては、23年度および24年度が90パーセント以上の高い数値を維持しているのに対して、25年度は70パーセント台に落ち込んでいる。これについては、昨年度まで後期に実施していた授業公開・授業参観を今年度は前期に実施したことにより、授業評価アンケートと実施時期が重なったことに起因する可能性がある。26年度は授業公開・授業参観が後期に実施される予定なので、それによって授業評価アンケートの実施率がどう動くかに注目する必要がある。また、アンケートが行なわれた授業の形態を分析すると、講義とそれ以外の演習・実習・実験が55:45の比率であった。学科毎の結果を分析すると、おおむね以下ようになる。

1.1. 法政策学科

(1) 講義

昨年度及び一昨年度よりも数値が悪化している項目は、「(3) あなたは不明な点を積極的に教員に質問した」、「(4) この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した」、「(7) シラバスで提示された学修目標に到達した」、「(8) この授業に対するあなた自身の受講態度の総合評価を10段階で回答してください」、「(9) この授業はわかりやすいものであった」、「(10) 教員は授業の目標をはっきり示した」、「(13) 教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた」、「(14) 質問や意見に対して適切に対応してもらえた」が挙げられる。

他方、「(1)-1 あなたのこの授業への出席状況について」、「(2) あなたは授業に意欲的に取り組む努力をした」、「(6) この授業に対して満足している」などは悪化していない。

これらのことから、学生側はまじめに勉学に取り組もうとしているものの、自らが理解できていない点や各コマの到達目標等を明確に認識できておらず、質問や意見に対する教員側の対応に必ずしも満足できていないことから、積極的な質問や能動的学習に取り組むところまで至っていないことが推測される。

教員側としては、各コマごとに授業の目標を明示することが必要であろう。また、学生の能力や興味・関心の度合を踏まえつつ、理解を促すよう創意工夫を行うのはもちろんのこと、学生の理解度を頻繁に確認し、授業中の質問やオフィスアワーの利用を歓迎する旨のメッセージを積極的に発信するなど、学生が自発的に学ぶ意欲を高める努力が求められていると思われる。

(2) 演習

従来から、講義の評価と比較して演習に対する評価は高い水準にあるが、今年度はほぼ全項目で以前にも増して高評価となっている。特に、「(1) あなたのこの授業への出席状況について」、「(5) 授業を通して、自分にとって発見があった」、「(6) この授業に対して満足している」、「(9) この授業はわかりやすいものであった」、「(11) 教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」、「(14) 質問や意見に対して適切に対応してもらえた」、「(b) 授業で教員の発問や誘導が適切であった」は、5段階評価で平均値が4.5前後と非常に高い数値となっている。

また、「(3) あなたは不明な点を積極的に教員に質問した」は、5段階評価の平均値が過去2年より1ポイント以上も上昇(2.68、2.69→3.83)している。

教員側の努力により授業の改善が図られ、その結果、学生の意欲も高まっていることが窺える。

今後、講義の授業改善の図っていく上で、今回演習に高い評価をもたらした取組を取り入れていくことが有用であると思われる。

1.2. 経済情報学科

(1) 講義

昨年度と比較して、評価は全体的に若干の上昇傾向にある。その要因としては、第1に、今年度は回答数が上昇している点、第2に、教員の努力が一定程度実を結んでいる点を指摘できるだろう。ただし、上昇傾向といっても、多くの項目についての評価は若干上昇しているか、あるいはほとんど変化していないかであり、評価の分布も著しく変化しているわけではない。また、「(6) この授業に対して満足している」の評価が低下しており、授業への取り組みに対する教員側のより一層の努力が求められる。「(14) オフィスアワーの活用」については工夫が必要だろう。「(17) 学生生活の支援」については、昨年度・一昨年度と同様に学生の不満が浮き彫りになっており、物理的に解決できる部分は教員側が早急に努力していく必要があるだろう。

(2) 演習

演習については、昨年度と比較して、評価が全体的に若干高くなっている。教員の努力が実を結んできているといえよう。ただし、「(12) 教員は時間通りに行った」および「(15) この授業に対する総合評価を10段階で回答してください」の回答は悪化しているため、教員のさらなる努力が引き続き求められる。また、例年のことながら、演習についてのアンケートは教員と学生が見えるところで行うことになり、どうしても講義よりも匿名性が損なわれてしまい客観的な評価になりにくい側面がある。したがって、アンケートの取り方も依然として今後の課題となるであろう。

1.3. 人文学科

(1) 講義

今年度は、質問項目自体は昨年度と同一である。各質問項目の平均値は、多くの質問項目で上昇傾向をみせている。これは、(1)および(2)という低い評価の減少に起因するものである。言い換えれば、平均的に質の高い授業が増加したということである。しかし、オフィスアワーの利用はこれまでどおり低い数値を示している。この結果は、学生が質問等をしやすい環境が整備されていないということを示唆している。総合すると、授業面では教員側の努力が評価されつつあるが、学生のアクティブな参加を促進するという面では、まだ改善へ向けた努力の余地があると考えられる。

ただし、アンケートはその授業に出席した学生を対象にしておこなわれているので、授業がつまらない

とあって欠席した学生の意見は反映されない仕組みになっている。したがって、低い評価が減少したということ、授業の質の向上にただちに結びつけるわけにはいかない。アンケートに反映されない潜在的な問題点は、アンケートでは掘り起こすことが困難なのである。

(2) 演習

新カリキュラムの学生が4年生になり、ゼミ体制になってはじめて卒論指導がおこなわれた。ゼミは「演習」である。「演習」において分かりにくい授業や目標のはっきりしない授業等、マイナスの評価が減少傾向に動いたのは、ゼミという学生主体の授業のためであると推測できる。今後注目していくべき点であると思われる。

全体の傾向としては、おおよそ例年並みの結果が出ている。

2. 法文学部授業公開・授業参観（研修授業）

今年度の授業公開・授業参観は、6月24日から7月19日まで実施され、法文学部の全教員に対して、期間中に1コマ以上の科目を公開するとともに、公開される授業の中から1コマ以上参観することが求められた。また、平成23、24年度に引き続き、FD活動をより実効あるものとする目的で、授業参観報告書の中に「授業をよりよくするアイデア」を募集する欄を設け、各教員の幅広い意見を募った。その成果は、おおむね次のように総括される。

2.1. 授業公開実施による成果について

全員参加による授業公開・授業参観は、今年度で8年目を迎える。過去7年間の取り組みを通して、さまざまな工夫や改善が図られてきた。

これまでの工夫や改善は講義形式の授業に関しては以下の3点に要約される。

- (1) 受講生の興味・関心を高めるための工夫や改善
- (2) 受講生の理解度を高めるための工夫や改善
- (3) 双方向的な授業スタイルを確立するための工夫や改善

授業公開報告書・参観報告書の回答からまとめると、(1)については受講者の関心が高いテキストの選択や公務員試験問題など実践的な課題の利用、実体験や実例による説明、アクチュアルな問題に関連付けた解説、受講者の興味を引きそうな知識を意識的に盛り込むなど、種々の工夫が試みられている。

(2)については学生の理解度に応じた講義はもちろん、講義レジュメや補足的資料の配布や板書の工夫、図表や映像（パワーポイントやDVDなどの映像資料）を用いた解説、学習連絡シートや質問票、小テストなどによる理解度の確認等、それぞれ講義の形態や内容に即して受講生の理解度を高める試みが採り入れられている。

(3)に関しては、受講生の質疑応答を促す雰囲気づくりに始まり、質問票や小テストなどを用いた講義内容のフィードバック、個人やグループでの発表や報告、プレゼンテーション、集団討論等を採用し、教員から学生への一方通行を避けるさまざまな試みが行われている。

演習形式の授業については、改善や工夫は次の2点にまとめられる。

- (1) 受講生の自発的な発言や学習姿勢を引き出すための工夫や改善
- (2) 受講生同士の意見交換や討論を活発にするための工夫や改善

これらに関しては、受講生が発言しやすい授業の雰囲気づくりや、受講生の関心を惹くテキストや問題（たとえば公務員試験など）の採用に始まり、個人やグループ単位での発表や報告、プレゼンテーション、集団討論等を取り入れるなど、それぞれの授業内容に応じて種々の工夫が行われていることが読み取れる。

また参観報告書の「工夫していると感じた点・取り入れたい点」からは、参観者が他の授業から改善のヒントを得ていることが窺える。とりわけ経験の浅い教員にとっては、講義形式の授業を含め、他の教員に参観してもらうことによって、授業内容や授業方法など全般にわたり有益な助言や示唆を得ていることが読み取れる。授業方法はそれぞれの講義や演習の内容と密接に関わっており、必ずしも改善方法が参考にならない場合もあることは言うまでもないが、継続的な授業公開・授業参観の取り組みが着実に授業改善につながっている状況が確認できよう。

2.2. 授業公開の現状と今後のあり方について

まず、今年度を含めた過去5年間の授業公開・参観の状況を下に表で示す。

	2009年度 (後期)	2010年度 (後期)	2011年度 (後期)	2012年度 (後期)	2013年度 (前期)
(A) 公開された科目数	83科目	80科目	80科目	87科目 (107コマ)	91科目 (112コマ*)
(B) 参観者数	40名	39名	48名	48名	46名
(C) 参観率 [(B) ÷ (A)]	約48%	約49%	60%	約55%	約51%
(D) 参観者のいた科目数	34科目	30科目	28科目	29科目 (31コマ)	32科目 (32コマ)
(E) 被参観率 [(D) ÷ (A)]	約41%	約38%	約35%	約33% (約29%)	約35%
(F) 推薦授業の参観者数	6名	6名	11名	4名**	

*コマ数には同一授業の複数回の公開が含まれる。

**2012年度は経済情報学科で推薦授業の指定なし。

***2013年度は全学科で推薦授業の指定なし。

(1) 参観者数（参観率）

今年度は公開科目（A）が91コマと過去最高を記録し、公開コマ数は112コマにのぼった。教員が積極的に科目提供に応じてくれたことが分かる。一方、参加者数（B）は46名で昨年比で微減となった。そのため、（C）の参観率は昨年から4ポイント低い51%にとどまった。

(2) 被参観率

被参観率（E）は昨年比2ポイント増の35%となった。参観者のいた科目数（D）も3科目増え、過去3年の漸減傾向に歯止めがかかった形となっている。

これらの数字をどのように評価するか見方は分かれるだろう。まず母数となる（A）の公開科目数と公開コマ数の増加は、教員が進んで担当科目を複数または複数回公開していることを示している。ここには教員の公開授業の意義に対する理解と、参観教員から積極的に授業への意見やアドバイスを得ようとする姿勢が窺えよう。

また参観者のいた科目数も4年ぶりに増加に転じた。これはアンケート回答にもあるように、実施

時期を従来の後期から前期に変更したことで、これまで提供されなかった授業科目が公開されたことにもよると推測される。

一方で参観者数がわずかながら減ったことについては種々の原因が考えられる。アンケート回答にある、授業公開・授業参観制度に対する疑問や形骸化の指摘からは、現在の制度が必ずしも構成員全員に評価されていないことが窺える。しかし公開科目数・コマ数の増加を踏まえると、むしろ制度の必要性を理解しながらも、参観できない事情や状況があると見るべきかもしれない。

2.3. 授業公開制度の改善に向けて

次に報告書の「授業公開・参観に対する意見」を参考に、今後の授業公開のあり方について、以下の3点を中心に考察を行いたい。

- (1) 実施時期・実施期間について
- (2) 実施方法について
- (3) 実施内容について（推薦授業等）

(1) 実施時期・実施期間

今年度は多くの教員の要望や昨年度の本委員会での検討結果を受け、前期に授業公開を実施することができた。今後の隔年での前後期実施に向け、スケジュールや手順に道筋がついたことはささやかな収穫と言える。

しかし委員会発足から間もないため、準備や周知に時間がかかり、実施期間は昨年より1週間短縮し、4週間とせざるを得なかった。参観者数が昨年比でわずかながら減少したのは実施期間の短縮によるところもあろう。アンケートの回答からは前期実施を歓迎する声が多く聞かれたが、一方でむしろ「後期よりも忙しく参観の時間が取れない」という意見も出た。

場合によっては実施期間を短縮する代わりに、期間内（たとえば2週間）の授業をすべて原則公開とすることで参観の環境を改善する方法も検討されて良い。

参観者数の向上を図るために 将来的には年2回（前後期）の授業公開 も検討すべきかもしれない。

(2) 実施方法

昨年度に引き続き今年度も複数科目の提供に加えて、同一授業の複数回の公開も呼びかけた。その結果、公開科目は91科目（昨年比+4）、公開コマ数も112コマ（昨年比+5）と過去最多を更新した。法政策では15名の教員が計30コマを提供するなど、参観条件の改善が図られた。参観された科目が増えたのはこうした教員の積極的な協力姿勢によるところが大きい。今後も継続すべきと考える。

一方で、参観者数と参観率の低下に歯止めがかからなかったことは反省材料である。下記(3)の実施内容と併せて総合的に検討を進めたい。

(3) 実施内容

今年度はFD委員会による推薦授業の指定を見送った。有意の判断材料に不足すること、教員の専門が異なるため、一律に推薦指定を行えないことがその理由である。

全体として今年度は参観科目数が増えた半面、参観者および参観率は昨年比で減少した。

公開科目ならびに公開コマ数の増加やアンケートの回答からは、教員が総じて授業公開の意義や必要性を理解し、積極的に公開および参観に関わっていることが窺える。

この一見矛盾する状況をどのように理解すべきであろうか。おそらく、人文の教員の回答にあったように、「自分の授業についてはいつでも参観していただいて結構。しかし自分自身なかなか参観の時間が取れない」という教員が多いのではないだろうか。

そこで来年度（後期実施）は実施に先立ち、学科ごとの参観状況を調べたり、昨年度および今年度と続けて参観しなかった教員からアンケート等で事情を聞くなどして、さらに参観しやすい環境を検討する必要があるだろう。

とりわけ、参観しやすい環境づくりについては、参観された科目が事前連絡を必要としない講義科目に集まる傾向がみられる。したがって 今後は「事前連絡不要」の公開授業科目をできるだけ増やすべく、教員の理解を求めていく必要があると思われる。 できれば事前連絡不要を原則とする共通認識の確立が望ましい。

また必ずしも 90 分（授業時間）すべて参観する必要のない場合もあるだろう。加えて、同一時間帯に複数の授業を参観したいという場合も考えられる。したがって授業公開科目を募る際に、授業時間中の入退出の可・不可についても事前に授業担当者に尋ねておく のが望ましい。

一方、一種の「研究授業方式」については、「同じ授業を多くの先生が参観し、様々な視点から改善策等について話し合いを行うのは非常に有意義」との回答も寄せられたが、通常の授業に支障が出るおそれや、従来の授業参観に加えて実施した場合の教員の負担増に対する懸念が指摘された。また「研究授業」が何を指すのかという理解も不十分で、検討に向けてはまず本委員会から具体的な提案や説明を行い、意見を聴取する必要があるだろう。上記の指摘も含めて、むしろ従来型の方式の改善の中で、長期的に検討すべきかもしれない。

3. 法文学部 FD 研修会

(1) 趣旨

平成 24 年 8 月、中央教育審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」を答申した。生涯学び続ける力、主体的に考える力、未知の時代を切り拓く力を持つ人材を大学が育成していくために、主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学習を中心とした、学生の主体的な学習を促す質の高い学士課程教育への質的転換が必要であるとの提言が行われている。

一方、本学部では、人文学科において平成 22 年度より「取材学習を取り入れた循環型初年次教育」導入などの大幅な教育プログラム改革を実施しています。また、平成 24 年度からは法政策学科及び経済情報学科の教員を中心に、時事問題学習や小学校出前授業を取り入れた新たな社会科学教育プログラムの開発を進めているなど、前述の答申を先取りする取組が行われている。

そこで、今回、これらの先駆的取組の内容や成果、今後の課題等について学部内で情報を共有し、今後の FD（ファカルディ・ディベロップメント）活動等に生かしていくことを目的に本研修会を企画した。

(2) 主催

法文学部 FD 委員会

(3) 日時

平成 26 年 2 月 10 日(月) 午後 2 時 30 分～午後 4 時

(4) 会場

法文学部棟 1 号館 2 階 201 号室

(5) 出席者

法文学部教職員 24 名（教員 21 名(講演者を含む)、事務職員 3 名)

(6) 内容

- ・最近の大学教育改革をめぐる動向について
平井一臣 法文学部長
- ・人文学科教育プログラム改革について
人文学科教授 竹内勝徳先生
- ・社会科学教育プログラム開発について
経済情報学科教授 大前慶和先生

4. 人文社会科学研究科授業評価アンケート調査

今年度の「人文社会科学研究科授業評価アンケート調査」は、6月24日から7月12日にかけて実施された。調査の対象は、各教員の担当授業のうち1科目としたが、博士後期課程を担当している場合は、博士前期課程と博士後期課程それぞれ1科目とした。アンケートの項目内容は、継続性を重視する観点から、従来と同様としたが、今年度は、調査の実施率を向上させるために、学部授業に対する授業評価アンケートと実施期間を同一とし、教員への周知徹底を図った。アンケートの結果は、おおむね次のようにまとめられる。

(1) 大学院課程の授業評価アンケート調査は今回で8回目だが、研究科全体の実施率は74.2%で、前年度の82.1%と比較して、おおよび10%下落した。本アンケート調査は、授業改善のための基礎的データを収集するために不可欠なものであるから、実施率を高い水準で維持するため、アンケート実施に対する各教員の意識向上、アンケート実施依頼の徹底措置が必要であろう。

(2) 今回の調査でも、授業についての5項目(1~5)と受講者に関する2項目(6, 7)のすべてにおいて、5段階評価で4以上の評価が全体の9割以上を占めている。このことから、本研究科においては、受講生のニーズに合った質の高い授業が提供されており、受講者も熱心に受講していることがわかる。また、今年度の調査では、授業の進め方の項目について、5の評価の占める割合が増加しており、教員が教授方法の改善に努め受講者にとってわかりやすい授業を展開したことが明らかになった。そして、このことと連動して、授業内容についての学生の理解度の向上もみられている。自由記述でも、授業や担当教員の熱意や教授方法に対する肯定的評価が多くみられた。その一方で、質問や個別的な指導を受ける時間がもっと欲しい、一方的な講義で内容が少しわかりにくかったとの声もあり、教員側に、学生の理解度に応じた、さらにきめ細やかな対応が教員に求められる場合があるようにも思われる。

(3) 過去7回の調査と今回のアンケート結果を比較しても全体的傾向は一貫しており、全ての調査において全項目は5段階評価で一貫して高い評価を得ている。こうしたアンケート結果の一致は、本研究科の授業に対する受講者の満足度が高いことを示しているといえよう。

以上のように、人文社会科学研究科では、受講者から高く評価される効果的な授業が実施されている

と評価することができる。今後は、このレベルを維持するだけでなく、さらにより高いレベルの授業を構築していくために FD 活動に取り組んでいくことが望まれよう。

5. 人文社会科学研究科 TA アンケート調査

「TA アンケート調査」は、授業における教育支援者としてのティーチング・アシスタント（教育助手。以下、「TA」と記す）の在り方を教員間で検討することを目的に、平成 19 年度より開始された。今年度は、法文学部後期授業に TA として働いた人文社会科学研究科の学生全員を対象として、平成 26 年 1 月 15 日から 2 月 5 日にかけて実施された。その結果は、以下のようにまとめられる。

(1) TA に対するアンケート調査は今回が 7 度目であったが、全ての TA 担当者からアンケートの回答を得ることができ、TA の活動実態を知る上で有意義なデータが得られた。

(2) 「事前準備」「教員の指導等」「TA のメリット」の項目の結果から、TA は教員との間で適度な連絡をとりつつ、熱心に業務に従事し、TA 制度が効果的に実施されていることが確認できる。また、「TA の負担」については、研究活動等の大きな支障にはなっていないが、演習の場合、学部生の授業準備の程度によっては負担を感じている場合もあった。この点については、指導教員が TA の状況および演習を受講している学部生の状況を把握し、柔軟な対応をとることが求められるだろう。

以上の結果から、今年度も、人文社会科学研究科の TA 制度は、学生へ教育経験の機会を提供し、業務の遂行も高く評価できることが確認できた。今後も継続し、さらに充実した制度となるよう努力していきたい。

教育学部・ 教育学研究科

1章 授業アンケート回答の分析

1. 授業アンケート質問項目の見直しについて

今年度の学生による授業アンケートは、質問項目内容の見直しを行った。削除した項目、あるいは修正した項目は、受講にあたって、学生がどれだけ義務を果たしたか等の学生側の義務や態度を問うような内容である。それよりも、授業に対して、あるいは授業に関連する事柄に関して、受講者側がどのように受けとめたかを問うような内容、あるいは問い方に統一した。

したがって、過去数年間の授業アンケートとの比較や変容の分析は行わない。また、昨年度と同様、回答の選択肢は4段階評価で行った。5段階評価で「どちらともいえない」などのような選択肢を排除し、プラスかマイナスのどちらの評価かをできるだけはっきりさせたかったからである。

また、学生による授業および教員に対する評価はあくまでも主観的なものであり、これを授業や教員に対する客観的評価に加えることにはなじまない。

2. 授業アンケート回答の分析

後に示した学生による授業アンケートへの回答から、以下のようなことを読みとることができる。

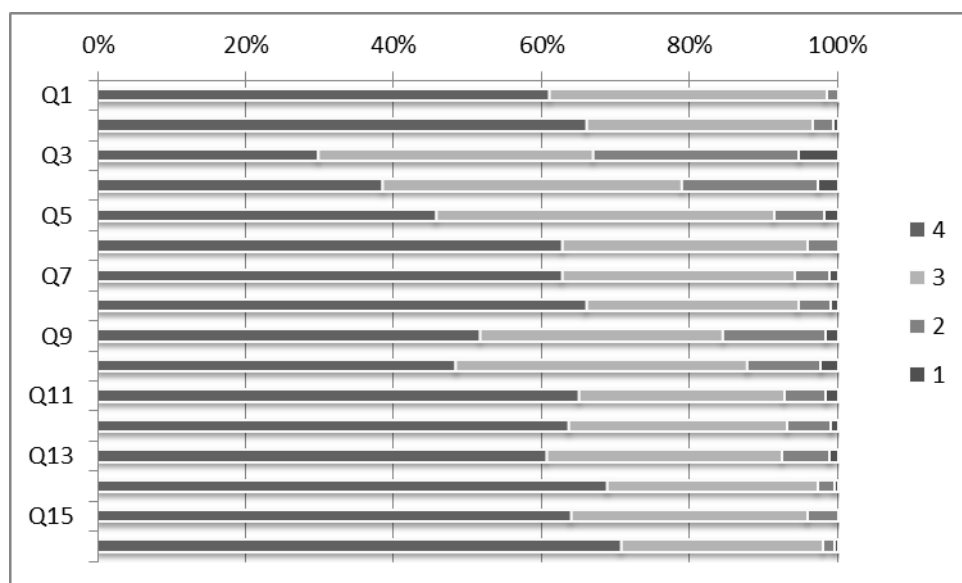
- (1) 全体的にみて、授業や教員に対して学生はだいたいプラスの評価を下している。
- (2) マイナスの評価は少ないが、一番マイナスの評価が多くなっているのは、Q3の予習・復習が不可欠な授業になっているかという項目であった。
- (3) 次にマイナスの評価が多くなっているのは、授業中に質問や発言がしやすい雰囲気であったかという項目である。
- (4) 前2項から、学生が主体的に活動したり参加したりするような授業のあり方の工夫に改善の必要が一番あるように思われる。
- (5) 示されたデータだけでは分からないが、授業アンケートはたいてい教員一人につき1科目となっているので、アンケートを実施していない科目に対する学生の受け止め方にどのような評価が下されているかは今後検討が必要かもしれない。
- (6) 授業アンケートを実施していない教員もいるので、全ての教員がアンケートを実施できるような働きかけと工夫が今後必要である。
- (7) 自由記述欄は、分析の困難さから省いているが、自由記述欄を設けると学生の直接的な意見や要望が分かるかもしれない。

3. 学生による授業アンケートの集計結果

下に授業アンケートの集計結果を示す。

No.	質問事項	4	3	2	1	未回答	重複回答	平均値
Q1	授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。	977	599	25	2	12	0	3.59
Q2	授業の進度は適切でしたか。	1063	492	49	8	3	0	3.62
Q3	授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか。	480	598	449	85	5	2	2.91
Q4	授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか。	621	651	298	43	3	1	3.15
Q5	授業内容は理解できましたか。	737	736	112	29	1	0	3.35
Q6	大学の授業にふさわしいレベルの内容を学べたと感じましたか。	1010	531	66	3	5	0	3.58
Q7	授業に満足していますか。	1010	506	80	17	3	1	3.56
Q8	授業はあなたのためになったと思いますか。	1068	463	73	16	5	0	3.59
Q9	授業はあなたの知的好奇心を刺激しましたか。	885	561	239	28	3	1	3.43
Q10	この授業の履修を他の学生にも薦めたいと思いますか。	779	633	161	37	5	0	3.34
Q11	教師の話し方は明瞭で聞きとりやすいものでしたか。	1050	447	93	26	0	1	3.56
Q12	教師の説明の仕方は分かりやすかったですか。	1025	474	96	16	5	1	3.56
Q13	資料(板書、プロジェクター、配布資料等)の内容は明瞭に見てとることができましたか。	977	513	104	19	2	0	3.52
Q14	授業は時間通りに行われましたか。	1112	457	41	6	0	1	3.66
Q15	質問には丁寧に対応してくれましたか。	1031	515	64	4	2	1	3.59
Q16	授業に対する教師の熱意を感じましたか。	1140	440	28	6	2	1	3.68

4 そう思う 3 だいたいそう思う 2 あまりそうは思わない 1 そうは思わない



2章 平成 25 年度前期教育学部授業公開報告

1. 授業公開の実施計画

平成 25 年度の教育学部授業公開は、以下のような手順で実施された。

(1) 授業公開の目的と枠組み

「教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業方法・授業運営の改善を図り、教育の質的向上を目指すことを目的とする」が本学部の授業公開の目的であると実施要項に規定されている。このことに基づき本年度も授業公開を実施した。

本年度は、昨年度の実施方法を元にしながらか授業公開の実施時期を後期から前期に変更した。それまで約半月であった公開期間を昨年度と本年度は、約 1 月とそろえた上で公開時期の要因を検討するためであった。授業公開科目は、各教員 1 科目とし、参観者は参観したい授業があった場合、事前のその授業者に連絡を取り、参観の可能性について確認を各自で行ってもらう方法で実施した。

(2) 授業公開科目の調査

事前に教授会で報告した後に平成 25 年 5 月 22 日（水）～5 月 31 日（金）の期間で授業公開に関する調査を行った。調査内容は、①授業公開実施科目名（曜日・時限・科目名・講義室）、②受入可能人数（人数を指定する場合、人数を記載）であり、それらを各専修世話人に報告しもらい、専修世話人は、それらを一覧表にして教育改善委員会の担当者にメールで転送をしてもらった。

(3) 授業公開科目一覧と授業参観報告書書式の提示

各専修世話人から提出された資料を集約し、教育学部全員に授業公開科目一覧表と授業参観報告書の書式を配布するとともに、授業公開実施要項を提示した。授業参観者は、授業参観報告書を提出することを原則とした。また、授業公開科目一覧表は、本学の他学部に対しても送付された。

(4) 授業公開及び授業参観の実施

平成 25 年 6 月 10 日（月）から 7 月 12 日（金）までを授業公開期間とし、この期間中に各教員は、授業公開および授業参観を実施した。

(5) 授業参観報告書の提出

授業を参加した教員は、平成 25 年 6 月 10 日（月）から 7 月 26 日（金）までに、授業参観報告書の提出を求められた。

(6) 授業公開のまとめ

提出された各教員の授業参加報告書をもとに、教育学部教育改善委員会が集約、整理を行った。

2. 授業公開の実施状況

授業参観報告書を集計、整理した結果、平成 25 年度教育学部授業公開の実施状況は以下のとおりであった。

(1) 授業公開科目数

本年度は、公開科目として 100 科目（昨年度 94 科目）の登録があった。このうち 2 科目は、2 名の教員の連名で登録があったものである。1 人で 2 科目の登録を行った教員が 1 名、複数名で 2 科目の登録をおこなったケースが 1 ケースあった。参加教員数は、102 名であった。この数字は、海外への長期出張等を除くと、全員の参加得られたことを意味する数字となり、昨年度の 95 名をも上回るものとなった。

(2) 授業参観件数

提出された授業参観報告書は、27通であり、昨年度の30通（後期実施）と比較してもやや少ないか同等レベルであった。一昨年度が、23名（後期実施、実施期間は半月）であることと比べるとやや多くなっている。これまでの実施結果から最も多かったのが平成20年度の前期の実施のため、参観件数に公開の時期の要因がある可能性がこれまでの報告書に指摘をされていたが、今回の結果は、実施時期を変更することは、改善にはあまり影響がないことを示唆する結果となった。

昨年度より参観期間の延長や実施時期の調整により、参観率の向上を試みてきたが、参観率の向上のためには、他の方法の併用も含めてその実施を検討していく必要を示すものであると考えられた。

3. 授業参観報告書における記述

多くの報告書に共通する内容は、参観でよかった点や工夫や配慮についての具体的な記載であった。以下に「授業参観者が、よい、あるいは取り入れてみたいと評価した授業の方法」と「参観授業の改善のための工夫」の2つにわけて紹介をしたい。

(1) 授業参観者が、良いあるいは取り入れてみたいと評価した授業の方法

【授業の導入】

- ・前回の講義時に学生から集めた演習の体験についてフィードバックする内容から始まり、学生の関心を今回の講義に円滑につなげるような工夫がなされていた。
- ・授業の初めに小テストがあるので、受講生は授業前に配布された資料の重要語句に緑色のマーカーを塗り必死に記憶に努めていた。
- ・授業の最初で、前回の学習内容の項目がパワーポイントで示され、まとめが口頭で述べられるのは、前回の振り返りと今回の授業への発展を理解する上でとても有効だと思いました。
- ・講義の展開が、導入（問題提起）→今日のめあて→本題...となっておりそれぞれにメリハリがありました。

【授業の展開】

- ・あらためて考えたことは、大学の日頃の授業においても、学校現場の今日的課題をできるだけ取りあげることの必要性です。
- ・積極的に学生達に発問していたし、学生達も積極的に答えていた。双方向的な授業になっていたと感じた。
- ・全般的に、和やかな雰囲気の中で、授業が行われていました。
- ・内容がパワーポイントで整理され、それらを手元資料と照らし合わせながら学習できるので、学習者にはたいへん便利で、内容理解に集中できていいと思います。ただ、個人的には、パワーポイント（資料）に学習するポイントがすべて見えるので、キーワード等、少し自分の手を動かさず部分を作ってみてはと感じました。資料のキーワード部分等を抜いたものに、学習者が自分で書き込む等してはと思ったところです。（古い方法かもしれませんが。）
- ・VTRの視聴や、さまざまなエピソードの紹介、学生への具体的な支援策を考えるミニレポートを課すなど、授業内に留まらず、授業で学んだことを実践に生かすことができるように、綿密に準備をされていることが窺えました。
- ・机間巡視やTAを活用し、学生の理解度を把握した上で、講義が進められていたため、大変、理解しやすかった。
- ・教員が提示する事例や学生に実技させる課題も、受講生が興味を示すものを取り上げており、教

材研究等が十分に行われていた。

- ・ 授業の目標設定がわかりやすく設定されており、学生の課題追求がしっかりと図られていました。
- ・ 課題追求に必要な資料や教材が開発されていました。身近なものがおもしろい教材として使えて、楽しい授業展開となっていました。
- ・ 学生の理解を促すために、具体と抽象（活動と言語化）を適切に配置されており、コメントも学生のこれまでの経験を基にしており、定着促進には大切な役割を果たしていると感じました。
- ・ 声量などもメリハリがあり、学生の関心を引きつけるものとなっていました。
- ・ 授業中は常に受講生に対面する方を向き、語りかけるような口調で解説がなされ、受講生が自然体で無理なく授業内容を理解できる環境がつけられた。また、聞き取りやすい声のトーンで落ち着いて受講することができた。授業の要点をまとめたスライドの進行について学生の様子を観察しながらおこなっていた。
- ・ 授業内容と期末試験との関係がわかりやすく説明され、そのためのテキストも用意されている。
- ・ 問題を出し、学生を指名して答えさせ、回答と解説を施す。これまでの学習成果が受講生自身によって確認されるようになっている。
- ・ 配布プリントを音読をまじえて丁寧に紹介し、また興味を引く話題を挙げながら語り、関連情報を図も入れてこまめに板書している。見やすい文字で文の形で書いているので、さらにフリガナも振っているのが受講生にもわかりやすくノートを取りやすい。
- ・ 学生のグループ活動に適切なアドバイスをされていた。
- ・ 要所で実物、実例、実話を示されており、終始集中力を切らさずに真剣に聞くことができました。
- ・ 「あえて資料をつけず受講生自身で探す」というスタイルがとても素晴らしいと思いました。
- ・ スライド講義は鮮やかな資料を提示することで、学生の興味を喚起し、講義内容の理解を促すことができる反面、部屋が暗いため学生が眠くなる、教員の説明が早口になるなどのデメリットがある。本講義では講義室のカーテンをあえて閉めず、部屋の明るさを保ち（それでも後方の席からも十分スライドを読み取ることができた）、スライドの分量を少なめにすることで説明をゆっくりするなど、上記のデメリットに十分に配慮がなされている様子が見えた。
- ・ 笑みの絶えない授業である。
- ・ 冗談を交えつつ動作を交えて説明した点は、学生に理解しやすく記憶に残りやすい指導法で、今後の自分の授業に取り入れたい。
- ・ 大事な点、学生に注意を促す箇所では、ノートテイクのための「間」もきちんと取られていたので、安心してノートを取ることができました。
- ・ 学生のところを回りながら、その技術的なことについてきちんとレクチャーされていました。
- ・ 発表時間を区切り、受講生からローテーションで司会者も立てるなど、参考になる講義を見せていただきました。
- ・ 授業では紙媒体の配布資料のほかに、パワーポイントに写真が多く取り入れられていたり、映像を視聴したり、実物（絵本）が用意されていたりと、多大な労力をかけて準備をしていることがうかがえました。
- ・ 教授内容の体系的にまとめられた資料（紙媒体）とその要点を抜粋し、学生の理解を支援するために追加された提示資料（プレゼンテーション）が準備されていた。提示資料は、要点が赤
- ・ 強調体で記入されているなど、視覚的にも理解されるようなものに工夫されていた。

- ・ 既習事項の内容の復習と理解度を確保することを意図した発問が行われ、それに対して指名された学生が回答する形が取られていた。その際の質問は、単純に記憶していることを想起するものではなく、基本的な原理を踏まえて回答するように配慮されているようであった。
- ・ 実物をつかったロールプレイや視覚とエピソードを取り入れた知識提供といった授業であり、参観して有意義であった。

(2) 参観授業の改善のための工夫

- ・ 部屋が明るいためスクリーンの画像がややぼやけていた。小さい字はまったく読めなかった。パワーポイントのスライドは次々に消えていくので、一人の学生は写メールで画面を撮っていた。
- ・ 授業で使う作業台ではなかったのですが、机や棚、通路に雑然と道具が置かれている箇所がありました（ゼミの学生や卒業生が整理し忘れていたようです）。
- ・ 内容がパワーポイントで整理され、それらを手元資料と照らし合わせながら学習できるので、学習者にはたいへん便利で、内容理解に集中できていいと思います。ただ、個人的には、パワーポイント（資料）に学習するポイントがすべて見えるので、キーワード等、少し自分の手を動かす部分を作ってみてはと感じました。資料のキーワード部分等を抜いたものに、学習者が自分で書き込む等してはと思ったところです。
- ・ 少し離れて座った学生に対して、席の移動を促しても良いのではないかと思った。
- ・ 問題を解かせながら進むスタイルで、意欲のある学生はどんどん力が付くと思われた。後ろのほうの学生が授業についていっているかどうか知ることができたらさらに良いと思われた。

(3) 評価の工夫

- ・ 講義終盤で実施されるミニレポートは、書式が明瞭に構造化されていたり、次回に関連した問いが用意されていたりして、たいへん参考になった。

4. 授業公開のまとめ

教育学部における授業公開は、平成 18 年度から開始され、今年度は 8 回目の実施であった。

授業を公開した専任行員の割合は、100%であった。また、授業参観者数の推移は、図 1 に示したとおりとなった。平成 20 年度の 59 人をピークに、平成 23 年度まで、減少の一途をたどり、昨年度ややその傾向に歯止めがかかったが、今年度は 27 となり、やや低減する結果となった。今年度は、実施時期を前期に変えること（これまで平成 20 年度のみが前期：6 月下旬～7 月上旬の実施）で、参観者数への影響を検討してみたが、昨年度と比較して大きな影響はなかったといえよう。参加者数の増加をめざすには、ここ 2 年間で取り組んできた実施期間の延長や実施時期の変更に加えて、他の取り組みが必要となることを示唆しているのかもしれない。

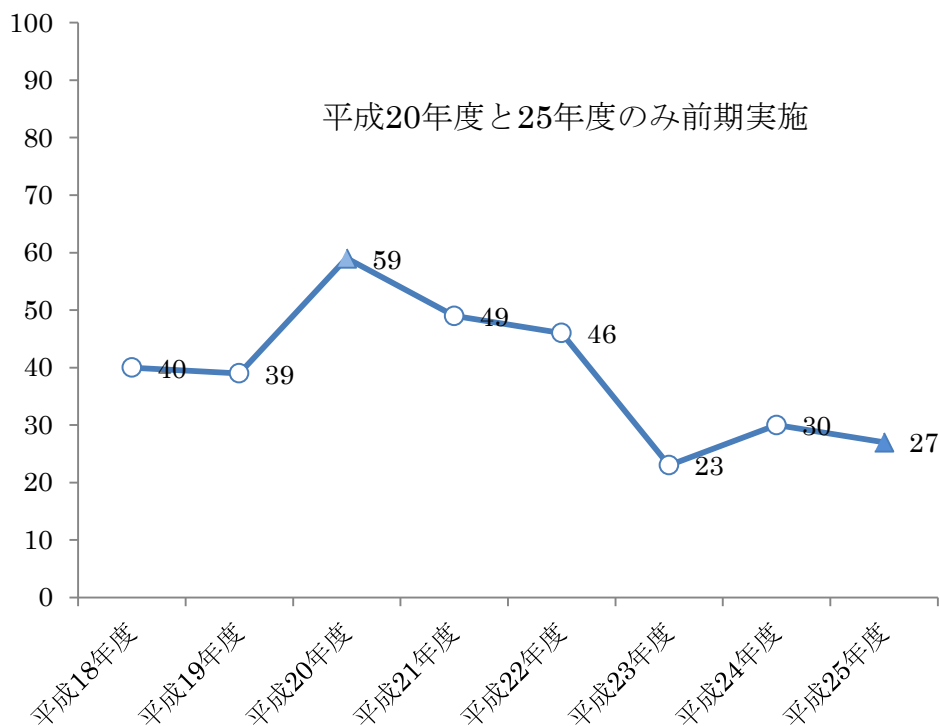


図1 参観者数の推移

本年度も授業参観者の実数の増加は著しくはなかったものの、先に示した「授業参観報告書における記述」からもわかるように、教員の中で様々な授業改善の試行錯誤が行われてきていることが分かる。又参観者もその実践と自らの実践を比較検討しながら、参観に取り組んでいることが分かった。このような授業公開は、教員同士が相互に授業改善にむけた取り組みをシェアする上で貴重なきっかけや教員相互のコミュニケーションの場となる可能性を秘めているものである。より多くの参観者が出てくるような取り組みと仕掛けを検討する必要があるのかもしれない。

3章 教育学部・教育学研究科合同 FD シンポジウム

1. FD シンポジウムの目的

シンポジウムの目的は学生の眼から見た授業改善の方法（tips）を探求すること。さらに今後の活動に資することができるために、tips を文書として蓄積する。

2. FD シンポジウムの実施方法

FD シンポジウムは昨年の形態・テーマを引き継ぎ、3つのテーマについて各3グループずつ設置し、計9グループに分かれてグループディスカッションを行うという形で開催した。各グループは、学部3年生を中心に学部1～3年生6～8人、教員1人、大学院教育学研究科学生1人の計8～10人で構成された。

日時：2013年12月10日

次第：

1. 開会 13:00
2. 基調報告13:00--13:30
3. グループ討論会13:40 -- 14:40
4. 全体報告会14:50 --16:00
5. 閉会 16:00

進行役：学生FD委員長、副委員長

基調報告：

討論のために必要な知識・情報を提供することにより、討論への参加が自然に行えるよう図る。
基調報告者は、濱崎先生（英語）と広瀬先生（教育）に、各15分ずつ行っていただいた。

グループ別討論会：

全部で5グループ。各グループは、教員1名、大学院生1名、学生6～8名から成り立つ（ほぼ昨年度並み）。

グループ別討論のテーマは、5グループのいずれも、つぎの3つテーマのすべてについて討論する。

- (1) 実習の経験を活かした大学の授業改善策の模索
- (2) 卒業論文・修士論文の意義の再考
- (3) 学生と教員のコミュニケーション、とくに課題のフィードバックの方法

3. FD シンポジウムで表出された学生からの意見

(1) テーマ「教育実習の経験を活かした大学の授業とは」に関して

- ・ 学生から出た意見（というより要望）の大半は、実習に行くための『準備』に関わるものであった。たとえば、実習に行く前に、「模擬授業の機会を増やす」「指導案の書き方を学ぶ時期を早める」「模擬授業を行えるように少人数授業にする」「附属学校と連携する機会を増やす」「低学年・複式の指導案の書き方がわからない」、等。

- ・ 実習の時期・期間に関する要望もあった。たとえば、「教育実習（本実習）を2年後期にしてほしい」「特別支援の実習期間を長くしてほしい」「生涯教育の教育実習の時期を早めてほしい」、等。
- ・ 学生は「実践力を付ける」必要があると言う一方、「実習では何を教えるか、どう教えるかのバランスが大切」とも言う。このように抽象的に表現するしかできなかったのは、大学の授業で獲得できる能力が、実践的能力と具体的にどのように関わりがあるのか、が見出せないためであろう。すなわち、私たちの授業の存在理由を、学生は十分に認識できていない現状があるようだ。

(2) テーマ「卒業論文と修士論文の意義とは」に関して

- ・ 学生は「専門性を高めることができる」「問題解決能力を身に付けることができる」「大学4年間の集大成」と認識している。しかし、やはり抽象的で、卒業論文（修士論文）の作成により自分たちはどのような具体的な能力を獲得できるのか、は見出せていない。
- ・ 学生から出た意見（というより要望）の大半は、教育実習の場合と同様、『準備』に関わるものであった。たとえば、「もっと早い時期に卒論のテーマ選びに資する機会がほしい」「ホーム決定時期を早めてほしい」「共通教育が多すぎる」、等。

(3) テーマ「学生と教員のコミュニケーションを増やすには」に関して

- ・ このテーマに関して、学生の意識は、課題（レポート・試験）結果のフィードバックに集中している。とくに、「複数回の評価の機会を設けてほしい」「結果に対するコメントがほしい」「とくに、レポートのどの箇所が良くなかったのかを教えてほしい」「フィードバックにMoodle、メール等を利用するとよい」「評価基準を開示してほしい」「評価基準の作成に学生も関与したい」、等。
- ・ もちろん、直接的なコミュニケーションの機会を求める意見もあった。たとえば、「ゼミ（を増やす）」、「"school" = 『暇』の原義に戻って、学生と教員が共有できる時間を増やしてほしい」、等。

(4) 学生からの質問と教員の回答

- ・ 「卒業論文のテーマ選びにも関係することであるが、他専修のゼミに参加する機会がほしい」
（回答） 学部全体では対応するシステムはないが、教員の個人の判断で対応できる。
- ・ 「このFD シンポジウムで出た良い意見は、教員に伝わるのか、またどのように活かされるのか？」
（回答） 会議の場、および「FD 報告書」で教員には必ず伝える。

(5) 基調報告者（教員）からの意見：

1. 多くの大学で「人間力」や「社会人基礎力」といった、学生の資質や能力を高める目標を目指して、カリキュラム等を再構築している。本大学では共通教育で人間力が、学部としては教員として求められる19の資質能力が設定されており、それらと各講義のつながりがシラバス上で整理されつつあるが、それを拡充していくことが望ましいと考えられる。また、学生たちには、各講義や演習での活動をそうした資質能力の向上の機会として位置づけながら、後のグループワークで議論してほしい。
2. (a) （欧米の大学と比較して）本学では30単位も修得可能ということは、それだけエネルギーを注がなくてもやっつけていける科目が多いということで、これでは学生の力が付かない。
- (b) 予習・復習にそれほど時間もかけずに修得できる講義が単位数が大きい一方で、予習・復習に時間をとられる演習等の方が単位数が小さい、矛盾。
- (c) （欧米の大学と比較して）授業時間も50分を週3回などのように、まるまる一週間空くということが

ない。これは、人間の集中力は90分はもたない、という考え方に基づく。

(d) 他の教育系の大学院では、現職教員に対して2年間を保証しているところもある。「2年目に校務をこなしながらの論文作成は地獄だよ」という話が伝えられている。

4章. 立命館大学 FD サミット 2013 夏・東洋大学 FD サミット 2014 春

1. 立命館 FD サミット 2013 夏

日時：2013年8月24日（土）・25日（日）

会場：立命館大学衣笠キャンパス

【活動内容】

1日目：8月24日（土）

10：00～受付開始

10：30～11：00 オープニング（1. あいさつ 2. 各企画説明 3. 事務連絡）

11：00～12：00 新企画（1.本企画説明 2. メイン企画「学生 FD の歴史と今を考える」 3. 「学生 FD タイムカプセル開封」 4. 新参加大学紹介）

12：20～13：40 ランチしゃべり場（少人数グループに分かれ昼食をとりながらのアイスブレイク。）

14：00～16：30 ポスターセッション

17：10～19：00 懇親会

2日目：8月25日（日）

9：00～受付開始

9：30～9：45 オープニング（1.各企画説明 2. 事務連絡）

10：00～12：00 分科会 I（各テーマに自由に分かれて参加。1. 大学教育の本丸へ突撃☆真夏の学生 FD 作戦会議 2. 解決！学生 FD アンサー 3. 学生 FD 活動の大学間連携）

12：00～13：10 昼食

13：10～14：40 分科会 II（1. 学生 FD 再考 2. 学生発案型授業の可能性と課題 3. それでも僕は考えたい学生 FD への「思い」）

15：00～15：40 エンディング

【活動詳細】

*ランチしゃべり場（アイスブレイク）

東洋大学の学生から共通教育科目の受講生数（700人）の問題が話題に上がった。評価はテストで行われるが果たして大人数を正當に評価できているのかが不安であるという。また、京都文教大学の学生から Twitter やグーグルクロームのサービスを利用した「つぶやき授業」の実例を紹介していただいた。

*ポスターセッション

各大学に共通する問題として、FD系団体の各大学内での認知度が低いことが挙げられる。団体の成立自体がゼミ生同士の集まりを出発点にするものや、大学職員とともに学生がFD団体を組織化したものなどまちまちである。また団体自体の歴史も浅いので、どのように活動を進めていけばよいのか試行錯誤している場合がほとんどである。

*分科会Ⅱ・学生発案型授業の可能性と課題。

分科会はいくつかのテーマを設定しており、各人、自由に分かれて参加することになったが、私は分科会Ⅱの「学生発案型授業の可能性と課題」に参加した。内容は学生が学生の求める授業を念頭に企画・運営された講義に関する報告であった。どれも現実の社会問題（震災のボランティアなど）に対して意欲的に向き合おうとする講義内容であり、学生の意欲の高さが窺われた。しかし、同時に学生のニーズといっても当FDサミットに参加するような意欲的な学生のニーズで授業が構成されているのではないかと疑問をもった。現実的な問題点として授業の評価はどうするのか、ということを実問したが、多くの登壇者は、当該大学の教員と相談しながら、最終的には教員の判断で受講者の評価をしてもらったということだった。

ただし、当分科会のテーマ自体は魅力的であったが、これが教員のFDにどうつながるのかまでは議論が及んでいなかった。単に学生が授業に不満があり別に学びたいこと、取り組みたいことがあるのなら、私的な勉強会やサークル活動を開けばよい。しかし学生にはそうした単位を気にせず、のびのびと知的な活動ができる場として大学が理解されていないのかもしれない。

2. 東洋大学FDサミット2014春

日時：2014年3月8日（土）・9日（日）

会場：東洋大学白山キャンパス1号館・5号館(井上円了ホール)・6号館

【活動内容】

1日目：3月8日（土）

10：00～10：50 オープニング・学生FD概論Ⅰ

10：50～11：35 他大学の学生FD活動取り組み紹介

11：35～12：00 ワーク（自大学分類など）・午後の案内

13：00～16：50 分科会

- ・学生FD活動戦略論、アクティブラーニングとは
- ・他大学のFD活動プレゼンセッション
- ・ダイベート
- ・ポスターコーナー
- ・学生だけ、教職員だけ座談会

2日目：3月9日（日）

10：00～11：50 学生・教職員合同テーマ別しゃべり場

テーマA：学生FD活動の取り組みを考える

テーマ B : 学生 FD 活動について

テーマ C : 大学教育を考える(報告者はここに参加した)

テーマ D : 大学生論

12 : 00~12 : 45 学生・教職員合同テーマ別しゃべり場 成果報告会

13 : 00~14 : 15 自大学の大学最高大作戦作成

14 : 30~15 : 35 学生 FD 活動の今後の方向性を問う

【活動詳細】

<学生側から行える取り組み>

○筑波大学「全学学類・専門学群代表者会議 教育環境委員会」

筑波大学の行っている試みとして「Bridge」の作成が挙げられる。これは言い換えるならば学生が作るシラバスである。筑波大学は多くの学部学科があり、学生は自分の所属する学部学科とは違う学部学科の授業を受けても卒業単位として加算されるという制度をとっているが、一学期で開講される講義は全ての学部学科合わせて 3、000 以上あり、学生が時間割を作る際大変苦労するという意見が毎学期出てきている。その改善策として筑波大学では大学側が作成するシラバスに加えて、学生側の視点で作られたシラバスも作成する事で、学生がより時間割を組み立てやすくしつつも、学生達がより広い分野の学問を学べやすくするように努めている。

鹿児島大学教育学部では教員免許取得のために必修授業が多いため、このような試みをそのまま利用する事は大変難しいが、学生視点からのシラバスがあれば学生側も自由単位を取得する際に、“この授業あまり興味なかったけど受けてみようかな”といったように学生の動機付けに一役買うことができる。更にこのような試みは教員側にとってもプラスに働く事ができると私は感じた。学生視点のシラバスということは、学生が対象となる教員の授業を受けてみた際の感想も盛り込まれているという事である。その感想の中には教員にとっては耳が痛くなるような感想も出てくるだろう。しかし教員側が学生からの自分の授業に対する要求として真摯に受け止めるなら、教員側の授業改善の一助として学生視点のシラバスがうまく機能できると思う。もちろん授業の最後に学生に感想を書かせる教員もいるが、教員に自分の意見が見られるという意識が学生に働き、中々本音を書くことができないのではないだろうか。学生視点のシラバスだと学生が中心となってシラバスをつくるため、普段授業の最後には書けないような本音の部分も学生が書きやすくなるのではないだろうか。

<大学側から行える取り組み>

○教員同士の密な連携の構築

「大学教育を考える」というテーマで他の大学と KJ 法を用いて話し合いを行った際、教員一人一人が学生に教える「知」は断片的になっており、全体像が見えない上に学生側がその「知」の必要性を意識する事ができない授業になっているのではないかという意見が出てきた。大学の教員は自らが研究している分野や内容を学生に教えている。しかし、ある事象を学生に教える際、決してその大学教員が研究している分野や内容だけでは説明できるものではない。更に大学教員自らが研究している分野や内容が自らの生活にどう必要になってくるのかという説明がないまま講義が進むため、その授業に対して積極的に取り組む事ができないという意見が出てきた。そのため学生が大学で学んだ内容をより多面的・多角的な視点を持って自分の生活に活かしていくためには、教員同士の密な連携を構築していく必要があるのではないかという結論に至った。

○学生発案型授業

この学生発案型授業は文字通り学生が主体的に授業を作っていく授業の事を言う。これは一回目の授業で教員側が大まかなテーマを提示する。学生はその後そのテーマに沿った題材を様々提示し、題材を一つに絞る。この活動以降はその題材を基にして、教員が提示したテーマを追求していく。例えばある教員が「イギリスの文化」というテーマを提示したとする。すると学生は「食事」、「文学」、「衣服」などと言ったイギリスの文化に関する題材を複数提示し、その内から一つの題材に絞る。一つの題材に絞ったら、学生はその題材を基に「イギリスの文化」について追求していく。この時教員は学生に対して助言や指導を行うが、学生と一緒に調べてたり考えたりする事もあるそうだ。

私はこの授業方法はそのまま鹿児島大学教育学部の授業にも活用できると思う。小規模授業ではもちろんであるが、特に学生が主授業を作っていく、教員もまた学生と一緒に学び合う事ができるという点で、30～40人程度の中規模の講義において活用されるべきであると感じた。

5章 平成25年度教育研究科教育改善のためのアンケート

1. はじめに

今年は、本学大学院教育学研究科が改組され5年目である。昨年度のアンケート調査からは授業内容・授業形態・研究・学習環境に満足していた結果が得られている。

しかし、課題としては、授業内容や方法面では、「現職の先生を生かした授業」、「教育機関などゲストティーチャーを招く」、「日本だけでなく外国の事例も紹介してほしい」、授業形態に対しては、「グループディスカッションのさらなる充実」といった要望があった。

また、研究・学習環境の面では、更なる環境の充実として、研究生の使用時間の延長、パソコンやプリンタの完備といった要望が挙げられていた。

以上の課題点を踏まえ、本年度は、アンケート調査を引き続き実施し、教育改善の分析に務めることとした。

2. アンケートの実施方法

平成25年度の教育学研究科大学院生による授業アンケートを以下の手順により実施した。

- (1) 調査期間；2014年1月14日（アンケート配布開始）～2月15日（回収締切）
- (2) 対象；教育学研究科全学生を対象（1年生34名、2年生36名、計15名）
- (3) 手法；アンケート用紙（別紙1）にて自由記述アンケートとした。
- (4) 配布方法；共通科目時及び修士論文提出時に配布
- (5) 回収方法；アンケートBOXを事務室に設置した。
- (6) 集計方法；2014年2月末に集計および分析を行った。

3. アンケートの質問項目

調査項目は、①「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業、②「学修コース専門科目等の授業、③研究・学習環境、④その他、要望・意見について、満足している点とその理由、改善して欲しい点を自由記述式で回答を求めた（別紙1参照）。

(別紙 1)

教育学研究科 教育改善のためのアンケート用紙

教育学研究科では教育改善のため、昨年度に引き続き大学院生へのアンケート調査を実施します。つきましては、下記の項目に自由記述にて回答していただき 教務係に設置してある回収 BOXに提出して下さい。

提出期限 月 日 (曜日)

① 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業について意見を書いてください。
<u>満足している点とその理由</u>
<u>改善してほしい点とその理由</u>
② 「学修コース専門科目」等の授業について意見を書いてください。
<u>満足している点とその理由</u>
<u>改善してほしい点とその理由</u>
③ 研究・学習環境（設備、備品、消耗品等）についての具体的な意見を書いてください。
<u>満足している点とその理由</u>
<u>改善してほしい点とその理由</u>
④ その他、要望等の意見があれば自由に書いてください。
ご協力ありがとうございました。教育学部教育改善委員会

4. アンケート記述の結果整理

(1) 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業について

1) 満足している点

表1は、「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における満足している点である。なお、重複する回答は表記せず、回答内容を箇条書きにして記している。

表1 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における満足している点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none">・教養が身に付く・専門性の高い授業内容・幅白い意見や知識の吸収
<p><授業方法面></p> <ul style="list-style-type: none">・学校現場での事例の紹介・少人数でのグループワーク・自分の意見を発表する機会・ディベート等の話し合い活動・オムニバス形式で、多様な領域が学べる

上記のとおり、多様な専門性を有する教員によるオムニバス形式という本共通科目の特色は、内容面・方法面において、大学院生たちから評価されている。また、学校現場に資する学習内容（事例紹介や分析等）についても、評価を得ている。とりわけ、授業方法面においては、少人数のグループ活動において多様な学びが展開されている様子が推察される。

2) 改善してほしい点

改善点については、授業内容面、方法面、その他の3つに類型化された。授業内容については、学習内容と学校現場での接点を明確化する要望が寄せられている。また、共通科目でありながら専門性が高い点や、分野が違くと理解が困難である等、受講生（大学院生）の属性に対する配慮等を望む声が散見される。

授業方法については、グループ編成の方針について、要望が出されている。現職や専攻分野といった異属性からなるグループ編成のメリットはあるものの、時には、同じような属性でグループを編成することで、学びが深まるのではないかという意見であった。

なお、その他の事項として、授業時間に関する要望がなされていた。終了時間を守ってほしいとの要望や、時間帯を検討してほしいという要望である。評点に関する要望や教室環境に関する要望もなされている。

表 2 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における改善点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・内容が分かりにくい授業もある ・学習する意義を見だしにくい授業がある ・学校現場において役立つ内容を、さらに紹介してほしい ・教職に関連する内容に偏りすぎているのではないか ・研究者になるための学習内容もあってよいのではないか ・分野が違い過ぎて理解が難しい点もある ・専門性が高く、共通学習内容なのかと気になることもあった ・論文等は時間をかけて読みたいので、事前に案内してほしい
<p><授業方法面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ編成を多様にしてほしい ・グループメンバーを異属性で編成していたが、同属性等でも編成してほしい
<p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価結果（点数）を出してほしい ・教室が狭いので、もう少しゆとりのある教室に変更してほしい ・講義の時間を守ってほしい ・19:00 時以降の講義は負担が大きい

(2) 「学修コース専門科目」の授業について

1) 満足している点

表 3 を見るに、上記の研究科共通科目と同様に、授業内容面において、その専門性が評価されている。大学院生の研究分野との接点や関連性といった研究志向と学習内容との整合性を求める一方で、他分野の学習から刺激を受けたとの声も確認されている。

表 3 「学修コース専門科目」における満足している点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・他分野の学習内容から刺激を受ける ・専門的な知識・技能を学ぶことができる ・自らの研究内容に即した内容である ・自らの研究したいことが優先的に学習できる ・専門性の高い授業内容であり、自らの研究に活かすことができた

2) 改善して欲しい点

表 4 からは、授業の時間帯や授業時間厳守に対する改善要望が寄せられていることがわかる。開講時間や授業時間については、上記の共通科目においても同様の声が上がっており、大学院生にとって重要な事案であると推察される。また、開講科目数についても、研究の遂行や単位取得の関連性から、要望が寄せられている。

表 4 「学修コース専門科目」の授業における改善して欲しい点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校現場での取り組みを DVD 等で紹介してほしい
<p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・夜の時間帯での開講は負担が大きい ・授業時間をしっかりと守ってほしい ・オムニバス講義で、各担当者がレポート課題であった場合は、負担感があった ・授業の科目数が少ない ・毎年開講してほしい ・単位が必要であり、専門分野に関係しない授業を取らねばならず、研究との兼ね合いが大変であった

(3) 研究・学習環境について

1) 満足している点

研究・学習環境について満足している点（表 5）を見ると、個々人の研究環境（研究室や空調、研究のための器材等）について、院生たちは、およそ満足していると考えられる。また、メールによる教務連絡等が評価されていることが分かる。

表 5 研究・学習環境について満足している点

<p><環境面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・空調が自由に利用できる ・院生用の研究室がある ・研究のために必要な器具や調査環境が整備・提供されている ・研究スペースが確保されている ・教務等からの連絡メール

2) 改善してほしい点

研究・学習環境について改善してほしい点（表 6）は、研究環境面、施設やその利用面、その他の 3 つに整理された。

研究環境面については、機器や備品利用、資料収集面での課題が指摘されている。施設やその利用面では、研究室の利用時間制限（現在 22 時まで）について、改善要望が出されている。また、防犯上の懸念事項（防災扉やカード認証機器の点検等）が提示されている。先に述べた利用時間とも関連するが、夜間の授業や研究室の利用を考えるに、防犯上の懸念については、検討が必要であろう。そして、その他としては、夜間の授業に伴った生協利用について配慮が望まれている。

表6 研究・学習環境について改善してほしい点

<p><研究環境面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・PCを1人1台、貸与してほしい ・プリンタの関連備品（用紙やインク等）を常備してほしい ・研究室所在の論文や文献があり、探し出すのが大変である
<p><施設やその利用面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・院生室の利用時間を24時間にしてほしい ・大学院生の研究室がほしい ・個々人の研究スペースが狭い ・研究棟や音美棟のトイレを改修してほしい ・研究室の窓から隙間風が入り、冬場は寒い ・実験室が南側にあり、薬品等の劣化が心配される ・防犯設備を点検してほしい（学生証を使わずとも入れることがあった） ・理系棟の防火扉が壊れており、外から入れてしまう。 ・音美棟にエレベーターを設置してほしい ・空調が壊れやすいので、点検してほしい ・火山灰等、丁寧に清掃を行ってほしい
<p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・夜間の授業もあるので、エディカ（生協）の利用時間をもう少し長くしてほしい

5. 総括

当アンケート調査から考えるに、「研究科共通科目」や「コース共通科目」、「学修コース専門科目」について、その授業内容や方法は、大学院生たちの学びに資していると考えられる。「専門性の高い授業内容」や「幅白い意見や知識の吸収」、「他分野の学習内容から刺激を受ける」といった回答項目がその証左であろう。

課題としては、多様な分野の共通科目としての内容レベルや、学校での教育実践との関連性や学術性について、受講生たちが改善を要望している点が挙げられる。「分野が違い過ぎて理解が難しい点もある」、「専門性が高く、共通学習内容なのかと気になることもあった」の回答項目が前者に、「学校現場において役立つ内容を、さらに紹介してほしい」や「教職に関連する内容に偏りすぎているのではないか」や「研究者になるための学習内容もあってよいのではないか」といった回答項目が後者に属する。

しかしながら、上述した授業内容の評価点を見るに、こうした改善点が評価点ともなっていることがわかる。

また、こうした評価点と課題点の表裏一体的な関係は、授業方法についても、同様である。「少人数でのグループワーク」や「ディベート等の話し合い活動」が評価されているものの、「グループメンバーを異属性で編成していたが、同属性等でも編成してほしい」といった改善点も寄せられている。

ところで、鹿児島大学大学院教育学研究科教育実践総合専攻は、平成21年4月より、「学校教育専攻」と「教科教育専攻」の2専攻が統合されて誕生した。それは、教科や学問分野に細分化されたコース・専修を融合し、より広範な単位である学修コースを設置することによって現実の課題に即した総合的な講義や研究方法の指導が可能となり、視野の広い高度の専門知識・技能を背景に広く教育分野において

優れた指導力を有する高度専門職業人の養成を図るためである（研究科ホームページより）。

こうした設置の意図から考えるに、上記の表裏一体となった評価点と課題点は、専門性の向上と異分野融合という本研究科の特色を反映していると考えられる。こうした特色について、履修案内に記されているものの、ガイダンス時や共通科目時等において確認していく必要があるだろう。

研究・学習環境については、研究スペースや器具等の提供、比較的自由な研究室の環境面が評価されていることが明らかとなった。また、連絡事項のメール配信も、大学院生の支援として重要な支援となっている。

改善点については、特に研究室利用時間や防犯面が重要であろう。利用時間を 24 時間化することについては、防犯や院生の健康管理の側面から、今後、慎重な検討がなされる必要がある。また、防犯面については、大学院生の研究や大学生活を営むうえで重要な課題であり、対策が必要であると考えられる。

本アンケート調査を通して、大学院生の求める大学院教育について把握することができ、あわせて、これまでの教育改善活動の成果を確認することができた。しかし、施設面や薬品管理面等については、こうした年に 1 度のアンケートで把握することは、迅速な対応を要する場合において、限界があるだろう。

各相談窓口等を明確化・周知し、大学院生が院生生活において気が付いたり、気になったりした事項については、相談・報告しやすいように、配慮していく必要があると考えられる。

理学部

平成 25 年度理学部 FD 活動報告書

平成 25 年度に理学部で実施した FD 活動は以下のとおりである。

- (1) 学生による授業評価アンケートの実施（7 月、12 月）
- (2) 授業公開および授業参観の実施（7 月、11～12 月）
- (3) FD 講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加

以下、それぞれの活動の概要を報告する。

(1) 学生による授業評価アンケートの実施

理学部における授業評価アンケートの目的は、受講学生の率直な声を担当教員に還元することにより個々の授業や学科のカリキュラムをより有益なものへと改善していくことにある。理学部での授業評価アンケートは平成 13 年度に初めて実施され、その際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことを取り決めている。平成 25 年度の授業アンケートは、不定期実施科目、集中講義、教職専門科目、非常勤講師担当科目を除く全科目（前期 74 科目、後期 66 科目）を対象に行われた。アンケート用紙は、授業ごとに受講者分を担当教員に渡し、適切なタイミング（原則として最終講義日）に記入させた。受講者は 13 の質問項目に、それぞれ 5 を最高値（高評価）とする数値で回答する。また、自由記述欄も設けられている。授業担当教員は、（無記名で）記入されたアンケート用紙を所定の封筒に入れ、学生係に持参することとした。

アンケート結果は、授業ごとの回収済みアンケート用紙の現物と、集計したデータを担当教員に返却し、担当教員はそれを参考に授業改善を行う。理学部では、アンケートの集計結果を保存し、必要に応じて学部および学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。以下に平成 25 年度のアンケート結果について報告する。

アンケートの回収率は、実施科目受講者総数に対する回収枚数の割合が、前期が 68%、後期が 64%であり、例年とほぼ同じである。（前年度は、前期が 69%、後期が 68%であった。）25 年度的全質問項目の評価点平均は、前期が 3.68、後期が 3.65 であり、前年度（前期 3.86、後期 3.85）に比べやや低い値である（なお、過去 5 年間の平均点は、3.68 ～ 3.86 の範囲で変動している）。この種のアンケートでは、回答者である受講生にとって最高または最低の評価点はつけにくいと予想されるため、平均点が 4 を大幅に超えることは考えにくく、平均点が 3 の後半から 4 に近いことは、十分に高い評価に到達しているとみなしてよい。従って、今年度の結果も、例年通りの高い水準とあってよいと思われる。しかしながら今年度の結果は、最近 5 年間では最も低い値であるので、これが来年度以降も続く下降傾向とならぬよう、各教員によるいっそうの授業改善の努力が必要であろう。

(2) 授業公開と参観の実施

平成 25 年度の授業公開・参観は、前期は 7 月 1 日から 5 日、後期は 11 月 29 日から 12 月 10 日に行われた。前期の公開授業数は 14 件で参観者数は 3 人、後期の公開授業数は 9 件で参加者数は 0 人であった。教員の多忙化が進む中で、この種のイベントにノルマのようなものを課すと、FD 活動を形骸化させることとなり、教員を FD 活動から遠ざける恐れがある。そのため今年度も昨年度と同様、授業公開・参観への参加は教員の自主性に任せることとし、委員会としては数値目標などを掲げなかった。その結果、参観者数は昨年度とまったく同じであったが、公開授業数は昨年度に続く増加となった。自身の講義と重なる等の理由で参観が困難（不可能）という声は以前から寄せられていたが、一方で、授業の公開は多くの教員が可能であり、実際に年々、授業の公開が増加していることは、FD 活動に積極的に取り組む教員が増えていることを示唆している。参観の有無にかかわらず、公開授業を担当した教員全員が「授業公開・参観報告書」を提出しており、その報告書の内容からも、参加した教員が授業改善に真摯に取り組んでいることがわかる。

(3) FD 講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加

3.1 FD 講演会

理工学研究科・工学部との共同企画として講演会を実施した。講師は、広島大学の迫原修治教授をお招きし、広島大学における独創的な教育プログラム HiPROSPECTS について講演していただいた。広島大学の教育、カリキュラムの問題点とそれに対する独創的なプログラムの試みは、大変興味深く、教員個人の FD 活動に直ちに取入れるという類のものではないが、学科、学部の構成員としてカリキュラム改革を考える際にきわめて貴重な内容であった。

日時：平成 25 年 11 月 6 日（水） 13：30～15：00

場所：鹿児島大学稲盛会館

演者：広島大学大学院工学研究院物質化学工学部門 迫原修治教授

演題：「広島大学の到達目標型教育プログラム（HiPROSPECTS）」

参加人数： 理学系教員 13 名

工学系教員 61 名

他学部教員 2 名

事務系職員 23 名

3.2 学生・教職員ワークショップへの参加

平成 25 年 12 月 17 日に行われた、学生・教職員ワークショップ「自主的な学習のできる学生を育成する教育の推進」に、理学部から教員 3 名、学生 9 名（学部生 6 名、大学院生 3 名）、事務系職員 1 名が参加した。また、ワークショップにおいて、理学部の有馬一成教授による、共通教育科目「有機化学基礎」の事例紹介があった。

医学部

医学部医学科 FD 活動報告

1. はじめに

医学部医学科の平成 25 年度の FD 活動は、望ましい臨床実習を実践するために、特に診療参加型臨床実習の充実が必要となっていることから、昨年度の方針を引き継ぎ、臨床実習担当者が国内で先進的な診療参加型臨床実習を行っている医学部・臨床教育病院の視察を行い、本学の実習に還元することを計画した。また、平成 23 年度から全学年の学生を対象として実施している授業評価アンケートも、学生の教育への自主的な取り組み、学習計画と成果、教員の指導等の評価と改善に有効であることから、継続して実施した。これら医学科 FD 部会の活動を報告する。また、平成 25 年 9 月には、医学教育振興財団の「第 33 回国内医科大学視察と討論の会」が当医学部で開催され、医学教育に関する当医学部の特色ある取り組みについての講演と討論が行われた。この会についても報告する。

2. 筑波大学附属病院及び水戸協同病院での臨床実習見学

筑波大学医学部では、国内で最先端の診療参加型臨床実習を行っており、またそれを支援する総合臨床教育センターが設置されており、スタッフも充実している。また、大学病院だけでなく関連病院での臨床実習も充実しており、本学が学ぶべきことが多い。そのため、平成 25 年度は、筑波大学附属病院と筑波大学医学部の関連病院での臨床実習見学を計画し、指導医に参加を募った。

12 月に小児科の丸山慎介先生、宮園明典先生が筑波大学附属病院を見学し、1 月に神経内科・老年病学の岡本裕嗣先生が、筑波大学附属病院と関連病院の水戸協同病院を見学した。その報告を以下に掲載する。これらは臨床実習委員会（教務委員会医学科部会の下部委員会）において報告された。

【筑波大学学生教育プログラムを見学して】

小児科 丸山慎介、宮園明典

I. カリキュラムについて

まず、総合臨床教育センター・総合診療科の前野教授（鹿児島・鶴丸出身、筑波大卒）からカリキュラムについて丁寧な説明をしていただきました。学生は 4 期までに基礎系講義を終了し、5 期から 7 期までで系統別講義が行われていました。基礎系講義は 4 期までで全てを終了するのではなく、その系統別講義の中にも解剖学や生理学、薬理学などが組み込まれていました。呼吸器系の講義であればまず呼吸器系の解剖や呼吸器生理の講義があり、その後に臨床系講座と病理学とか講義されるといった具合です。なぜこの知識が必要なのか、を感じる事が容易であると思われ、学生にとってメリットのあるカリキュラム構成ではないかと感じました。しかし、このカリキュラムを組むためには講座ごとに計画を立てることができないので、コーディネイト役が重要と感じました。実際、筑波大学では学生カリキュラムや実習のコーディネイトや担当の職員が学生係とは別に存在していました。人員は豊富に配置されており、カリキュラム担当で 9 名の職員、実習担当で 10 名の職員がいるそうです。贅沢な人員配置だと思えます。学生と教員をとりもつ役割であり、講座と講義、実習をより学生の立場になって調整している

ようでした。

また短い期間にまとめているにも関わらず自習時間がたくさんありました。チュートリアル準備などで必要ですが、それだけでなく「講義ではすべて教えません、自分たちで勉強しなさい」というメッセージもあるらしいです。が、どこまで学生に伝わっているかは、なかなか難しいのが現実のようでした。早い段階（1年生のやる気がある時期）で医学の勉強をどのようにしていくのか教える（あるいはイメージしてもらう）のもよいのかもしれませんが。

7期（4年前期）にCBTが行われて、8期（4年後期）から11期（6年前期）までに臨床実習が行われていました。臨床実習の特色としては、期間が長く（1年半、78週）、希望により変更できる部分が鹿児島大学より多い、と思いました。臨床実習カリキュラム作成のみに関わっている職員がいて、学生の個別の希望を汲み取る臨床実習カリキュラム作成が可能でした。また院外の病院との連携により一次・二次診療を手伝い参加する機会を増やし、合わせて大学で抱える学生の数を減らす、という工夫をされて2学年が臨床実習となることを可能としているそうです。確かに大学病院ではなかなか問診をするにも難しい疾患や患者の求めるニーズが高くて学生で行うのが困難な場合も多いと思いますので、市中病院の一般外来で問診をとってどんな疾患が鑑別か考える機会があればいいと思いました。ただ、院外の病院の先生が忙しい中、学生とどう付き合っているのか知りたいところでした。

上記に書いていたように、何らかの形で診療に関わらせることで学生のモチベーションを上げ有意義な実習にできるのですが、2、3週間ではやはり困難なようです。欧米ではそのようになるためには8週間ぐらいは必要と言われていて、内科や外科など主要な科で実習を長くしていると聞きました。

また、11期は4週間×3の臨床実習で、その終了時には、各学生が担当した症例についてポスター形式でまとめ、模擬学会の形で発表する形が取られており、学生に発表の機会が与えられていました。

II. 小児科実習

選択実習ではない必修の実習としては小児系（小児科＋小児外科）で3週間の実習期間が設けられていました。学生の希望に応じてどちらかを2週間（小児科2週間＋小児外科1週間、または小児科1週間＋小児外科2週間）実習する形式でした。小児科を2週間選択した学生に関しては、1週間は大学病院の病棟で3次医療を中心に、残りの1週間は1～2次診療を行っているすぐ近くの関連病院での実習を行うことで幅広い疾患を体験できるように実習が組まれていました。病棟では医師が専門ごとにグループ化されていて実習生はその専門グループごとに分けられるため、見る疾患に偏りが生じることになりました。また学生自信がプレゼンをする機会が非常に少なかったです。鹿児島大学での実習の方がよいと感じてしまいました。

臨床実習に関しては学生によって熱心さが異なることが多々感じられますが、臨床参加型実習を充実させるために「Student Doctor」であることを体感できるような環境を提供することが大切であると感じました。具体的には、患者の問診を取らせたり診察の介助をさせたりということです。学生の方が礼儀正しく振る舞う傾向にあり、患者家族からの不満の声が聞かれることは少ないようでした。また筑波大学では電子カルテに学生記載が可能でした。指導医がそれをカウンターチェックする方式をとって

いました。学生はカルテを何回も書き直してより良い内容にしていっており、カルテ上でも何回書き直したか分かるようになっていました。カルテ記載ができるようになると、「Student Doctor」であることをより体感できるようになると感じました。

Ⅲ. 全体を通して

いいところも悪いところも客観的に見られたのはいい経験でした。そして感じるのは、教員も学生もそれぞれに教育に対して温度差があり、そこが解消されるようないい取り組みはないものか、ということです。学生にもカリキュラムの意味、勉強していく目標、などが感じられる場、認識してもらう時間が必要なかもしれません。あるいはカリキュラム作成に学生も参加するような土壌ができると良いのかな、とも思いました。

【研修報告書】

神経内科・老年病学

岡本裕嗣

私は、1月20日から2日間、「医学科FD部会主催の筑波大学学生指導見学」に応募し、筑波大学と筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター 総合病院水戸協同病院の見学をさせていただきました。筑波大学では教育担当をされている、総合診療グループ長、総合診療教育センター長である前野哲博教授より筑波大学医学部における、学生実習のレクチャーをしていただきました。

筑波大学では平成16年度より、従来の医学教育の枠組みから根本的にかえた新しいカリキュラムを導入されました。新しいカリキュラムの柱は①知識伝達型講義の大幅削減と問題基盤型チュートリアルの前導入。②本格的な参加型臨床実習。③信頼される医療人としての必要な知識・技能・態度を継続して学習する医療概論です。③についてはすべての医学部教育で取り組まれていることと思いますが、新カリキュラムの一番の改革点は、知識伝達型講義の大幅削減と参加型臨床実習に重きをおいたカリキュラムに大きく舵をとったものといえるものでした。筑波大学でのクリニカルクラークシップの期間は全国でも最も長いということです。全国の大学との比較もスライドで提示していただき、当大学も筑波大学ほどではないにしても比較的多い時間がクリニカルクラークシップにさかれている事がわかりました。これはいわゆる従来のポリクリ時間を参加型臨床実習の時間としてカウントしているためと思われました。

当大学でもクリニカルクラークシップは導入され、ポリクリを全てまわったあとの6年時に各科をまわってきていますが、短期間で行われるためか、ポリクリの焼き回し的なものになっている印象があり、開始時期やポリクリとの色分けもしくは融合など検討すべき問題と思われました。筑波大学で行われているクリニカルクラークシップは本学でいうところのポリクリとクリニカルクラークシップを融合させ、より参加型に重点をおいたものになっているということです。イメージとしては研修医とかなり似た様なこともさせているとのこと。開始学年や期間も長期にわたり、また選択性についても学生が

選ぶ幅をもたしているところに特徴があると思われました。その選択性を行う仕組みとして、各科を4～5科よりなる7のユニットにわけ、その1つのユニットを約8週間まわります。この振り分けには同一系統の科だけでなく、同じ病棟やフロアの科をユニットにすることにより、看護師やスタッフなどとも顔なじみになるメリットがあるようです。

このカリキュラムを導入するにあたり、講義のカリキュラムにも工夫がみられました。例えば、医学部の専門教育を1年時4月より開始したり、基礎医学だけを学ぶ時期と臨床医学を学ぶ時期が隔たらないように、最初に基礎医学を学ぶ時期を短くし、臨床医学の講義がはじまる頃に例えば呼吸器であれば、呼吸器内科、外科、と共に呼吸器の解剖や病理を一定期間集中して授業をうけるなどの工夫です。この取り組みは当初、基礎医学系の講座からは授業コマ数がへることなどへの懸念があったようですが、トータルでみるとそれほど短くなっておらず、概ね認知をうけられたようです。またなにより学生への評判もよいとのことでした。

筑波型クリニカルクラークシップの導入当初の学生のアンケートによると、実習時間の長さや、当初は従来型のポリクリがされており、クリニカルクラークシップが実施されているという実感の比率があがってきていないことがアンケートなどから分かりました。新しいカリキュラムが導入され、そのカリキュラムの元で学んだ医師がふえるにつれ徐々に学生達のアンケートなどにも新カリキュラムが浸透していく様子がわかりました。

見学では神経内科病棟を石井一弘准教授に丁寧に説明していただいたのですが、残念ながら学生やクリニカルクラークシップをされている学生達に直接出会うことはできなくて、実習自体が、当大学とどのように違うかなどの実感としての差異を感じるができなかったのが残念です。前野教授も石井准教授もいわれていましたが、まだ実習方法などについては、統一したものがなく、実習システムが確立されている科とそうでない科の差が大きいということで、過渡期のシステムだという印象を持ちましたが、常々医学教育をできるだけ早くはじめることが有益だと考えるものとしては筑波大学の方法は多に参考すべきであるし、ポリクリとクリニカルクラークシップのあり方についてより議論があつてよいと思われました。

筑波大学では臨床実習に携わるスタッフの数が多く、そのパワーをつかって学生のアンケートの集計などを行っており、いくつかの点については、学生実習のフィードバックが行われていると聞きました。私自身も、ポリクリ学生の授業や外来での実習等を担当することがありますが、どの点がよくて、どの点が悪い、また学生はどのような実習を望んでいるか等手探りの点が多いです。実質的に難しい点も多いと思われていますが、本学でも取り組んでいただきたいと思いました。

2日目には筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター 総合病院水戸協同病院に見学にいつてきました。全国からの見学者、参加者も多い、臨床実習に力をいれている病院です。水戸自体は、筑波からさらに電車で1時間弱の位置にあり、失礼を承知で書けば、決して都会という感じのところではありません。その点でも鹿児島で医療に携わるものとして多に学ぶところがある病院と思われました。まず気がつくのがこの病院の名前の前に「筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター」とつくところです。この病院自体はJAが経営する病院ですが、そこから大学に寄付講座を開く様な形で連携をとり、病院

スタッフは大学の教官という形で、医療と教育に携わり、地域の総合病院を運営されています。元々の協同病院は水戸地域の中核病院でしたが、一時期は入院患者数 160 くらいまで減少し、それにともない医師の数も減っていくという悪循環に落ち込んでいたようですが、大学病院附属教育センターという形で生まれかわり、各科の医師も増えることにより医療、教育が充実することになったそうです。現在では、入院患者数が、400 をこえるところまでいき、新病棟の建設も開始されているようで、研修医のマッチングの希望も高いそうです。非常に勢いを感じる病院でした。収益のことを考えるとまだ黒字経営という段階までできていないようでしたが、筑波大学全体の研修というところでは有形、無形の効果が得られているように思われました。

水戸協同病院では、総合診療部をおき、そこに総合診療専門の先生、各内科からの先生、研修医などが所属し多くの入院、救急外来などの受け皿になっています。基本的に入院は初期診療だけでなく、入院中も所属は総合診療科が担当されています。専門医にはコンサルトや、症例検討会などで意見をかわすということで、容易に相談できるシステムができています。実際には総合診療部にまわってきている内科、外科の先生はなんらかの専門性を有している先生も多いことから、専門医は各科 1 人～2 人（多くは 1 人）という少人数でもまかなえているようです。各科に複数の医師がいるような形で診療にあたるようなことは、理想的ですが、現実的には非常にむづかしいことです。一人の専門の先生の献身的な働きにより支えられるようなシステムは、その先生が病院をうつれば機能しなくなります。

私も参加させていただきましたが、グラウンドカンファレンスや症例検討会、レクチャーなども定期的に行われており、科のしぼりのない open なものでした。病院全体で患者をみる体制が整っており、中規模病院のフットワークの軽さが存分に発揮されているようでした。初期研修医だけでなく、医学生にも人気があるそうで、週末などを利用して、5 年時から当直にはいるようにして研修するような人もいます。指導される先生にお話を伺うと、そういった熱意のある学生さんが、初期研修をむかえるころには卒後 3-4 年目の医師のように即戦力として働いているという話を聞き、やる気や学習意欲のある学生さんがさらに伸びる様な場の必要性も感じました。

茨城県は人口あたりの医師数が全国でも下から数えた方がはやいそうで、医師偏在、医師過疎の地域の問題があり、苦肉の策としてこのような地域機関病院の附属病院化というアイデアがうまれたと聞きました。水戸協同病院のような理想的なシステムがすべての病院に行き渡っている訳ではないということですが、JA だけでなく、日立製作所のような企業型の病院、時には県立病院の医師不足に対して、市がお金を出す形で大学附属病院として生まれ変わったような総合病院が次々とできているようです。このシステムをとることにより、病院としては医師確保が担保でき、医師側としては大学のスタッフとして各地域

の診療にあたりると共に、時間がゆるせば研究も継続でき、科研費などの申請もできるなどアカデミックな面での継続性などもはかれるなどよい面があるようです。また、大学の教官であるということで、学生や研修医に対して、各科にまたがって教育する意識が浸透しているように思われました。もちろん、このシステムが有効に働いているのは水戸協同病院のスタッフの先生の努力によるところが大きいことはいまでもありません。また大学の附属病院なので、大学契約の online journal が読めるようにな

っており、カルテの記載まではできませんが、大学のカルテや画像を閲覧できるシステムなども構築されていて非常に便利だと感心しました。

医局主導型の医師派遣システムの弊害がいわれて久しくなります。しかし、新研修制度がはじまってからでてきた問題をいうまでもなく、医師が都会や便利な場所にばかり集中しては地方の医療の改善は望めません。大学の医局から医師派遣するというシステムは、当大学ともまったく変わらないし、大学と民間企業とのコラボという点など、容易にクリアできない問題もあるものの、地域医療が重要な課題の本学の試みとしても、大学でみるような疾病だけでなく、より common な疾患に多く接したいという若い医師達の要望にも応える意味でも学ぶことの多い、良い試みと思われました。

新臨床研修制度下で、研修システムや待遇には改善が見られていますが、研修医でいられる期間はわずかです。医学生や研修医の先生は、数年後の自分を想像しながら、上級医や指導医をみてシビアに進路を決定しているように思われます。大学にいらなくても、都会にいらなくてもより良い医療や、アカデミックなこともできる環境作りは非常に有益だと感じました。

3. 学生による授業評価アンケート

平成 25 年度も、全学年の全科目を対象として学生による授業評価アンケートを実施した。

1~4 年の 44 科目から 3773 枚（平均 85 枚/科目）、5 年次臨床実習では 2427 枚（平均 105 枚/診療科）、6 年次臨床実習では 291 枚（平均 8 枚/診療科）の回答が得られた。1~4 年の科目では学生自身の学習に対する評価 4 項目、科目について 8 項目、講師の指導について 5 項目、全体評価 1 項目のアンケートを、それぞれの項目について 5 段階評価で行った。

5 年の臨床実習では、実習開始前のオリエンテーション時に評価の目的、内容、方法を説明した後に、2 週間毎に小グループでの実習が終了するたびにアンケートを実施した。アンケートは無記名で、学生が記入後、学生自身で学務課 医学教務係に届けられ、教員や指導医の目に触れることはない。5 年の臨床実習では 2 期に分けて各期毎に集計し、全てのアンケート結果は医学科 FD 部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議に報告した。

医学科のアンケート項目には、学生の自主的な学習への取り組みを評価する項目がある。1~4 年次科目において 4（どちらともいえない-非常に行った）、5（非常に行った）の回答は 46-60%であり、自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況であった。

5 年の臨床実習では 4、5 の回答が 82-90%となり、非常に自主的に臨床現場での学習に取り組んでいることが明らかになった。

臨床実習では診療参加型実習の比率を増やすことが求められているが、アンケート結果では診療参加型の割合は 37%で、この 3 年で上昇し改善が認められているものの、いまだに主要な実習形態とは言えない状態であり、今後の改善が臨まれる。

4. 授業公開

医学科で本学の医学教育に関わる教員が希望し、科目責任者が了承した場合は、授業参観が可能であるが、平成 25 年度の授業公開、授業参観は実施していない。

5. 第 33 回国内医科大学視察と討論の会

平成 25 年 9 月 19 日（木）、20 日（金）の両日にわたって、当医学部の主催で第 33 回国内医科大学視察と討論の会を開催した。この会には全国の国・公・私立大学医学部から理事長、学長、医学部長、教務委員長を始め、教育に関係する 110 名の教員が参加した。

第 1 日目の特別講演 I では、文部科学省医学教育課の平子哲夫企画官が「医学教育の現状と課題」の題で、診療参加型臨床実習の充実、医学教育認証評価の構築等について講演された。

その後、岸田昭世教授が「学士編入学制度の意義」、田川まさみ教授が「患者・医療職・地域との連携による臨床実習前教育」、大脇哲洋教授が「地域枠医学生への教育の取り組み」、上村裕一教授が「医学生の国際交流とその成果」の講演を行い、当医学部の医学教育に関する取り組みを報告した。

講演の後に行われた学生との懇談では、A) 学士編入学制度の意義、B) 患者・医療職・地域との連携による臨床実習前教育、C) 地域枠医学生への教育の取り組み、D) 医学生の国際交流とその成果、の 4 つのテーマで、この会の出席者と当医学部学生との間で発表並びに意見の交換が行われた。

第 2 日目の特別講演 II では、嶽崎俊郎教授が「島嶼地域を活用した地域医療教育」の題で、離島での地域医療実習を紹介した。

特別講演に引き続く総合討論では筑波大学医学医療系 前野哲博教授の司会の下、学生との懇談会で討論された 4 つのテーマを中心として活発な討論が行われた。

6. おわりに

平成 25 年度は、前年度と同様に診療参加型臨床実習改善のための取り組みとして、先進的な他大学・関連病院の視察と、現行の実習に対する学生による評価を実施した。アンケートによる学生の評価では、前年度よりも診療参加型の実習の比率は増えてきているが、更なる臨床実習の改善が必要と判断される。また、大学教育の課題となっている学生の自主的な学習への取り組みに関しては、講義を中心とした 1～4 年次科目では不十分であるものの、5 年時の臨床実習ではほとんどの学生が自主的に学習していることが明らかになり、臨床実習の重要性が再認識された。

25 年度に当医学部で開催された第 33 回国内医科大学視察と討論の会では、他大学からの教育に関係する教員から、当医学部における医学教育の先進的な取り組みに対して高い評価を受けた。この会での評価・助言が、今後の当医学部の教育改善に活用されることが期待される。

平成 25 年度の FD 委員会の活動は、現状の教育の実態を測定してその結果を情報提供し、さらに医学教育に関する先進的な情報を提供することにより、教員の教育改善に寄与していると考えられた。

（文責：医学部 FD 委員会医学科部会長 上村 裕一）

平成 25 年度 医学部保健学科 FD 活動報告

1. はじめに

平成 25 年度医学部 FD 委員会保健学科部会の活動として、

- 1) 学生による授業評価アンケート
- 2) 教員による授業公開・授業参観
- 3) 講演会

を実施した。それぞれの活動について、以下に概略を述べる。

2. 学生による授業評価アンケートの実施とその結果の検討並びに授業評価結果の教員へのフィードバック

1) 対象科目と方法

実習、演習と非常勤講師による授業を除く、全ての授業科目を対象に、学生による授業評価を実施した。学生による授業評価は各授業の最終日に学生にアンケート票を配布し、無記名で記載してもらい、学生代表に回収し、封筒に入れ、厳封し、学務課に提出してもらった。授業評価の中の評価項目は以下の通りである。「学生自身の自己評価」、「授業について」、「教員について」、そして「自由記述」から構成されている。

授業評価アンケート

学生自身の自己評価

101 出席状況は良好だった。

(5: 非常に良好だった、4: かなり良好だった、3: 良好だった、2: 良くなかった、1: 非常に良くなかった)

102 授業に意欲的に取り組む努力をした。

(5: 非常に努力した、4: かなり努力した、3: 努力した、2: あまり努力しなかった、1: 努力しなかった)

103 授業の予習あるいは復習をした。

(5: 非常に予習復習をした、4: かなり予習復習をした、3: 予習復習をした、2: あまり予習復習をしなかった、1: 予習復習をしなかった)

授業について

201 授業科目にふさわしい内容だった。

(5: 非常にふさわしかった、4: かなりふさわしかった、3: ふさわしかった、2: あまりふさわしくなかった、1: ふさわしくなかった)

202 シラバスの内容は明確だった。

(5: 非常に明確であった、4: かなり明確であった、3: 明確であった、2: あまり明確でなかった、1: 明確でなかった)

- 203 授業内容はシラバスに沿ったものであった。
(5:非常に沿っていた、4:かなり沿っていた、3:沿っていた、2:あまり沿っていなかった、1:沿っていなかった)
- 204 授業の難易度は以下の通りだった。
(5:丁度良かった、4:やや簡単だった、3:簡単だった、2:かなり難しかった、1:非常に難しかった)
- 205 この授業を他の学生にも勧めたいと思う。
(5:非常にそう思う、4:かなりそう思う、3:そう思う、2:あまり思わない、1:思わない)
- 206 この授業は自分にとって価値があった。
(5:非常にそう思う、4:かなりそう思う、3:そう思う、2:あまり思わない、1:思わない)

教員について

- 301 話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった。
(5:非常にそう思う、4:かなりそう思う、3:そう思う、2:あまり思わない、1:思わない)
- 302 授業は時間どおり行われた。
(5:非常にそう思う、4:かなりそう思う、3:そう思う、2:あまり思わない、1:思わない)
- 303 教師の授業に対する熱意を感じた。
(5:非常に感じた、4:かなり感じた、3:感じた、2:あまり感じなかった、1:感じなかった)
- 304 授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた。
(5:非常にそう思う、4:かなりそう思う、3:そう思う、2:あまり思わない、1:思わない)

自由記述

この授業をより良くするための意見や要望、受講者としての自分を省みた上での感想などを自由に書いてください。

2) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講分は 62 科目に依頼し、57 科目からアンケートを回収した (回収率 92%)。後期開講分は 67 科目に依頼し、60 科目から回答を回収し得た (回収率 94%)。前期開講、後期開講別にアンケートの中の各項目について評価点 (1~5) の平均値と標準偏差を求めた。点数が高いほど評価が良いことを示している。また、前期開講科目と後期開講科目を合わせた全体での評価点の平均値も求め、過去 4 年間との比較を行った。25 年度前期開講科目の平均点と 25 年度後期開講科目の平均点を表 1 に示す。表 2 には、過去 5 年間における前期・後期を合わせた科目全体での平均点の推移を示した。

表 1. 平成 25 年度学生による授業評価の前期・後期別の点数の比較 (平均点)

質問項目	前期開講科目	後期開講科目
出席状況は良好であった	4. 7 2	4. 6 5
授業に意欲的に取り組む努力をした	4. 3 7	4. 3 0

授業の予習あるいは復習をした	3.72	3.61
授業科目にふさわしい内容だった	4.48	4.51
シラバスの内容は明確だった	4.36	4.37
授業内容はシラバスに沿ったものであった	4.35	4.36
授業の難易度は丁度良かったか	4.35	4.31
この授業を他の学生にも勧めたいと思う	4.24	4.27
この授業は自分にとって価値があった	4.36	4.39
教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった	4.28	4.32
授業は時間どおり行われた	4.37	4.42
教師の授業に対する熱意を感じた	4.40	4.40
授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた	4.28	4.24

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

表2. 過去5年間の学生による授業評価の点数の推移 (平均点)

質問項目	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
出席状況	4.65	4.66	4.67	4.62	4.68
意欲的な取り組み	4.24	4.19	4.23	4.21	4.33
予習・復習	3.24	3.29	3.36	3.37	3.66
内容のふさわしさ	4.46	4.47	4.50	4.48	4.49
明確なシラバスの内容	4.27	4.34	4.38	4.38	4.36
授業内容とシラバスの整合	4.28	4.34	4.36	4.39	4.36
適切な難易度	4.39	4.30	4.26	4.33	4.33
他学生への履修の勧め	4.20	4.22	4.21	4.22	4.25
自分にとっての価値	4.34	4.38	4.36	4.34	4.38
わかりやすい説明	4.28	4.29	4.26	4.27	4.30
時間どおりの開講	4.34	4.37	4.45	4.42	4.40
授業に対する熱意	4.40	4.40	4.39	4.38	4.40
質問や相談への対応	4.26	4.27	4.27	4.24	4.26

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価 質問項目の文言は表1と同じ。

3) 結果の解釈

平成25年度の前期と後期の比較では、後期では前期に比べ、学生自身の授業に対する自己評価が3つの項目全てで低下していた。また、「授業の予習あるいは復習をした」という項目は前期、後期いずれも低い点数であったことは特筆すべきであると思われた。過去5年間の推移では、毎年わずかずつ向上、あるいは年度によっては横ばい状態となっており、今年度もほぼ同様の傾向であった。

4) 学生による授業評価結果アンケート結果の教員へのフィードバック

各授業科目についての各学生からのアンケート票（自由記述も記載されたものあり）は当該科目の担当教員に返して、今後の授業方法についての参考資料としてもらった。

3. 教員による授業公開・授業参観

1) 方法

各学期（前期・後期）が始まってから、授業を担当する保健学科全教員に対して、“他の教員に自分の授業を公開することを希望するか（複数科目可）、希望する場合はその日時を提示して下さい”、と依頼し、公開授業科目の日時を記したリストを作成し、次に、そのリストを全教員に示し、“公開希望が出された授業科目のうち、どの参観を希望するか（複数参観可）”を募った。

授業参観をした教員には「授業参観報告書」に意見を記載し、学務課に提出してもらった。報告書の記載項目は、「本日の講義の狙いをどのように受け取りましたか」、「講義の分かりやすかった点についてお聞かせください」、「工夫していると感じた点、自分の授業に参考になると感じた点などについてコメントして下さい」、「その他コメントがあったらお書きください」であった。

2) 結果

平成 25 年度前期は 25 年 6 月 19 日より 7 月 30 日までの期間で、授業公開希望教員数は 14 名、公開授業科目延ベコマ数は 45 であった。一方、授業参観希望教員数はその間 12 名で、参観希望延ベコマ数は 15 コマであった。

後期については、25 年 11 月 11 日より 26 年 1 月 21 日の期間に開講された授業について、授業公開希望教員数は 11 名、延ベ公開授業コマ数は 35 であった、一方、授業参観希望教員は 7 名で、参観希望延ベコマ数は 9 コマであった。

表 3 に、過去 4 年間における前期・後期合わせての公開希望授業科目（延ベコマ数）と参観希望科目（延ベコマ数）を示す。

表 3. 授業公開延ベコマ数と授業参観延ベコマ数の推移

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度
延ベ公開授業科目数（コマ）	84	84	95	80
延ベ参観授業数（コマ）	26	43	28	24

3) 結果の解釈

平成 25 年度は過去 3 年間に比べ、公開授業コマ数、参観授業コマ数ともに少なかった。

4) 教員へのフィードバック

授業参観報告書はそれぞれ当該公開科目の担当教員にフィードバックした。

4. 講演会

医学部保健学科では平成 24 年度から看護学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻の 3 専攻合同授業として、1 年次から 4 年次にわたる「チーム医療授業科目群」をカリキュラムの中に組み込んでいる。

「チーム医療授業科目群」のさらなる充実に向けて、チーム医療教育の先進大学である北里大学から講師を招き、講演が行われた。

講演会名：オール北里：北里大学におけるチーム医療教育

講師：北里大学チーム医療教育委員長 石井正浩先生

日時：平成 25 年 10 月 31 日 17 時～19 時

場所：鹿児島大学医学部鶴陵会館 中ホール

主催：鹿児島大学医学部FD員会保健学科部会、共催：鹿児島大学医学部FD員会医学科部会

講演内容：平成 18 年度から開設され、平成 25 年度には 1000 人を超える学生（薬学部、医学部、看護学部、医療衛生学部など）を対象とした「オール北里チーム医療演習」をはじめ、北里大学で行われているチーム医療教育の実際についての講演を拝聴した。参加人数は、教員・学生・他で計 59 名であった。講演会の後、活発な質疑。応答がなされ、医学部における今後のチーム医療教育推進に向けてのFD活動に寄与するところが大きであった。



講師の北里大学教授 石井正浩先生



開会挨拶と講師の紹介



講演会

5. 終わりに

学生による授業評価アンケートに関しては回収率を100%にする必要があると思われる。授業公開・参観は教員が容易にかつ独自で行うことができ、しかも直接学生への教育効果に影響することより、最も重要な

FD 活動であると考えられるが、公開科目及び参観教員ともに少なく、かつ固定化する傾向があるようである。

教員はまずは学生のためにある、との自覚に基づき、部局内で FD 委員会が中心となり、FD 活動の意義をより強く広報していくことが必要であると感じた。

(文責 医学部 FD 委員会保健学科部会長 藤野 敏則)

歯学部

歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、従来からの全学的な取り組みとしての「学生による授業評価」、「授業公開・授業参観による教員相互の評価」に加えて、「学部6年生対象の教育に対する卒業時アンケート調査」、「共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会・研修会」、「外部講師を招いての講習会」とともに、2年前からの新たな取り組みとして、「外部教育系セミナーへの参加者としての教員派遣」、「外部教育系セミナーへのスタッフとしての協力」等を行った。本報告では歯学部 FD 委員会として平成 25 年度に行った各活動について、その概要を報告する。

2. 学生による授業評価

歯学部 FD 委員会では、年間の FD 活動の一環として「学生による授業評価」について、平成 23 年度に更新した評価票を用いて実施した。この授業評価は平成 25 年度に開講した全ての授業を対象に、各授業の終了時に適宜実施した。評価活動への参加は各教員の自由意思に任せた。評価対象者は各授業担当教員であり、職位は教授、准教授、講師、助教であった。本調査票は記名式とし、レイティングスケール（1（No）～4（Yes）の 4 段階評価）による評価項目を 3 つ（1. 今日の授業はあなたにとって有益と感じましたか？ 2. 今日の授業は理解できましたか？ 3. 教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか？）、自由記載形式の評価項目を 3 つ（4. 今日の授業で良かった点を挙げてください、5. 今日の授業で芳しくなかった点を挙げてください、6. その他、今日の授業で感じたことを挙げてください）とした。学生が評価記入後、各学年のクラス委員が回収し、学務課歯学教務係へ提出してもらった。また無記名での提出を希望する場合は、所定のボックスへ各自で提出してもらうよう依頼した。得られた記入済み調査票は OCR により読み込み処理後、集計作業が行われた。

次表に調査結果を示す。集計の結果、本調査に参加した授業数は合計 37 件であった。個別の数値については、各授業の難易度や背景、授業担当者もばらばらのため、総体としての数値で論ずることは避ける。個別のデータは集計直後、各授業担当者に生の調査票を PDF 化し返送することにより、学生の意見や指摘事項について、次の授業へすぐに生かせるような体制を、2 年前より構築した。そのため、教員も調査に参加するモチベーションが上がり、調査の手法としてはある程度機能したと考えられる。また、自由記載欄には多くのコメントが寄せられており、授業改善に直接つながるような内容が多かった。次年度以降も同様の方式を進めていくとともに、より多くの授業で活用してもらうような広報を検討していく予定である。

	2年生	3年生	4年生
調査授業数	6	8	23
1. 今日の授業は、あなたにとって有益と感じましたか？	3.72	3.65	3.66
2. 今日の授業は、理解できましたか？(分かりやすかったですか？)	3.48	3.48	3.54
3. 教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか？	3.59	3.55	3.57

3. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員による授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施しており、平成25年度については前期が6月17日(月)～6月28日(金)、および後期が11月25日(月)～12月6日(金)の2度の期間で行われた。この期間の歯学部における授業は原則として全て公開とし、教員はFD活動の一環として、随時授業参観することを可能とした。授業を参観した教員は、授業修了後に次のアンケートへの記載を行った。質問項目は下記の14項目とし、5:極めて優れている、4:良い、3:普通、2:やや劣る、1:よくない、の5段階での評価とした。結果を下記に示す。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
シラバスに沿った授業がなされたか	3	3	3	3	4	4	4	4	4
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3	3	2	4	4	3	4	4	3
授業の準備がよくなされていたか	3	3	3	3	4	4	4	4	4
教材(プリント, スライド, 教科書, 参考書, 板書等)は適切であったか	3	3	3	3	4	4	4	4	4
実習器具・材料は適切であったか	0	0	0	0	4	4	4	0	0
実習は授業内容の理解に役立ったか	0	0	0	0	4	4	4	0	0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4	3	4	3	3	4	4	4	4
質問や学生による発表の機会を与えたか	4	3	4	3	4	4	4		
質問をしやすい雰囲気であったか	4	3	3	3	4	4	4		3
適切な難易度であったか	3	3	4	3	4	4	4	4	4
学習意欲が刺激されたか	3	4	4	3	4	3	3	4	3
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4	4	4	4	4	4	4	4	4
教育に対する熱意が感じられたか	3	3	4	3	4	4	4	4	4
上記項目以外の観点も含めた「総合的な評価」	3	3	4	3	4	4	4	4	

授業参観に参加した教員数は9名(A～I)であり、それぞれが異なる授業を参観し相互評価を行った。本データは調査数が少なく個別の項目について具体的に論じるには限界があるため、避けることとする。この取り組みを通じて、教員が同僚の授業を見学することにより様々な意味で刺激を受け、よりよい授業の作り方を考え、自己の授業方法のあり方を再考するきっかけになればよいのであるが、未だ十分その趣旨や意義が各教員に浸透していないと考えられる。教員が相互の授業を見学し互いを評価・批判し合うには、互いの遠慮もあり、それ相応の環境整備が必要不可欠である。そのためには今後、本活動の目的や意義を広く周知する手段を検討するとともに、より多くの教員の本取り組みへの参加を促す必要があると考えられた。

4. 学部6年生対象の卒業時アンケート調査

歯学部FD委員会では歯学部教育委員会とともに、学部6年生の卒業時に、これまで受けてきた学士課程教育全体の「振り返り」という意味で、各種教育内容、活動、施設などについて、「歯科医師になる立場」から有効であったかどうかについて、無記名式アンケート調査を実施している。本年度は、平成25年度学位記授与式が挙行された平成25年3月25日に、学部6年生を対象に行った。調査項目は下表の18の各種教育内容、活動、施設などについて、5:極めて有効であった、4:どちらかと言えば有効であった、3:どちらとも言えない、2:どちらかと言えば無意味であった、1:全く無意味であった、の5段階で評価を行うよう依頼した。得られた回答数は23件であった。以下に結果を示す。

<回答者に関する事項>

	鹿児島県	鹿児島以外の九州	左記以外
出身	4	6	13
卒業後研修先	7	5	11

<鹿児島大学入学後の教育内容、活動、施設などについて、歯科医師になる立場で、あなたにとって有効であったかどうか、ご記入ください>

	5	4	3	2	1	平均
オリエンテーション	4	8	9	0	2	3.52
共通教育	3	4	7	8	1	3.00
導入系科目	5	8	8	1	1	3.65
基礎系科目	8	12	3	0	0	4.22
臨床系科目	11	12	0	0	0	4.48
医系科目	6	9	6	2	0	3.83
統合系科目	7	8	4	3	0	3.86
臨床実習	17	6	0	0	0	4.74
選択科目	9	11	3	0	0	4.26
共用試験CBT	14	8	1	0	0	4.57
共用試験OSCE	12	8	1	2	0	4.30
総合歯科学	13	8	2	0	0	4.48
チューター制度	5	6	7	4	1	3.43
課外活動	15	6	2	0	0	4.57
学術情報基盤センター	5	6	9	2	1	3.52
図書館	13	8	2	0	0	4.48
学習室	16	5	2	0	0	4.61
学生控室	12	8	2	1	0	4.35
学務課	15	6	2	0	0	4.57

調査の結果、評価の平均値が「4」を超えた項目は、「基礎系科目」、「臨床系科目」、「臨床実習」、「選択科目」、「共用試験 CBT」、「共用試験 OSCE」、「総合歯科学」、「課外活動」、「図書館」、「学習室」、「学生控室」、「学務課」であった。質問が「歯科医師になる立場で」ということであり、また調査時期が歯科医師国家試験合格発表直後であったことから、特に「臨床実習」や「臨床系科目」の項目が高く評価されたことは理解しやすい。また昨年度は「4」以下であったものの今年度が「4」を超えた項目は「学生控室」であり、逆に評価が昨年は「4」以上であったが「4」以下へ下がった項目は「医系科目」、「統合系科目」であった。過去数年にわたって学部を挙げて教育カリキュラム改革を続けてきた6年生に開講している「総合歯科学」および「臨床実習」については、過去3年間の調査結果によると毎年評価が着実に向上しており、改革の方向性が学生側にも理解してもらえていることが推定された。一方で、相対的に評価が低い傾向であった教育内容は、調査時期や質問方法による影響かもしれないが、学生のニーズに合っていない教育内容や改善の必要なカリキュラムや組織であった可能性もあり、今後詳細に検討していく必要がある。

5. 平成25年度第1回歯学部FD講習会

- 1) 講師：竹内久裕先生（徳島大学病院 臨床実習教育支援センター 副センター長、かみ合わせ補綴科 講師）
- 2) 講演タイトル：「徳島大学における歯科臨床実習の取り組み」
- 3) 日時：平成25年7月31日（水）18：00～19：30
- 4) 場所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員60名
- 6) 内容

徳島大学歯学部は、1991年に従来の診療参加型臨床実習から見学中心型へ改変した後、2005年に再度学生診療室を復活させ、見学中心の体制から一口腔単位の実習が可能な臨床実習へプログラム改変を行っている。講師の竹内先生は其中で、教育現場に近い視点から多くの取り組みを行っておられる。本学部で平成25年秋に行う本学の臨床実習改革を検討する上で大変貴重な情報をいただき、また意見交換を行うことができた。

【講習会受講後のアンケート結果】

- ・とても参考になった講演会でした。鹿大歯学部が目指す姿が見えたことが、各教員にとっても参考になったと思います。
- ・徳大の取り組みを紹介して頂いたが、内容的には表面上の取り組み紹介にとどめていた。実際の問題点の解説が少なかった。特に効果の検証についてはもう少し説明を聞きたかった。
- ・臨床実習に携わる教員の専任を2名配置するのは、非常に有効であると思う。総診張り付きのライターが配備されているのも教育に有効と思う。
- ・実習の進行表を公表することは、学生間の刺激となるので有効と思う。
- ・技工室の技工士との実習、アシストを教育実習に取り入れていることも感心した。
- ・技工することで症例に深く取り組めると感じている。教育に時間をかけている様子が分かった。
- ・鹿児島大学の学生にももう少し技工をさせる機会、場所が必要である。
- ・少ない患者数で多い症例数を確保しているのはかなり苦労しているように思う。
- ・今日は貴重なお話を伺うことができ有難うございます。徳島大学は臨床実習改革を通じて、より多くの工夫と技工を多く経験させている点が非常に興味深く拝聴いたしました。ミニマムリクワイヤメントの一覧表は非常にわかりやすく、クリアーであると思いました。また、進捗状況を張り出して学生と教員が情報を視覚的に共有できている点も興味深く拝聴いたしました。今後の参考にさせて頂ければと思います。
- ・よりよい教育のためには、臨床実習室の整備、専任教員の配置が必須と感じました。
- ・臨床実習の課題は、鹿児島大学でも同様であると感じた。臨床予備実習～臨床実習での各指導教官のご尽力は大層なものと思います。診療実習、レポート、見学について各進行表を作り、月毎にチェックし、実習の進捗状況をチェックするシステム、各実習帳が整備されているのは見習う点だと思いました。
- ・教育に時間をとられても、なかなか評価されないのは今後の課題だと思います。
- ・鹿大も2診補綴科 **waiting** まちにすれば学生に配当しやすくなると思います。
- ・普段、他大学の状況などを直接伺う機会ほとんどないため、とても参考になりました。ただ臨床実習の課題において、教員評価が全く考慮されていないとの話がありました。これでは鹿児島大学で取り入れるということになっても、本当に一生懸命にすることは難しいような気がします。システムの導入は賛成ですが、他大学で指摘されている課題についても対応策を考えながら行う必要があるかなと思います。
- ・非常に役に立つ素晴らしい講演でした。特に以下の点が参考になりました。
 - ・術前検討会、術後検討会を行っている点
 - ・臨床予備実習と臨床実習が重なっている時期がある点
 - ・研修歯科医の症例検討会に参加させている点
 - ・進行表の工夫

- ・ 終了模型を用いての補綴物制作
- ・ 見学実習時の見学レポート
- ・ 本年 10 月からの診療参加型臨床実習を前に、鹿児島同様に地方大学である徳島大学がどのように実習を運営しているのかを知ることができ、大変参考になりました。
- ・ 術前症例検討会等非常に考えられており、ためになりました。
- ・ 非常に緻密、熱心な教育を行っている印象を受けた。
- ・ 参加型臨床実習が臨床教育に有効であることが理解できた。
- ・ プロフェッショナルリズムの手渡し教育の試みとして様々な工夫をされながら臨床実習の教育に取り組んでいることが分かった。また、実習評価として、実習、見学、症例報告の総合評価をする必要があると思った。
- ・ 鹿大との比較になるが、臨床実習では学生の行うことが非常に多いと感じた。他病院・施設への学生の見学は、学生の立場のうちに色々へ行けると良い。
- ・ 学生のすべての進捗を教員が把握するシステムは、教員側の意識がなければうまく動かないと考える。取りまとめるセンター的機関と各科との連携が重要なのだろう。
- ・ 他大学では学生診療室が復活しているのですね。中身はもっと細かくシステム化されており、評価やフィードバックもきちんとされていて、今の学生さんはいいなあと感じました。ローテーション表は昔と同じスタイルで懐かしい感じがしました。コアカリ、CBT、OSCE などシステム化が進んでいますが、病院実習の基本は、なるべく多くの患者さんに直接接することだと思います。昔なかった内容として、学生が症例カンファランスを行うのは素晴らしいと思いました。「見学ノート」の試みも良いと思います。見ているだけではわかっていない時もありますから。
- ・ 見学中心の臨床実習から自験型実習への復帰をされた具体的な経緯と内容がよく理解できた。研修医教育と学生教育の関係について、もう少し聞きたかった。
- ・ 他大学の教育システムを知ることは非常に貴重なことであり、自施設との比較により、我々の教育システムを客観的に評価でき、大変勉強になった。取り入れるべき部分は迅速に吸収し、あるいは改善し、充実したプログラム、学生から見て魅力的なプログラムの構築を進めたい。少なくとも、自科の実習プログラムにおいてはすぐにでも応用していきたい。可能であれば、もっと多くの全国の各大学の教育カリキュラムを学んでみたいと思いました。(口腔外科系の話題は毎回省略されて情報が少ないので、口腔外科系の実情をもっと知りたいと思いました。)
- ・ 学生自験実習に力を入れ、プロフェッショナルリズムの手渡し教育の試みなどで大学独自の臨床教育を行っていることに興味を覚えた。スクールカラーを形成することはプライドを持たせてやることだと思います。鹿児島大学に不足していることだと思います。
- ・ 講演を通して、臨床実習に携わる指導医の資質の向上が重要ではないかと思われた。鹿大の場合は患者の確保が難しい点があるので、それを補う実習が必要であると考えます。今後の鹿大の臨床実習への取り組みに向けて有意義な FD であった。
- ・ 臨床実習に関して充実しているといわれる医科歯科大学、日本歯科大学の現況についての講演を聞いてみたいと思う。
- ・ 学生は、実際に手を動かして実習ができ、いいことだと思いますが、講演でもあったように、担当する教官の先生の負担は大変なものだと思います。個人的には、外科や麻酔科などの科で、どこまで臨床に参加しているのか、実習全体の中でどれくらいの時間が割り当てられているのかを知りたいと思い

ました。

- ・基本は10月から当院が行う実習と同じ運用なので参考になった。学外の一般歯科への見学も必要かと思いました。見学は見物になることが多いため、ノートを書くというのは検討していきたいと思いました。
- ・徳島大学の取り組みより、学生の臨床実習日の管理をしっかりと行う必要があると思いました。また、学生に対し、通常の診療の流れを体験させる取り組みは良いと思いました。一部だけを実習させるのではなく、なるべく多くのことを経験させ、自分たちで物事を考えさせるような指導の流れになるようにしていくべきだと考えました。
- ・補綴、保存2科での実習は良い制度と思う。必ず二人体制であることは良い。
- ・すべての質問に丁寧に答えて頂き、参考になることが多かった。
- ・現場の歯科医師の努力や大学内での体制作りがやはり急務で、大変なことであるとは思いますが、今後改革を進めていかなければならないと思いました。
- ・症例報告は有意義だが時間確保が難しい。
- ・私自身は臨床実習には携わっていないので具体的なコメントはできないのだが、臨床実習がいかに緻密に計画されなければならないか、担当教員の先生方の労力がいかに必要とされているかを考えるとめまいがしそうになった。
- ・教員評価における教育業績の比重を再検討しないと、教員は燃え尽きてしまうのではないかと思った。
- ・徳島大学が平成17年に見直しを図ったことを考えると、すでに7~8年遅れているのが驚きました。
- ・各科というよりは「歯科」としての教育、実習が必要。
- ・臨床実習教育支援センターが効果的に機能していることがうかがえるが、各科からの教員の配置、扱い、また患者の配当について実態はどうなのか知りたいところである。
- ・今まさに取り組んでいる内容であり、大変参考になりました。基本的な方向性は問題ないように思いました。
- ・他施設の実習システムを聴講し、自施設（自分の所属科以外）はどうしているのかと疑問に思った。
- ・学生の診療に対する責任感が、鹿大の学生とは全く違うように思われた。また、各科の横のつながりについても、鹿大よりもしっかりしたものに思われた。
- ・臨床実習教育支援センターのようにセンター化することも実りある実習を行うためには必要なのかもしれない。鹿児島大学では臨床教育部会があり、教育委員会の下の部会という位置づけであるが、このままで良いのか、新しいシステム構築が必要なのか、議論の余地があるのかもしれない。予備実習、臨床実習の期間も再検討すべきなのではないか。鹿大のシステムおよびタイムスケジュールはこのままでもよいのかも含めて議論すべきなのではないだろうか。
- ・学生臨床実習の部屋にエックス線撮影室があるのは大変便利です。
- ・臨床予備実習、臨床実習が別々に管理されているわけではなく、担当は決まっているが理想通りに連携がしっかりとれている状態で、内容の変更もフレキシブルに行われている。また、評価に関しても明確な方法で確実になされており、有名無実ではない、すべてが理論的に行われており、勉強になる。
- ・患者さんの同意が取れないケースも多いのですが、徳島大学ではどのように協力して頂いているかが興味深いです。移行期を設けて、学生に引き継ぎをさせるのはとても良いアイデアと思いました。
- ・以前の鹿大のシステムと一部似ているところがあった。
- ・学生が電子カルテを参照できるところを本学学生にもぜひ取り入れていかねばならないと思いました。

- ・何より、学生に教育するという熱意が伝わってきました。
- ・初めて聞くプログラムであったため、用語が少しわかりづらかったです。

6. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会

(平成 25 年度第 2 回歯学部 FD 講習会)

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、学内の CBT 作問委員会コアメンバーおよびアドバイザーが講師を務める講習会を開催した

2) 日時

平成 25 年 1 月 15 日 (水) 18:00~19:30

3) 場所

歯学部第 4 講義室

4) 講師

梶山加綱先生 (歯科麻酔全身管理学分野)

白方良典先生 (歯周病科)

松尾美樹先生 (口腔微生物学分野)

田松裕一先生 (人体構造解剖学分野)

岩下洋一朗先生 (歯科医学教育実践学分野)

5) 参加者

歯学部教員 : 71 名

6) 講演テーマ

「モデル・コア・カリキュラムと具体的な作問方法について」

- ・モデル・コア・カリキュラム改訂と作問の割り振り
- ・PC・セキュリティ
- ・画像の取り扱い
- ・作問のコツ

7) 内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。本年度は平成 25 年 12 月より作問を開始し、例年通り共用試験実施評価機構からの正式な作問依頼が来る前にある程度の作業を進めておくようスケジュールを組んだ。各講座への作問依頼は 12 月下旬、提出締め切りを 2 月上旬とし、その作問作業に直接的な参考となるように本講習会を企画した。前年度の共用試験歯学系 CBT 作問の採択率が全国でもかなり上位であったこともあり、本年度の作問方針は大きく変更はしないものの、省力化に向けた取り組みをすすめる方針とした。

7. 平成 25 年度第 3 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講師 : 宮脇正一教授 (歯科矯正学分野、カリキュラム部会部会長)

田口則宏教授（歯科医学教育実践学分野）

2) 講演タイトル：歯学部教育カリキュラムのあり方（1）

「教育カリキュラムに関するアンケート結果報告と今後の方針について」

3) 日 時：平成 26 年 2 月 5 日（水）18：00～19：30

4) 場 所：歯学部第 3 講義室

5) 参加者：歯学部教職員 69 名

6) 内 容：

歯学部では、6年間の学士課程教育に平成 18 年に新カリキュラムを導入して以来 7 年目が経過している。6年間の学部教育が一巡し卒業生を輩出した現在、カリキュラムの編成や内容について見直しを行う時期に来ている。そこで、歯学部教育委員会内にカリキュラム部会を立ち上げ、新カリキュラムに関するアンケート調査を平成 25 年度後期に教員および学生対象に行った。今回の FD 講習会では、これらのアンケート結果の概要を解説するとともに、明らかとなった問題点を解決するための方略として、昨今医療者教育分野で導入が進みつつあるコンセプトである「アウトカム基盤型教育（Outcome-based Education：OBE）」を紹介し、その導入の可能性について歯学部教員からの意見をj得る機会とした。

【講習会受講後のアンケート結果】

<理解できた点>

- ・ OBE の意義、重要性（30）
- ・ 改革の方向性（プロセス基盤型からアウトカム基盤型へ）について（12）
- ・ GIO、SBO と OBE との違い（11）
- ・ カリキュラム、教育改革が必要だということ（9）
- ・ 現在のカリキュラム、GIO、SBO の問題点（細分化されすぎる、など）、欠点（8）
- ・ 現在の歯学部教育カリキュラムに対するアンケート結果（8）
- ・ コンピテンス、コンピテンシーの概念（統合された能力観）（6）
- ・ 鹿大歯学部の教育が抱える問題点（5）
- ・ カリキュラムとは（4）
- ・ ラセン型カリキュラム、SPICES モデルの重要性（4）
- ・ 統合系科目の問題点（4）
- ・ 学生も教員も教育改革の必要性を感じていること（3）
- ・ パフォーマンスレベル（3）
- ・ 「教える」から「学んでもらう」、学ぶ側について考えること（2）
- ・ 本学においてカリキュラム改善の動きがあるということ（2）
- ・ ロードマップの作成の大変さ（2）
- ・ グローバルな教育の状況、他大学の状況（2）
- ・ 二度目の講演だったのでよく理解できた（2）
- ・ 認証評価の導入の必要性（2）
- ・ カリキュラムの作成に関して全期間を通して学生をどんな歯科医師に育てていくのかの視点が必要とわかった。
- ・ 具体的目標を設定する意義

- ・順次性のある教育の重要性
 - ・MILLER の学習ピラミッド
 - ・モデル・コア・カリキュラムの特徴
 - ・ロードマップ、マイルストーンのスライドが具体的で分かりやすかった。
 - ・アンケート結果で3年生に余裕があること
 - ・今後もカリキュラム改善を継続しなければならないこと
 - ・現時点で学生の大半に講義への不満があること
 - ・新カリキュラムになって学生にとって講義のスケジュールが全体理解にとって良いものかどうか疑問に思っていたが、実際に学生、教員に不満があることがわかった。
 - ・ディプロマポリシーの再認識ができた。
 - ・講演最後の「離島診療（地域医療）」に関する説明がわかりやすかった。
 - ・教員の横のつながりの重要性
 - ・目標を立てても、他分野の先生や学生の意見を取り入れて変更する。→そして変更した結果を先生や学生に伝える。
 - ・臨床研修で用いたブルーの小さなメモが OBE につながっていることがわかりました。
 - ・臨床実習の前に症例の目標を伝える。終了後、学生に対して必要だったものが何かを考えてもらう→ポートフォリオを記載してもらう。
 - ・複数科にまたがる統合系科目の必要性は感じるが、講座間の調整はもっと必要である。
 - ・カリキュラムの長期改善
 - ・認証評価に耐えられる鹿大歯学部をつくる必要性
 - ・千葉大学の例
 - ・富士研
 - ・予備校化を目指す
- <理解できなかった点>
- ・カリキュラム変更のロードマップ、具体的方法（8）
 - ・OBE の具体的な言語などがイメージしにくかった（2）
 - ・大学の特色を入れ込んだカリキュラムの作り方、方略の考え方。
 - ・優れた理論を現場の一人一人の先生に実践してもらうための具体的方法。
 - ・教員、学生が何%程度の満足度を得ることで改善が成功したといえるのか？指標があるかどうかを知りたいです。
 - ・アウトカム基盤型教育についてはもう少し咀嚼が必要と感じました。
 - ・プロセス基盤型教育とアウトカム基盤型教育の具体的な違い
 - ・コンピテンスとコンピテンシーの違いを確認したい。
 - ・OBE でも学習目標を細かく作っていけば結局今の GIO、SBO 方式による“硬い”カリキュラムと大きく変わらないものになるのでは？
 - ・順次性のあるパフォーマンスレベル科目の設定の必要性はわかるのですが、実際に教務係がカリキュラム表を作成するときに、全科目が望ましい時期に授業をはめ込むことができるのか、どうすればよいかがわからない。
 - ・プロセス基盤型教育の後に新たに OBE が現れたが、これも流行なのか疑問。

- ・数年後にまた新たな教育理論が出て OBE も死語になるのかという疑問。
 - ・人材育成を **outcome** という概念で量ることの背景
 - ・OBE が認証評価に有利となる根拠
 - ・OBE がなぜ文献的考察となるのか
 - ・細分化しすぎてわかりづらくなっている
 - ・OBE の導入した先行大学の問題点
 - ・コンピテンスが備わったかどうかの評価方法。概略評定のみ？ステップ、ステップごとの評価→今までの学年単位での評価との違いは？
 - ・カリキュラム改変にどれくらいの期間を要するのか（鹿大歯で）
 - ・重複点は重要な項目であることが多いので構わないと思う。同一項目に対する種々の意見を聞いて学生が自ら判断することも重要と思う。
 - ・ユニットごとの横のつながりの欠如が出ましたが、その解消のための「統合系科目」だったのでは？単に手法の失敗ということが結論でしょうか。
 - ・早ければ 2016 年に歯学部の認証医評価の導入、2015 年には OBE に基づく改善カリキュラム完成、とすると 2014 年の現時点で新カリキュラムの内容が具体的でないで間に合うのかなあと思いました。具体的な新カリキュラムの実施は何年入学の学生に適用されるのでしょうか？？ゴール設定を最初に言わないことが理解できませんでした。WG メンバーでもないのに申し訳ありませんが、最初に期限を決める必要があるのでは、と思いました。
 - ・全員が現状で良いという結果に至ることはないのでは？
 - ・現在のカリキュラムに問題があり改善が必要であることは分かったが、他国、他大学の新しいカリキュラムを **modify** して導入できないのか。
 - ・“right”の定義
 - ・教養がなぜ“basic ”なのか
 - ・皆で意見、考えをぶつけ合った時間を持てる企画でもよかったかな？
- <ご意見等があればご記入ください>
- ・次回 FD で田川先生から医学部の実例を聞けると思うので楽しみです。(3)
 - ・各講座間のコミュニケーションを成功させるためにはどうすればよいか (3)
 - ・カリキュラムについても常に新しい考え方や方法が出てくると考えられるが、本学で立案、実施するころには古いものになってしまうのでは？
 - ・カリキュラム改善においても OBE のステップでしたほうが良いと思います。カリキュラム改善によってどのようなゴールがビジョンとしてあるのか、まず設定する必要があると思います。
 - ・OBE を導入すれば学生の学習意欲が向上するのであれば（積極的に）導入するべきだ。
 - ・OBE によるカリキュラム改善は大変興味深く、良い方針であると思いました。
 - ・他大学での良い科目があれば本学でも移入すべきであると共に、本学独自の科目を設立させるべきである。
 - ・鹿児島大学の教育改革の道標はどうなっていくのかがよくわからなかったが、OBE に合わせてカリキュラム改革を今後どうすすめるのかが具体的に説明があったので良かった。
 - ・OBE による鹿大独自のカリキュラム開発については教育者側のトレーニングが必要に感じました。
 - ・地域医療は離島中心ではなく、鹿児島（南九州）を相手にしたい。

- ・統合系科目についてですが、〇〇学は旧カリキュラムでは 60 時間ありました。新カリで統合系科目を開講したとき〇〇学を半減して、新たな△△学を 30 時間にして重複しないように配慮しました。△△学はいくつかの講座によるオムニバス講義を始めたのですが、平成 26 年度に参加していただける講座をお尋ねしたら、2 講座しか手を挙げて頂けませんでした。統合系科目のオーガナイズがいかに難しいかを痛感した次第です。講義したくないという講座に無理にお願いしても充実した授業内容は期待できないと思います。
- ・基礎系、臨床系のつながり、各科間の連携をとるためのコミュニケーションが現在はまだ不十分だと思います。また教育業務については成果が見えにくく、各科、各教員間でその取り組み方に温度差がかなりあることも問題と思われます。具体的な方策を教えてください。
- ・学生と教員の意見が食い違うのは当然であり、どこまでの間ですり合わせができるのかだと考える。
- ・スピードアップ
- ・教員アンケートの結果で一番多いのが「現状で良い」でした。その意識を変えていかなければ、嫌々やらされて改革を行っている雰囲気になってしまうと思います。
- ・結局は教育者のカリキュラムに対する理解度を向上することが肝心だと思うので、こういう FD プログラムは良いと思います。
- ・具体的なコース、カリキュラムを作成する作業と方略の実践が必要、作業の FD もあるべきでしょう。
- ・今日のような学部教育の根幹にかかわるような FD は、参加を義務化すべきと思われる（教育の素人であることを認識として持つべき）。
- ・短期改善やマイナーチェンジは毎年でもできるのではないかと思います。毎回の FD 講習会のアンケートの中にもいろいろな意見を出されているのではないかと思います。しかし実際には兼業だと先生方にも時間がないので、カリキュラム改善や教育計画専任の教員の採用なども必要ではないかと思います。
- ・アンケート実施後、その結果と今後の方針を全教員に対して公表、解説する機会が設定されたことは大変意義のあることだと思います。この後の行動が教員の質として問われるところだと思います。
- ・よく検討されていると思います。
- ・思ったより参加人数が多くて有難かったです。とりあえず皆さんにアウトカム基盤型がすり込まれたからよかったのでは。
- ・プロフェッショナルリズム、倫理観、コミュニケーションは誰が教えるの？プロがいたほうがよいと思う（しかも早い時期に）。
- ・コンピテンスドメインについて、「倫理観とプロフェッショナルリズム」、「コミュニケーション」について、どのような学習、教育が行われるのか知りたいと思った。また、自分にも必要だと思った。
- ・教育に対する評価を向上させなければ全体の士気を高めることはむづかしい。
- ・海外の教育先進国のシステムと国内で現在行おうとしていることの差や方向性の違いなどを理解していきたいと思います。
- ・あまりに細かい GIO、SBO は学生が考えて取捨する力をなくすように感じる。
- ・“1”について授業をしても学生が自分から“0”や“2”について学ぼうとする意志を持たなければ、創造的な学部にはならないような気がします。
- ・講義を受ける前知識、必要知識の再検討をしなければならない。
- ・若い先生も実際のカリキュラムの作成に具体的に関与できるようになるといいと思う。
- ・教員の能力をどのように向上させるかについて知りたいです。

- ・見直しと改善は常に必要となるものと思うが学生にも教員にもわかりやすい形での改善が必要と思う。
- ・なぜ千葉大学、昭和大学、鹿大医学部で実施されたことができないのか？

8. 平成 25 年度第 4 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：田川まさみ教授（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 医歯学教育開発センター）
- 2) 講演タイトル：歯学部教育カリキュラムのあり方 (2)
「アウトカム基盤型教育導入のプロセスと運営」
- 3) 日 時：平成 26 年 3 月 17 日（水）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 50 名
- 6) 内 容：

平成26年2月5日に実施した第3回歯学部FD講習会「歯学部教育カリキュラムのあり方 (1) 教育カリキュラムに関するアンケート結果報告と今後の方針について」に引き続き、医学教育カリキュラム改革の知識と経験の豊富な本学医歯学総合研究科の田川まさみ教授をお招きし、カリキュラム改革の実践例についてご講演いただいた。田川先生はご出身の千葉大学および本学医学部において教育カリキュラムの抜本的改革をご経験され、教育の質の保証を推進するために全国的に導入が進んでいる「アウトカム基盤型教育」に関しても造詣が深く、ご講演ではそのプロセスとノウハウ等について詳細にご紹介いただいた。

【講習会受講後のアンケート結果】

<理解できた点>

- ・鹿児島大学医学部での OBE 導入のプロセス (13)
- ・アウトカム基盤型教育 (OBE) の基本的な考え方 (8)
- ・教育 (到達) 目標の重要性 (4)
- ・プロフェッショナリズム科目が必須であること (4)
- ・カリキュラム改革の必要性 (3)
- ・OBE 導入の必要性 (3)
- ・教育パラダイムに変化が生じていること (3)
- ・6 年生 OSCE の必要性 (3)
- ・客観主義→行動主義→構成主義→OBE へ (3)
- ・ニーズの把握 (2)
- ・学習到達目標の構築の流れ (2)
- ・学生とのコミュニケーション (2)
- ・医歯学教育のエキスパートが本学はそろっていること (2)
- ・コンピテンス：ミニマムリクワイヤメントと同じ、専門職の最低限の能力 (2)
- ・鹿児島大学医学部のカリキュラムは OBE であること
- ・田川教授が中心的な役割を果たされたこと
- ・医学部とは科目割り (コマ割り) が違うこと
- ・進級要件等

- ・(医学部では) 全体をよく見て抜け目のない教育が考えられている点
 - ・OBE の評価
 - ・現在の医歯学教育の基本理念：学生が理解し、自ら発見していく過程が学習、教員は学生の目標到達の支援（学習者中心の教育）
 - ・大学外の医療関係者の役割、重要性
 - ・コンピテンスの意味
 - ・医師として求められる基本的な資質について
 - ・医療者や社会人としての価値観の構築
 - ・理念だけでは不十分である点
 - ・卒業生のフォローアップが必要
 - ・マイルストーンの設定
 - ・学習者中心教育の大切さ
 - ・学生主体の一貫性のあるカリキュラムが重要である点
 - ・学生が参加することの重要性
 - ・グループ学習が大切
 - ・学習の場を教員が提供する必要がある（目標達成の支援）
 - ・インフォーマルな学習環境改善も必要である点
 - ・大幅な変更はデメリットも大きい
 - ・コツは「足りない点を見出すこと」、「伸ばしたい長所は何かを明確にすること」
 - ・PDCA サイクル
 - ・PDCA という最適化ではなく OBE ということで“超える”教育の可能性を感じました
 - ・古くから教育カリキュラムの考え方があり、OBE も新しくない
 - ・現行の 1 科目半期 15 コマの授業体制では、OBE の実現は難しそうだということ
 - ・同じ講義をしても学生により異なる
 - ・改革には時間がかかることなので慌ててはいけませんが、やはり急いでカリキュラム改善することも必要だと思います。
 - ・臨床実習～実際の臨床の場を踏む、不足している部分が何か
 - ・断片化している知識→結合して実際の場で役立つものにする
 - ・学習成果の評価の重要性
 - ・自分は自己流で学生教育を行ってきたが、重視していたのは断片化した知識の統合と考えていたが、それがそんなに間違っていなかったとわかった
- <理解できなかった点>
- ・ニーズアセスメントをどのように吸い上げるか (2)
 - ・OBE 導入が遅れた歴史的経緯
 - ・教育的背景（歴史）をストーリーとして理解したいと思いました。
 - ・現実的、本質的なカリキュラム改善の過程がよくわかりました
 - ・学生は OBE を求めているのか？もっと勉強するようになるのか？
 - ・コンピテンスが最低限の能力ならば、最終的に全国（世界）共通化されるのか？企画化？
 - ・OBE において基礎系科目の対応、改善すべきことを具体的に聞きたい。

- ・アウトカムが中心であるのに評価制度の確立と今のところ連携していない点
 - ・田川教授のみでこの OBE のカリキュラムの作成を行ったのか、委員会で決めて行ったのか？
 - ・各科の先生方はどの程度かかわってカリキュラムを作成したのか
 - ・膨大で相当に複雑なカリキュラム改変の実務的作業を誰が担ったのか
 - ・どの程度の期間が必要だったのか
 - ・医学部がカリキュラム改変をして、一番どこに変化がでたか
 - ・具体的に苦労した点を教えてほしい
 - ・改変作業で専門分野間の意見が衝突することはなかったか
 - ・鹿児島大学医学部医学科の教員自身の教育・研究・臨床に対する考え方や態度が変わったのかを知りたい。
 - ・学士編入学は現在ではどのようにされているのでしょうか。
 - ・改編にあたっての権限
 - ・卒業生の動向
 - ・GIO、SBO の記載中心のカリキュラム開発を続けていること
 - ・社会に対する説明責任については
 - ・現状の教育成果とはどのようなことか
 - ・歯学部先生方は行動主義的な考え方は馴染みやすい（私の偏見かもしれませんが）ですが、構成主義を概念的に理解することはなかなか困難ではないかと思います。教育実践の場面に即したご説明がもっとあればと思いました。
 - ・構成主義では学生にとって目標が異なってくるのか
 - ・実際、何をすればよいのかがわかりませんでした。
 - ・教育にかけるパワーの配分、どれだけ自分たちにそのパワーがあるのか、具体的にイメージできなかった
 - ・医歯学教育開発センターの位置づけ、今後の方針
 - ・自ら学習できない学生（わからないところがわからない）に対して、どのように接すればよいか。
 - ・これで何か良くなるとは全く思えません。
 - ・スライド番号 45 「注意すべき点」は難しいと思いました。
- <ご意見等があればご記入ください>
- ・成果が不明な現時点での OBE の導入はどうか (3)
 - ・カリキュラム改革に関する根本的な考え方を理解できたことは有意義だった (2)
 - ・個々の教員がカリキュラム改編にどのようにかかわっていくか考える機会になればと思います。
 - ・教育改革は学部全体で取り組むべき問題である
 - ・鹿児島大学歯学部の評価（良い点、悪い点）を調査することが必要
 - ・（講師の先生に）歯学部の方でも力を貸してもらおうとよいのでは、と思う。
 - ・学生にもこの内容の講義をすべき
 - ・日々の教育に大変役に立つ講演でした
 - ・医学部における評価法ならびに結果を教えてください
 - ・指導者のロールモデルは必要なのでは、と思いました。自分たちも省みないと。
 - ・学生のモチベーションを 6 年間維持するのが大変だと思います。

- ・非常に難しいです。通常、こういった教育を受けていないので、馴染みがないのが原因です。今後大事なことだと思います。学生教育にも一部取り入れるとなじみが出てきていいのではないのでしょうか。
 - ・大学教育のプログラムよりも、むしろ学生生活の中で何をどのように体験させるかが重要ではないか、と感じた。
 - ・自己決定の文化が根付いていない文化において OBE はそぐわないのではないか。入学する学生はカリキュラムのほう勉強しやすいのではないか
 - ・教育理論を現場に活かすのはなかなか難しいですが、がんばります。
- “アウトカム～”から考えてまずすべきと思うこと：“6年生の国家試験解答データを収集し、どこの分野が強い、弱いというデータを持つべき”、アンケートなどよりよほど役に立つはず。
- ・他の歯学部動向を見守るくらいの慎重さが必要かと思った
 - ・別に歯学部の OBE のパイオニアになる必要はないと思う
 - ・ハンドアウトが小さくて読めないのは仕方ないですが、スクリーン上でも細かくて読めませんでした。具体例だったので残念です。
 - ・ビデオ収録すべき

9. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する研修会

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、作問における基本的事項の理解を深めるとともに、より質の高い作問を行うために、教育委員会共用試験実施部会における CBT 作問委員会主催のグループ内ブラッシュアップに参加し、作問作業の実際を体験する。

2) 日時および場所

<第1回>

平成 26 年 2 月 12 日 (水) 18:00~20:00

A グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 26 年 2 月 17 日 (月) 18:00~20:00

B グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 26 年 2 月 19 日 (水) 18:00~20:00

C グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

<第2回>

平成 26 年 3 月 3 日 (月) 18:00~20:00

B グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 26 年 3 月 4 日 (火) 18:00~20:00

A グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 25 年 3 月 5 日 (水) 18:00~20:00

C グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

3) 対象者および参加者

<対象者>

歯学部教員全員

<参加者>

第1回 Aグループ・ブラッシュアップ：12名

Bグループ・ブラッシュアップ：16名

Cグループ・ブラッシュアップ：18名

第2回 Aグループ・ブラッシュアップ：19名

Bグループ・ブラッシュアップ：17名

Cグループ・ブラッシュアップ：19名

4) 内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。歯学部 FD 委員会では、教育委員会共用試験実施部会とともに CBT 問題作成過程を歯学部 FD 活動の一環としてとらえ、歯学部教職員に対して各 CBT 作問グループ (A、B、C グループ) で行われるブラッシュアップに参加してもらい、問題作成上の基本的事項の確認とともに、自らの作問能力向上へ向けて取り組んでもらう機会を設けた。

10. 教員の外部研修会への派遣報告

平成 25 年度 文部科学省・大学改革推進等補助金「歯学教育認証評価制度等の実施に関する調査研究」

平成 25 年度教育認証評価制度検討 WG 公開シンポジウム

「歯学教育認証評価制度の構築に向けて－英国・米国の認証評価制度と我が国の準備状況について」への教員派遣報告

報告者：田口 則宏（歯科医学教育実践学分野 教授）

日時：平成 26 年 2 月 8 日（土）

場所：東京ガーデンパレス（東京都文京区）

概要：本事業は、日本の歯学部が国際標準の教育を実施していることを証明するとともに、国際標準を超えるグローバルかつ優れた歯科医師を養成するために、日本における国際標準の歯学教育認証評価制度等の基盤を構築する目的で実施されている。平成 24 年度より始まった本事業は 2 年目が終了し、一定の成果を見つつある。今回の公開シンポジウムでは、これらの事業の経過が報告され、今後の進め方について議論がなされるとともに、一足早く事業が本格化している医学領域から講師を招き、その実情について情報共有が図られた。また、海外での先進事例として米国の CODA(Commission on Dental Accreditation)、英国の GDC(General Dental Council)より担当者を招き、我が国の歯学教育認証評価制度の今後の進むべき方向性を探る機会となった。

スケジュールと講演タイトル：

講演 1：「Standard and Accreditation in Dental Education; The Policy of GDC」

Patrick Kavanagh (Policy manager, General Dental Council)

講演 2：「Standard and Accreditation in Dental Education; The Policy of CODA」

Sherin Tooks (Director, Commission on Dental Accreditation)

講演 3：「国際基準に基づく医学教育の質保証」

奈良信雄教授（東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター）

講演 4：「進化する高等教育の質保証」

川口昭彦特任教授（独立行政法人大学評価・学位授与機構）

講演 5：「歯学教育認証評価基準（案）と認証評価実施要項（案）」

前田健康教授（歯学教育認証評価検討WG 幹事委員、新潟大学）

1.1. 歯学部 FD 委員会委員による学外施設への FD および教育研修活動協力実績

- 1) 「平成 25 年度 歯科医師臨床研修プログラム責任者講習会」歯科医療振興財団主催
平成 25 年 8 月 25～28 日 富士教育研修所（静岡県裾野市）
参加者：田口則宏 役割：タスクフォース
- 2) 「第 5 回 歯学教育者のためのワークショップ」日本歯科医学教育学会主催
平成 25 年 12 月 12～15 日 富士教育研修所（静岡県裾野市）
参加者：田口則宏 役割：タスクフォース
- 3) 「第 15 回 中国・四国地区歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」徳島大学病院主催
平成 25 年 6 月 15～16 日 徳島大学病院（徳島市）
参加者：田口則宏 役割：タスクフォース
- 4) 「第 16 回 中国・四国地区歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」岡山大学病院主催
平成 25 年 11 月 2～3 日 岡山大学病院（岡山市）
参加者：田口則宏 役割：タスクフォース
- 5) 「平成 25 年度 九州大学病院歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」九州大学病院主催
平成 26 年 2 月 22～23 日 九州大学病院（福岡市）
参加者：田口則宏 役割：タスクフォース

工学部

平成25年度 鹿児島大学工学部
ファカルティ・ディベロップメント委員会報告書
(平成26年3月)

鹿児島大学工学部
ファカルティ・ディベロップメント委員会

はじめに

大学の社会的役割は、論じるまでもなく教育と研究にある。高等教育研究機関として、大学での教育と研究は車の両輪のごとく協調的に機能することが理想である。しかし現実には、教育自体とそれに付随する様々な事務的負荷の増大によって研究活動が圧迫され、ここ数年工学部の学部としての研究の activity が低下していると危惧する声も聞く。第一線で主体的に研究を行う者が同時に教育も行うという大学本来の教育形態を仮にもし維持できなくなるとするならば、それは大学としての存在意義が失われることに等しい。

工学部 FD 委員会の使命は、上記のことを鑑み、個々の教員が限られた時間の中で行う教育効果の改善の試みを支援することにより、学部教育全体の質を向上させることである。実際に教員各位が、FD 講演会、授業参観、学生授業アンケートなどの FD 委員会の活動を、教育効果の効率的な改善のために利用していただけるならば、委員会の使命が果たせたことになる。

本報告書は、平成 25 年度の活動報告である。委員と学生係係員が協力して作成した。評価アンケートのデータ処理等は学科事務支援室の皆さんに作業していただいた。これらさまざまな協力に感謝を申し上げる。なお、従来年度報告書は冊子体として印刷されてきたが、22 年度分より恒常的に web 上に PDF で公開されることとなった。本報告書を読んでいただき、FD 委員会自体の改善のために委員会活動に関する忌憚のない意見をお寄せいただければ幸いである。

平成 25 年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 本間 俊雄

平成 25 年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	本間 俊雄	(工学部副学部長、全学 FD 委員会委員)	H25.4.1 ~ H27.3.31)
委員	上谷 俊平	(機械工学科委員、専門委員会委員)	H25.4.1 ~ H27.3.31)
委員	川越 明史	(電気電子工学科委員、専門委員会委員)	H24.4.1 ~ H26.3.31)
委員	黒川 善幸	(建築学科委員、専門委員会委員)	H25.4.1 ~ H27.3.31)
委員	吉田 昌弘	(環境化学プロセス工学科委員、専門委員会委員)	H24.4.1 ~ H26.3.31)
委員	三隅 浩二	(海洋土木工学科委員、専門委員会委員)	H25.4.1 ~ H27.3.31)
委員	加藤 龍蔵	(情報生体システム工学科委員、専門委員会委員)	H24.4.1 ~ H26.3.31)
委員	高梨 啓和	(化学生命工学科委員、専門委員会委員)	H25.4.1 ~ H27.3.31)
委員	山本 高師	(理工学研究科等事務部長)	H25.4.1 ~ H27.3.31)
事務	上村 敏	(工学系事務課長)	H23.4.1 ~ H26.3.31)
事務	吉村 大作	(工学系事務課学生係長)	H24.4.1 ~)
事務	南野 真奈美	(工学系事務課学生係)	H25.4.1 ~)

目次

はじめに

第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動 3

第2章 工学部FD講演会および鹿児島大学FDワークショップ

2.1 工学部FD講演会 5

2.2 全学FDワークショップ

2.2.1 学生支援研修会 7

2.2.2 新任教員FD研修会 9

2.3 学外FD研修 10

第3章 学生による授業評価とそれを生かした授業

3.1 学部授業評価アンケート分析結果

3.1.1 学部平均値の推移とその分析結果 12

3.1.2 機械工学科の推移とその分析結果 16

3.1.3 電気電子工学科の推移とその分析結果 18

3.1.4 建築学科の推移とその分析結果 20

3.1.5 環境化学プロセス工学科の推移とその分析結果 22

3.1.6 海洋土木工学科の推移とその分析結果 24

3.1.7 情報生体システム工学科の推移とその分析結果 25

3.1.8 化学生命工学科の推移とその分析結果 28

3.2 授業計画改善書の各学科の活用状況

3.2.1 機械工学科の活用状況 29

3.2.2 電気電子工学科の活用状況 29

3.2.3 建築学科の活用状況 29

3.2.4 環境化学プロセス工学科の活用状況 29

3.2.5 海洋土木工学科の活用状況 29

3.2.6 情報生体システム工学科の活用状況 30

3.2.7 化学生命工学科の活用状況 30

第4章 平成25年度工学部のFD活動の総括と今後のFD活動

4.1 平成25年度の工学部のFD活動の総括

4.1.1 平成25年度のFD活動 31

4.1.2 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成 31

4.1.3 公開と授業参観の実施 31

4.1.4 FD講演会の実施 32

4.1.5 学習成果と質の向上の検討 32

4.2 今後のFD活動 33

第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動

鹿児島大学の中期計画には、『進取の精神』（時代を先取りし、物事に果敢に挑戦する気風）を有する人材を育成するために、FD活動等を充実し、教員の教育力向上に向けた取り組みを展開する」と定められており、充実したFD活動の実施を求められている。工学部FD委員会では平成25年度もこの中期計画に沿って活動を行った。

工学部では、全7学科の教育が日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定プログラム教育、あるいはJABEEに準拠した教育を行っている。これまで継続的に実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEEの求める教育改善のためのPDCAサイクルにうまく取り込まれた形で実施されている。平成25年度の第1回工学部FD委員会において、既に学部に着したFD活動を本年度も継続して遂行することが決定され、年度内に次の6つの活動を実施した。

1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成

工学部の学生による授業評価アンケートは、平成24年度も例年どおり前期7月、後期1月に実施した。また期中頃に中間アンケートも実施した。期末アンケートは、5段階のリッカート尺度評価による15項目の質問と自由記述欄で構成されている。5段階評価（「大いにそう思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そうは思わない」、「全くそうは思わない」）は5から1までの値で数値化し、科目ごとの各項目の平均値を評点として集計後、担当教員に学生の記入したアンケート用紙とともに印刷して返却した。評価印刷物には、各学科の評点平均も一緒に記載されており、各授業の評価位置が認識できる。また、各教員は、授業評価を受けて既定のフォーマットに沿って授業計画改善書を提出した。授業計画改善書には平成25年度、24年度、23年度の三年間の各項目の評点の推移と平成25年度の評価値に対する自己評価と改善対策案を記入することになっている。この改善書は全7学科で学科内での自由な閲覧を可能にしており、各教員の教育の質改善のみならず、各学科の教育の質改善にも利用されている。

2) 授業公開と授業参観の実施

平成25年度は、前期35科目、後期46科目が公開科目となった。これは授業を担当している工学部担当教員のほとんどが自身の担当科目の一つを公開科目としたことを意味する。これらの公開科目に対して、工学部教員による授業参観が前期9件、後期10件実施された。このように平均で公開科目の23%で実際に参観が行われた。ただし参観の実施は、学科間で差が大きい。

3) FD講演会の実施

平成25年度の工学部FD講演会は2回開催された。1回目は、理工学研究科と理学部との共催で、稲盛会館ホールにて平成25年11月6日水曜日13時30分から15時00分まで、広島大学工学研究院の迫原修治教授を講師に招いて開催した。その詳細な記録は理工学研究科のFD報告書に記載されている。2回目のFD講演会は、稲盛会館にて平成25年12月6日金曜日16時10分から17時40分まで、大阪大学名誉教授・日本技術者教育認定機構（JABEE）顧問 大中逸雄先生を講師に招いて開催した。その記録は、第2章で詳細に記載する。

4) 学外 FD 研修会への学部教員の派遣

平成 25 年度より、学外の先進的な FD 活動を学部教員に体験してもらうために、全学 FD 委員会に学外 FD 研修会等への学部教員の派遣の予算を申請することとした。申請は採択され、電気電子工学科から川越准教授を大学コンソーシアム京都主催の FD フォーラムに派遣した。その報告は第 2 章に掲載する。

5) 授業評価アンケートの分析

工学部においては授業評価アンケートを平成 16 年度より 9 年間継続して実施しており、多くの項目の評点についての経年的な変化やトレンドを把握することが可能となっている。各学科の FD 委員は、学科ごとの評点の分析を詳細に行った。第 3 章に工学部全体と各学科の動向分析を記載する。

6) 報告書の作成

本 FD 報告書は、上記 1)～5)の報告の他に、FD と JABEE への取り組みや GPA 制度の現状と学習成果を学科ごとに現状報告や分析をまとめた。最後に、平成 25 年度工学部の FD 活動の総括と今後の FD 活動について整理した。なお、全学 FD 委員会主催で、工学部教員が参加した学生支援研修会や新任教員 FD 研修会あるいは FD・SD 講演会が開催されている。学生支援研修会や新任教員 FD 研修会についても出席工学部教員から報告書を提出していただいた。

第2章 工学部 FD 講演会および鹿児島大学 FD ワークショップ

2.1 工学部 FD 講演会

本間 俊雄（建築学科）

平成 25 年度の工学部 FD 講演会は、2 回開催された。1 回目の FD 講演会は、稲盛会館において、平成 25 年 11 月 6 日水曜日 13 時 30 分から 15 時 00 分まで、理工学研究科、理学部との共同共催で、広島大学工学研究院の 迫原 修治 教授に講師を依頼した。講演題目は、「広島大学の到達目標型教育プログラム(HiPROSPECTS)」である。講演会への参加者は、95 名（教員 72 名、事務・技術職員 23 名）であった。迫原先生の講演内容の詳細に関しては、平成 25 年度理工学研究科 FD 報告書に掲載されているので、詳細はそちらを参照されたい。2 回目の FD 講演会は、稲盛会館において、平成 25 年 12 月 6 日金曜日 16 時 10 分から 17 時 40 分まで、工学部独自に工学部が当面大きな課題としているエンジニアリング・デザイン教育法に関する講演を大阪大学名誉教授・日本技術者教育認定機構（JABEE）顧問 大中 逸雄 先生に依頼した。講演題目も「日本の将来を決めるエンジニアリング・デザイン教育」と刺激的で興味深いものであり、その内容も事例を取り入れた具体的であったため、講演終了後の質疑応答も活発となった。講演会への参加者は、65 名（教員 52 名、事務・技術職員 13 名）であった。講演ポスターは図 2.1.1 のとおりである。以下に大中先生の講演概要を簡単にまとめる。

まず、工学部長の福井先生より、「国立大学のミッションの見直しに関連して、工学系分野の取り組みの中で付加価値のあるモノづくりのできるような汎用的能力が必要となります。一方、こうした能力を育成するエンジニアリング・デザイン教育が欧米諸国より不足していることに鑑み、今後の日本のモノづくりを支えるのに必要となるエンジニアリング・デザインとはどのような考え方で工学教育に取り入れていったらよいかの共通認識を構成し、5～10 年先を見据えたトップレベルの教育体制を鹿児島大学工学部で作っていくことを考えています。本講演は、全教員の意見の統一・合意形成の一環として大中先生にお願いしています。」（文責・本間）との講演会趣旨が話された。

大中先生から頂いた講演内容は次のとおりである。

工学部主催 FD 講演会

日本の将来を決めるエンジニアリング・デザイン教育

講演者 大中 逸雄（大阪大学名誉教授）

講演概要

日本のような高度工業化社会は、専門知識や専門技能を駆使して活動する種々の職業人の努力で成り立っている。エンジニアリングを学んだ人達が受け持つ仕事は、主に建造物や各種機械・機器、材料あるいはソフトウェアなどの人工物の設計、製造、維持、管理・運営等に関係している。これらの活動の過程で生じる種々の問題を解決する人材の優劣が、社会の安全、安心、経済性に大きく影響する。エンジニアリング・デザインとは、従来の単なる設計だけではなく、種々のエンジニアリング的問題解決策の立案を含む広い意味を持っている。従って、科学がゆっゆに発展しようと、科学を適切に利用して種々の問題を解決するエンジニアリング・デザイン力が劣っている国は衰退せざるを得ない。

本講では、このようなデザイン教育の国際的動向や現在の日本の危機的状況に対する講演者の考えについて述べ、皆様と共に、今後如何に教育すべきか、何をすべきかについて学び合いたい。

エンジニアリング・デザイン

解決すべき課題を考える
課題の特定
社会の要を考慮する
設計
みんなで作る
自分で作る
種々の課題の中で最適な設計
自然や社会への影響
具体的な設計を立案する
実際に建造や製造する

開催日時 平成25年12月6日（金）
16:10～17:40

場所 稲盛会館ホール 鹿児島大学郡元キャンパス

対象 鹿児島大学教職員

お問い合わせ
鹿児島大学 工学系事務課学生係
TEL: 099-285-8231
Email: gakusei@eng.kagoshima-u.ac.jp

図 2.1.1 講演会ポスター

日本のような高度工業化社会は、専門知識や専門技能を駆使して活動する種々の職業人の努力で成り立っている。エンジニアリングを学んだ人達が受け持つ仕事は、主に建造物や各種機械・機器、材料あるいはソフトウェアなどの人工物の設計、製造、維持、管理・運営等に関係している。これらの活動の過程で生じる種々の問題を解決する人材の優劣が、社会の安全、安心、経済性に大きく影響する。エンジニアリング・デザインとは、従来の単なる設計だけではなく、種々のエンジニアリングの問題解決策の立案を含む広い意味を持っている。従って、科学がいかに発展しようと、科学を適切に利用して種々の問題を解決するエンジニアリング・デザイン力が劣っている国は衰退せざるを得ない。本講では、このようなデザイン教育の国際的動向や現在の日本の危機的状況に対する講演者の考えについて述べ、皆様と共に、今後如何に教育すべきか、何をすべきかについて学び合いたい。

当日は、最初に東京大学と京都大学、MIT の教育目標が掲げられて問題点を指摘し、鹿児島大学工学部の教育目標と 2 学科の教育目標について高度専門職育成への対応を解説した。その上に、高度専門職とは何か。高度専門職を育成することはどういう意味があるのか。エンジニアリング・デザイン教育の世界動向とそうなっている理由はなぜか。このような現況の下、我々は何をどうすべきなのかを説明し、エンジニアリング・デザイン教育に単なる修正・変更ではなく、パラダイムシフトすべき理由が述べられた。具体的には、解答のない解を導き出す過程を重視する、少人数単位による問題解決型の手順が話され、欧米の教育例や教育施設が紹介された。最後に、エンジニアリング・デザイン教育（学び教育）の普及が日本の今後の繁栄につながることで、知識と応用力・創造力の違い、教員のデザイン力・創造性が結果的に問われていることが述べられた。

講演後、以下の質疑が交わされた。

質問 1. 実社会と大学での問題解決の内容に大きなギャップがある。大学のエンジニアリング・デザイン教育効果（身につけ方）を正しく評価できるか。

回答：能力との育成と判定については、レベルは異なるが社会で起こる類似の問題を大学で低学年からプロジェクトで実施し、経験や失敗を体感させることが可能である。

質問 2. 間違っただけで教育にさらされ、覚えることだけが得意の学生を社会に送り出すために、全体を底上げする方法を具体的に聞きたい。

回答：少人数のチームによる学び教育の実質化を推奨する。ただし、与えたテーマに対してチームで取り組むのではなく、個人が行い、チームで聞き合う関係を構築する。教え過ぎは問題である。学生は教育に対する先入観があるので、学び教育の重要性を説く必要がある。

質問 3. 高度成長期の 1969-1980 年代の教育方法で、十分に機能していた。敢えて教育方法を変える必要はないのではないか。

回答：時代とともに社会状況は変化する。高度成長期は求めるべき解が存在していた。その当時はその解を解決するために、皆さん一斉に取り組んでいた。現在、求めるべき解がない時代である。その変化に対応しなければならない。

質問 4. 日本の産業構造が変化するのに伴い、工学部教育も変える必要がある。モノづくりをどのように立て直すのか。

回答：ものづくりの定義を変える必要がある。開発・設計も含めたモノづくりを考える必要がある。生き残り戦力を各個人が考えなければならず、従来の単なる工学教育ではなく、経済やビジネスを取り入れた教育が必要となる。エンジニアリング・デザイン教育はそれが可能となる。

2. 2 全学 FD ワークショップ

2. 2. 1 学生支援研修会

川越 明史（電気電子工学科）

平成 26 年 3 月 26 日に学生支援研修会が開催された。前田学長より本学の学生支援体制について説明があり、その後保健管理センターの川池先生から、保健管理センターへの相談事例について説明があった。いずれも有意義なものであった。特に川池先生のお話は、大学生活につまずいている学生に対する支援の際に有用なお話であった。

前田学長から説明のあった鹿児島大学の学生支援体制に関する内容は次のとおりである。

学生の教育においては、社会の課題に真摯に取り組む姿勢を育てるとともに、専門性・倫理観・課題の発見と解決力・コミュニケーション力・社会人力・リーダーシップ、さらに困難を乗り越える力・粘り抜く力を育成する必要がある。このためには、学生が「前に進む努力」を積み重ねることができ、また教職員はその努力を支援する必要がある。その繰返しが「経験」の蓄積となり、学生の「自信」と「勇気」に繋がる。大学の人材養成指針は、学生憲章・大学憲章・生涯学習憲章の三つの視点から打ち出されているものであり、目標は「進取の精神を備えた人材の育成」と定められている。

人材育成を支援する環境整備としては、ハード面として附属図書館や保健管理センターを含め、数々の設備がある。最近では、海音寺潮五郎先生の記念館を改修した施設が、平成 26 年 10 月から宿泊施設として使用できるようになるので、学生の学会参加や就職活動の際に活用していただきたい。またソフト面として、学習支援や就職支援、経済支援、補習教育などの支援事業を行っている。特にグローバル人材の育成を見据え、国際化の支援事業も行っている。さらには、安心して学べる修学環境を保障するために、相談窓口を設置したり、学長との懇談会も年 2 回実施している。FD 活動も積極的に行っており、鹿大版 FD ガイドには、多くの取組み事例が掲載されているので、各先生方にも参考になるものと考えている。

以下、質疑内容である。

質問 どう勉強していいかわからず、自分から学ぶことができない学生が多い。発達障害も疑われるような学生もいる。そのような状況の中で、入学直後に、性格診断など行い、自分をどう変えればいいのかを知る機会を作るなどの取り組みを、全学として導入する可能性はないか？

回答 重要な視点である。鹿児島大学としても知恵を出して考えていきたい。

質問 桜ヶ丘キャンパスにおける自主学習の環境整備について

回答 学長との懇談でもそういう意見が届いている。しばらく時間がほしい。病院や研究棟の改修の機会があればその中で考えていきたい。

質問 情報社会に応じた教育環境の整備について

回答 入学前の学生への JMOOC や、高校生向けの manavee などを活用して、学力の低い学生向けの補習授業を入学前に実施することが検討されている。しかしながら正式な授業の中での活用法については特に検討されていない。

保健管理センターの川池先生から、保健管理センターにおける学生からの相談事例、特に「つまずき」から悪循環に陥っている学生の種々の事例や精神状態を説明いただいた。その内容は以下のとおり。

対応件数は年々増加傾向にある。初診のケースの半分以上は、なんらかの形で教員から勧められたものである。相談の内容の8割は、情緒不安定と不登校である。この二つの内容は、実質はかなり重なりがあるものである。

相談のよくあるパターンは次のようなものである。担当教員が不登校の状態を確認する。学生を呼び出す。このときの学生の多くから聞く発言は、「意欲がわからない」「憂鬱」といったものである。この話を聞いた教員が心配して、保健管理センターの受診を勧める。このようなパターンが多く、学生の周囲の関係者はうつ病を心配するので、慎重に対応しなくてはならないと考えて、苦慮されているようである。関係者が、気分の落ち込みは病気であると考え背景には、「うつは心のかぜキャンペーン」による「気分の落ち込みは病気かもしれない」という認識を多くの人をもつようになったことがあるのではないか。このため、「悩める健常人」としての対応が難しくなっている状況にある。

現状の相談に来る学生の状況は、なんらかの「つまずき」から負のスパイラルに陥ったものである。「つまずき」の主なパターンは、次のようなものである。一人暮らしの学生が陥り易い生活リズムや食生活が乱れてしまったもの。大学システムに慣れることができず、大学生活に戸惑ったまま時間が過ぎていき、モチベーションが低下し孤独感を募らせるもの。第一希望ではない学部・学科に入学したために、学業への意欲が低下してしまったもの。基礎学力が不十分なために、授業についていけないもの。偏差値や資格などのわかりやすい目標がない大学における学問にとまどっているもの。

以上のような「つまずき」から授業を欠席がちになると、その後以下のようなパターンで悪循環に陥るようである。授業を欠席することによって授業内容が理解できないという劣等感から孤立化し、不登校に陥っていく。欠席がちのために周囲からの情報が入らず適応できなくなり、教員との接触も回避しがちになる（この場合、罪悪感からより教員との接触を避けるようになったり、拒否的な対応になったりすることがある）。不登校・学業不振の負い目から親からの連絡も拒否しがちになる（この場合、生活費・学費を負担してもらっていることに対する罪悪感から親との連絡をさらに遠ざける。このため、事態を親が知らないということがよくある）。

以上のように、悪循環にある学生の多くは、やらなければならないことをやっていない罪悪感をもっており、そのために見捨てられるかもしれないという恐怖感も感じている。その恐怖感があるからこそ、今の状況を親や教員に知られたくないという気持ちもある反面、近づいてきてほしいと感じている。このような「両価性」は、うまくいっていないときの人間の共通特性である。学校や家庭が連携をはかり、「みんなであなたの将来を考えている」という姿勢が伝わるだけでも、学生の変化のきっかけになることがある。

以下、質疑内容である。

質問 本日の内容を、入学当時の学生向けに話していただけると、「つまずき」やすい学生の初期対応として効果があるのではないか。検討してほしい。

回答 検討します。

2. 2. 2 新任教員 FD 研修会

山下 和香代（情報生体システム工学科）

平成 25 年 9 月 24 日に新任教員 FD 研修会が開催された。本研修会のテーマは「アクティブ・ラーニングを促すシラバス設計」であった。

清原 教育担当理事による学生の学修活動の現状をふまえた開会の挨拶からはじまり、講演と事例紹介、グループ活動、意見交換がなされ、終始和やかな研修会であった。

教育センター高等教育研究開発部 伊藤奈賀子 先生による講演『『アクティブ・ラーニング』とは何か』では、学生自身の頭の中や体が能動的に活動し、学生が自分の学びについて振り返ることができる学修活動になるように意識した授業運営が大事であると説かれていた。能動的な活動の為には、学生自身で遂行できるか、具体的な指示を出しているかといったことを工夫しながら授業を構成する必要があるだろう。一方で過度の指示を与えると学生自身の頭の中で考えることを必要とせず単なる作業となる可能性があるだろう。学生の資質を十分に見極めていかなければならないことを考えると、一度に多くの学生を対象とする場合は特に注意する必要があると感じた。

次に、大学院医歯学総合研究科 田口則宏 先生による事例紹介が行われた。学生生活における目標を設定させるために、学部 1 年で様々な診療科をみてまわり、将来どのような歯科医になりたいかをまとめさせることを行っているとのことだった。学生が自分で目標設定することによって学生の間は何をすればよいか明確にすることができ、能動的な学修活動が促進される仕組みが整備されていると感じた。また、講義の際にアンケート・集計をリアルタイムで行い、フィードバックを学生に返すことができる「クリッカー」と呼ばれる通信機器を用いた事例紹介もあった。この機器を利用することの利点は、学生の理解がどの程度であるかをその場で知り補足説明することができることだ。さらには回答者にとっても人前で発言するより精神的負担が少なく回答しやすいように感じた。

最後にグループ活動では、1 グループ 6 名で、共通教育科目「鹿児島探訪」という講義を想定し、アクティブ・ラーニングを意識したシラバス案（到達目標・15 回の授業概要・評価方法など）作成後、その案を発表し全体で意見交換を行った。これまでに講義を単独担当したことはなくシラバス作成の経験はなかったが、グループで先生方と意見を出し合いながら作成できたことで、15 回の講義構成する際に注意しなければならないポイント、工夫できるポイントなど知ることができた。いつの日か実際に作成するときに学んだポイントを活かしていきたい。また、グループは分野の異なる教員同士で構成されており、自身では想定していなかったアクティブ・ラーニングを促す方法をご提案する先生もおられ興味深かった。

意欲・創造性・交渉力などをはじめとした能動的な能力が現代社会では求められていると聞いたことがあるが、普段の業務を顧みると学生の能動的な姿勢はむしろ必要ないまでの支援が行われているように感じることもある。研修会を終えてみて、学生の資質を十分に見極めていかなければならないことはわかるがその塩梅は難しいとひしひしと感じた。

2. 3 学外 FD 研修

川越 明史（電気電子工学科）

第 19 回「FD フォーラム社会を生き抜く力を育てるために」は、龍谷大学深草キャンパスを会場として、平成 26 年 2 月 22 日、23 日の 2 日間にわたって開催された。本フォーラムについて報告する。当日の資料は学生係に提出している。

初日は、シンポジウム I「京都発！地域社会まるごと学習コミュニティ共に育ち、共に学び合う社会を創る」と、シンポジウム II「未来を切りひらく学生を育てるには」の二つのシンポジウムが開催され、シンポジウム I に出席した。

シンポジウム I の内容は、始めに 3 名の講演者による講演の後、パネルディスカッションが行われた。講演者は、京都市総合企画局市民協働政策推進室大学政策担当部長である古瀬ゆかり氏、京都工芸繊維大学理事・副学長の大谷芳夫氏、第 11 回京都学生祭典実行委員会委員長の立命館大学政策科学部 3 回生の堤大地氏である。

いずれの講演も興味深いものであった。京都市として大学・学生のまち京都を推進しようとする京都市の取組みは、経済界と行政、地域と学生が一体となって京都市を活性化させようパワーが感じられた。京都工芸繊維大学の「地（知）の拠点整備事業（COC 事業）」の取組みは、産業界のみならず教育委員会と連携した地域工学系人材育成のためのカリキュラム改革を進めているとのことであった。そのために、教員の地域活動を評価する業績評価の導入や、地域に関する学習を行う科目を必修化して、産業振興による地域の活性化をはかっているとのことであった。京都学生祭典の実行委員長としての堤氏の経験談からは、学部 3 年生としては非常に密度の濃い時間を経験したことが感じられた。多くの学生が参加する祭典であり、協賛をとることから紆余曲折あったことが話され、講演者のみならず、多くの学生の大きな成長に繋がったであろうと感じた。これらの講演からは、鹿児島大学工学部は、企画力や実行力、コミュニケーション力といった、何らかのプロジェクトを実践して身につける力の養成という点で、大きく遅れていると感じた。

二日目は、第 1 分科会から第 13 分科会まで同時進行で開催され、第 12 分科会「産学協働でグローバル人材を育成するには」に参加した。4 名の講演者が講演を行い、その後、ポスターセッションを挟み、5 班程度に分かれてワークショップを行った。4 名の講演者は、京都信用金庫専務理事の榎田隆之氏、立命館大学国際関係学部教授の小山昌久氏、サラヤ株式会社代表取締役社長の更家悠介氏、京都文教大学海外インターンシップ生の種子恭輔氏である。ワークショップでは、「グローバル人材とは？」「グローバル人材育成における産学間連携教育の様々なあり方と課題ならびに解決方法について」の二つについて、KJ 法を用いたブレインストーミングが行われた。

いずれの講演でも、グローバル人材の教育には実践型教育が効果的であるということは一致しており、そのために企業と大学、行政の連携が重要であろうとのことであった。京都信用金庫専務理事の榎田隆之氏は、高校から米国に渡り海外で活躍された後、行き過ぎたグローバリズムに警鐘を鳴らすべく、地域の絆づくりの重要性を提唱し、グローバル人材の育成にご尽力されている方であった。いわゆるグローバル人材を育成するには、ありきたりの座学ではダメで、産学が連携した実践型教育が有効であろうと話された。立命館大学国際関係学部教授の小山昌久氏からは、グローバル教育のための有効な取組みとして、交換留学のような生活体験、国際交流体験、海外正課受講体験、また国際教育寮による留学生

と日本人間の異文化交流のプラットフォーム設置、企業へのインターンなどが挙げられ、ここでも多様な人とのコミュニケーションを通じた実践型教育の重要性が強調された。サラヤ株式会社代表取締役社長の更家悠介氏からは、事業を通してグローバル人材が養成されるという事例を紹介いただいた。京都文教大学海外インターンシップ生の種子恭輔氏からは、海外で開催された学生会議への参加経験と、タイの日本企業工場へのインターンシップ体験の話をしていただいた。自身の経験から、グローバル人材に必要な態度・能力は、「積極性」「適応性」であり、それを「日本国内だけでなく、海外という異なる環境下でも発揮できる人」がグローバル人材であると考えているとのことであった。グローバル教育のための実践型教育はもちろんであるけれど、インターンシップ等の前に実施する事前の教育として、現地の言語習得のみならず、文化を知ることなどが重要であると指摘していた。また、企業・大学・学生の三者がプログラムに関して議論し、考えをすり合わせておくことが大切であるとのことであった。さらには、この三者に加え、海外の方まで含めた四者で連携することを提案していた。

ポスターセッションでは、京都産業大学における英語合宿プログラムの試みに関する発表が興味深かった。1泊2日の英語のみの研修を実施した結果について報告されていた。学生は、今後、留学などについてのモチベーションが上がったようであった。英語によるディスカッションを実施したりしたが、適宜、ネイティブの方を含む教員が、意見を言えない学生のサポートをしたりして、議論が活発になるようにしたとのことであった。このような取組みを活発に実施し、学生の英語で議論する力を養成することが重要であると感じた。

ワークショップでは、グローバル人材育成における産学間連携教育の様々なあり方と課題ならびに解決方法についてブレインストーミングした結果、「理工系にマッチしたインターンシップが少ない」という意見があった。企業側のメリットが見えにくいという課題が指摘されたが、それに対しては、「広報・ブランディング」が一つの解になりうるという意見があった。留学の場合の予算措置も課題として挙げたが、これに対しては、政府の「トビタテ！留学ジャパン」という事業があるということがアナウンスされた。

全体を通して振り返ると、京都学生祭典の実行委員長とタイのインターンシップを体験した二人の学生の魅力が際立っていたことが、印象的であった。大学の座学中心の教育だけでは中々できない体験をする中で、人間的に大きく成長した様子が伺えた。やはり、実践型の教育を大学としても押し進めていく必要性を感じた。しかしながら、エンジニアを教育する工学部としては、工学の専門知識の教育をおろそかにしては本末顛倒であるので、そちらの教育効果も上げられるようにバランスよくカリキュラムを設計する必要があると感じた。

第3章 学生による授業評価とそれを生かした授業

3. 1 学部授業評価アンケート分析結果

3. 1. 1 学部平均値の推移とその分析結果（黒川善幸）

ここでは、講義・演習科目の授業評価アンケート結果の工学部全体の平均値に関して、平成16年度前期～平成25年度後期までの20期分の授業評価の推移をもとに分析する。なお、「工学部平均値」は、まず各設問に対する講義・演習科目の評点を学科毎に平均し、さらに学科平均値を単純に平均し、得られた値であり、学科ごとの科目数の違いは考慮されていない。

まず、15項目の授業評価アンケート項目の内、特に重要な次の6項目に着目して分析を行う。

設問4：授業は理解できた

設問6：宿題・レポート・小テストなどは授業の理解に役立った

設問7：シラバスに記載された授業目標を達成できそうだと感じる

設問11：講義中やオフィスアワーで質問などに対する教員の対応に満足した

設問14：1コマ（90分）の授業に対して、予習と復習の時間を合わせてどれ位をかけましたか

設問15：この授業は総合的に見て満足できた

これら6項目を以下では簡単のため、「④理解」、「⑥宿題」、「⑦目標」、「⑪質問」、「⑭自習」、「⑮満足度」と記すことにする。図3.1.1(1)～(6)に上記6項目について、また図3.1.1(7)にその他の9項目について、工学部全体における授業評価アンケート評点の推移をそれぞれ示す。

図3.1.1(1)より、「④理解」に関しては、前期は平成21年度ぐらいまで上昇傾向のあとは3.6～3.7程度でほぼ横ばいを続けていることが解る。後期は平成23年度がピークであった。平成25年度は24年度に比べて前後期とも若干低下した。全体的にやや頭打ちの傾向を示している。

図3.1.1(2)より、「⑥宿題」に関しては、平成23年度～24年度ぐらいがピークであったことが解る。授業担当教員による継続的な改善努力が行われているがそれも限界に近づいていると解釈できる。平成25年度では24年度に比べ若干下降しているが、評点は3.9以上と依然高く、現状では適切と判断できる。

図3.1.1(3)より、「⑦目標」に対しては、前期は平成21年度ぐらいまで上昇傾向のあと3.7前後でほぼ横ばいを続けていることが解る。後期は平成23年度～24年度がピークであった。平成25年度は24年度に比べて若干低下した。「④理解」とほぼ同様の値で同様の推移を示している。

図3.1.1(4)より、「⑪質問」は、近年ほとんど変化が見られず、3.6～3.7の間を推移していることがわかる。学生が授業中やオフィスアワーにおける教員の対応にあまり満足できなかったのか、質問やオフィスアワーの利用自体が少なかったのかは判らないが、設問が教員限定であり、演習等で実際に接することの多いTAに対する評価が含まれていないことの影響も考えられる。

図3.1.1(5)より、「⑭自習」は平成23年度ぐらいまで上昇傾向のあとは3.1前後でほぼ横ばいを続けている。この項目の評点は低いが他の項目と違って定量的な評価であるため直接比較はできない。しかし、90分の講義に対し3時間の自主学習が求められている以上、選択肢3の「1～2時間」に近い現状は改善の必要がある。演習課題やレポートの質の改善、演習書の適切な選定等を工夫して、学生の理解向上に反映させていく必要がある。ただし、この項目は科目間のばらつきが大きく、標点4.0を超

えている科目も少なくない。選択肢 5 が「3 時間以上」と打ち切っているため、実際の自習時間はもう少し多いものと考えられる。

図 3. 1. 1(6)より、授業の総合的評価である「⑩満足度」も「④理解」、「⑦目標」と同様のやや頭打ち傾向を示しているが、評点は 3.8～4.0 と低くない。理由は解らないが、常に「④理解」<「⑦目標」<「⑩満足度」であり、理解が不足していても満足している層があることが判る。今後も高い評点を維持しつつ学生の理解を引き上げる方法を検討することが望まれる。

上記の 6 項目以外については、図 3. 1. 1(7)から、前期に関しては、「⑫返却」以外は平成 21 年度が突出しているものの、これを除くとおおむね後期同様平成 20 年度～22 年度まで上昇の後に鈍化し、平成 24 年度をピークとしていることが解る。平成 25 年度は 24 年度に比べて低下している。「⑫返却」以外は評点は 4.0 前後で高いが、「⑫返却」は 3.6 前後で推移している。これは、他の項目が比較的曖昧な印象で評価されているのに対して、「⑫返却」はアンケート時点での実際の返却の有無のみで判断されるため、評価がシビアになっているものと考えられる。

全体的に頭打ちの傾向にあるので、今後全体の評点を上げるには評点の低い「⑪対応」「⑫返却」「⑭自習」などを伸ばす必要があると思われる。

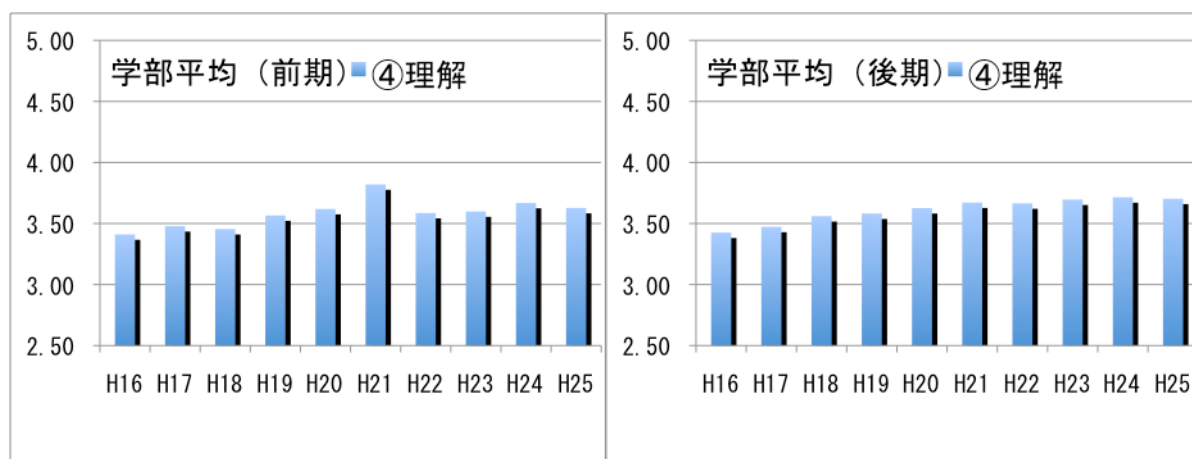


図 3. 1. 1(1) 工学部全体の平均値 (④理解)

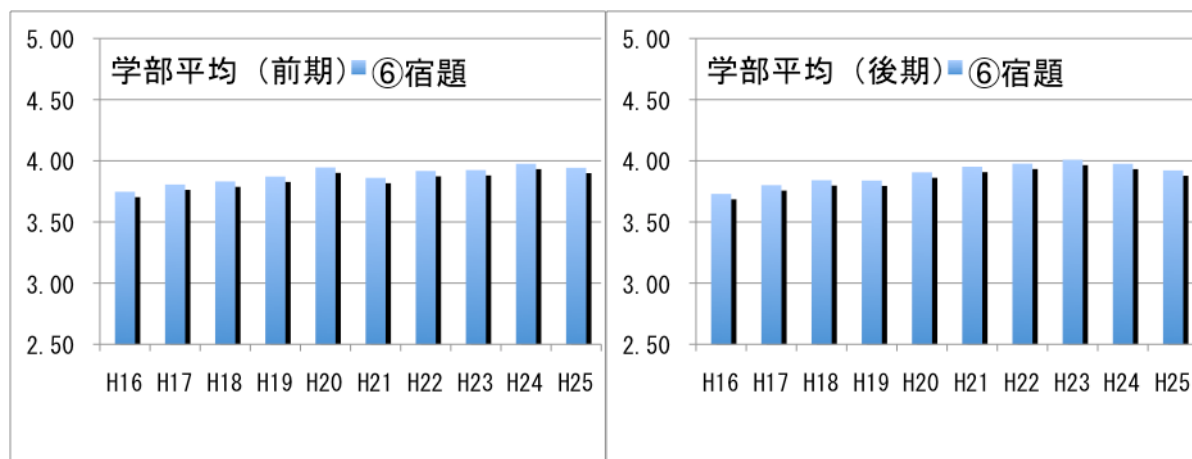


図 3. 1. 1(2) 工学部全体の平均値 (⑥宿題)

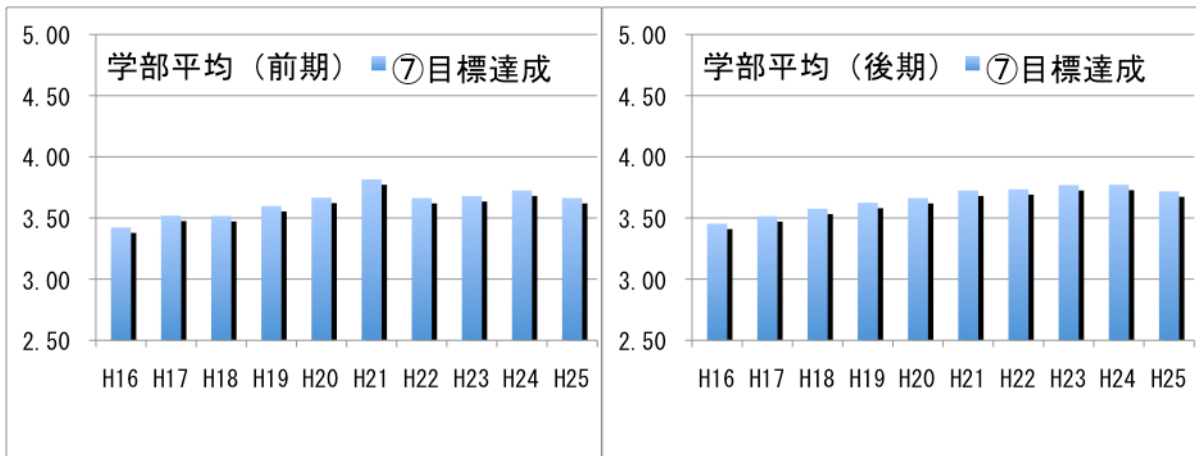


図 3. 1. 1(3) 工学部全体の平均値 (⑦目標)

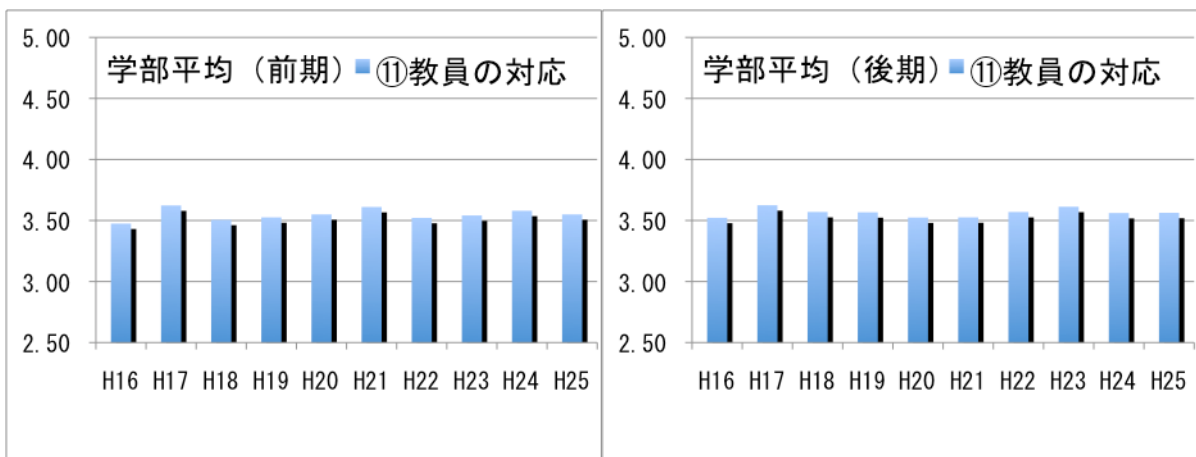


図 3. 1. 1(4) 工学部全体の平均値 (⑪質問)

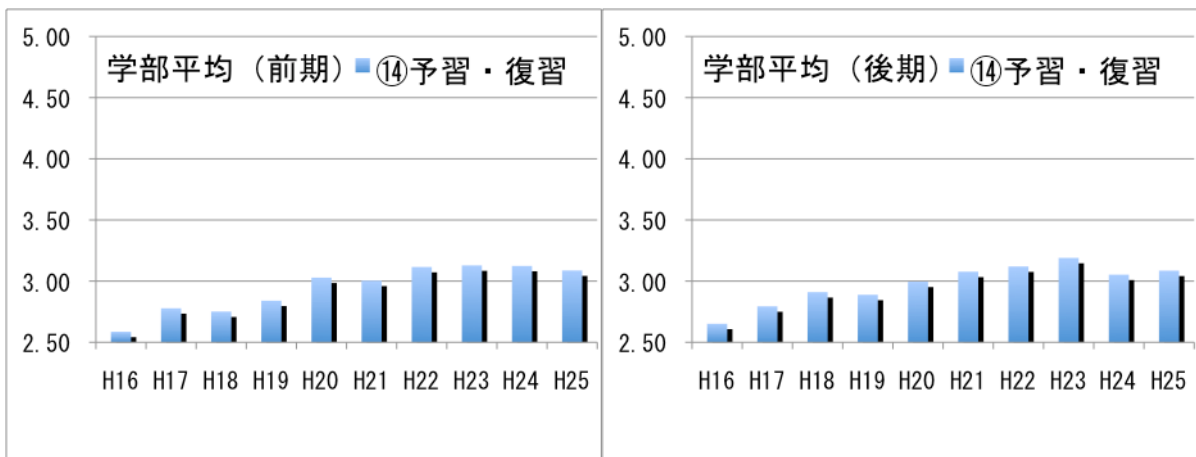


図 3. 1. 1(5) 工学部全体の平均値 (⑭自習)

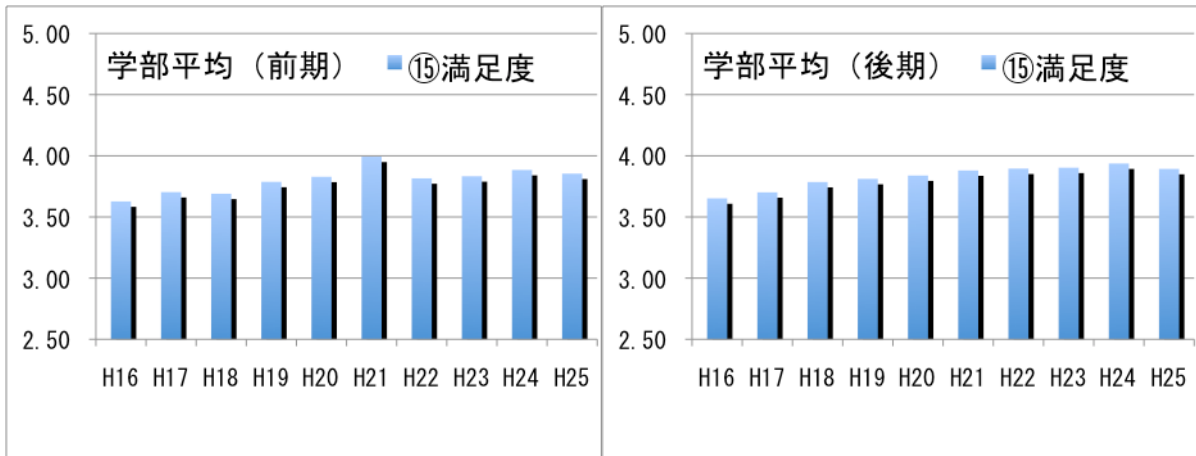


図 3. 1. 1(6) 工学部全体の平均値（⑮満足度）

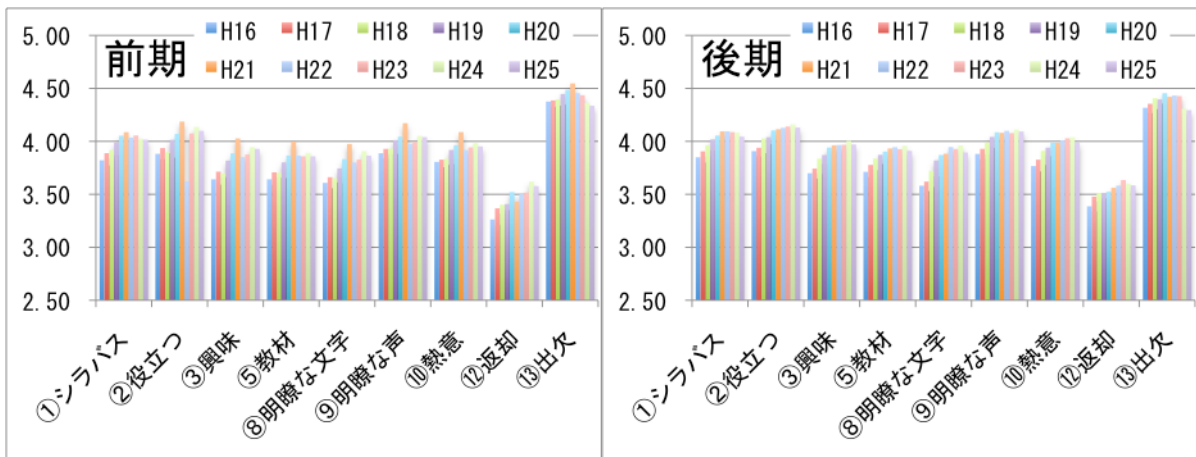


図 3. 1. 1(7) 工学部全体の平均値（その他）

その他、全ての項目で工学部全教職員の改善努力が続けられていることが分かる。先の重視した 6 項目とこれら 9 項目とは、言うまでもなく密接に関連しており、今後、頭打ちの傾向を打開するためには、これまでに気づけなかった要改善点を見出す努力が必要である。

自学自習の能力の育成については、これまで重要な項目として指摘されていることであるが、充分とは言えないまでもこの 3 年間の間に徐々に増加していることを示している。各科目の掲げる学習目標の達成度については、学生の評価点は昨年度と変化は見られないが、授業を受けての全体としての満足度については、僅かながら向上を示していることが分かる。

3. 1. 2 機械工学科の推移とその分析結果

機械工学科の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの評価結果を図 3. 1. 2(1)に示す。この図は、前期及び後期(1年間)に開講された科目に対する各アンケート項目の評点の平均点について、平成16年度から平成25年度(10年間)までの評点の推移を示している。表 3. 1. 2 及び図 3. 1. 2(2)は平成25年度の評点のばらつきを表す。

図 3. 1. 2(1)から、各評点は、「⑩教員の対応」の場合あまり変化がなく横ばいで、「⑬出欠」の場合、平成20年度以降に低下が見られるが、ほぼ全ての項目について、各評点は、平成16年度以降から平成25年度にかけて全体的に右上がりの増加傾向を示している。ただ、ここ数年間はその増加は横ばいになる傾向が見受けられる。年々、学生の基礎学力が低下している傾向にあり、「④授業に対する理解」や「⑦学習目標達成」の評価は下降していくことが予想される。しかしながら、これまでのところその傾向は、まだ顕在化していない。これらを考慮すると、各教員による継続的な授業改善の効果が現れている結果であると判断できる。継続的に授業評価アンケートの推移を確認しながら教員それぞれが授業改善にフィードバックし、評価・改善のサイクルを継続することが重要であると指摘できる。

表 3. 1. 2 及び図 3. 1. 2(2)は、平成25年度開講科目の評点の平均値、最高点及び最低点を表す。これらの表及び図から、ほとんどのアンケート項目の最大値は、4.5～5.0の満点に近い評価であることが分かる。一方、平均値は全般的に3.5～4.0の範囲にあるが、「⑭予習・復習」の評価が特に低下している。この原因は特定の科目で他の項目に比べて最低点が特に低くなっているためである。しかしながら、昨年度の平均点と比較すると本年度は向上しており、各教員が授業内容等の改善や学生に勉強する時間を確保させる工夫を行い努力していると判断される。今後も、平均点より大幅に低い科目の担当教員には、その事実を認識してもらい、授業改善を積極的に実施し、努力してもらう必要がある。

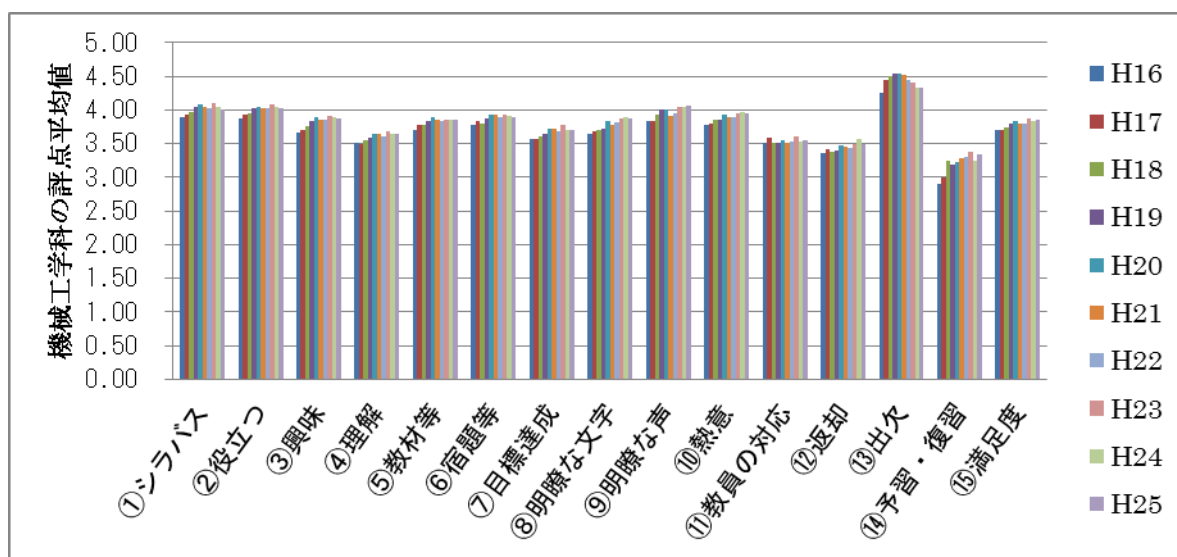


図 3. 1. 2(1) 過去10年間の開講科目における評価点の推移

一方、平成 22 年度の分析結果において、必修的な科目と選択的な科目では選択的な科目の評点が高くなる傾向があるのではないかと見解が示された。この件に関して昨年度の分析によれば、必修及び選択に関わらずに学生が興味を持って熱心に授業を受けているかどうかの違いが、それらの評点の差に反映されているのではないかと見解が示された。図 3. 1. 2(1)の「③興味」と「⑮満足度」の評点平均値の 10 年間の値とその変化を比較すると両項目はほぼ同じ結果となっている。はっきりとした見解を得るには、今後も評価の推移を注意深く比較しながら分析する必要があると思われる。

表 3. 1. 2 平成 25 年度開講科目における評価点のばらつき

項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
平均値	4.02	4.03	3.88	3.65	3.86	3.90	3.70	3.87	4.07	3.95	3.56	3.49	4.33	3.34	3.86
最高点	4.75	4.62	5.00	4.67	4.75	4.88	5.00	4.88	5.00	4.75	4.10	4.50	4.86	4.46	4.62
最低点	3.68	3.33	3.30	3.05	3.37	2.98	3.00	3.00	3.35	3.45	3.00	2.00	3.00	2.10	3.38
昨年度の平均値	4.05	4.06	3.90	3.64	3.86	3.91	3.71	3.90	4.05	3.97	3.53	3.57	4.34	3.24	3.84

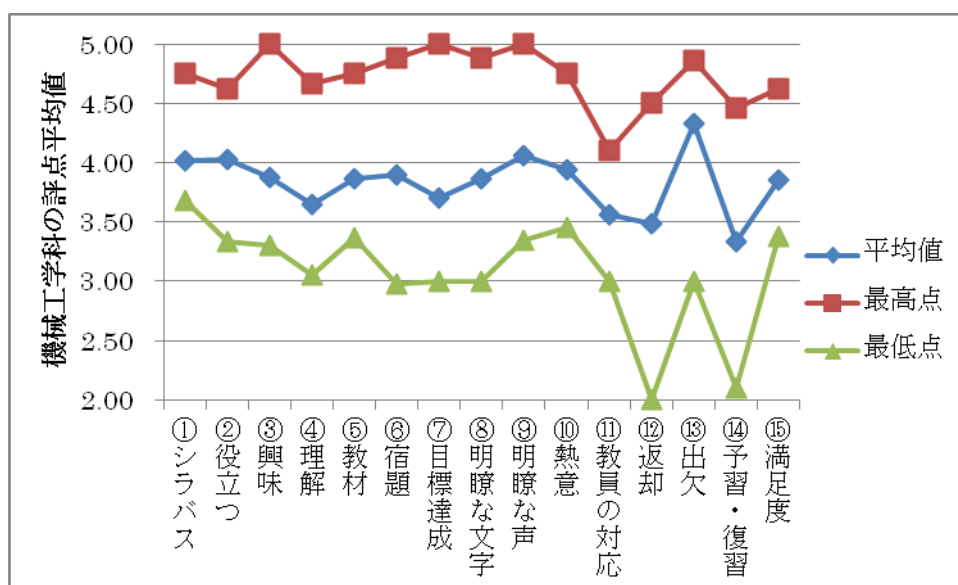


図 3. 1. 2(2) 平成 25 年度開講科目における評価点のばらつき

3. 1. 3 電気電子工学科の推移とその分析結果

図 3. 1. 3(1)および図 3. 1. 3(2)に、電気電子工学科の過去 4 年分（平成 22 年度から 25 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。ほぼ同じ講義科目で比較できるように、前期と後期をわけている。図 3. 1. 3(1)が前期を、図 3. 1. 3(2)が後期を示している。ほぼ全ての項目で、過去 4 年間で大きな変化は見られない。このことは、特に学科で重視している四つの設問項目③興味深い授業、④理解、⑩熱意、⑮満足度においても同じである。この数年来、教員は授業改善の努力を続けてきたが、授業評価アンケート結果からみれば、全体的にやや飽和気味となってきたことがうかがえる。⑭自習の評点（前期 3.16、後期 3.38）は予習・復習 1 時間～2 時間程度を意味しており、満足度のいくレベルであるとは言えないが、ここ数年の実績よりもやや向上がみられる。自習時間を伸ばすことで、理解度や満足度の飽和状態を改善できる可能性がある。今後も、予習・復習の評点は 3.5 を目指して取り組んでいくべきと考えられる。

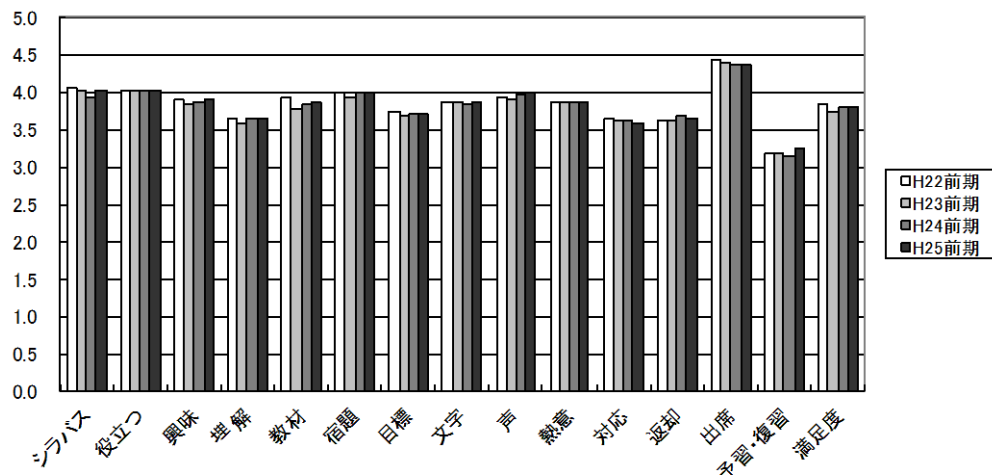


図 3. 1. 3(1) 電気電子工学科の授業評価アンケート結果の推移（平成 22 年度～25 年度（前期））

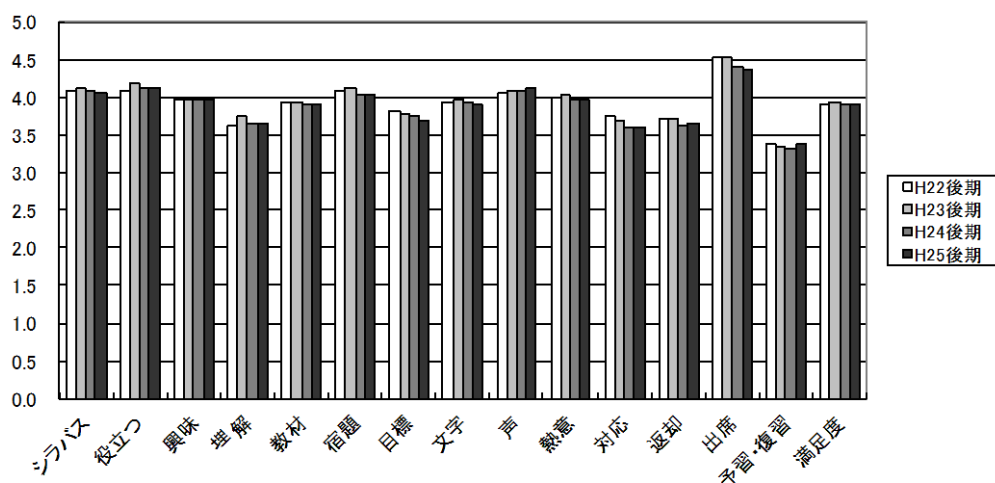


図 3. 1. 3(2) 電気電子工学科の授業評価アンケート結果の推移（平成 22 年度～25 年度（後期））

図3. 1. 3(3)は、設問③興味深い授業、④理解、⑩熱意、⑮満足度の4項目について、電気電子工学科平均の評点と工学部平均の推移を比較したものである。電気電子と工学部平均はほぼ同じように推移している。やや工学部平均よりも低い傾向がある。学科によって学生の傾向、講義内容や教育方法等が異なるため、工学部平均と比較することの意味は必ずしも明確ではないが、すべての設問で工学部平均以上を目標としていくべきであろうし、工学部平均との距離を把握し、その推移を監視しておくことは重要であると考えられる。

以上、本年度は授業評価アンケート評点の面からは飽和傾向が見られたが、少なくとも現状維持以上に授業改善が進んでいると評価できる。今後とも現状に甘んじることなくさらに講義の質を向上させるために、JABEEへの取り組みやFD活動を通して各教員の不断の努力が求められる。

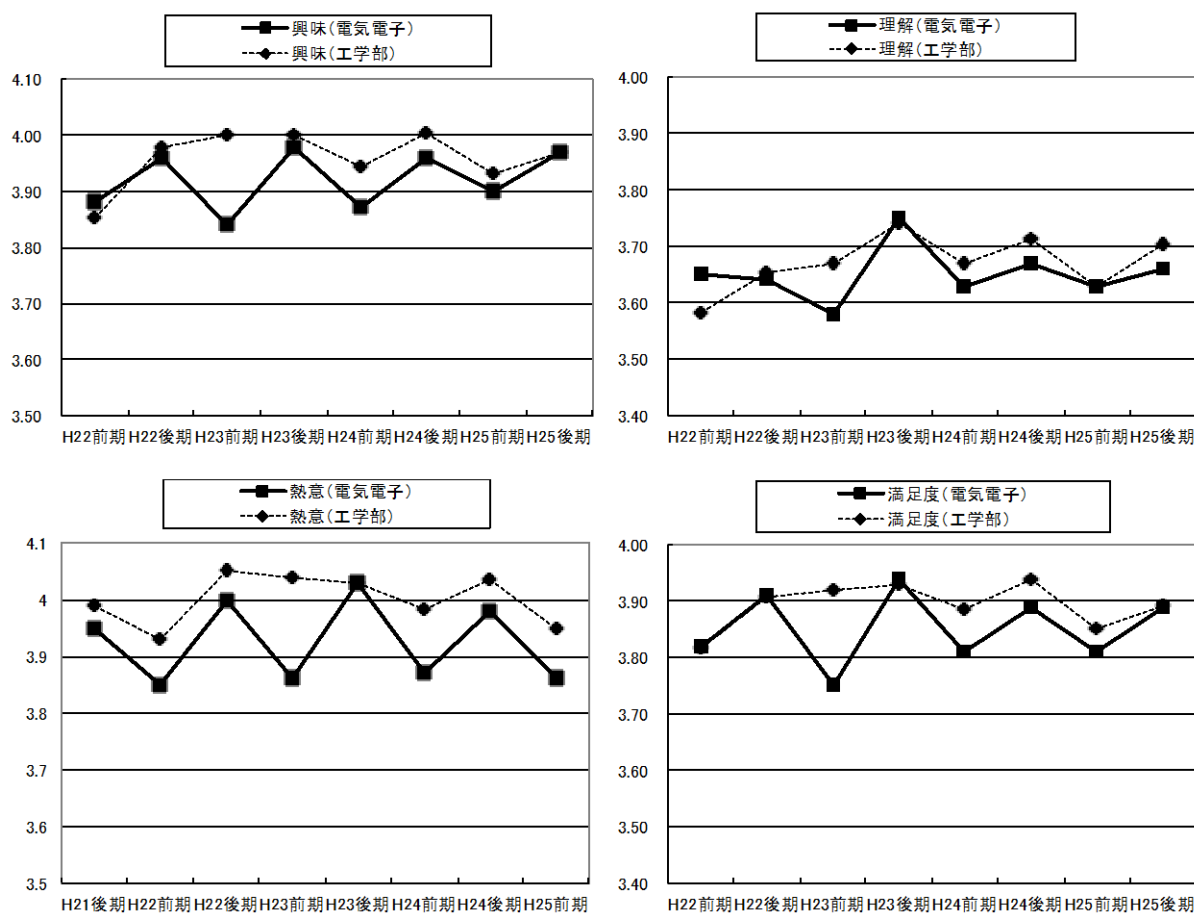


図3. 1. 3(3) 電気電子工学科平均と工学部平均との比較

3. 1. 4 建築学科の推移とその分析結果

建築学科には建築設計演習の科目が全学年にあり、この講義の形態は講義科目とも実験科目とも異なるが、授業アンケートではこれを講義科目に含めている。実験の科目は1科目だけで比較しにくいので、講義科目について授業アンケートの結果を分析する。

平成 25 年度の授業アンケートから得られた、各評点の値を表 3. 1. 4(1)および図 3. 1. 4(1)、(2)に示す。工学部全体のアンケートの評点の平均と比較すると、項目 13 など若干の例外を除きほとんどの項目が、前期・後期とも工学部の平均よりも高いか、ほぼ同様となっている。特に、項目 2 (役立つ) 項目 3 (興味) 項目 4 (理解度) 項目 5 (教材) 項目 15 (満足度) の比率が前期・後期を通して大きい。これに対し、前後期とも平均を下回っているのは項目 13 (欠席) である。設計課題の締切が近いと欠席が増えることが反映されていると思われる。以上の結果を見ると、建築学科の授業では特に大きな問題となるものは見あたらず、どちらかといえば教員の努力により適切な教育がなされていると評価できる。

表 3. 1. 4(1) 建築学科の講義科目の授業評価アンケートの工学部平均との比較

年度・学期	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
平成25年度前期	学部平均	4.02	4.10	3.93	3.63	3.86	3.94	3.66	3.86	4.04	3.95	3.55	3.58	4.34	3.09	3.85
	建築学科	4.08	4.30	4.13	3.80	3.99	4.04	3.78	3.90	4.04	4.07	3.74	3.59	4.24	3.11	4.05
	学部比	1.02	1.05	1.05	1.05	1.03	1.02	1.03	1.01	1.00	1.03	1.05	1.00	0.98	1.01	1.05
平成25年度後期	学部平均	4.04	4.13	3.97	3.70	3.91	3.92	3.72	3.89	4.09	3.99	3.56	3.58	4.29	3.09	3.89
	建築学科	4.09	4.24	4.09	3.81	4.02	3.97	3.75	3.89	4.06	4.04	3.62	3.49	4.10	2.98	3.96
	学部比	1.01	1.03	1.03	1.03	1.03	1.01	1.01	1.00	0.99	1.01	1.02	0.97	0.95	0.97	1.02

過去二年からの推移を項目別にみると、先に見た項目 13 がここ数年 4.5 近くであったものが 4.0 近くに低下している。これは欠席が 1 回程度という結果を示している。項目 14 は 3.5 未満で推移していたものが 3.0 に近づいており予習復習時間が 2 時間程度であることを示している。90 分講義科目で期待される自主学習時間は 3 時間であり、若干不足気味となる。ただし、設計演習の平均が 4.36、それ以外の講義・演習科目の平均が 2.72 と科目間で大きな偏りがある。この項目の選択肢 5 は「3 時間以上」と 3 時間で打ち切られているため、多数が 5 と回答している設計演習の自主学習時間は実際には 3 時間を大幅に超えていることが考えられる。したがって、全科目の平均時間も実際には充分高い可能性が高く、科目間の偏りこそが課題といえる。

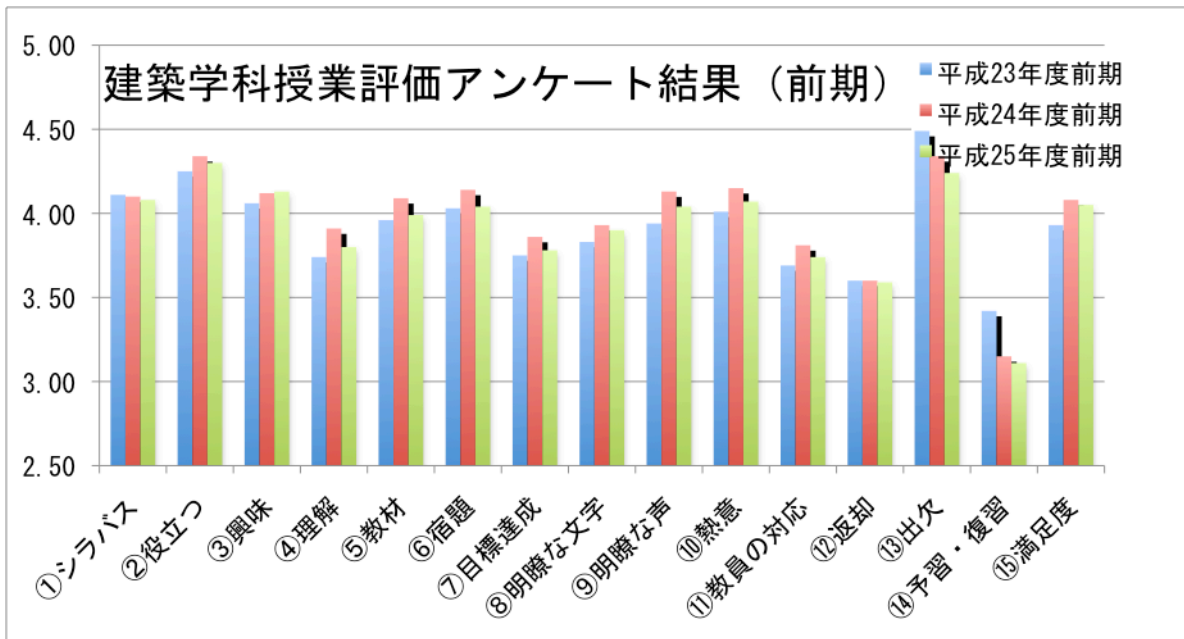


図 3. 1. 4(1) 建築学科の講義科目の授業評価アンケート（前期）の結果

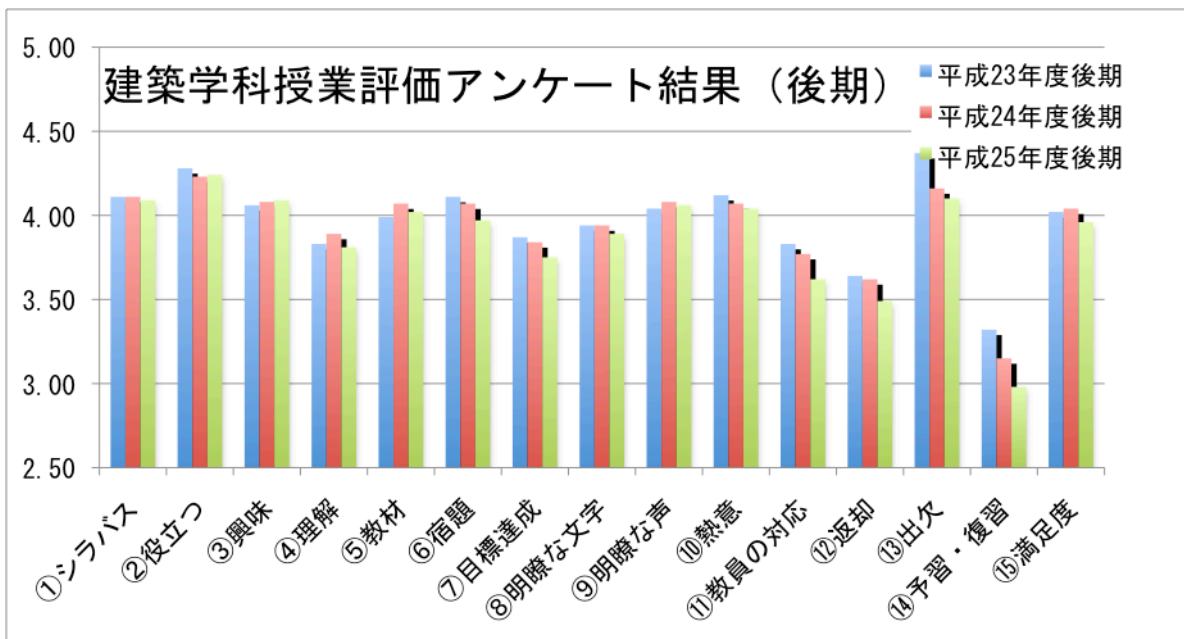


図 3. 1. 4(2) 建築学科の講義科目の授業評価アンケート（後期）の結果

その他の項目の経年的推移では顕著な点は見受けられず、高い水準を維持しているか、継続的な改善傾向を示している。昨年度に比較して低下している項目もそれ以前と比較すると大きな低下ではない。とくに学習の成果を示す項目 4、15 については、継続的な改善が行われており、建築学科全体として授業改善の努力が成されていると評価できる。

以前から課題となっていた項目 12（返却）については、前期ではほぼ例年どおり、後期では低下という結果となっている。今後引き続き改善する取組みが望まれる。

3. 1. 5 環境化学プロセス工学科の推移とその分析結果

図 3. 1. 5(1)は、平成 21～25 年度の環境化学プロセス工学科の開講科目（講義・演習）に対するアンケート結果を評価項目別に比較したものである。

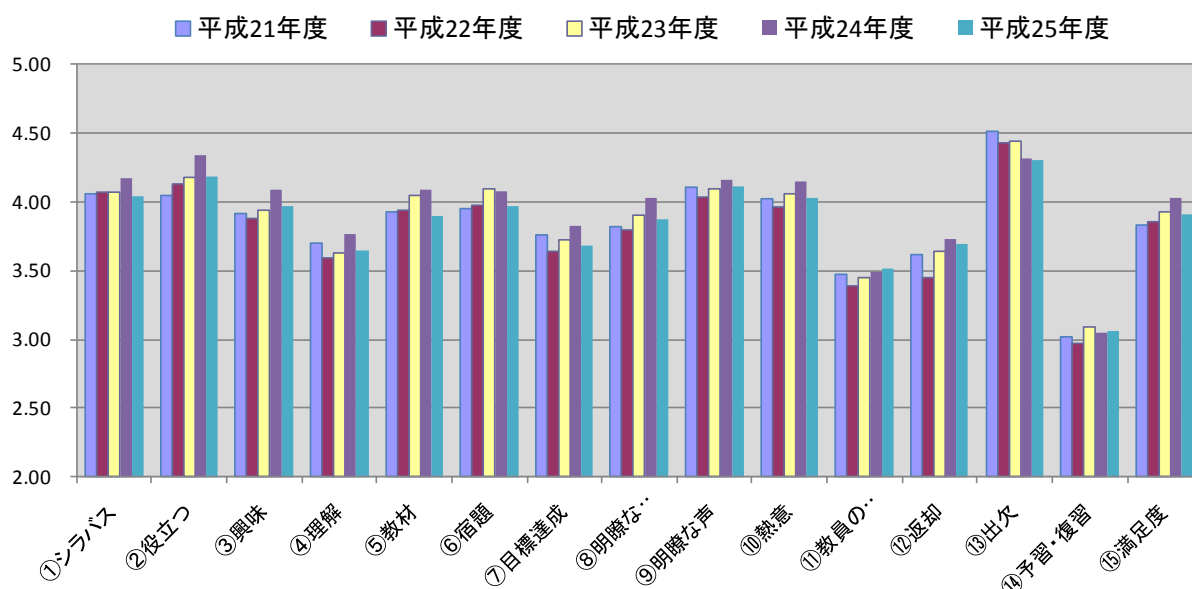


図 3. 1. 5(1) 環境化学プロセス工学科における開講科目アンケート結果（講義・演習）
（H21～25 年度）

平成 21～25 年度の各項目の評価値は、ほぼ飽和傾向にある。その推移を細かく見ると、授業が②「役立つ」、③「興味」深いといった講義の意義については評価が平成 24 年度までは微増を続けていたが、25 年度においては評価値が下がった。また、④「理解」度や、⑦「目標達成」度もこれに連動し向上していない。これに対し、⑤「教材」、⑥「宿題」、⑧「文字」の明瞭さなど、講義方法に関する評価や⑮「満足度」がこれまで上昇傾向にあったが、25 年度においては、評価値下がっている。これは、教員数の削減に伴い担当講義数がふえるなどの各教員の負担増や、少人数の学生数に合致しない大講義室への教室変更などが影響している可能性がある。⑭「予習・復習」に関しては、学生への適切な課題を与えることが重要であると考えられる。

図3. 1. 5(2)は、当学科の評価結果を工学部全体の評価結果と比較したものである。両者に大きな差はないといえる。少数数制の学科形態を活かし、さらに教員が努力をすることで、よりよい教育を実践できることが考えられる。しかし、教員の負担は大きく、学生の理解度をさらに高めていくためには、質の高い非常勤講師の確保などの方策が必要であろう。

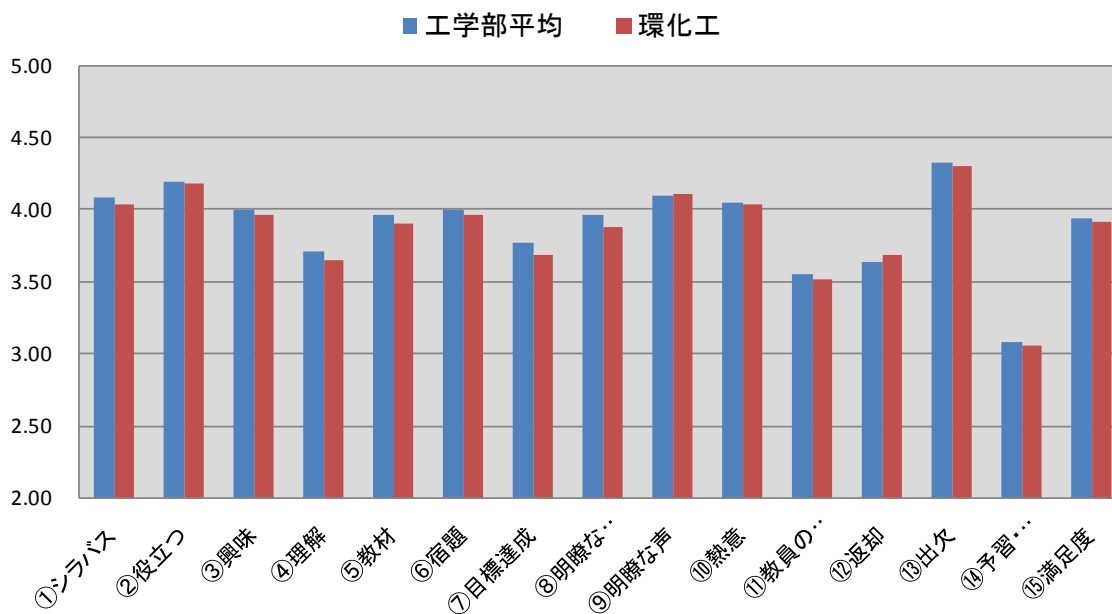


図3. 1. 5(2) 環境化学プロセス工学科における後期開講科目アンケート結果（講義・演習）
（工学部全体との比較：H25年度）

3. 1. 6 海洋土木工学科の推移とその分析結果

海洋土木工学科では授業評価アンケート結果は、各授業担当教員から提出される授業計画改善書と合わせて、授業改善の自己点検の資料として活用されている。図 3. 1. 6 は平成 24 年度の海洋土木工学科の前期・後期授業に対する評価値を講義・演習科目と実験科目に分けて示したものである。実験科目はいずれの項目に対しても、4 程度の高い評価が得られている。講義・演習科目についても、大半の項目について 4 程度の評点が得られているが、講義・演習科目の「⑪教員の対応」、「⑫返却」、「⑭予習・復習」において、3～3.5 程度の比較的低い評点が得られている。

昨年度の報告でも指摘したが、前期と後期、年度の違いにかかわらず、このような傾向が比較的長期間、得られており、学生にヒアリング調査を行うなど、これら項目への対応を別途考える必要がある。

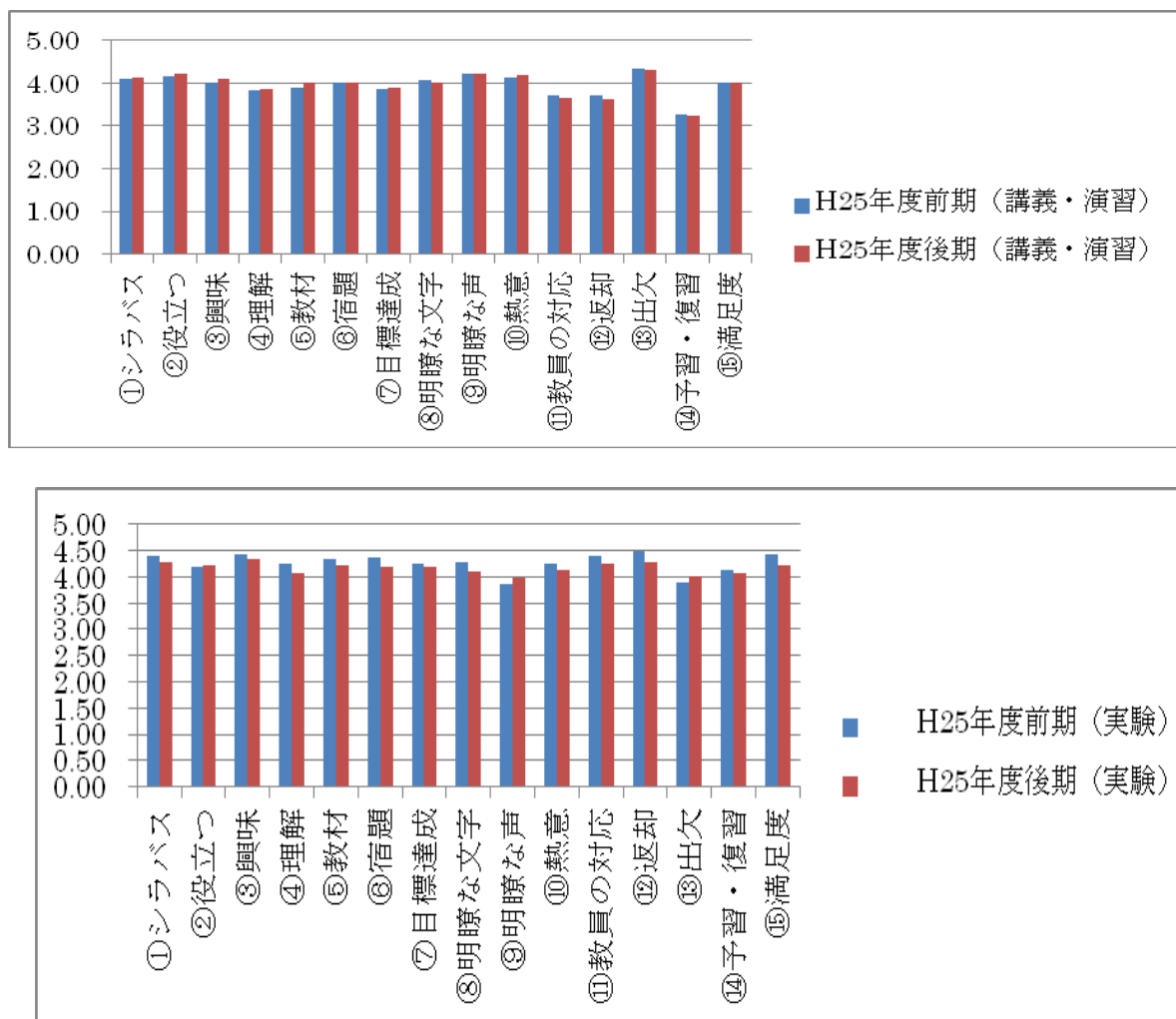


図 3. 1. 6 海洋土木工学科の授業アンケート結果

3. 1. 7 情報生体システム工学科の推移とその分析結果

平成 21 年度の改組により情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて誕生した情報生体システム工学科が、卒業生を送り出したのは今年度で 2 回目となる。FD 授業評価アンケートは、平成 21～25 年度の 5 年間収集されており、これらのデータから経年変化の分析と今年度の工学部平均値との比較分析を行うこととする。

講義系科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の理解度、⑤教材等の適切性、⑥レポート等の理解への効果度、⑦授業目標の達成感、⑧文字の明瞭性、⑨声の明瞭さ、⑩教員の熱意度、⑪質問等に対する教員の対応度、⑫レポート等の評価への満足度、⑬出席回数、⑭予習・復習の時間数、⑮総合的満足度であった。

講義系科目の集計結果を前期と後期に分けて、図 3. 1. 7(1)及び図 3. 1. 7(2)にそれぞれ示す。前期・後期ともに、「⑩教員の対応」と「⑭予習・復習の時間数」を除く項目の評価は、3.5 を超えておりほぼ満足できる水準である。また、「⑨明瞭な声」、「⑩明瞭な声」、「⑫返却」、「⑬出欠」の 4 項目以外では、前期と後期による評価の差は 0.1 未満でありほとんど違いがない。一方、「⑫返却」の項目の評価は、前期の学科平均が後期の評価より 0.18 低くなっており、工学部の前期の平均の評価と比べても 0.21 低くなっている。また、今年度の「⑭予習・復習の時間数」の評価は、前期と後期ともに 3.0 に達しておらず、まだまだ改善の余地が残されていると考えられる。

今年度の工学部平均値と比較すると、前期と後期ともに、「⑬出欠」の項目では、学科平均の評価が工学部平均の評価より上回っているが、それ以外の項目の評価は、わずかであるが低くなっている。

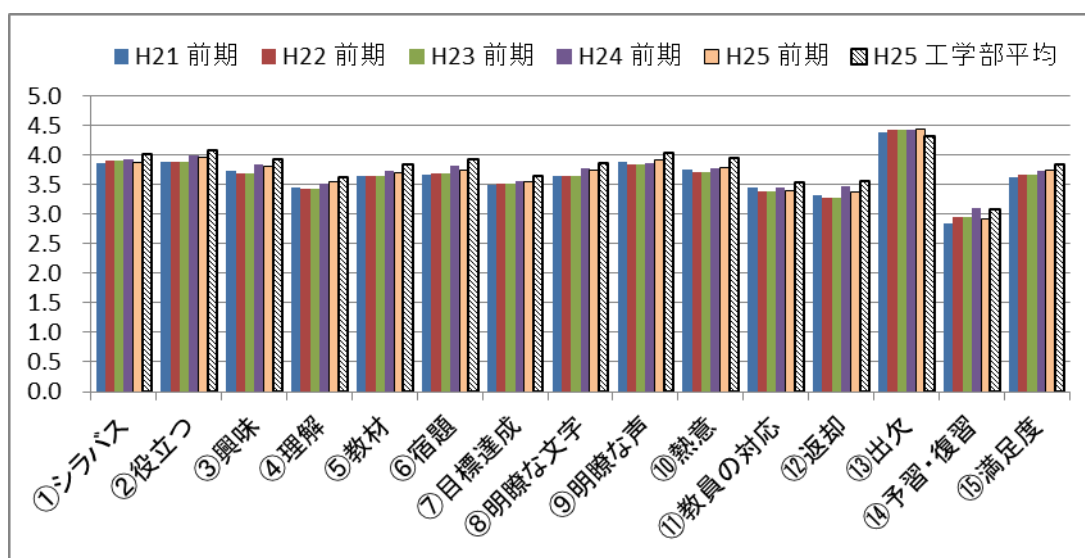


図 3. 1. 7(1) 情報生体システム工学科の授業評価アンケート結果の推移
(平成 21～25 年度前期 講義科目)

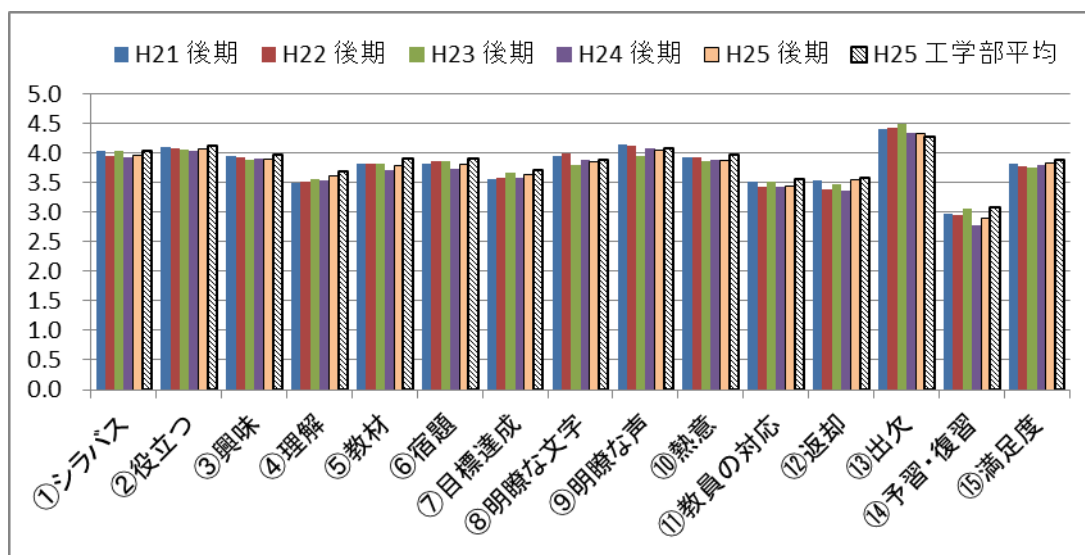


図 3. 1. 7(2) 情報生体システム工学科の授業評価アンケート結果の推移
(平成 21～25 年度後期 講義科目)

実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TA の熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度であった。

実験系科目の集計結果を前期と後期に分けて、図 3.1.7(3)及び図 3.1.7(4)にそれぞれ示す。

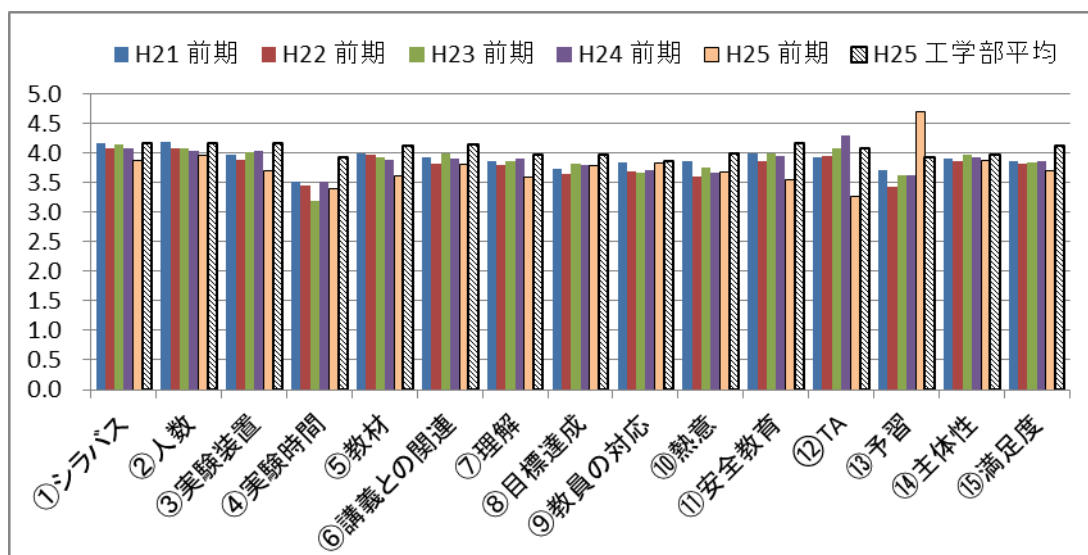


図 3. 1. 7(3) 情報生体システム工学科の授業評価アンケート結果の推移
(平成 21～25 年度前期 実験科目)

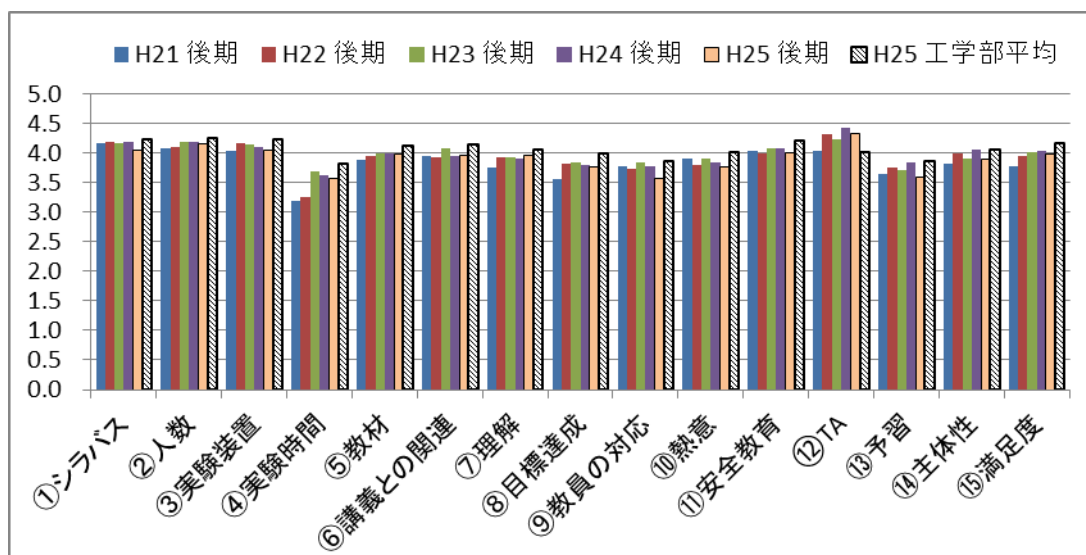


図 3. 1. 7(4) 情報生体システム工学科の授業評価アンケート結果の推移
(平成 21～25 年度後期 実験科目)

今年度の評価は、前期の「④実験時間」と「⑫TA の熱意」以外の項目の評価は、3.5 以上であり満足できる水準である。その中で、前期の「⑬予習」の項目は 4.70 であり、とても高い評価となっている。一方で、前期の「⑫TA の熱意」の項目は 3.27 であり、とても低い評価となっている。ただし、後期の「⑫TA の熱意」の項目は 4.34 であり工学部の平均と比べても高い評価である。前期の実験科目に採用される TA への指導を徹底するとともに、次年度以降の推移を見守る必要がある。

今年度の工学部平均値と比較すると、前期の「⑬予習」と後期の「⑫TA の熱意」以外の項目では、講義系科目と同様に評価が低く、改善の余地があると考えられる。

以上のように、講義系科目及び実験科目の前期・後期のアンケート結果の推移及び分析から、今年度も昨年度と同様に情報生体システム工学科での授業は、教員及び TA の努力により十分な水準を保っていることが分かった。ただし、実験科目では、「⑮満足度」の評価が昨年度より低下しており改善する必要がある。前期の実験科目については、来年度からは、新しい実験機器を導入した実験内容の見直しが行われており、これによる授業水準の向上が期待される。

3. 1. 8 化学生命工学科の推移とその分析結果

アンケートの集計結果を平成23年度から直近の平成25年度まで集計・比較したグラフを図3. 1. 8に示す。図は、上段が前期実施科目、下段が後期実施科目についての集計結果を示している。図を見ると、一部の評価項目を除き、すべての評価項目で概ね4点前後の評点となっており、他学科と比較しても遜色のない結果であった。また、前期と後期で比較しても、際だった差は認められなかった。前期、後期ともに、評価項目⑭の「予習・復習」の評点が相対的に低いが、多くの学科で同様の傾向があり、大きな問題とは考えにくい。評価項目⑮「満足度」などいくつかの評価項目での評価が低下傾向にあり、今後、経過を観察する必要があると考えられるが、本学科だけではなく他学科の過去の集計結果を見ても、同一項目の評点は年度により0.3ポイント程度は増減する。このため、有意な差とは考えにくく、現時点で問題があるとは判断できない。

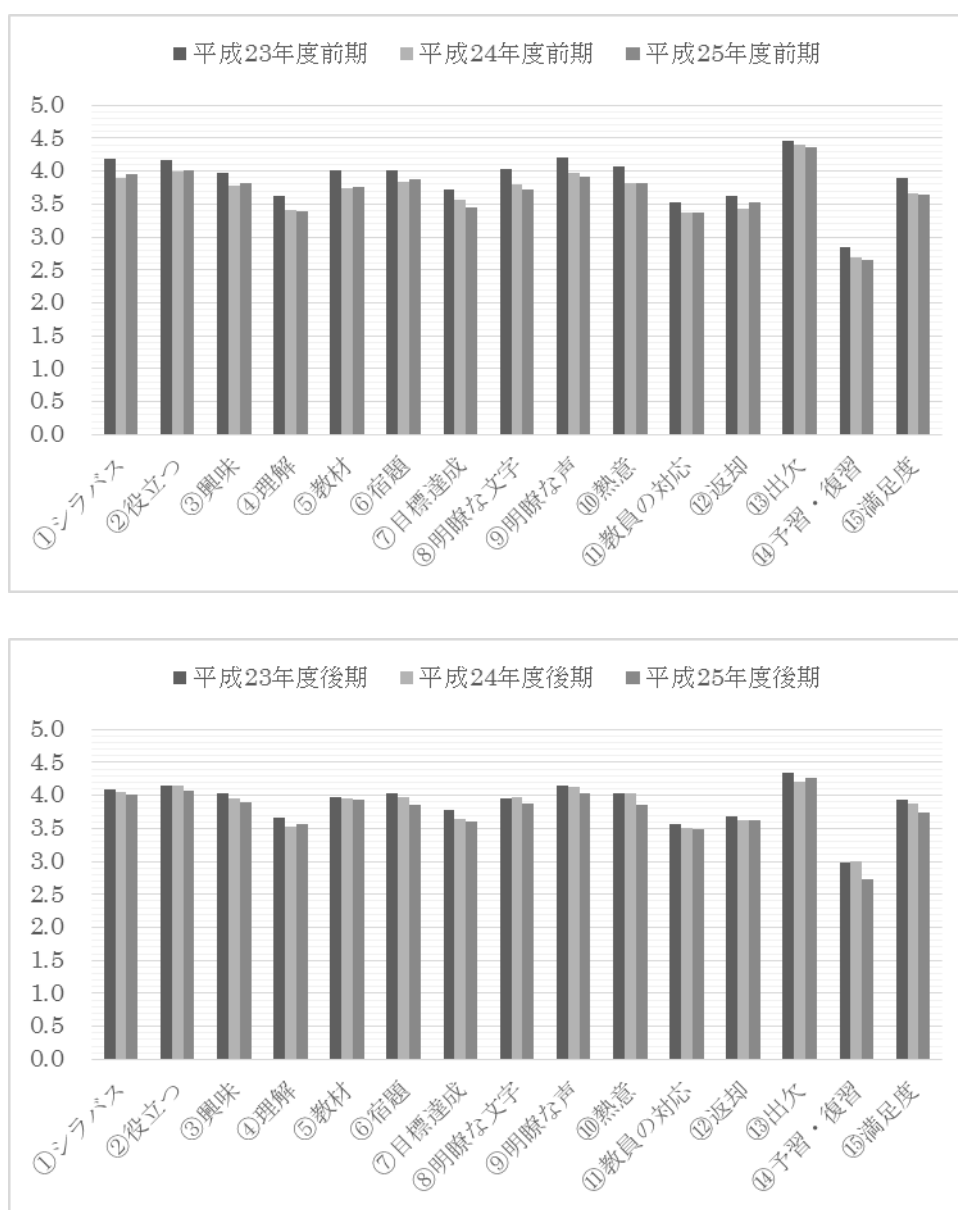


図3. 1. 8 化学生命工学科におけるアンケート結果

3. 2 授業計画改善書の各学科の活用状況

3. 2. 1 機械工学科の活用状況

学科のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。授業計画改善書は、専攻内に設置されたパソコンのフォルダ内に各年度、各期ごとに整理され、全教職員に閲覧できるように公開されている。また、専攻教育評価委員会報告書は冊子とCD-ROMの形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

3. 2. 2 電気電子工学科の活用状況

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として工学部FD委員が管理し、JABEE活動の一環として、専攻（学科）FD委員会において授業改善に取り組む資料として活用している。

3. 2. 3 建築学科の活用状況

授業計画改善書に関して、全科目の評点を学科内で公開して問題点を共有することになっている。具体的には、全科目の全項目の評点の一覧表と、全項目の目標とする評点の一覧表を作成して、全科目がどのような状況になっているかが簡単に分かるようにしている。また本学科では平成19年より授業満足度の評点と授業担当時間を用いて教員の教育貢献度を評価するシステム導入している。この結果も学科内で公開している。

3. 2. 4 環境化学プロセス工学科の活用状況

年2回学期末に開催される学科の教員間ネットワーク会議において、FD委員会のアンケート調査より返却された前期／後期授業科目のレーダーチャートおよびこのチャート結果に基づく授業改善書の提示を行っている。また同時に次学期開講予定科目のシラバスも提示し、メンバーとの意見交換を通じて、授業内容や授業方法の改善のために利用している。授業計画改善書は、学科内の資料室にエビデンスとして保管してあり、教員は自由に閲覧することができる。このように授業計画改善書は本学科の教育点検・継続的改善を図る上で大いに活用されている。このような継続的な取り組みの結果、評価は毎年改善されていると考えられる。

3. 2. 5 海洋土木工学科の活用状況

海洋土木工学科における授業計画改善書の活用方法は既にシステムされている。具体的には、授業計

画改善書は授業評価アンケートの集計結果に基づいて作成され、学科のFD委員に提出することが義務付けられている。そして、学科内に設置されている教育システム評価委員会が、授業計画改善書および専門科目の学習目標達成度に基づいて、授業改善状況の点検を行っている。さらに、その点検結果は教育システム評価委員会から学科会議に報告されることになっている。最終的に、学科会議において、この報告書に示されて改善点に関して、審議して必要な措置をとることになっている。以上のように、学科としてはPDCAの点検システムを構築しており授業計画改善書は、その中で重要な役割を果たしていると言える。

3. 2. 6 情報生体システム工学科の活用状況

情報生体システム工学科では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている。各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで、学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している。また、改組のためにJABEE申請は再出発となったが、学科JABEE委員会の下に作られている教科グループWGにおいて、科目の内容の見直しなどの検討の際に、資料として活用している。

3. 2. 7 化学生命工学科の活用状況

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースと同一の理念の下で活用を図っている。すなわち、授業計画改善書を、卒業生アンケート集計結果、授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに、会議において提示し、各教員の各科目についての説明、質疑応答、さらにメンバーによる評価が行われる。アンケート集計結果の評価の下落が大きい教員や科目については申し合わせに従い、その対処が行われている。分担して行う講義・実験・演習についても、教務委員やFD委員等が説明を行い、メンバー全員で評価し改善に努めている。このように授業計画改善書等のFD活動書類を資料として、教員間で協力・連携そして切磋琢磨するシステムが構築され、その中で授業内容・方法の改善もなされている。

第4章 平成25年度の工学部FD活動の総括と今後のFD活動

4.1 平成25年度のFD活動の総括

4.1.1 平成25年度のFD活動

工学部では、世界基準に対応する教育を目指し、当面は日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定プログラム教育もしくは、JABEEに準拠した教育を実施している。これまで継続的に工学部FD委員会が実施してきた授業アンケートなどによるFD活動を通じた教育改善のPDCAサイクルは、比較的良好に機能してきた。平成25年度の第1回工学部FD委員会において、既に学部に着したこのような活動を本年度も継続して遂行することが決定され、年度内に以下の活動の手順が決められ、実施された。

- 1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成
- 2) 授業公開と授業参観の実施
- 3) FD講演会の実施
- 4) 学習成果と質の向上の検討

4.1.2 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成

工学部の学生による授業評価アンケートは、平成25年度も例年どおり前期は7月、後期は1月に実施した。また期中頃に中間アンケートも実施した。期末アンケートは、5段階のリッカート尺度評価による15項目の質問と自由記述欄で構成されている。5段階評価（「大いにそう思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そうは思わない」、「全くそうは思わない」）は5から1までの値で数値化し、科目ごとの各項目の平均値を評点として集計後、担当教員に学生の記入したアンケート用紙とともに印刷して返却した。各教員は、授業評価を受けて、授業計画改善書を提出した。授業計画改善書には直近三年間の各項目の評点の推移と当該年度の評価値に対する自己評価と改善対策案を記入する。この改善書は系列科目担当の教員間で共有されたり、学科内での自由な閲覧を可能にするなど、各教員の教育の質改善のみならず、各学科の教育の質改善にも利用されている。

この授業評価アンケートは平成16年度より10年間継続して実施しており、多くの項目の評点についての経年的な変化やトレンドを把握することが可能となっている。各学科のFD委員は、学科ごとの評点の分析を詳細に行い、報告書を作成した。

4.1.3 公開と授業参観の実施

平成25年度は、前期35、後期46の合計81科目を公開科目とした。これらの公開科目に対して、工学部教員による授業参観が前期9件、後期10件実施された。したがって、授業参観は、平均で公開科目の23%となっている。ただし参観の実施は、学科間で大きな差がある。また、共通教育科目の実態を調べるため、建築学科では一人の教員が最低1つの共通教育科目の参観のを実施している。

4. 1. 4 FD 講演会の実施

平成 25 年度の工学部 FD 講演会は、2 回稲盛会館ホールで開催された。1 回目の講演は平成 25 年 11 月 6 日（水）13 時 30 分から 15 時 00 分まで、理工学研究科、理学部との共同共催で、広島大学工学研究院の 迫原修治 教授に講師を依頼し、「広島大学の到達目標型教育プログラム（HiPROSPECTS®）」という演題で行われた。聴講者は教職員合わせて 95 名があった。迫原先生のご講演は、HiPROSPECTS の創設当初より関わった経緯より、具体的な事例を交えた非常に興味深いものであった。そのため講演終了後の質疑応答も活発となった。2 回目の講演は稲盛会館において、平成 25 年 12 月 6 日金曜日 16 時 10 分から 17 時 40 分まで、工学部独自に工学部が当面大きな課題としているエンジニアリング・デザイン教育法に関する講演を大阪大学名誉教授 大中逸雄 先生に依頼した。聴講者は教職員合わせて 65 名があった。エンジニアリング・デザイン教育法の現状と問題点の指摘は、真摯に受け止め、今後の工学教育に反映させる切っ掛けとなる講演内容であった。講演終了後の質疑応答も活発となり、予定の時間を 20 分以上超過した。本講演はビデオに収め、当日欠席した教職員にも閲覧可能としている。

4. 1. 5 学習成果と質の向上の検討

工学部 FD 委員会では、平成 21 年度から学習成果と教育の質の向上の定量的な評価のために、学生による授業評価アンケートの評点と科目 GPA との相関を吟味してきた。平成 25 年度も過去のデータと同様の検討を行った。授業内容の理解、授業目標の達成、満足度と行った項目の評点は、受講生の成績の平均値と相関があることが平成 25 年度のデータでも示された。つまりアンケートという学生の主観的評価が、特定の項目においては成績という学生の理解度の客観的評価とも相関があることが見いだされ、アンケートデータの有用性が改めて確認された訳である。但し自習時間の長さに関しては、科目受講生の成績の平均との相関は見られなかった。

平成 24、25 年度前・後期の平均 GPA の分布を調べると例年のように 1.8 と 3.0 にピークがある W 型となっている。しかし、平成 25 年度後期の分布は、従来とは異なり、理想的な正規分布型に近づいている。

授業内容の理解、授業目標の達成、予習・復習の自習時間の長さ、満足度の 4 項目について、平成 24、25 年度前・後期の工学部全科目の評価値平均の分布を示すグラフを、学科別にデータを分類し、アンケート評点および GPA の学科平均値を算出した相関図より、アンケートの学科平均値および学科平均 GPA は 5 つの学科で接近した値となった。つまり、授業実践後の学生による授業評価アンケートと、その結果を受けた授業計画改善書の提出、そして次年度の授業実践という PDCA サイクルがうまく機能し、毎年授業の質が相対的に向上していると考えられる。特に注目することは、理解、目標、満足度の 3 項目で評点の平均が徐々に 4 に近づきつつあることである。しかし、3.2 程度の値に留まっている。

上記の分析はあくまでも全科目の評点の平均値である。理解に関しては平均としては毎年改善する傾向にあるが、平成 25 年度も評点が 3.2 以下、つまり「理解できたか」という間に、「どちらとも言えない」相当に近い自己判定の平均となった科目が未だにおよそ 1 割ある。工学教育の科目の場合、難易度の高い科目が必然的に多く含まれるが、このような高難易度科目の担当教員の更なる講義方法の工夫による理解の評点の改善を期待したい。

自習時間の設問ではリッカート尺度ではなく、1 コマの授業に対する平均の予習・復習時間を「3 時

間以上」、「2～3 時間」、「1～2 時間」、「30 分～1 時間」、「30 分未満」の 5 段階で回答させている。3.2 という値は、「1～2 時間」相当以上の値である。この自習時間に関しては、科目平均が大きくばらついていた。ここで示されている数値の意味は、レポート作成に時間のかかる実験、実習系の科目や宿題やレポートが多く課される科目がある一方、受講生の多くがほとんど予習・復習を行わない科目があることを示している。卒業後も継続的かつ自主的に学習する態度を獲得した、所謂「進取の気性」を持った学生をどのように育成するかは重要な課題であり、具体的な検討が求められる。また、文科省が定めている授業時間に対する自習時間の不足が気になる。

6. 2 今後の FD 活動

工学部は上述のように JABEE に基づくあるいは JABEE に準拠する教育を行っており、教育改善の PDCA サイクルが比較的良好に機能していると考えている。しかし現状では、教育システムが完成されるに連れて、学生は受け身になるという皮肉な傾向も見られる。また、GPA の推移を追跡すると、若年学年が年ごとに学力が低下する傾向が読み取れ、今後の工学教育の質や水準の維持に対して危惧する。さらに、エンジニアリング・デザイン教育とも関連して、教員が多くのレポートを課して半ば強制的に学習させること以外に、自主的な問題解決能力育成の検討が求められている。そのような自主性の育成などに関して各学科、各教員の効果の見られた様々な取り組みや工夫について、学部の全教員で情報共有できるようにする仕組みづくりを検討する必要がある、工学部としてそれらの仕組みづくりに関連した複数の WG を立ち上げ、取り組みつつある。

農学部・ 農学研究科

平成25年度
鹿児島大学農学部・農学研究科 **FD** 活動報告書
(概要)

鹿児島大学農学部 **FD** 委員会

平成26年3月

第1節 平成25年度農学部FD活動の記録

まえがき

農学部 FD 委員会は、委員長、副委員長（教務副委員長が兼任）、および各学科から選出された委員4名、および、教務係長で構成されている。委員会では、さまざまな FD 活動計画や取りまとめ、また、全学 FD 委員会や、全学 FD 活動への対応について協議した。

農学部の FD 活動の3本柱は、授業公開・授業参観、学生による授業評価アンケート、および、農学部 FD ワークショップである。授業公開・授業参観の予約、学生による授業評価アンケートの集計などには、農学部 FD-WEB システムを活用している。

1. 農学部 FD 活動組織（FD 委員会の構成と活動状況）

委員長 西野吉彦
委員 寺岡行雄
委員 岡本繁久
委員 イブラヒム・ヒッシャム
委員 肥山浩樹
事務担当者 郡山 茂（教務係長）
データ処理 池田日出男（技術専門職員）

第1回 FD 委員会 平成25年5月8日（水）

議題：1. 平成25年度 FD 委員会の活動計画について
2. 平成25年度 FD 活動計画・経費要求について
3. 平成25年度 FD 関連計画について
4. その他

第2回 FD 委員会 平成25年10月9日（水）

議題：1. 平成25年度農学部授業公開・授業参観の実施について
2. 農学部 FD 講演会(農学セミナーと合同開催)について
3. その他

2. 授業公開と授業参観の取り組み

農学部では、平成15年度後期より公開授業・授業参観の取り組みを実施している。平成22年度からは、授業公開科目と授業参観参加希望科目の登録を FD-WEB で行うようにし、今年度もこの FD-WEB を活用することとした。その使用法は教授会ならびにメールにて説明し、周知した。授業公開は、例年

どおり全学の教職員を対象にすることとし、全学の教職員に周知した。
授業公開と授業参観のスケジュールは以下のとおりであった。

(前期)

- 5月15日(水)：公開授業の実施についてのお知らせ(教授会)
- 6月10日(月)～6月14日(金)：公開不可能な授業科目調査
- 6月24日(月)～6月28日(金)：授業参観予約
- 7月1日(月)～7月5日(金)：授業公開(農学部FDウィーク)
- 7月1日(月)～7月19日(金)：授業参観報告書作成・提出

(後期)

- 10月16日(水)：公開授業の実施についてのお知らせ(教授会)
- 10月28日(月)～11月1日(金)：公開不可能な授業科目調査
- 11月11日(月)～11月22日(金)：授業参観予約
- 11月25日(月)～11月29日(金)：授業公開(農学部FDウィーク)
- 11月25日(月)～12月13日(金)：授業参観報告書作成・提出

授業担当者と授業参観者には、可能な限り、授業参観終了後に意見交換をお願いした。また、参観者には、FD-WEBを通じて、授業参観報告書を作成・提出いただいた。

授業公開・授業参観の取り組みにおいては、平成25年度の授業のうち、学生の評価が高い授業科目を農学部の教員に周知した。これらの授業の選抜は、学生の授業評価アンケートの結果、「満足した」「どちらかと言えば満足した」という回答が100%であり、受講生が30名以上の授業科目を選び、各学科から満足度が最も高かった授業科目を3科目選出した。本年度の授業参観には、前期43名、後期58名の参加があり有意義な取り組みであった。

以下に、参加者による参加報告・感想を掲載した。

公開授業参観に参加して

生物環境学科 寺岡 行雄

金曜日2限目開講の害虫学(津田勝男教授担当)を参観させていただいた。

生物生産学科の大半が受講する科目であり受講生が多く、講義室も比較的大きな307教室での授業であった。

配付された資料は、学生が理解しやすいよう配慮されたものであった。講義の内容は防除に関するものであり、具体的な事例を出しながらのわかりやすい説明であった。重要な用語はホワイトボードに板書し、列挙されていた。学生のノート取りのスピードを考慮されての進め方と理解した。私は後ろの席に座っていたが、周囲を見渡すと後ろに座る学生もまじめにノートを取る者が多かった。授業終了前に

出欠確認を兼ねたミニレポートが出され、学生の理解度を確認することが行われていた。

私自身が通常担当する科目の受講生は多くても 50 名であり、広い講義室での講義の進め方が参考になった。

公開授業参観

生物生産学科 岡本 繁久

家畜生産学コース 3 年生(後期)の必修科目「動物発生工学」(大久津 昌治 先生)の講義を参観させていただきました。まず、講義の進め方であるが、落ち着いた口調で説明すると共に、頻繁に学生を指名しながら理解度を確認するやり方に感銘を受けた。また、板書がしっかりしていたので専門外の私でも内容理解は容易であった。さらに、人工授精に用いる機器を持ち込み実演しながら説明していたので、学生にとっても現実味を持って講義内容を理解できたのではと想像される。これらの工夫のうち、自身の講義に利用できるものは積極的に取り入れたいと考えている。次に学生の授業態度であるが、大部分の学生は真剣に講義を視聴していた。しかし、一部遅刻あるいは途中退室する学生もみられた。残念である。

3. 農学部 FD ワークショップ

以下に、参加者による参加報告・感想を掲載した。

平成 25 年度 鹿児島大学農学部 FD 講演会
学生の「自学自習」を促すための研修会について

西野 吉彦

標記研修会を平成 25 年度 第 3 回農学セミナーと合同で平成 26 年 2 月 12 日(水)15 時から 17 時、鹿児島大学農・獣医共通棟 101 講義室において開催した。日本の大学では、学生の授業外学修の時間が少ないといわれている。そこで、本学部でも「学生の自学自習」を促すための取り組みについて検討を始めることとなった。その概要は以下のとおりである。

『今回、アメリカの大学の事情に詳しく、海外の様々な大学の教育現場で活動されている西南学院大学 人間科学部 教授 門田理世先生をお招きして、「アメリカの大学における学修の実情」について御講演いただく。アメリカの学修事情と比較することで、日本の大学でどのような取組が必要か、またどのような課題があるのかについて議論する。』

まず、西南学院大学人間科学部 門田 理世 教授を講師にお迎えし、「アメリカの大学における学修の実情」と題して御講演いただいた。講演を依頼する際、以下のようなリクエストをさせていただいた。

1. 日本では「単位の実質化」ということで、講義の場合、授業時間の倍の時間の授業外学修時間を求めていることになっています。2 時間の講義の場合、4 時間の学修を求めていることになります。実質講義は 1.5 時間なので 3 時間の授業時間外学修をすることになっていますが、外国ではどのような規則や目標があるのでしょうか？日本では、建前ばかりが一人歩きしている感がありますが、アメリカ等ではどうなっているのか、教えていただきたいと思います。
2. 講義の登録数の問題です。日本では、1 年で 50 単位以上を取得してしまう例も珍しくないと思いますが、さすがにこれは問題と見て、授業登録単位数の上限を定めるといった、応急処置で対処しています。もし、1 日に 5 単位分の講義を登録すると建前上、授業時間外に 10 時間の学修時間を確保しなければならないので最初から無理な状況です。アメリカ等での授業登録数と単位数との関係についてどうなっているのか、興味のあるところです。
3. 授業時間外学修をさせるためには、学生が自ら教材を探し、興味を持って、進んで学修するのが理想的かもしれませんが、実際には、教員が課題を課し、何らかの方法で学生の評価に反映させるのが普通かもしれません。どの程度の負荷を学生にかけるのかが知りたいところです。課題がどのようなものか判るようなシラバスの例をご紹介いただくと面白いと思います。特に厳しい例が知りたいと思います。
4. 学生の授業外学修について充実させればさせるほど、それを学生の評価に結びつけようとしたときに、教員の教育負担は増大するようになります。その点は、いかがでしょうか？私の勝手な想像では、教員の教育負担がアメリカでは日本と比べ物にならないほど重いので教員は消耗してしまい、必然的にサバティカル休暇のような制度が設けられたと考えていますが、いかがでしょうか？
5. 専門教育科目では、一般に少人数での講義となることが多いかもしれませんが、100 人を超す学生が聴講することもあります。大人数での講義で、授業時間外学修をさせる、いいアイデアがあれば教えて下さい。
6. 実際、日本の大学の専門教育で授業時間外学修時間を確保するための取組は、どのようにすればいいとお考えでしょうか？

講演の内容は、アメリカの学生も日本同様、授業外学修時間が減少している傾向があり、日本と同様の危機感を持っているなど、アメリカの実状に関する多くの情報をもとに、的確な解説が加わった充実した内容の講演であった。講演後のフリーディスカッションも活発に行われ、今後の本学部の取組に多いに活かせるものと感じられた。

学生の授業外学修時間を増やすことに関して、考慮すべき事項は以下のようなものであった。

1. 現在の学生の生活様式は、30 年前のものから大きく変化しており、そのことに十分留意して取り組む必要がある。学生の私生活は一般に忙し過ぎる。
2. 大人数の講義においては、オンラインプラットフォームを活用した取組が有効である。ただし、厳密な評価に結びつけることは難しい。
3. キャンパス内に学生同士がゆっくり語り合えるスペースは必修である。
4. 教員の負荷が過度にならないようなサポート体制があるのが望ましい。
5. ただ単に学修時間をのばすための課題等を課すのは、学修の主体者である学生をリスペクトしていないので、「わかる」ためのプロセスを共有できるような工夫を織り込むべきである。
6. 授業評価システム等の導入が、学生の評価を甘くしすぎたり、負荷を減らしすぎたりすることにつ

ながるというジレンマに如何に対処するか。熱心な教員の評価ほど低くなりかねない。

なお、参加者の内訳は以下のとおりであった。

参加者：	教 員	12 名
	事 務 部	3 名
	他 学 部	5 名
	計	20 名



第2節 全学FD活動への参加

全学FD委員会には、農学部FD委員長が出席し、また、多くの教職員、学生が、平成25年度の様々な全学FD活動に参加し、全学FD活動の一翼を担った。平成25年度全学FD活動参加者のリストは、以下のとおりである。

平成25年度FD活動参加者

研 修 名	開 催 年 月 日	曜 日	参 加 者		
			学 科	職 名	氏 名
平成25年度新任教員FD研修会	平成25年9月24日	火	資源	助教	宮田 健
			資源	助教	坂尾 こず枝
			資源	助教	奥津 果優
			環境	教授	芝山 道郎
			環境	准教授	伊藤 祐二
FD・SDフォーラム	平成25年10月5日	土	資源	教授	境 雅夫
			資源	教授	イブラヒム・ヒツシャム
			環境	教授	西野 吉彦
			環境	教授	寺岡 行雄
			環境	准教授	肥山 浩樹
			事務	係長	郡山 茂
学生・教職員ワークショップ	平成25年12月17日	火	環境	教授	西野 吉彦
			環境	准教授	肥山 浩樹
			事務	係長	郡山 茂
			事務	係員	山口 聡
			生産	3	高吉 征弥
			生産	4	榎田 泰洋
			資源	3	小森園 亮
			環境	1	海田 悟史
			環境	3	山口 葵
			環境	3	松本 淳
FD委員会・農学部セミナー実施委員会	平成26年2月12日	水	環境	教授	西野 吉彦
			資源	教授	イブラヒム・ヒツシャム
			生産	准教授	岡本 繁久
			事務	係長	郡山 茂
学生支援研修会	平成26年3月26日	水	生産	教授	佐々木 修
			生産	准教授	坂巻 祥孝
			生産	准教授	山本 雅史
			環境	教授	西野 吉彦
			環境	准教授	肥山 浩樹

			環境	准教授	枚田 邦宏
			環境	准教授	鶴川 信
			事務	係長	郡山 茂

以下に、それぞれの参加者による参加報告・感想を掲載した。

鹿児島大学新任教員 FD 研修会について

西野 吉彦

平成 25 年度鹿児島大学新任教員研修会は、平成 25 年 9 月 24 日（火）13:00～16:30、稲盛アカデミー棟 1 階 A11 教室において開催された。参加者数は 32 名であった。農学部からは、4 名の新任教員が参加した。研修会の運営は、鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会、FD 研修会・講習会 WG が担当した。

今回の新任教員研修会の目標は「学生の主体的な学習を促す授業設計について理解する。」であった。研修会の趣旨としては、平成 24 年 8 月に中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」が示された。そこで、学生の主体的な学習時間の実質的確保と増加、アクティヴ・ラーニングへの転換が強く求められている。こうした点を踏まえ、学生が主体的に学ぶようにするためのシラバス作成の留意点、有効な教育方法などについて考える機会と位置付けられる。当日のプログラムは以下のとおりであった。

13:00～13:10	開会挨拶
13:10～14:00	小講演『『アクティヴ・ラーニング』とは何か』および事例紹介
14:00～14:30	グループ活動①：アクティヴ・ラーニングに関する意見交換
14:30～14:50	休憩
14:50～15:40	グループ活動②：「鹿児島探訪」のシラバス（サブタイトル・到達目標・授業概要・評価方法）作成
15:40～16:20	発表・意見交換
16:20～16:30	全体のまとめ

研修会の概要としては、アクティヴ・ラーニングの事例紹介としてクリッカーを使用した授業の進め方が紹介された。その後、アクティヴ・ラーニングを取り入れた形式で参加者 5～6 名ずつの 6 グループを形成して、グループワークを実体験していただいた。グループワークでは、“鹿児島の魅力を外国人にアピールする”、“桜島を世界遺産に登録する”、“水とともに”、“焼酎を造る”、“食と文化に関するパンフレットを作成する”、“鹿児島を売り込め”、といったサブタイトルの「鹿児島探訪」のシラバスを作成し、それについてのプレゼンテーションを行っていただいた。参加者からも指摘があったが、アクティヴ・ラーニングは、その評価方法が確立されておらず、今後の検討課題としてアクティヴ・ラーニングの評価方法をより工夫する必要があると思われる。

平成 25 年度 FD・SD 合同フォーラム
「発達障害学生の理解と授業支援を考える」に参加して

西野 吉彦

平成 25 年 10 月 5 日（土曜日）13 時より鹿児島大学稲盛会館にて鹿児島大学 FD 委員会と大学地域コンソーシアム鹿児島島の共催により平成 25 年度 FD・SD 合同フォーラムが開催された。本年度は「発達障害学生の理解と授業支援を考える」というテーマで、基調講演とパネルディスカッションが行われた。開催に先立ち鹿児島大学 FD 委員会委員長である清原貞夫教育担当理事より開会の挨拶があり、引き続き大学地域コンソーシアム鹿児島 FD・SD 活動事業部会長の有倉巳幸鹿児島大学教育学部教授より本会の趣旨説明があった。

まず、基調講演として富山大学学生支援センター アクセシビリティコミュニケーション支援室長の西村優紀美氏により「発達障害学生に対する修学支援～合理的配慮の探求～」と題してプレゼンテーションがあった。その内容は、発達障害の概要とその定義、考えられる修学支援の内容と、合理的配慮の決定に関する説明であった。富山大学で行なわれている実例を基に様々な取組が紹介され、参加者には大いに参考になる基調講演であった。若干の質疑応答もなされた。

休憩の後、パネルディスカッションが行なわれた。パネルディスカッションに入る前に、パネリストによる事例紹介が行なわれた。パネリストは、鹿児島大学保健管理センター所長の伊地知信二氏、志学館大学参与の有川宣明氏、鹿児島大学教育学部の片岡美華氏および基調講演を行なった西村優紀美氏がコメンテーターとして加わった。内容は、個別に異なる発達障害を持つ学生に対してどのような対応が可能なのか、また、その対応は発達障害を持つ学生にとってというよりも、すべての学生に対して教育内容の改善につながるのではないかという指摘に関するものであった。一方で、現実的には無限の資源と労力をその対応につぎ込むことは不可能であるので、いわゆる「合理的配慮」についてその程度や内容を当事者にも共有してもらう必要が有ることが指摘されていた。

本フォーラムを通しての全体的な印象として、発達障害を持つ学生に日々対応しているスタッフの人がもつ意識と一般の教員や職員のもつ意識との間に大きな隔たりがあるということを感じざるを得なかった。発達障害には様々な形態があり、身体的な障害を持つ学生と異なり、その対応はやはり個別の事案ごとに検討しなければならない。したがって、ユニバーサルデザイン的なもので対応するには限界がある。また、一方で、発達障害があるにもかかわらず、なんとか個人的に社会や大学の制度に順応していこうとしている事例もあるので、大学側として押し付けるような対応や、障害学生の掘り起こしを行なうことは必ずしも適当でないということであろう。発達障害学生への対応ということは非常に難しいテーマであるので、今後も様々なかたちで理解を深める機会をもつことが必要であるといえる。

平成25年度学生・教職員ワークショップに参加して

西野 吉彦

鹿児島大学FD委員会では、昨年度の学生・教職員ワークショップ「学生の自主的な学習を生み出す大学へ」に引き続き、「自主的な学習のできる学生を育成する教育の推進」をテーマとした学生・教職員ワークショップを開催した。

今回のワークショップでは、学生、教員、職員が自主的な学習の必要性と具体的方法を理解して日々の教育活動に活用できるように、それぞれのテーマに分かれて討議し改善計画立案を行った

内容は下記のとおりであった。

平成25年度学生・教職員ワークショップ 「自主的な学習のできる学生を育成する教育の推進」

【趣旨】

大学のめざす望ましい教育を実現するために、FD委員会では教職員が学生とともに討議する「学生・教職員ワークショップ」を毎年開催している。本年度は、昨年に引き続き「自主的な学習」を取り上げた。学生の主体的な学習は望ましい学習成果を生み出し、自主的な学習習慣が生涯学び続ける社会人の基盤となる。鹿児島大学では「自主自律と進取の精神」の涵養を掲げて自立した学習者の育成をめざしており、全ての教職員、学生が協力して学習の環境を整備していく必要がある。

本ワークショップでは、本学での事例紹介と改善計画立案を行い、参加した皆様が自主的な学習の必要性と具体的方法を理解して日々の教育活動に活用できるように企画した。また、参加者の皆様が今後部局の教育改善やFD・SD活動の推進役、支援者となっていただけることも期待する。

【目標】

ワークショップ終了時に、参加者は、学生が主体的に学習することの重要性と大学の役割を理解し、授業、制度、教育環境の改善を提案する。

【主催】 鹿児島大学 ファカルティ・ディベロップメント委員会

【日時】 平成25年12月17日（火）16:10～19:10

【場所】 郡元キャンパス 共通教育棟2号館1階 212・213号教室

【参加対象者】

教育に関心のある全ての学生、教職員

- ・ 学生：各学部より推薦を受けた学生、自主参加希望者
- ・ 教員：各学部、施設の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員
- ・ 職員：各学部学生系職員、附属図書館、学術情報基盤センター等施設職員、学生部職員

グループ別テーマ

学生が能動的、主体的な学習を経験して学習成果を高め、自主的に学習する技能と習慣を習得する教育を行うために、参加者は以下のテーマに別れて討議する。

① 学習すべき内容（指導すべき内容）をいかに指導（学習）するか？

定められた学習項目を学生が興味、関心を持って主体的に学び、より良い学習成果をあげる教育の改善計画（指導方法改善、学生との連携など）を検討する。

必修科目（専門科目、基礎教育科目等）改善を主に想定。

② 「市民として行動できる能力」「専門能力」を培う多彩な科目により、自主的な学習のできる機会を提供できるか？

学生の関心・興味に応じて選択できる多彩な科目や、学習内容、学習方法を学生が選択・計画できる科目の提案と実現のための方策を検討する。

選択科目（共通教育科目、専門科目）の改善を主に想定しています。

③ 自主的な学習を推進するための学習環境、学習文化をいかに実現するか？

授業の理解、自習での問題解決を支援する教職員と学生の対応、学生同士の学習支援（ピア・サポート）、制度、必要な資源（設備や資料等）の提供を検討する。

参加した感想

全体として、活発なやり取りがなされ、多くの学生の参加もあって、盛り上がった会であった。

このワークショップには、タスクフォースとして参加したが、設定したグループ別テーマに若干、具体性が乏しく、メンバー間にイメージのずれがあったため、案を作成していく際に手間取ることが多かったように思う。毎年同じようなパターンのワークショップを行っているとのことであったが、行う時期や時間帯等、再検討する余地も多く、見直しの時期に来ているかもしれない。最近の大学内のカタカナ言葉が、アメリカの軍隊用語が多いのは少し気になる。タスクフォースやリエゾンオフィス等。

平成 25 年度学生支援研修会に参加して

生物環境学科 肥山 浩樹

去る 3 月 26 日、全学 FD 委員会主催の学生支援研修会に参加した。昨年度までは新入生オリエンテーション説明者講習会として実施されていたが、今年度から、共通教育の履修登録などの説明を省き、大学の学生支援体制とメンタルケアに特化した研修会であった。

清原 FD 委員会委員長の開会挨拶に続き、前田学長から「鹿児島大学の学生支援体制について」と題して詳細な説明がなされた。本学の人材養成目標である「進取の精神を備えた人材の育成」を達成するために、ここ数年に亘り、様々な取り組みが実施されている。その主な狙いは、多くの体験を重ねる中で学生自らが新しい課題に取り組み、その達成感を味わい、さらに次の課題に挑戦させようというもの

である。このためには、教育環境の整備が必須である。各種施設の改修や学習交流プラザの新設などのハード面はもちろん、ソフト面では、修学や就職支援のための各種相談窓口や制度を創設し、安心して4年間を過ごすことができる大学の創造に向けた改善が進められている。また、近年では、グローバル人材養成機能を強化するために、海外研修支援事業の拡大や英語教育の充実に力を入れている。最終的に学長は、「日本で一番、学生を大切にす大学」を目指している。我々教員は学長の意を汲み、学生が「自信」と「勇気」を持って課題に取り組み、「誇り」を持って卒業できるように支援しなければならない、と強く感じた。

続いて、保健管理センターの川池先生から「保健管理センターの学生相談、学生支援」と題して講演が行われた。ここ数年、保健管理センターの学生支援件数は増加傾向にあり、平成24年度は延べ4、772件に達した。相談内容の半分以上が不登校であり、3割が情緒不安定（うつ状態）、1割が学業不振であった。「気分の落ち込み」を過大評価し、「うつ病」を疑う相談が多いが、何らかの「つまずき」から学業不振や学内での孤立を招き、負のスパイラルに落ち込むケースがよくあることが紹介された。また、つまずきの典型例として「時間管理ができない」、「大学生活への戸惑い」、「不本意な入学」、「基礎学力不足」、「大学流学問への戸惑い」の5つがあげられた。負のスパイラルの中で症状はさらに悪化し、学校、教員および家族に対して、見捨てられたくないが近づけないといった「両価性」の心性が現れるとこのことである。このような学生を出さないためには、教員は常に学生のことを考えているという姿勢を示し、いつでも相談できる環境を整える必要があると感じた。

今回の研修は、学生に対して大学がどのような支援体制を構築し、教員に何を求めているかを知る上で大変意義のあるものであった。願わくは、年度末の学会シーズンではなく参加しやすい開催時期設定、ならびに初年度学生担当者に限らない教職員全体への研修としていただくことを望む。



水産学部・ 水産学研究科



よりよい教育環境を創るために

学生の、学生と教職員による、学生のための
ファカルティ・ディベロップメントの取り組み



2013

鹿児島大学水産学部FD委員会

1. はじめに

水産学部では、教育に対する学生満足の実現を目的として、水産学部教育システム運用マニュアルを策定し ISO9001 を取得しています。このマニュアルに基づいて、水産学部ファカルティ・ディベロップメント委員会（FD 委員会）は、教職員の力量を維持し高めるための教育訓練、学生満足度を把握するための授業アンケートを実施し、その評価を行っています。FD 委員会は、ISO9001 が求める PDCA サイクルの Check（授業アンケート）を中心に Action（教育訓練の実施）にも関わり、授業改善、教育改善において重要な役割を担っています。

本年度、FD 委員会が策定した年間教育訓練計画は以下のとおりです。

- 第 1 回 平成 25 年度前期授業公開・授業参観
- 第 2 回 水産学部 FD 講習会「発達障害学生とその保護者が経験してきた苦勞」
- 第 3 回 水産学部 FD ワークショップ「不登校・気分障害学生等への部局としての対応」
- 第 4 回 平成 25 年度後期授業公開・授業参観
- 第 5 回 平成 25 年度学生支援研修会

以下に、それぞれの概要とその成果を報告します。

2. 授業アンケートと授業改善

FD 委員会は、受講生に対し、各学期末に授業アンケートを行っています。学生の抱く満足度を計ることを中心に据えて質問して、各科目の評価を行いました。ここでは、平成 24 年度後期および平成 25 年度前期の授業アンケートについてまとめます。

本アンケートでは、受講生の満足度に応じ、満足した点あるいは満足できなかった点について具体的な記述を求める様式としました。各質問項目における科目の平均値を図 2.1 ～ 図 2.2 に示します。科目種（講義・演習、実験・実習、乗船実習）別の満足度では、いずれの科目種でも満足したと答えた割合は平均で 80% を超えており、ほとんどの受講生が学部で実施している科目に満足していることが分かります。

表 2.1 水産学部授業アンケートの質問項目

Q1: 当該科目を履修した動機 (答) この授業に興味を持ったので この授業に学習意欲がかき立てられたから 履修しやすい曜日や時間帯だったから 必修科目だから 単位取得の為	回答 1 回答 2 回答 3 回答 4 回答 5
Q2: 授業内容に満足した はい or いいえ はいの場合 → Q3 へ いいえの場合 → Q4-1、Q4-2 へ	
Q3: 満足した点 (答) この授業は興味や関心を抱かせる内容だった この授業によって学習意欲がかき立てられた 授業の内容が理解できた 教員の説明が分かりやすかった 学習について教員からのアドバイスやサポートがあった その他	回答 1 回答 2 回答 3 回答 4 回答 5 回答 6
Q4-1: この科目の学習への取り組み態度 (答) 強くそう思う、そう思う、あまりそう思わない、そう思わない	
Q4-2: 満足できなかった点 (答) 授業の内容がよく理解できなかった 授業の内容に興味や関心がわかなかった 教員の説明が分かりにくかった 学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった その他	回答 1 回答 2 回答 3 回答 4 回答 5

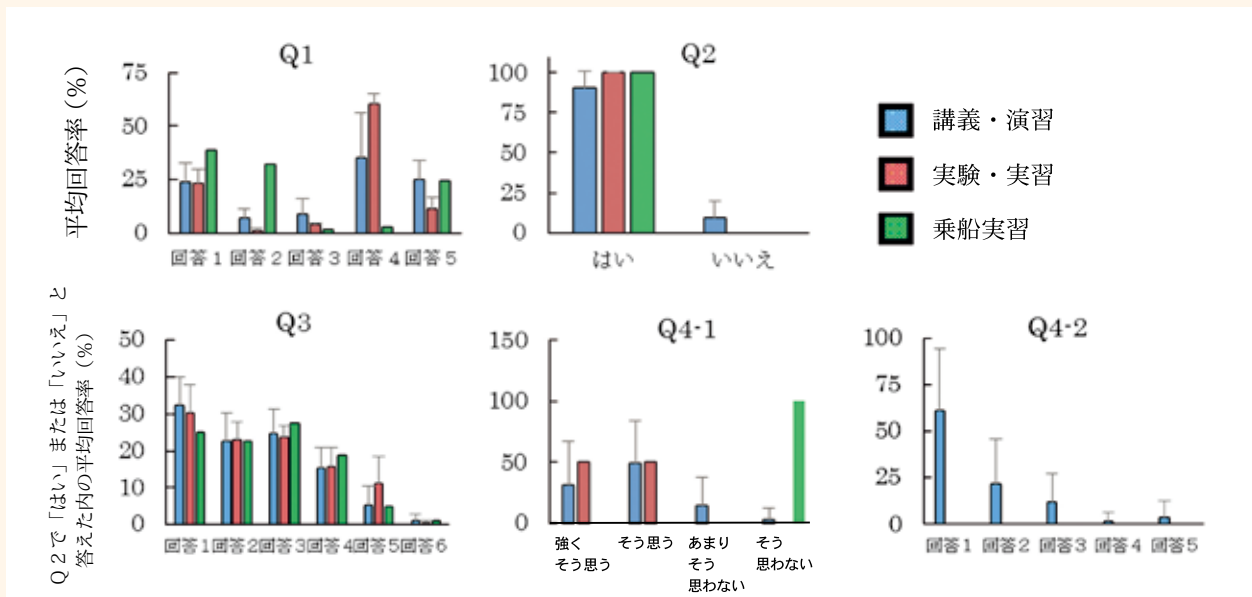


図 2.1 平成 24 年度 後期開講科目の授業アンケートの集計結果

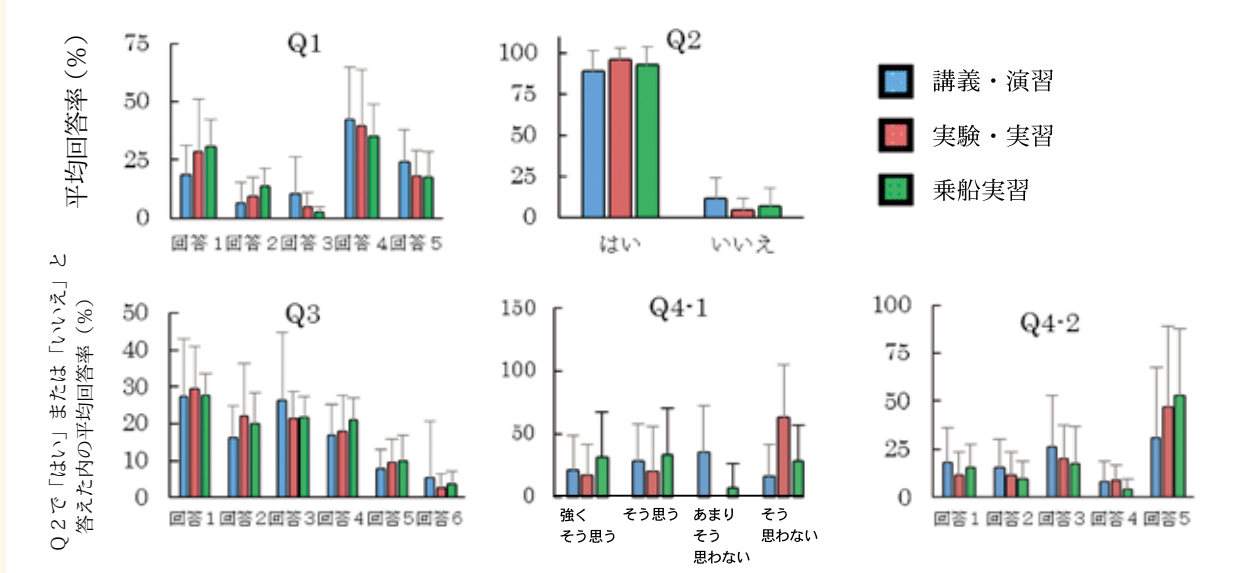


図 2.2 平成 25 年度 前期開講科目の授業アンケートの集計結果

講義・演習科目では、受講の動機を尋ねる質問において、平成 24 年度後期でも平成 25 年度前期でも「必修科目だから」、「単位修得のため」と答える割合が多く、「この授業に興味を持ったので」と積極的な動機を持つ受講生は前述の回答より少ないか「単位修得のため」とほぼ同程度の傾向でした。一方で、満足した点でも「この授業は興味や関心を抱かせる内容だった」と答えた割合が一番多くなる傾向にあり、動機が積極的でない割には、各科目で受講生の興味や関心を喚起させることに成功していたことが窺えます。また、「授業の内容が理解できた」あるいは「教員の説明がわかりやすかった」と答えた受講生が比較的多かったことから、教員の指導方法の改善と、その効果が現れていたことが示唆されています。

講義・演習科目で満足していないと答えた受講生の中で、講義への取り組みが積極的であったかどうかについては、回答にばらつきがみられました。また、満足できなかった点も平成24年度後期では「授業の内容がよく理解できなかった」、「授業の内容に興味や関心がわかなかった」とする意見が多く見られました。これは、履修した動機で「必修科目だから」「単位取得のため」とする意見が多く、これを反映したものと考えられ、科目に満足できなかった受講生は、履修の動機の時点で科目に興味があるわけではなく、そのまま興味や関心を持ってないまま過ごしてしまったものと考えられます。しかし、多くの学生は履修登録の時点では興味や関心を持っていなかったのにも関わらず、科目履修を続けるうちに興味や関心が湧き、科目の内容に満足したものと考えられます。また、この興味や関心が湧いてきた要因としては、授業の内容を理解でき、かつ教員の説明が分かりやすかったことに起因するものと考えられました。同様の傾向は実験・実習および乗船実習科目にも見られました。これに対して平成25年度前期では「教員の説明が分かりにくかった」と回答した学生が多く見受けられ、今後の動向に注視すべきと思います。

一方で、満足であるとした点で「学習について教員からのアドバイスやサポートがあった」と答えた受講生の割合が、いずれの科目種でも低く、講義・演習科目、実験・実習科目、ならびに乗船実習科目の満足できなかった点で「学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった」と答えた割合が少なかったものの、アドバイスおよびサポートの印象が薄いと受け取ることも出来ません。各科目でさらに積極的に学生へのアドバイスやサポートに取り組む必要があると思われます。

一部の科目を除いて Moodle を利用してアンケートを実施しました。授業アンケートの Moodle での実施については、漁業工学分野・(故)日高正康先生に大変ご尽力いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

3. 授業公開・参観と授業改善

FD委員会では、教育従事者の教育訓練の一環として授業公開・授業参観を行っています。各学期の初めに授業公開への協力を依頼し、公開可能との回答をいただいた科目について授業公開をします。水産学部に限らず、全学の教職員や当該授業を受講したことのある学生の参観も可としています。授業公開にご協力いただいた担当教員には授業公開・授業参観報告書を提出いただき、授業改善の基礎資料としています。本年度は、前期で24科目、後期で12科目の授業公開を行い、それぞれ3名ずつの参加がありました。なお、より多くの授業への参加を促進することを目的として、授業参観参加者は赴任後3年以内の教員を対象として実施しました。また、本年度後期については赴任後3年以内の教員に加えて技術職員も対象者となりました。

授業参観後アンケートの記載内容を以下にまとめます。本年度の特徴として、受講生の理解度の向上と受講生に興味を持たせることを目的とした取り組みが挙げられます。たとえば、ミニッツペーパーに書かれた疑問に対して丁寧に授業時間中に答えたり、パワーポイントを使って要点を抽出する、あるいは注意を引くような工夫をするなど、各教員が苦労を重ねている様子がうかがえます。

アンケートの回答からは、個別の工夫だけでなく、受講生にとって分かり易く、かつ考えながら講義を受けられるような方向に、各教員の意識が向いていることが示唆されていました。また、今年度後期に実施した技術職員の授業参観も1名あり、教職員全体が一丸となって教育に携わる意識が浸透していると思われます。

一方で、授業参観者数は、授業公開・授業参観報告書が提出された公開授業1科目当たり平均1名と昨年度(0.3)より多くなり、授業参観者がなかった公開授業は83.3%と昨年度より増えていました。

赴任後3年以上の教員については、授業スキルの確立・改良はほぼ完成し、次のステップに踏み出す準備が必要であり、幅広い学力集団の学生に対して、いかに教育していくのかを議論することも必要であると考えます。

4. FD 講習会「発達障害学生とその保護者が経験してきた苦勞」

教育従事者教育訓練の一環として、平成25年9月2日にFD講習会「発達障害学生とその保護者が経験してきた苦勞」を開催しました。近年発達障害を有し、他者とのコミュニケーションに問題がある学生の入学が増加傾向にあります。こうした学生が講義や実験を受講する際には、様々な問題が生じることが推察されますが、現段階では教職員の発達障害に対する知識も少ない現状です。こうした学生への対策を講じるためにも、教職員は発達障害を有する学生に対して十分に理解し、とるべき対応を学んでおく必要があります。そこで、発達障害学生とその保護者が、その本人が幼い頃からいかに苦勞して成長してきたのかという、本人とご家族の立場を理解することを目的にし、教職員が発達障害を有する学生へ接する際の一助になることを期待して本FD講習会を行いました。講師には、学童期の発達障害児について長年携わって来られた鹿児島県こども総合療育センター内の鹿児島県発達障害者支援センターの芝隆史先生をお招きしてご講演いただきました。

芝隆史先生のご講演内容を以下にまとめます。

発達障害学生は幼い頃から高校までは手厚いサポートを受けながら、学校生活をしています。発達障害は生まれつきの脳の障害であり、保護者の育て方や愛情不足などの家庭環境が原因で起こるものではありません。発達障害学生一人ひとりの特性に配慮した細やかな支援を受ければ、多くの場合、学力や人間力を伸ばすことが可能です。しかし、大学に入学すると環境が激変し、発達障害学生への理解が得られにくく、また、特別なサポートが得られずに、孤立し不安を抱え、問題を起こしがちになる傾向があります。教職員は、発達障害学生の保護者の立場も理解して学生と接することで、問題をエスカレートさせずに対応することが可能になると思われます。

講演後の質疑では、講演直後ということもあり講演内容を反芻理解できていないためか、一方的に教員の立場を強調した質問が見受けられました。また、講演後に、このような啓蒙活動はこれまでに十分になされてきたので、もっと現実的な対処法のアドバイスが欲しいという意見もいただき

ました。しかし、このような意見が寄せられること自体、啓蒙活動が不十分であるといえ、今後、例えば交通安全教室が毎年繰り返し実施されることと同様に、地道な啓蒙活動が必要であると強く感じられました。

なお、平成16年度に制定された「発達障害者支援法」で、大学においても発達障害者の障害の状態に応じ、適切な教育上の配慮の必要性が謳われるようになったことで、発達障害のある学生に対して、十分な理解の下に適切な対応をしていくことが必要となっています。さらに昨年6月に公布された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の施行（平成28年度）を前にして、本FD講習会を開催しました。

5. FD ワークショップ「不登校・気分障害学生等への部局としての対応」

近年、コミュニケーションを苦手とする不登校・気分障害・発達障害などの学生の割合が増加傾向にあり、様々なトラブルの発生が見受けられます。そこで、今回のFDワークショップでは、「不登校学生ならびに気分障害（が疑われる）学生」について、通常の講義・実験・実習等、ならびに研究室活動等において、これまでに各教職員が経験した困ったことの事例、それらに関する悩み、これらの学生との付き合い方の工夫などの情報を可能な範囲で共有し、よりよい対応策を今後の教育現場等へ還元し、教育の質の向上に有機的につなげることを目的に、平成26年1月15日にFDワークショップを開催しました。

実施方法として、各分野等を基本母体として6つのグループ（水産生物・海洋学、養殖学、食品・資源利用学、漁業工学・教員養成課程、水産経済学、海洋センター）を形成し、FD委員（前委員を含む）がタスクフォースを務め、事前調査を行いました。この事前調査を踏まえて、ワークショップでディスカッションし、各グループの取りまとめた内容を発表していただきました。

ワークショップの発表内容を以下のように表5-1と表5-2にまとめます。少なくとも計29件を超える事例がワークショップで議論されたことが分かりました。把握できる限りで内容をまとめると、不登校、気分障害が疑われる学生の事例は、1年生時に5件、2年生時に3件、3年生時に5件、4年生時に10件、修士1年時に1件、修士2年時に2件、不明が3件紹介されていました。不登校のきっかけ・原因は様々考えられましたが、事例から推察されるに、人間関係、就職活動、修学意欲の低下、生活費（アルバイト）の関係等が挙げられました。修士学生、学部生では母数が異なるため単純に比較はできませんが、4年生時の症状発現が多いことが窺えました。これらを基に不登校を、怠惰型、発達障害の可能性型、気分障害の可能性型、留学生型、合併型、およびその他に類型化することができました。これらの事例に対しては、積極的にコミュニケーション（連絡をとる）を図ること、保護者への連絡や保健管理センターと連携することなどの具体的な対応例が発表されました。また課題、問題点として、コミュニケーションの重要性、そのための連絡手段の確保、不登校学生の検出とモニタリング、助言指導の体制などが挙げられました。

一方で、学生の症状がどの程度深刻であるのか、たとえば病名が付く深刻な状態（気分障害、発達障害）なのか、一過性のものなのか、教員には判断することができないことも事実であり、専門家ではない教職員のみへの対応には限界があり、それ相応の予算と時間を確保すべきとの意見もでました。

表 5.1 学生の不登校の種類と不登校の原因

怠惰型	アルバイト中心の生活、サークル活動に熱中 など
発達障害の可能性型	他人とのコミュニケーションが苦手
気分障害の可能性型	将来や現状に対する不安など
留学生型	アルバイトに熱中、勉学・研究意欲の低下
合併型	多様な型の合併・複合型
その他	原因不明

ワークショップを通じて、議論の内容をまとめると不登校学生、気分障害が疑われる学生への対応には、現状で以下の問題点があげられました。

連絡手段の確保： 不登校学生に多くみられる傾向に、届け出ている連絡先が変わっていて音信不通になる可能性があるため、連絡先の定期的な確認作業が課題である。

ガイドラインの作成： 不登校、気分障害の学生に対する対応をガイドライン化する。これは、助言指導経験の浅い教員へのサポートになりうることに加え、状況が悪化した際の責任問題への対応になると考えられる。賛否両論であり、学生の個人差もあるためガイドラインどおりの対応ができない可能性もある。

情報の共有化： 個人情報取り扱いに議論が必要だが過去の事例や対応策を教員間で共有することで、不登校学生、気分障害の学生への対応を教員一人で抱え込むことがないように対応する。現在教員 1 人が 10 名を助言指導している体制から、複数人が 20～30 名を助言指導するような、指導教員のバディ制で対応するなど。また助言指導教員の交代時に学生の情報を確実に引き継ぐなど。

問題発覚の早期化： 不登校学生、気分障害の学生への対応は早いほうがよい。たとえば、1 年生時では全員が受講する学部基盤科目で 3 回欠席した学生を助言指導教員に連絡することや、2 年生時からは分野必修科目での出席状況をモニタリングするなどの対応が考えられる。

表 5.2 不登校学生に対する教員の経験と対応策

成人の自由意志として行動しているので放置している
教員から見ると「虚言癖」があるような雰囲気である
保健管理センターにも行きたくないと思表示
保護者も対応に苦しんでいる
教員が対応できる範疇をこえている印象である
教員の対応範囲をガイドラインとして決めて欲しい（ただ、マニュアルで対応できるような「問題」ではないから「問題」なのでは…）
専門家ではないので、「対応」には限界がある
現状では知識も時間もない
それなりの予算と時間を確保すべきである
全ての教員が「対応」できるものではないという認識を持つべきである（「適性」というものがある）
学校教育の無限定な役割拡大は慎重に…
本人が投薬カウンセリングを受けていたが、その情報が提供されていなかった（練習船）
学生に対する情報を共有できる仕組みがあればいい
親・学生・教員の三者関係が重要である
不登校のきっかけは多様である
教員側は学生の行動、情緒をよく観察する必要はあると同時に教員側には限界がある
保健管理センターに任せるのがベターだが、連れて行くのが難しい（親の理解も必要）
保健管理センターの医師、スタッフを増やしてほしい
就職活動の最大限のサポート、学生係やジョブサポーターを積極的に薦める
就職活動で来ないのか、不登校（さぼり？）かどうかわからない
教員が学生の生活パターンをすべて把握するのは難しい（1～3年生）
生協の取り組み（友達作りができるようなイベント、不登校のデータ取り）を活用する
個人情報の取り扱いのむずかしさを感じる
問題が起こるタイミングは、①入学時（不本意な進学など）、②2～3年時（進級、人間関係）、③卒論時（人間関係、就職など）である
不登校学生との連絡手段を確保する
教職員間で情報を共有する
授業の出席率を定期的に確認する

ワークショップでも発表されたように、不登校学生、気分障害を疑う症状が発現する時期には、いくつかのパターンがあるように思われます。現在の教育体制では助言指導教員が卒業までに最大で3度交代することから、学生に対する情報を確実に引き継ぐ制度や仕組みを整備することや、一人の教員で悩むのではなく、多人数で情報を共有する仕組みを整備して担当教員をバックアップしていくことも必要であり、今後対応を検討すべき事項と考えられました。

近年、不登校学生、気分障害が疑われる学生が顕著に増えており、今回のFDワークショップの題材に取り上げるに至りました。今回のワークショップでは、現状を把握して問題を提起するに至りましたが、具体的な対応策や改善への議論は今後の課題となりました。ワークショップでの議論を分析すると不登校・気分障害が疑われる学生の発現する時期にパターンが見られ、それに応じた対応策が垣間見えたような印象を持ちました。また、専門家ではない教職員のみ対応には限界があるため、学校教育の役割として何処まで大学が関与するのかを明確にすることも併せて必要であると考えられます。今回のワークショップで得た情報が有効に利用され、水産学部の教育の質の向上に繋がることを期待したいと思います。

なお、今回のワークショップで「授業の出席率を定期的に確認する」という意見があり、水産学部FD委員会では不登校を判断する一助として、学生カードを利用した出席管理の導入を検討しています。

6. 大学院授業アンケートの実施

水産学部では、学部で開講される全科目について授業アンケートを行っています。一方で、昨年度までは水産学研究科（修士課程）の大学院生にはアンケートは行っておらず、大学院におけるFD活動は停滞した状態でした。そこで今年度から大学院修士課程の授業アンケートを実施しました。アンケートの様式を図6.1に示します。今後は、各科目の受講生数が少ないので、授業アンケートにどれほどの効果、信頼性があるかを吟味することも必要であると思われます。

アンケートでは、履修して良かったと思う点と改善すべきと思う点の2点に絞り、簡潔な書式の作成を行いました。

大学院水産学研究科 授業アンケート		
このアンケートは、受講生の皆様とともに授業改善に取り組むための基礎資料として活用します。集計結果のみを授業担当者にお知らせしますので、回答内容が成績に影響することはありません。あなたの考えを率直に記入してください。		
受講科目名： _____	学籍番号： _____	氏名： _____
所属分野： 水産生物・海洋学	養殖学	食品資源・利用学
(該当に○) 漁業工学	水産経済学	
Q1. この科目を履修して良かったと思う点を自由に記述してください。		
Q2. この科目の改善すべき点について自由に記述してください。		

図6.1 大学院修士課程の授業アンケート様式

7. 卒業時アンケート・修了時アンケートの実施

水産学部では、例年卒業生対象にそれまでに受けた教育のPDM中で掲げられている学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に対する達成度を調査することを目的として、卒業式直前に卒業時アンケートを実施しています。卒業時アンケートの様式を図7.1に示します。これにより、学生が卒業するまでに受けた教育の体系を評価させ、これを分析することで将来の学部教育の戦略的な

展開の材料にしようとしています。また、今年度から大学院修士課程の修了時アンケートを同様に実施いたします。修了時アンケートの様式を図 7.2 に示します。

アンケートは、学部教育目標、各分野のカリキュラム目標に基づいた質問を設け、さらに進路の決定に際して、情報の収集あるいは相談をどのようにしたのかを問う項目も設けてあります。学部教育目標関係の設問については、進路先（就職、進学、その他）および分野で分けて集計し、各分野カリキュラム目標関係の設問については進路先で分けて集計します。進路決定に関する設問については、進路（就職、進学）で異なる質問を設けてあります。

8. 終わりに

水産学部 FD 委員会では、教育システム運用マニュアルに規定された教職員の力量の維持、向上を実現するために、授業公開・授業参観を企画し、FD 講習会、FD ワークショップを開催しています。また、学生満足度の調査を目的として授業アンケートを行い、その結果を教職員にフィードバックすることにより、授業改善に役立てていただいています。しかしながら、近年、FD の意義や重要性が十分に認識され、教員が自ら授業改善、教育改善を進めているなかで、FD 委員会の提供する FD 活動が形骸化しつつある印象も否めません。本年度は、その解消を目指し、特記すべき点として大学院水産学研究科（修士課程）の授業アンケートの実施に取り組みました。今後の課題として、これらの成果を検証するのに加え、授業改善、カリキュラム改善に資するような授業公開・授業参観の実施方法の検討、水産学研究科（修士課程）の FD の充実が挙げられると思います。その実現のために、他の教育関連の委員会との連携も図りながら、教職員が積極的に関与し議論できるような仕組み作りをめざしたいと考えています。

平成25年度 卒業時アンケート

I. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、貴方自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。①～④を選び、カッコ内に数値を書き入れてください。

① 十分にそう思う ② ある程度思う ③ 少し思う ④ 全く思わない

質問項目（全員回答）	評価
1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した	
2. 基礎学力が身につき、生涯学べる能力を習得した	
3. 水産技術者として必要な英語能力が向上した	
4. 情報処理能力が身に付いた	
5. 報告書作成、プレゼンテーション能力が身に付いた	
6. 現場対応能力が備わった	

II. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで書き入れてください。

専門分野別の質問項目（1つ回答）	評価
A. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
B. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
C. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
D. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
E. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
F. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
G. 水産教員養成課程 水産教員またはそれに近い分野の教員になるための必要で実践的な知識・技術が身に付いた	

III. 就職・進学について、ご回答ください。（全員回答）

① 十分にそう思う ② ある程度思う ③ 少し思う ④ 全く思わない ⑤ 未決定

1. 貴方が修得した知識や技術が活かして、希望する職種等に就職・進学できた	
---------------------------------------	--

ご協力、ありがとうございました。

図 7.1 卒業時アンケートの様式

平成25年度 修了時アンケート

I. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較して貴方自身が修得できたかを総合的な観点から評価し、①～④を選んでカッコ内に数値を書き入れてください。

① 十分にそう思う ② ある程度思う ③ 少し思う ④ 全く思わない

質問項目（全員回答）	評価
1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する高度な知識を修得した	
2. 基礎学力が向上し、生涯学べる能力を修得した	
3. 水産技術者として英語論文などの内容を正確に理解し、要約できた	
4. 情報活用能力が向上し、自ら学ぶ技術が身に付いた	
5. 調査・研究のプロセス全体を進めることができた	
6. 就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ	

II. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで書き入れてください。

専門分野別の質問項目（1つ回答）	評価
A. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
B. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
C. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
D. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
E. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
F. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた	

III. 就職・進学について、ご回答ください。（全員回答）

① 十分にそう思う ② ある程度思う ③ 少し思う ④ 全く思わない ⑤ 未決定

1. 貴方が修得した知識や技術が活かして、希望する職種等に就職・進学できた	
---------------------------------------	--

ご協力、ありがとうございました。

図 7.2 修了時アンケートの様式



鹿児島大学水産学部では教育全般に対する満足度を向上させるため、ファカルティ・ディベロップメント（FD）に関する様々な取り組みを行っています。例えば、品質のマネジメントに関する国際標準化規格である ISO9001 を教育分野に国立大学として初めて導入し、授業アンケートも他学部に先駆けて導入しました。水産学部および大学院水産学研究科の教職員は、ISO9001 教育マネジメントシステムの運用により、より良い教育を学生に提供することを目的に、日々教育の質の向上に努めています。FD パンフレットが教育や授業の質の向上に役立てば幸いです。

編集：鹿児島大学水産学部FD委員会

委員長：上西由翁

副委員長：小松正治

委員：米山和良、佐々木貴文、西隆一郎、須本祐史、池上潤

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20

099-286-4111（代表）

共同獣医学部

第1節 平成25年度共同獣医学部FD活動の記録

1. 共同獣医学部FD活動組織（FD委員会の構成と活動状況）

委員長 松尾智英 准教授
委員 白石光也 准教授
委員 安藤貴朗 准教授
事務担当者 本 忠夫（学務課長）
 郡山 茂（教務係長）
 東屋敷貴宏（教務係員）

第1回共同獣医学部FD委員会

日時：平成25年4月16日（火）14：28～15：08
場所：22セミナー室（農・獣医共通棟2階）
出席者：松尾、白石、安藤
陪席者：事務部（本、郡山、東屋敷）

議 題

1. 平成25年度FD委員会の定例開催日について
2. 平成25年度FD委員会の活動計画について
3. 平成25年度FD経費予算要求について
4. 平成24年度鹿児島大学FD報告書について

報告事項

1. 平成24年度FD経費執行状況報告書について

第2回共同獣医学部FD委員会

日時：平成25年5月23日（木）16：10～16：40
場所：22セミナー室（農・獣医共通棟2階）
出席者：松尾、白石、安藤
陪席者：事務部（本、郡山、東屋敷）

議 題

1. 平成25年度FD講習会について
2. 平成25年度授業参観および授業公開について

報告事項

1. 平成24年度鹿児島大学FD報告書について
2. 平成25年度FD活動計画・経費要求書について

第3回共同獣医学部FD委員会

日時：平成25年10月10日（木）10：30～11：00
場所：24セミナー室（農・獣医共通棟2階）
出席者：松尾、白石、安藤

陪席者：事務部（本、郡山、東屋敷）

議 題

1. 後期授業参観および授業公開について
2. 学部 FD 講習会について

報告事項

1. 授業評価アンケート結果について
2. その他
前期授業参観への参加者について
12月開催のFD・SDワークショップへの参加者選定について

第4回共同獣医学部FD委員会

日 時：平成25年12月9日（月）9：30～9：44

場 所：22セミナー室（農・獣医共通棟2階）

出席者：松尾、白石、安藤

陪席者：事務部（本、郡山、東屋敷）

議 題

1. 学部FD講習会について

報告事項

1. 後期授業参観および授業公開について

2. 授業公開と授業参観の取り組み

まえがき

共同獣医学部では、農学部所属の平成15年度後期より授業公開・授業参観の取り組みを実施している。平成24年度より共同獣医学部が発足し、本年度は共同獣医学部所属の学生が1-2年生となったが、3年生から6年生までは農学部所属となるため、授業公開と授業参観のスケジュールは農学部と同様であった（農学部報告書参照）。しかしながら、共同獣医学部科目に関してはFD-WEBの利用を予定していないため、今後FD-WEBを使用しない授業参観の実施が必要となる。そのため、本年度は授業公開科目の周知はFD委員経由でメールにて、授業参観参加希望申込みは科目担当者と参観希望者間のメールのやりとりで行われた。授業担当者と授業参観者には、可能な限り、参観後に意見交換をお願いすると共に、参観者には様式の配布を行って、授業参観報告書を作成・提出いただいた。

また、授業公開・授業参観の取り組みにおいては、例年通り平成24年度の授業のうち学生の評価が高い授業科目を教員に周知した。これらの授業科目の選抜は、受講生が30名以上のうち、学生による授業評価アンケートで「満足した」「どちらかと言えば満足した」という回答が100%である科目を選び、各学科から満足度が最も高かった科目を選出した。選抜された授業は以下の表の通りであった。

本年度の獣医学科教員の授業参観参加者数は、前期11名、後期10名、のべ21名の参加があり、例年以上に有意義な取り組みであった。

<特に学生の満足度の高かった科目> (前期科目)

学 科	曜日	時限	教室	科目名	担当教員名	備 考
生物資源化学科	月	2	105	栄養生理化学	大塚 彰	
生物生産学科	月	5	201	昆虫学	坂巻 祥孝	
生物環境学科	火	1	201	森林保護学	曾根 晃一	
生物生産学科	火	2	104	生物的防除論	津田 勝男	
生物環境学科	火	2	201	環境エネルギー論	岩崎 浩一	
生物生産学科	火	3	204	果樹園芸学	富永 茂人	
生物環境学科	火	4	105	森林計画学	寺岡 行雄	
生物資源化学科	水	1	203	植物性食品学	北原 兼文	
生物生産学科	水	2	203	園芸品種創成論	清水 圭一	
獣医学科	水	2	305	代謝・内分泌学	帆保 誠二	
生物環境学科	木	2	105	森林材料学	服部 芳明	
生物環境学科	木	4	203	森林気象学	井倉 洋二	
獣医学科	金	1	A棟 4F	発生学	松元 光春	
獣医学科	金	1	305	産業動物獣医学	高木 光博	

<特に学生の満足度の高かった科目> (後期科目)

学 科	曜日	時限	教室	科目名	担当教員名	備 考
獣医学科	火	1	302	寄生虫病学Ⅱ	松尾 智英	
生物環境学科	火	3	104	木質環境学	服部 芳明	
獣医学科	木	2	A棟 4F	解剖学Ⅲ	松元 光春	
生物環境学科	木	3	203	生物生産機械学	末吉 武志	
生物生産学科	木	4	104	生物統計学	下桐 猛	
生物生産学科	金	1	105	植物感染分子微生物学	中村 正幸	
生物環境学科	金	1	203	森林計測学	寺岡 行雄	
生物生産学科	金	2	307	害虫学	津田 勝男	
生物資源化学科	金	2	204	食品微生物学	石橋 松二郎	
獣医学科	金	2	303	薬理学A	宮本 篤	
生物資源化学科	金	2	203	機器分析化学	玉置 尚徳	
生物資源化学科	金	3	204	動物栄養・飼料化学	大塚 彰	

学生による授業評価

平成 25 年度前期・後期の 2 回、学生による授業評価のアンケートを実施した。これについては、前述の通り、3 年生から 5 年生までは農学部としてアンケートを行っているため割愛させていただく（農学部報告書参照）。

しかしながら、共同獣医学部としては、今後徐々に学年毎の新カリキュラムへの移行を進めていく。その中で、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施していく（様式は右のとおり）。本年度は共同獣医学部所属の 1-2 年生のみであったが、実施した授業評価アンケート結果（実習科目は省略）は下記の表のとおりであった。

共通教育科目等は山口大学とのメディア授業（受信のみ）および集中講義について、授業評価アンケートを実施した。メディア授業とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。

専門教育科目は全科目について、授業評価アンケートを実施した。

平成 24 年度 共同獣医学部

授業評価アンケート(講義・演習用)

授業科目番号: _____ 受講者氏名 _____

授業科目名: _____ () 遠隔授業システム 教員名: _____

* このアンケートは、授業をより良くするために行うものです。
 * 回答者の成績に影響することはありませんので、あなたの考えを率直に記入してください。
 * この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。

1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)
 ○1. 90%以上(14回以上) ○2. 80~90%(12~13回) ○3. 60~80%(9~11回) ○4. 40~60%(6~8回) ○5. 40%未満(6回未満)

2 あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。
 ○1. 3時間程度または以上 ○2. 2時間程度 ○3. 1時間程度 ○4. 30~50分程度 ○5. 30分未満

3 この授業内容の水準はどうでしたか？
 ○1. 高かった ○2. やや高かった ○3. 妥当だった ○4. やや低かった ○5. 低かった

4 この授業の分量はどうでしたか？
 ○1. 多かった ○2. やや多かった ○3. 妥当だった ○4. やや少なかった ○5. 少なかった

5 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

6 録音やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

7 授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

8 この授業はシラバスに沿って進められましたか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

9 あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

10 あなたは、この授業の内容を理解できましたか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

11 この授業は、あなたにとって満足のものでしたか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

* 以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合(授業科目名の横にチェックあり)のみ回答してください。

12 教員の音声は聞き取りやすかったと思いませんか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

13 教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いませんか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

14 教員の授業の進め方はスムーズでしたか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

15 授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いませんか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

16 対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いませんか？
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あおそう思わない ○5. そう思わない

自由記述
 この授業についての感想・要望・感想などを自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。 共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会

〈授業評価アンケート結果〉

※数字は%。回答 6 には「無回答」を含む。設問 12~16 は遠隔授業システムに関する質問。

講義名：基礎生物学（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	32.4	18.9	18.9	13.5	13.5	2.7	設問 9	8.1	13.5	43.2	21.6	13.5	0.0
設問 2	5.4	5.4	24.3	24.3	37.8	2.7	設問 10	8.1	35.1	18.9	21.6	16.2	0.0
設問 3	13.8	24.3	51.4	2.7	10.8	0.0	設問 11	2.7	5.4	35.1	29.7	27.0	0.0
設問 4	16.2	10.8	64.9	5.4	2.7	0.0	設問 12	21.6	24.3	32.4	18.9	2.7	0.0
設問 5	2.7	2.7	32.4	37.8	24.3	0.0	設問 13	18.9	43.2	29.7	5.4	2.7	0.0
設問 6	5.4	5.4	32.4	43.2	13.5	0.0	設問 14	13.5	29.7	40.5	10.8	5.4	0.0
設問 7	5.4	5.4	54.1	29.7	5.4	0.0	設問 15	5.4	21.6	29.7	27.0	16.2	0.0
設問 8	10.8	10.8	43.2	21.6	13.5	0.0	設問 16	5.4	10.8	32.4	21.6	29.7	0.0

講義名：基礎化学（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	75.0	21.4	3.6	0.0	0.0	0.0	設問 9	10.7	14.3	39.3	25.0	10.7	0.0
設問 2	25.0	0.0	35.7	25.0	14.3	0.0	設問 10	10.7	14.3	7.1	50.0	17.9	0.0
設問 3	71.4	17.9	7.1	3.6	0.0	0.0	設問 11	17.8	10.7	32.1	35.7	3.6	0.0
設問 4	46.4	39.3	14.3	0.0	0.0	0.0	設問 12	17.9	28.6	21.4	32.1	0.0	0.0
設問 5	10.7	10.7	50.0	28.6	0.0	0.0	設問 13	10.7	42.9	25.0	21.4	0.0	0.0
設問 6	17.9	32.1	28.6	21.4	0.0	0.0	設問 14	7.1	50.0	32.1	10.7	0.0	0.0
設問 7	35.7	32.1	32.1	0.0	0.0	0.0	設問 15	17.9	28.6	28.6	14.3	10.7	0.0
設問 8	42.9	32.1	25.0	0.0	0.0	0.0	設問 16	0.0	14.3	32.1	21.4	32.1	0.0

講義名：情報セキュリティ・モラル（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	89.7	3.4	0.0	0.0	0.0	6.9	設問 9	0.0	55.2	37.9	6.9	0.0	0.0
設問 2	0.0	0.0	17.2	17.2	65.5	0.0	設問 10	6.9	51.7	34.5	3.4	3.4	0.0
設問 3	3.4	24.1	65.5	6.9	0.0	0.0	設問 11	6.9	51.7	34.5	3.4	3.4	0.0
設問 4	13.8	17.2	69.0	0.0	0.0	0.0	設問 12	41.4	31.0	17.2	10.3	0.0	0.0
設問 5	17.2	48.3	31.0	3.4	0.0	0.0	設問 13	41.4	41.4	10.3	6.9	0.0	0.0
設問 6	27.6	51.7	17.2	3.4	0.0	0.0	設問 14	34.5	37.9	17.2	10.3	0.0	0.0
設問 7	3.4	24.1	65.5	3.4	3.4	0.0	設問 15	20.7	37.9	27.6	10.3	3.4	0.0
設問 8	24.1	44.8	31.0	0.0	0.0	0.0	設問 16	10.3	27.0	27.0	27.0	6.9	0.0

講義名：コミュニケーション論（共通教育科目等、前期集中講義）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	96.9	0.0	0.0	0.0	0.0	3.1	設問 7	31.3	34.4	34.4	0.0	0.0	0.0
設問 2	3.1	0.0	0.0	6.3	87.5	3.1	設問 8	28.1	34.4	34.4	3.1	0.0	0.0
設問 3	25.0	9.4	62.5	3.1	0.0	0.0	設問 9	43.8	37.5	12.5	3.1	0.0	3.1
設問 4	3.1	18.8	78.1	0.0	0.0	0.0	設問 10	43.8	50.0	6.3	0.0	0.0	0.0
設問 5	37.5	50.0	6.3	0.0	0.0	6.3	設問 11	56.3	34.4	6.3	3.1	0.0	0.0
設問 6	43.8	46.9	9.4	0.0	0.0	0.0							

講義名：生命倫理学（共通教育科目等、前期集中講義）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	93.8	0.0	3.1	0.0	0.0	3.1	設問 7	93.8	0.0	6.3	0.0	0.0	0.0
設問 2	3.1	0.0	3.1	12.5	81.3	0.0	設問 8	62.5	21.9	15.6	0.0	0.0	0.0
設問 3	25.0	31.3	43.8	0.0	0.0	0.0	設問 9	40.6	40.6	18.8	0.0	0.0	0.0
設問 4	9.4	25.0	65.6	0.0	0.0	0.0	設問 10	50.0	46.9	3.1	0.0	0.0	0.0
設問 5	78.1	15.6	3.1	3.1	0.0	0.0	設問 11	81.3	15.6	3.1	0.0	0.0	0.
設問 6	56.3	34.4	9.4	0.0	0.0	0.0							

講義名：獣医学概論 A（専門教育科目、前期集中講義、山口大学で実施）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	100	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	設問 7	31.3	37.5	25.0	3.1	3.1	0.0
設問 2	12.5	6.3	6.3	0.0	75.0	0.0	設問 8	43.8	25.0	28.1	3.1	0.0	0.0
設問 3	15.6	34.4	46.9	3.1	0.0	0.0	設問 9	31.3	43.8	21.9	3.1	0.0	0.0
設問 4	18.8	28.1	53.1	0.0	0.0	0.0	設問 10	34.3	53.1	3.1	9.4	0.0	0.0
設問 5	25.0	37.5	25.0	6.3	6.3	0.0	設問 11	37.5	40.6	12.5	6.3	3.1	0.0
設問 6	40.6	43.8	9.4	3.1	3.1	0.0							

講義名：獣医学概論 B（専門教育科目、前期集中講義）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	100	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	設問 7	40.6	43.8	15.6	0.0	0.0	0.0
設問 2	6.3	3.2	6.3	0.0	84.4	0.0	設問 8	50.0	34.4	15.6	0.0	0.0	0.0
設問 3	25.0	15.6	59.4	0.0	0.0	0.0	設問 9	37.5	46.9	15.6	0.0	0.0	0.0
設問 4	6.3	21.9	71.9	0.0	0.0	0.0	設問 10	37.5	59.4	3.1	0.0	0.0	0.0
設問 5	40.6	43.8	9.4	3.1	0.0	3.1	設問 11	50.0	43.8	6.3	0.0	0.0	0.0
設問 6	34.4	46.9	15.6	3.1	0.0	0.0							

講義名：獣医組織学 A（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	77.4	16.1	0.0	0.0	0.0	6.5	設問 9	6.5	45.2	32.3	12.9	3.2	0.0
設問 2	29.0	22.6	35.5	12.9	0.0	0.0	設問 10	16.2	51.6	19.4	12.9	0.0	0.0
設問 3	12.9	25.8	61.3	0.0	0.0	0.0	設問 11	19.4	41.9	29.0	6.5	0.0	3.2
設問 4	12.9	45.2	41.9	0.0	0.0	0.0	設問 12	32.3	38.7	16.1	12.9	0.0	0.0
設問 5	16.1	48.4	25.8	9.7	0.0	0.0	設問 13	22.6	58.1	6.5	12.9	0.0	0.0
設問 6	19.4	41.9	25.8	9.7	3.2	0.0	設問 14	22.6	51.6	22.6	3.2	0.0	0.0
設問 7	19.4	54.8	22.6	3.2	0.0	0.0	設問 15	29.0	45.2	19.4	6.5	0.0	0.0
設問 8	29.0	45.2	22.6	0.0	0.0	3.2	設問 16	6.5	51.6	16.1	16.1	9.7	0.0

講義名：獣医組織学 B（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	70.0	16.7	6.7	0.0	0.0	6.7	設問 9	6.7	63.3	23.3	3.3	3.3	0.0
設問 2	33.3	43.3	20.0	3.3	0.0	0.0	設問 10	20.0	60.0	20.0	5.7	3.3	0.0
設問 3	16.7	43.3	36.7	0.0	0.0	3.3	設問 11	30.0	46.7	20.0	3.3	0.0	0.0
設問 4	20.0	53.3	23.3	0.0	0.0	3.3	設問 12	30.0	36.7	10.0	3.3	0.0	20.0
設問 5	30.0	55.7	10.0	3.3	0.0	0.0	設問 13	30.0	50.0	3.3	0.0	0.0	16.7
設問 6	40.0	43.3	13.3	0.0	0.0	3.3	設問 14	30.0	36.7	13.3	3.3	0.0	16.7
設問 7	43.3	53.3	3.3	0.0	0.0	0.0	設問 15	36.7	40.0	6.7	0.0	0.0	16.7
設問 8	33.3	43.3	23.3	0.0	0.0	0.0	設問 16	25.3	30.0	20.0	3.3	6.7	16.7

講義名：獣医組織学C（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	79.3	10.3	3.4	0.0	0.0	6.9	設問9	6.9	55.2	31.0	6.9	0.0	0.0
設問2	24.1	27.6	31.0	13.8	0.0	3.4	設問10	6.9	69.0	20.7	3.4	0.0	0.0
設問3	6.9	27.6	62.1	3.4	0.0	0.0	設問11	20.7	35.2	17.2	3.4	3.4	0.0
設問4	17.2	34.5	44.8	3.4	0.0	0.0	設問12	31.0	41.4	20.7	3.4	0.0	3.4
設問5	17.2	44.8	31.0	6.9	0.0	0.0	設問13	31.0	44.8	13.8	6.9	0.0	3.4
設問6	24.3	51.7	13.8	10.3	0.0	0.0	設問14	24.1	44.8	20.7	6.9	0.0	3.4
設問7	34.5	31.0	27.6	3.4	3.4	0.0	設問15	34.5	41.4	17.2	3.4	0.0	3.4
設問8	34.5	31.0	27.6	3.4	0.0	3.4	設問16	24.1	34.5	24.1	3.4	10.3	3.4

講義名：獣医組織学D（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	86.2	10.3	0.0	0.0	0.0	3.4	設問9	10.3	48.3	27.6	13.6	0.0	0.0
設問2	17.2	27.6	44.8	6.9	3.4	0.0	設問10	13.8	65.5	13.8	6.9	0.0	0.0
設問3	13.8	27.6	58.6	0.0	0.0	0.0	設問11	37.9	44.8	13.8	0.0	0.0	3.4
設問4	44.8	17.2	37.9	0.0	0.0	0.0	設問12	41.4	13.8	10.3	3.4	0.0	31.0
設問5	48.3	37.9	10.3	0.0	0.0	3.4	設問13	34.5	31.0	3.4	0.0	0.0	31.0
設問6	48.3	37.9	10.3	3.4	0.0	0.0	設問14	34.5	27.6	6.9	0.0	0.0	31.0
設問7	51.7	41.4	6.9	0.0	0.0	0.0	設問15	37.9	24.1	6.9	0.0	0.0	31.0
設問8	48.3	41.4	10.3	0.0	0.0	0.0	設問16	34.5	13.8	17.2	3.4	0.0	31.0

講義名：獣医解剖学A（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	90.3	6.5	0.0	0.0	0.0	3.2	設問9	9.7	38.7	32.3	16.1	0.0	3.2
設問2	22.6	32.3	35.5	6.5	3.2	0.0	設問10	16.1	29.0	32.3	19.4	3.2	0.0
設問3	16.7	45.2	38.7	0.0	0.0	0.0	設問11	25.8	38.7	25.8	3.2	3.2	3.2
設問4	48.4	32.3	16.1	0.0	0.0	3.2	設問12	25.8	41.9	9.7	3.2	0.0	19.4
設問5	19.4	51.6	25.8	0.0	3.2	0.0	設問13	22.6	25.8	22.6	6.5	3.2	19.4
設問6	22.6	45.2	29.0	0.0	3.2	0.0	設問14	29.0	38.7	6.5	0.0	6.5	19.4
設問7	29.0	41.9	29.0	0.0	0.0	0.0	設問15	32.3	35.5	9.7	0.0	3.2	19.4
設問8	29.0	38.7	29.0	0.0	3.2	0.0	設問16	16.1	25.8	19.4	6.5	9.7	22.6

講義名：獣医解剖学B（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	76.7	13.3	3.3	0.0	0.0	6.7	設問9	13.3	43.3	36.7	3.3	3.3	0.0
設問2	20.0	46.7	26.7	6.7	0.0	0.0	設問10	20.0	63.3	13.3	3.3	0.0	0.0
設問3	16.7	33.3	50.0	0.0	0.0	0.0	設問11	36.7	53.3	6.7	0.0	3.3	0.0
設問4	16.7	36.7	43.3	3.3	0.0	0.0	設問12	43.3	40.0	10.0	3.3	0.0	3.3
設問5	40.0	50.0	10.0	0.0	0.0	0.0	設問13	33.3	46.7	13.3	3.3	0.0	3.3
設問6	30.0	56.7	10.0	0.0	3.3	0.0	設問14	40.0	40.0	13.3	0.0	3.3	3.3
設問7	43.3	46.7	10.0	0.0	0.0	0.0	設問15	43.3	36.7	10.0	6.7	0.0	3.3
設問8	36.7	40.0	20.0	0.0	0.0	3.3	設問16	30.0	36.7	16.7	6.7	6.7	3.3

講義名：獣医解剖学C（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	72.4	10.3	6.9	0.0	0.0	10.3	設問9	13.8	48.3	31.0	0.0	3.4	3.4
設問2	27.6	27.6	37.9	6.9	0.0	0.0	設問10	17.2	55.2	24.1	0.0	3.4	0.0
設問3	6.9	34.5	58.6	0.0	0.0	0.0	設問11	27.6	51.7	17.2	0.0	0.0	3.4
設問4	24.1	34.5	37.9	3.4	0.0	0.0	設問12	24.1	17.2	17.2	0.0	0.0	41.4
設問5	41.4	34.5	20.7	0.0	0.0	3.4	設問13	24.1	24.1	10.3	0.0	0.0	41.4
設問6	48.3	41.4	6.9	3.4	0.0	0.0	設問14	17.2	27.6	13.8	0.0	0.0	41.4
設問7	48.3	24.1	27.6	0.0	0.0	0.0	設問15	20.7	24.1	13.8	0.0	0.0	41.4
設問8	31.0	41.4	27.6	0.0	0.0	0.0	設問16	17.2	17.2	17.2	0.0	6.9	41.4

講義名：獣医解剖学D（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	89.3	7.1	3.6	0.0	0.0	0.0	設問9	28.6	46.4	21.4	3.6	0.0	0.0
設問2	25.0	25.0	32.1	10.7	7.1	0.0	設問10	28.6	50.0	17.9	3.6	0.0	0.0
設問3	17.9	28.6	53.6	0.0	0.0	0.0	設問11	35.7	57.1	7.1	0.0	0.0	0.0
設問4	21.4	39.3	39.3	0.0	0.0	0.0	設問12	53.6	39.3	7.1	0.0	0.0	0.0
設問5	35.7	53.6	10.7	0.0	0.0	0.0	設問13	35.7	46.4	17.9	0.0	0.0	0.0
設問6	35.7	53.6	10.7	0.0	0.0	0.0	設問14	50.0	39.3	10.7	0.0	0.0	0.0
設問7	32.1	50.0	17.9	0.0	0.0	0.0	設問15	53.6	35.7	10.7	0.0	0.0	0.0
設問8	39.3	46.4	14.3	0.0	0.0	0.0	設問16	39.3	35.7	10.7	10.7	3.6	0.0

講義名：獣医生理学A（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	53.3	30.0	10.0	0.0	0.0	6.7	設問9	10.0	23.3	40.0	13.3	13.3	0.0
設問2	20.0	43.3	26.7	3.3	3.3	3.3	設問10	6.7	26.7	26.7	20.0	10.0	0.0
設問3	43.3	40.0	16.7	0.0	0.0	0.0	設問11	20.0	20.0	40.0	16.7	3.3	0.0
設問4	36.7	36.7	23.3	0.0	0.0	3.3	設問12	23.3	33.3	16.7	13.3	13.3	0.0
設問5	13.3	40.0	23.3	10.0	13.3	0.0	設問13	16.7	40.0	13.3	20.0	6.7	3.3
設問6	10.0	46.7	30.0	13.3	0.0	0.0	設問14	16.7	30.0	36.7	13.3	3.3	0.0
設問7	13.3	36.7	43.3	6.7	0.0	0.0	設問15	26.7	33.3	20.0	16.7	3.3	0.0
設問8	20.0	43.3	36.7	0.0	0.0	0.0	設問16	16.7	33.3	23.3	20.0	6.7	0.0

講義名：生化学Ⅰ（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	44.8	34.5	13.8	0.0	0.0	6.9	設問9	10.3	31.0	41.4	13.8	3.4	0.0
設問2	20.7	31.0	31.0	17.2	0.0	0.0	設問10	13.8	24.1	31.0	27.6	3.4	0.0
設問3	24.3	27.6	41.4	6.9	0.0	0.0	設問11	6.9	27.6	34.5	24.1	3.4	3.4
設問4	41.4	24.1	34.5	0.0	0.0	0.0	設問12	20.7	17.2	24.1	27.6	3.4	6.9
設問5	3.4	24.1	24.1	41.4	3.4	3.4	設問13	10.3	31.0	37.9	10.3	3.4	6.9
設問6	6.9	34.5	27.6	24.1	6.9	0.0	設問14	13.8	24.1	31.0	17.2	6.9	6.9
設問7	6.9	31.0	58.6	3.4	0.0	0.0	設問15	31.0	20.7	27.6	13.8	0.0	6.9
設問8	22.6	27.6	41.4	3.4	0.0	0.0	設問16	10.3	20.7	31.0	20.7	10.3	6.9

講義名：生化学Ⅱ（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	54.2	33.3	8.3	0.0	0.0	4.2	設問9	8.3	54.2	25.0	4.2	4.2	4.2
設問2	25.0	25.0	37.5	8.3	4.2	0.0	設問10	8.3	58.3	12.5	12.5	4.2	4.2
設問3	29.2	33.3	37.5	0.0	0.0	0.0	設問11	16.7	62.5	16.7	4.2	0.0	0.0
設問4	41.7	41.7	16.7	0.0	0.0	0.0	設問12	25.0	25.0	4.2	0.0	0.0	45.8
設問5	37.5	50.0	8.3	0.0	0.0	4.2	設問13	29.2	25.0	0.0	0.0	0.0	45.8
設問6	37.5	58.3	4.2	0.0	0.0	0.0	設問14	29.2	16.7	8.3	0.0	0.0	45.8
設問7	29.2	58.3	12.5	0.0	0.0	0.0	設問15	29.2	20.8	0.0	4.2	0.0	45.8
設問8	32.3	58.3	4.2	0.0	4.2	0.0	設問16	25.0	12.5	8.3	4.2	4.2	45.8

講義名：動物遺伝学（専門教育科目、後期集中開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	87.1	6.5	3.2	0.0	0.0	3.2	設問 9	16.3	51.6	29.0	0.0	0.0	3.2
設問 2	3.2	6.5	35.5	9.7	45.2	0.0	設問 10	32.3	51.6	16.1	0.0	0.0	0.0
設問 3	0.0	3.2	67.7	29.0	0.0	0.0	設問 11	22.6	51.6	9.7	16.1	0.0	0.0
設問 4	3.2	6.5	83.9	6.5	0.0	0.0	設問 12	58.1	29.0	12.9	0.0	0.0	0.0
設問 5	48.4	41.9	5.5	3.2	0.0	0.0	設問 13	58.1	25.8	12.9	3.2	0.0	0.0
設問 6	35.5	35.5	16.1	12.9	0.0	0.0	設問 14	35.5	29.0	22.6	12.9	0.0	0.0
設問 7	35.5	29.0	35.5	0.0	0.0	0.0	設問 15	41.9	41.9	16.1	0.0	0.0	0.0
設問 8	32.3	38.7	25.8	3.2	0.0	0.0	設問 16	22.6	32.3	25.8	9.7	9.7	0.0

講義名：免疫学Ⅰ（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	55.2	34.5	6.9	0.0	0.0	3.4	設問 9	13.8	31.0	41.4	10.3	3.4	0.0
設問 2	13.8	31.0	44.8	10.3	0.0	0.0	設問 10	17.2	48.3	17.2	13.8	3.4	0.0
設問 3	3.4	64.5	62.1	0.0	0.0	0.0	設問 11	24.1	48.3	17.2	10.3	0.0	0.0
設問 4	24.1	34.5	41.4	0.0	0.0	0.0	設問 12	31.0	24.1	17.2	0.0	0.0	27.6
設問 5	20.7	51.2	17.2	10.3	0.0	0.0	設問 13	31.0	34.5	3.4	3.4	0.0	27.6
設問 6	20.7	62.1	3.4	13.8	0.0	0.0	設問 14	17.2	44.8	6.9	3.4	0.0	27.6
設問 7	31.0	27.6	41.4	0.0	0.0	0.0	設問 15	24.3	37.9	6.9	3.4	0.0	27.6
設問 8	34.5	48.3	17.2	0.0	0.0	0.0	設問 16	17.2	34.5	13.8	0.0	6.9	27.6

講義名：免疫学Ⅱ（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	82.8	13.8	0.0	0.0	0.0	3.4	設問 9	13.8	44.8	24.1	3.4	3.4	10.3
設問 2	17.2	31.0	31.0	10.3	10.3	0.0	設問 10	17.2	55.2	20.7	3.4	3.4	0.0
設問 3	17.2	44.8	37.9	0.0	0.0	0.0	設問 11	34.5	51.7	10.3	3.4	0.0	0.0
設問 4	6.9	37.9	55.2	0.0	0.0	0.0	設問 12	58.6	20.7	6.9	3.4	0.0	10.3
設問 5	44.8	37.9	10.3	3.4	3.4	0.0	設問 13	51.7	24.1	10.3	3.4	0.0	10.3
設問 6	48.3	48.3	3.4	0.0	0.0	0.0	設問 14	55.2	24.1	10.3	0.0	0.0	10.3
設問 7	24.1	55.2	20.7	0.0	0.0	0.0	設問 15	65.5	17.2	6.9	0.0	0.0	10.3
設問 8	44.8	37.9	17.2	0.0	0.0	0.0	設問 16	34.5	31.0	10.3	6.9	6.9	10.3

講義名：獣医微生物学Ⅰ（専門教育科目、後期開講）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	65.4	19.2	7.7	0.0	0.0	7.7	設問 7	19.2	42.3	38.5	0.0	0.0	0.0
設問 2	7.7	19.2	46.2	11.5	15.4	0.0	設問 8	50.0	34.6	15.4	0.0	0.0	0.0
設問 3	3.8	23.1	73.1	0.0	0.0	0.0	設問 9	11.5	46.2	38.5	0.0	3.8	0.0
設問 4	15.4	23.1	61.5	0.0	0.0	0.0	設問 10	7.7	69.2	19.2	0.0	3.8	0.0
設問 5	26.9	61.5	11.5	0.0	0.0	0.0	設問 11	19.2	65.4	11.5	3.8	0.0	0.0
設問 6	23.1	61.5	15.4	0.0	0.0	0.0							

講義名：獣医臨床栄養学（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	74.2	16.1	6.5	0.0	0.0	3.2	設問9	9.7	51.6	35.5	3.2	0.0	0.0
設問2	12.9	29.0	41.9	16.1	0.0	0.0	設問10	22.6	64.5	9.7	3.2	0.0	0.0
設問3	0.0	3.2	93.5	3.2	0.0	0.0	設問11	22.6	48.4	19.4	9.7	0.0	0.0
設問4	16.1	22.6	61.3	0.0	0.0	0.0	設問12	35.5	41.0	3.2	19.4	0.0	0.0
設問5	22.6	48.4	22.6	6.5	0.0	0.0	設問13	29.0	25.8	19.4	22.6	3.2	0.0
設問6	19.4	38.7	29.0	12.3	0.0	0.0	設問14	22.6	41.0	29.0	6.5	0.0	0.0
設問7	22.6	32.3	41.9	3.2	0.0	0.0	設問15	29.0	38.7	25.8	6.5	0.0	0.0
設問8	32.3	35.5	32.3	0.0	0.0	0.0	設問16	12.9	29.0	29.0	19.4	9.7	0.0

4. FD 講演会

「共同学部授業と評価 FD — 共同獣医学部授業実施における注意点」 教務委員長 三好宣彰 先生
 「双方向遠隔授業システムの現状」 FD 委員 白石光也 先生

日時：平成25年12月25日（水）12：30～13：30

場所：農・獣医共通棟302講義室（301および303とも双方向を接続）

共同獣医学部での講義・実習の実施と評価において最も重要なことは、両大学で同一のシラバスに基づいた教育体制を取っており、同一の評価が求められることにある。そこで、「授業の実施について」は（1）資料の配付、（2）出席、（3）授業の実施、（4）システムの不具合、「試験ならびに評価方法について」は（1）遠隔講義で単一大学が配信している場合、（2）個別実施の場合、（3）追試験、再試験、（4）進級要件、それぞれについての注意点が三好教務委員長から説明された。続いて、双方向遠隔授業システムの現状の説明があった。特に、（1）3教室同時接続の方法、（2）集音マイクと音声コントローラー、（3）ディスプレイ用ポインター、（4）Web File Service（学術情報基盤センター）、（5）キーパッドシステム、について白石 FD 委員よりそれぞれの説明がなされた。併せて、参加教員の質疑応答が実施された。

共同獣医学部では今後遠隔授業システムを用いたよりよい授業の提供を目指す必要があり、そのために有意義な講習会となった。



第2節 全学FD活動への参加

1. 鹿児島大学FD委員会への出席

平成25年度 第1回鹿児島大学FD委員会

日時：平成25年4月24日（木） 14：30

場所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

- 議題
1. 平成25年度FD委員会活動計画について
 2. 平成25年度FD活動計画の立案について

報告事項 1. 平成24年度FD経費執行状況報告について

平成25年度 第2回鹿児島大学FD委員会

日時：平成25年5月29日（金） 14：30

場所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

- 議題
1. 平成25年度FD活動計画・経費要求について

報告事項

1. 平成25年度FD委員会ワーキンググループについて
2. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2012について
3. 平成25年度FD・SD関連フォーラム、セミナー等の情報について

平成25年度 第3回鹿児島大学FD委員会

日時：平成25年6月26日（水） 15：30

場所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

- 議題
1. 新任教員FD研修会の開催について

報告事項 1. 各WGの検討内容について

平成25年度 第4回鹿児島大学FD委員会

日時：平成25年7月31日（水） 14：30

場所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

- 議題
1. 新任教員FD研修会の開催について（継続審議）
 2. FD・SD合同フォーラムの開催について

報告事項

1. 各WGの検討内容について
2. Q-conference2013ポスターセッション発表の募集について

平成25年度 第5回鹿児島大学FD委員会

日時：平成25年9月27日（金） 9：00

場所：稲盛アカデミー棟3階 展示学生交流室

- 議 題
1. 学生・教職員ワークショップの開催について
 2. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査報告について
 3. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針（案）について

- 報告事項
1. FD・SD 合同フォーラムの開催について
 2. 新任教員 FD 研修会について
 3. Q-conference2013 ポスターセッション発表について
 4. SPOD フォーラム 2013 について
 5. 鹿児島大学学務系職員研修（第 20 回 Q-place 合同企画）について
 6. 各 WG の検討内容について

平成 25 年度 第 6 回鹿児島大学 FD 委員会

日 時：平成 25 年 10 月 25 日（金） 9：00

場 所：稲盛アカデミー棟 3 階 展示学生交流室

- 議 題
1. 学生・教職員ワークショップの開催について（継続審議）
 2. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査報告について（継続審議）
 3. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針について（継続審議）
 4. FD ガイド第 6 号の作成について

- 報告事項
1. FD・SD 合同フォーラムについて
 2. 平成 24 年度 FD 報告書について
 3. 部局開催の FD 講習会開催について
 4. 各 WG の検討内容について

平成 25 年度 第 7 回鹿児島大学 FD 委員会

日 時：平成 25 年 11 月 22 日（金） 9：00

場 所：稲盛アカデミー棟 3 階 展示学生交流室

- 議 題
1. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針について（継続審議）

- 報告事項
1. Q-conference2013 の参加報告について

平成 25 年度 第 8 回鹿児島大学 FD 委員会

日 時：平成 25 年 12 月 24 日（金） 9：00

場 所：稲盛アカデミー棟 3 階 展示学生交流室

- 議 題
1. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針について（継続審議）

- 報告事項
1. 学生・教職員ワークショップについて
 2. 各 WG の検討内容について
 3. 大学 IR コンソーシアム学生調査について

平成 25 年度 第 9 回鹿児島大学 FD 委員会

日 時：平成 26 年 1 月 31 日（金） 9：00

場 所：稲盛アカデミー棟 3 階 展示学生交流室

議 題 1. 学生支援研修について

- 報告事項
1. 大学 IR コンソーシアム学生調査について
 2. 各 WG の検討内容について
 3. 平成 25 年度文部科学省先導的大学改革推進委託事業
「学修成果の把握と学修成果の評価についての具体的方策に関する調査研究」
アンケートについて
 4. 平成 26 年度「大学教育再生加速プログラム」事業説明会について

平成 25 年度 第 10 回鹿児島大学 FD 委員会

日 時：平成 26 年 2 月 28 日（金） 9：00

場 所：稲盛アカデミー棟 3 階 展示学生交流室

- 議 題
1. FD ガイド第 7 号の作成について
 2. 平成 25 年度 FD 活動報告について
 3. 平成 26 年度 FD 委員会の運営について

- 報告事項
1. FD 関連書籍について
 2. 各 WG の検討内容について
 3. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針について
 4. 大学 IR コンソーシアム学生調査について

平成 25 年度 第 11 回鹿児島大学 FD 委員会

日 時：平成 26 年 3 月 28 日（金） 9：00

場 所：稲盛アカデミー棟 3 階 展示学生交流室

- 議 題
1. 平成 26 年度 FD 委員会の運営について（継続審議）
 2. 平成 26 年度 FD 経費予算要求・配分方法についての基本方針案について

- 報告事項
1. 学生支援研修会について
 2. 平成 26 年度以降の九州地域大学教育改善 FD・SD ネットワークへの加入に関する
意向調査について

2. 平成 25 年度学生・教職員ワークショップへの参加

テーマ：「自主的な学習のできる学生を育成する教育の推進」

日 時：平成 25 年 12 月 17 日（火） 16:10-19:10

場 所：鹿児島大学郡元キャンパス 共通教育棟 2 号館 1 階 212・213 号教室

参加者：佐々木海・柿田周作・半田祥郎（共同獣医学部 2 年）

表記のテーマで学生・教職員ワークショップが行われた。共同獣医学部では平日午後は毎日学生実習で参加はなかなか難しい時間帯での開催であったため、教員の参加はなかったが、学部2年生3名の参加があった。まず、テーマに沿って、共通教育科目「グローバル社会を生きる」「有機化学基礎」における学内の事例報告が行われた。その後、グループに分かれ、

- ・学習すべき内容（指導すべき内容）をいかに指導（学習）するか？
 - ・「市民として行動できる能力」「専門能力」を養う多彩な科目により、自主的な学習のできる機会を提供できるか？
 - ・自主的な学習を推進するための学習環境、学習文化をいかに実現するか？
- というテーマで討議が行われ、最後にグループ毎の討議結果発表がなされた。

3. 平成25年度学生支援研修会への参加

日時：平成26年3月26日（水）14：00～15：40

場所：農・獣医共通棟1階 101 講義室

参加者：

高瀬公三（学部長）、三好宣彰（教務委員長・次年度副担任）、望月雅美（学生生活委員長・次期学部長）、中馬猛久（1年次クラス担任）、三浦直樹（学生生活委員）、藤木 誠（教務委員・次年度クラス担任）、松尾智英（FD委員長）、小澤 真（次年度FD委員）、郡山 茂（教務係長）

本研修会は主に平成26年度新入生の支援に携わる教職員を対象として行われた。例年、共通教育履修指導を含めた講習会であったものを、本年度は目的を学生支援に絞って研修会という形で開催された。前半は、前田学長による本学の学生支援体制についての講演が、また後半は、保健管理センターが行っている学生支援の実体についての講演が行われ、いずれも適切な学生指導を行うために有意義なものであった。

14:00-14:10 開会挨拶 清原 貞夫（FD委員会委員長、教育担当理事）

14:10-15:00 本学の学生支援体制について 前田 芳實（学長）

15:00-15:40 「保健管理センターの学生相談、学生支援」講師：川池 陽一（保健管理センター 准教授）

15:40-15:50 閉会挨拶 飯干 明（教育センター長）

理工学研究科

平成25年度 鹿児島大学大学院理工学研究科

ファカルティ・ディベロップメント委員会報告書
(平成26年5月)

鹿児島大学大学院理工学研究科 ファカルティ・ディベロップメント委員

目次

はじめに	3
第1章 平成25年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動	
1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動	5
1.2 理工学研究科FD委員会	5
第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動	
2.1 理工学研究科FD講演会	7
2.2 海外実習報告	11
2.3 理工学研究科FD講演会・調査等の参加	11
第3章 学生による授業評価	
3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果	13
3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告	13
3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告	14
3.2 博士前期課程の各専攻における授業評価アンケート分析結果	16
3.2.1 機械工学専攻	16
3.2.2 電気電子工学専攻	17
3.2.3 建築学専攻	18
3.2.4 化学生命・化学工学専攻	19
3.2.5 海洋土木工学専攻	20
3.2.6 情報生体システム工学専攻	21
3.2.7 数理情報科学専攻	23
3.2.8 物理・宇宙専攻	24
3.2.9 生命化学専攻	26
3.2.10 地球環境科学専攻	27
3.3 授業計画改善書の活用	28
第4章 学生の研究活動と教育成果	30
第5章 今後の理工学研究科FD活動への期待	32
参考資料-1 平成25年度理工学研究科FD委員会議事要旨	
参考資料-2 授業評価アンケート質問様式(平成25年)	
参考資料-3 授業評価アンケート質問回答用紙	
参考資料-4 授業計画改善書の様式	

平成25年度 鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会報告

はじめに

理工学研究科のFD委員会は、大学院設置基準の第14条の3(教育内容等の改善のための組織的な研修等)で「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」とされていることに基づき、昨年度に引き続いて以下のような活動を行った。

理工学研究科の教員は研究科と合わせて理学部と工学部を兼担して教育・研究に当たっているが、学部とは異なり、研究科におけるFD活動では、

- (1) どのような人材を入学させるのか
- (2) どのような教育プログラム(カリキュラム)を組むのか
- (3) どのような学位を出すのか

を明確にし、継続した点検の実施に基づいて修了生の質と学位水準を保証している。

中央教育審議会の答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」(2011)では、明確な学位プログラムとしての大学院教育を確立し、学生の質を保証する体系の整備が重要なものとして指摘されている。学生の質を保証する組織的な教育・研究指導體制の確立には、FD活動に関連する項目、FDの充実、ピアレビューの実施による教員の教育・研究指導能力の向上、教員の教育業績や能力の評価の充実、人事や処遇への反映などの推進、教員の教育研究活動の評価に関する指標の開発推進がある。さらに、「教員の教育・研究指導能力の向上」に関して、答申の中では、「体系的な大学院教育を充実させるためには、大学院教育に携わる教員の教育・研究指導能力の向上が不可欠である。FDや教育指導評価に関する取り組みは、学士課程段階が中心であるため、研究科や専攻の教員がお互いに教育について活発に議論するとともに、諸外国の大学院の教育・研究指導の経験を活用するなど大学院教育に関する組織的な研修体制を充実させる必要がある」としている。これまで大学院でのFD活動は、重要な項目として見なされてきたとは言い難い。しかし、FD活動が学生の質を保証する組織的な教育・研究指導體制の一環であるとする、現在理工学研究科で行っているFD活動を学部のようにアドミッション、カリキュラム、ディプロマーの3ポリシーの明確化が必要になるであろう。

理工学研究科では、アドミッション・ポリシーで求める学生像を示しており、入学後は学生の能力の向上を図ると共に各専攻の掲げる目標達成を目指した教育・研究指導に取り組んでいる。理工学研究科のFD委員会では、平成25年度の活動計画として、昨年度に続いて(1)学生による授業評価とそれに基づいた授業改善、(2)FD講演会の実施(3)学生の研究活動と教育成果の点検を実施した。最後にFD報告書の作成によるPDCAの現状分析と総括をまとめた。

なお、本報告書は、学部FD委員を兼務する理工学研究科FD委員各位のとりまとめや事務職員と事務支援室職員によるアンケート調査の整理等の協力により完成したことを明記し、深く感謝する。

平成25年度鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 本間俊雄(全学FD委員会委員)

平成25年度 鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	本間 俊雄	(全学FD委員会委員 (理工学研究科副研究科長))	H25. 4. 1～H27. 3. 31)
委員	上谷 俊平	(機械工学専攻,	H25. 4. 1～H27. 3. 31)
委員	川越 明史	(電気電子工学専攻,	H24. 4. 1～H26. 3. 31)
委員	黒川 善幸	(建築学専攻,	H25. 4. 1～H27. 3. 31)
委員	高梨 啓和	(化学生命・化学工学専攻,	H25. 4. 1～H26. 3. 31)
委員	三隅 浩二	(海洋土木工学専攻,	H25. 4. 1～H27. 3. 31)
委員	加藤 龍蔵	(情報生体システム工学専攻,	H24. 4. 1～H26. 3. 31)
委員	青木 敏	(数理情報科学専攻,	H25. 4. 1～H26. 3. 31)
委員	古川 一男	(物理・宇宙専攻,	H24. 4. 1～H26. 3. 31)
委員	塔筋 弘章	(生命化学専攻,	H25. 4. 1～H26. 3. 31)
委員	中尾 茂	(地球環境科学専攻,	H25. 4. 1～H26. 3. 31)
委員	山本 高師	(理工学研究科事務部長)	

第1章 平成25年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動

1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動

理工学研究科のFD委員会では、昨年度に引き続き鹿児島大学の中期目標と25年度計画を参考にしてFD活動を行った。大学院教育におけるFD活動は、「教員が授業及び研究指導等の内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされている。平成19年度から大学院設置基準の中で義務化が規定されている。学部のFD活動に比べて大学院に関するFD活動は活発に議論されてはいないと思われる。FD活動は大学院の学生数が増大したことにより多様な能力を有する学生の教育・研究指導に対応したような大学院教育の展開も必要になってきている。これまでは各教員の能力に大きく依存してきた大学院の教育・研究を研究科として点検して改善していくことが必要になる。FD活動に関しても、大学院教育の共通認識として教育・研究指導の点検と行うことで、理工学研究科の目標の実現を図ることができると考える。

大学院教育の共通の認識として、

- (1) どのような人材を入学させるのか
- (2) どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか
- (3) どのような学位を出すのか

を明確にすると共に、継続して点検していくことが求められている。

全学のFD委員会では特別に大学院のFD活動についての議論はなされていないが、鹿児島大学の中期計画の中の平成25年度の実施計画について大学院のFDに関連が深い項目を見てみると、表1.1のような項目が上げられる。

表1.1 鹿児島大学の中期目標と25年度計画

中期目標	中期計画
知識社会を担う高度専門職業人や研究者等の育成をめざした大学院教育の質を向上する。	大学院教育カリキュラムを整備・拡充するなど、大学院課程における学位の質を保証する方法を確立する
グローバル化推進に対応した、国際的に活躍できる人材育成	幅広い国際的視野を育成する実践的な教育プログラムを実施する

前述した項目は、大学院における修了生の質の保証と学位水準と密接に関連しており、理工学研究科のFD委員会も含めて全体で取り組む問題であると考えられる。理工学研究科のFD委員会ではこのような観点から、昨年度に続いて平成25年度の活動を行った。

1.2 理工学研究科FD委員会

理工学研究科は平成21年度から部局化に伴って新しい理工学研究科としてスタートした。前期課程は工学系が6専攻、理学系が4専攻の10専攻の機械工学専攻、電気電子工学専攻、建築学専攻、化学生命・化学工学専攻、海洋土木工学専攻、情報生体システム工学専攻、数理情報科学専攻、物理・宇宙専攻、生命化学専攻、地球環境科学専攻の各委員から構成されている。

本年度は理工学研究科のFD委員会を2回行った。委員会の議事録は参考資料-1に示している。ここでは、委員会の活動について述べることにする。

第1回（5月14日）の委員会では以下のような議論を行った。

- (1) 平成24年度研究科FD活動報告について
- (2) 平成25年度FD活動計画について

1. FD講演会の実施
 2. 海外実習報告
 3. 学生による事業評価
 4. 学生の研究活動と教育成果
- (3) 委員の活動分担について
1. FD講演会の実施：青木委員、加藤委員
 2. 海外実習報告：古川委員、黒川委員
 3. 学生による授業評価：塔筋委員、上谷委員
 4. 学生の研究活動と教育成果：中尾委員、高梨委員
- (4) 授業改善報告書のまとめについて

全学FD委員会における平成25年度予算配分の方針に基づき、FD講演会等その他の企画に係る経費要求は、資料に基づき平成25年度FD活動計画・経費要求書(案)により、学生による授業アンケートとFD講演会企画及び国際基準教育に係る教育体制調査の予算要求をすることが了承された。国際基準教育に係る教育体制調査は、FD講演会等の参加の項目に当てはめて申請することとした。

第2回（5月14日）の委員会では以下のような議論を行った。

- (1) 平成25年度研究科FD活動報告書の作成について

はじめに：本間、第1章 平成25年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動：本間
第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動：青木、加藤、古川、黒川
第3章 学生による授業評価：各専攻担当委員
第4章 学生の研究活動と教育成果：中尾、高梨
第5章 今後の理工学研究科FD活動への期待：本間
参考資料：研究科総務係

- (2) その他

アンケートのWeb上での実施検討が提案されたが、回収率低下の問題があり、今後の検討課題となった。

第2章 理工学研究科 FD 講演会と FD 活動

2.1 理工学研究科 FD 講演会（加藤龍蔵，青木敏）

平成 25 年度の理工学研究科 FD 講演会は、工学部および理学部の FD 委員会と理工学研究科 FD 委員会との共同主催として企画され、平成 25 年 11 月 6 日（水）13 時 30 分から 15 時 00 分まで、稲盛会館ホールで開催された。広島大学工学研究院の迫原修治 教授に講師を依頼し、「広島大学の到達目標型教育プログラム (HiPROSPECTS®)」という演題で講演が行われた。講演会への参加者は、教員 72 名（工系：58 名，理系：12 名，その他：2 名）と事務・技術職員 23 名の合計 95 名で、昨年度の 3 倍以上の参加者があった。

講演に先立ち、近藤研究科長から開会挨拶があり、今回の講演会開催の趣旨として、FD が、授業やカリキュラム改革にとどまらず、大学改革において重要であることから、広島大学において先進的な教育システムである「広島大学の到達目標型教育プログラム (HiPROSPECTS®)」の取組みとその課題について、策定と導入に尽力された迫原修治教授から講演をいただき、本学理工学研究科の教育システム改革の参考にして頂きたいとの説明があった。引き続き本間 FD 委員長から講演者の経歴および所属等の紹介の後、講演が始まった。講演の概要を以下に示す。

広島大学では、平成 15 年に、当時の牟田学長から「世界トップレベルの特色ある総合研究大学」という到達目標に向かっての行動計画として「長期ビジョン」が示された。そこでは、長期的視野に立った教育の質的向上を図るために、第一段階として学士課程教育の充実が挙げられ、その方策として教育の到達点に対する明確な目標を設定した教育プログラムを整備することが述べられた。また、平成 16 年の国立大学法人化における中期目標でもこのことが盛り込まれ、平成 18 年度から到達目標型教育プログラムが実施された。この教育システムの特徴は、到達度を定量化することによって履修学生全体の到達度から教育プログラムそのものの見直しができることであり、これによって質の高い卒業生を輩出することを目指すものであり、この教育システムは実施から 7 年が経過しました。

HiPROSPECTS®は、学士号を取得するための「主専攻プログラム」と他の主専攻プログラムの内容を学習できるよう編成された「副専攻プログラム」と特定のテーマに沿って学んだり、資格を取得したりする「特定プログラム」の 3 つから構成されている。主専攻プログラムは、67 のプログラムがあり、従来の学科の教育プログラムに相当し、全



図 2.2 FD 講演会の様子

学生が履修する。一方、副専攻プログラムは、43プログラムあり、特定プログラムは、17プログラムあるが、これら2つは、希望者のみの履修である。副専攻プログラムは、当初30単位の履修が必要であったが、履修者があまり多くはないことから、その分野で最低限必要な内容を厳選し、16～20単位に減らされている。特定プログラムは、文系では履修する学生がいる。

各プログラムは、プログラムごとに定められた到達目標に対する到達度を「知識・理解」、「知的能力・技能」、「実践的能力・技能」、「総合的能力・技能」の4つのカテゴリーに分類した評価項目ごとに評価する。一つの評価項目には複数の授業が含まれており、授業担当教員の評価からチューターである教員が評価項目ごとに「非常にすぐれている (Best)」、「優れている (Modal)」、「基準に達している (Threshold)」の3つの評価基準で評価し、学生はその結果をプログラム到達度評価として確認できるシステムである。「知識・理解」の評価項目では、授業の成績により評価するが、その他の3つのカテゴリーでは、レポートや面談により評価する。ただし、工学部では、すでに5つのプログラムがJABEEで認定されており、基本的なところではHiPROSPECTS[®]と似ているところが多く、JABEEでの評価方法を使用することが認められており、2つの教育システムの整合性をとっている。

課題としては、教育システムの検証が自己評価で終わっているため、外部評価を受ける仕組みを検討中である。また、カテゴリーを「知識・理解」、「能力・技能」、「総合的能力」の3つに再編することが決まっている。達成度の評価方法は、レポート・面談による評価だけでなく、授業の成績を到達度の評価として導入する方法を検討している。

講演後に、以下のような質問があり、講師の方から回答していただきました。

質問1： 副専攻プログラムの履修者数について

回答1： 文系では履修者がいるが、理工系では、ほとんど履修者はいない。また、工学部でも履修を積極的に推奨しているわけではない。

質問2： 副専攻プログラムの履修の動機づけについて

回答2： 工学部では、主専攻プログラムと関連のある副専攻プログラムを履修するように促している。

質問3： 同じ評価項目において、教員により評価のバラつきが生じた場合の対応について

回答3： 実際には、科目が限られるためバラつきは大きな問題となっていない。

質問4： チューターについて

回答4： チューターは、大学院生ではなく、教員が担当しており、勉強会などを開催している。工学部では、例えば40名程度の学生を1名のチューターが担当し、4年生になり卒業研究が始まると、卒業研究の指導教員が交代でチューターとなる。

質問4： 今後の総合的能力の評価方法について

回答4： 従来のレポートや面談での評価方法だけでなく、現在検討中の成績をベースとした評価方法を導入する。結果的には、成績をベースとした評価方法に移行することが考えられる。

講師の迫原教授のご厚意により、講演会資料を図2.3、図2.4に掲載します。なお、広島大学の到達目標型教育プログラム (HiPROSPECTS[®]) の詳細については、以下のURLのWebページで紹介されています。(<http://www.hiroshima-u.ac.jp/prog/hiprospects/>)



図 2.3 講演会資料 (1~8 ページ)

2.2 海外実習報告

理工学研究科 FD 講演会（黒川善幸，古川一男）

鹿児島大学理工学研究科（工学系）では、学生の海外研修を支援するために、「岩崎国際学術交流基金」が設けられている。また、理工学研究科（理学系）を主たる実施母体として実施されている、独立行政法人日本学術振興会（JSPS）によるインター・ナショナル・トレーニングプログラム（ITP）大学院生の海外研修も継続して実施されている。これらの基金等の助成によって実施された研修の内容を以下に紹介する。

国立カルナタカ工科大学（インド）での研修

平成 25 年 11 月 10 日～16 日に、理工学研究科・海洋土木工学科専攻の博士前期学生 3 名（武若耕司教授）が学術交流機関であるインド・バンガロールの国立カルナタカ工科大学を訪問し、学生生活に関する意見交換及びワークショップ、研究活動の紹介を行った。

2.3 理工学研究科 FD 講演会・調査等の参加（木方十根）

大学院における国際標準の建築教育体制を構築し、実施を行っている事例について調査を実施し、当該プログラム責任者からの説明と資料解説、現地説明を受けたので、以下に報告する。

○調査概要

日時：平成 26 年 3 月 24 日 午前 9 時～12 時

場所：明治大学理工学研究科建築学専攻国際プログラムプロフェッショナルコース

先方説明担当者：同上 教授 小林正美氏

理工学研究科参加者：木方十根(建築学専攻教授)，鱈坂徹(建築学専攻教授)

○研修内容

・明治大学理工学研究科建築学専攻国際プログラムプロフェッショナルコース（I-AUD）の組織概要、その設立背景と経緯について

・I-AUD のアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー

・国際プログラム運営上の工夫と課題点について

・上記の説明に対する質疑応答

研修の目的

鹿児島大学理工学研究科では、大学改革実行プラン（平成 24 年 6 月）を受けて、目下「理工学研究科改革プラン（案）」を検討している。博士前期課程については「グローバル人材育成の体制強化」を改革の基本方針として掲げている。建築学専攻においても国際標準を満足する大学院教育体制を整えることは、修了生のキャリア形成上、またより具体的には国際資格の問題と直結した課題となっている。そこで本研修では、いち早く国際標準の建築教育を行う博士前期課程相当の特別コースを設置し、平成 25 年度より授業を開始している明治大学大学院理工学研究科において、国際標準に即した教育体制の構築、各種のポリシーの設置と運営、プログラム運営上の工夫と課題点について講義を受け、質疑応答によって理解を深め、鹿児島大学建築学専攻における今後の大学院改革に向け有益な情報を収集することを目的とした。

研修の成果

今回の研修において、明治大学大学院建築学専攻国際プログラムプロフェッショナルコースの設立と運営では、下記の点に工夫と課題があることが分かった。

・既存プログラムとの関係性：明治大学では、従来の建築学専攻の教育プログラムは従来通り保

持し、国際プログラムは特別枠として別途設置している。そこへは明治大学出身者のみならず他大学からの受験生や留学生を積極的に受け入れるようなアドミッション・ポリシーを設け、定員の確保を図るとともに学生間交流の相乗効果も狙っていて、初年度はほぼ所期のと通りの学生受け入れを実現した。

- ・ 国外の学術交流協定校と連携した演習課題を柔軟に運用し、国外教員の教育能力も活かす形で教育を行い、国際プログラムの名にふさわしい教育を実践している。こうした取り組みは鹿児島大学の建築学専攻でも試行しており、今後の課題としてはより多くの教員が積極的にこうした事業に参画し、英語でのディスカッションを行うなどのファカルティ・ディベロップメントを行うことが重要であると考えられる。

- ・ 上記のような工夫とその実現には、教員の国際的人脈が大きく寄与している。このプログラムが立ち上がり始動するまでに数年（3年程度）の準備期間があったことも分かった。大学院改革およびその実現のためのFDには、中長期的な視点に立った取り組みが不可欠であることが分かった。

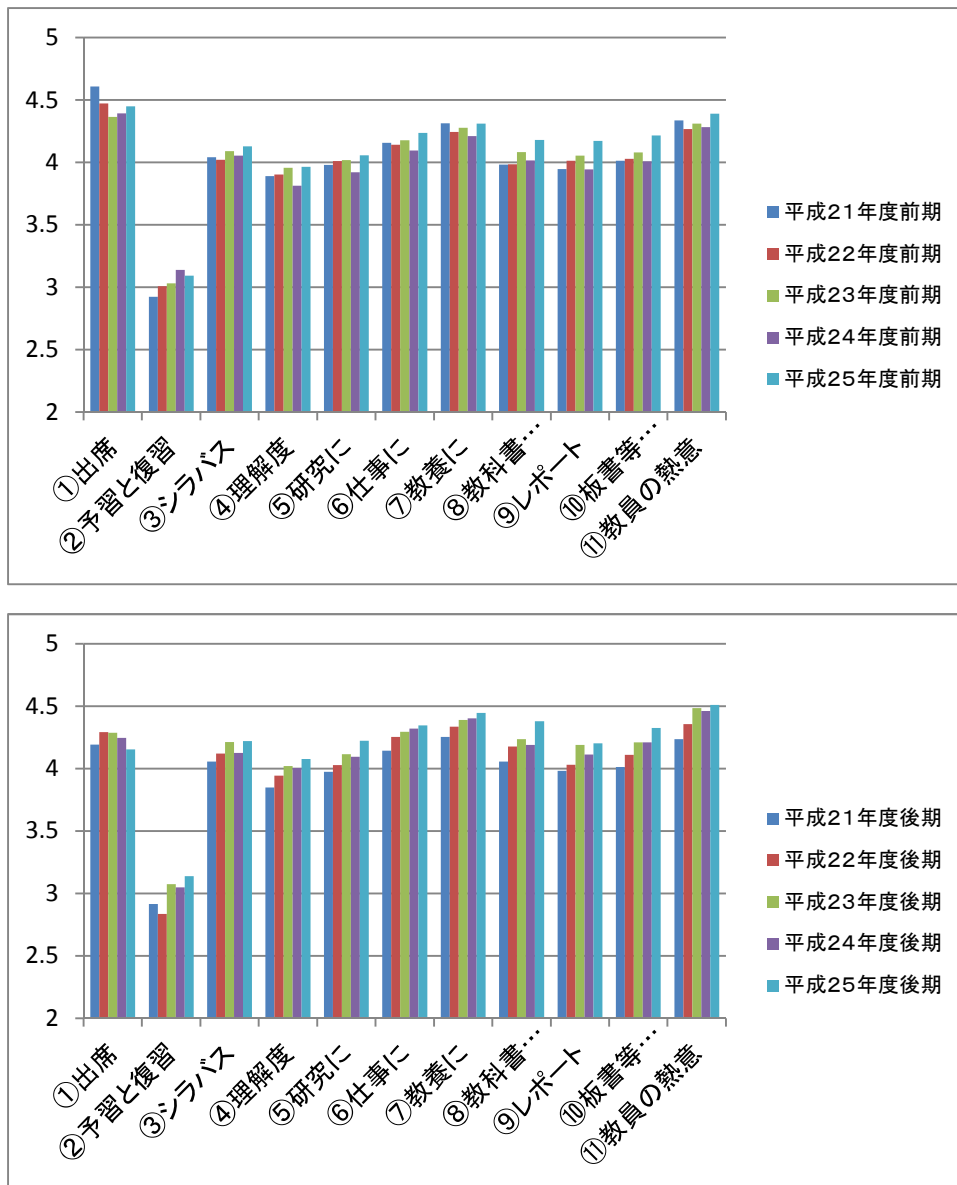


図 3.1.1 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（塔筋弘章）

図 3.1.2 の授業アンケート評価点平均値（理学系）をみると、前期開講の授業については「予習と復習は毎週どれくらいしましたか」の項目を除き、4 前後の高い評価となっている。また、「予習と復習」を含めすべての項目の数値は、5 年間をとおしてみると上昇傾向にあるといえる。各教員の努力によって授業が改善されていることが読み取れる。評価点の平均値が 4 を大幅に超えるようになることは考えにくいので、「予習と復習」以外の項目については十分に高い評価に到達しているものとみなすことができる。

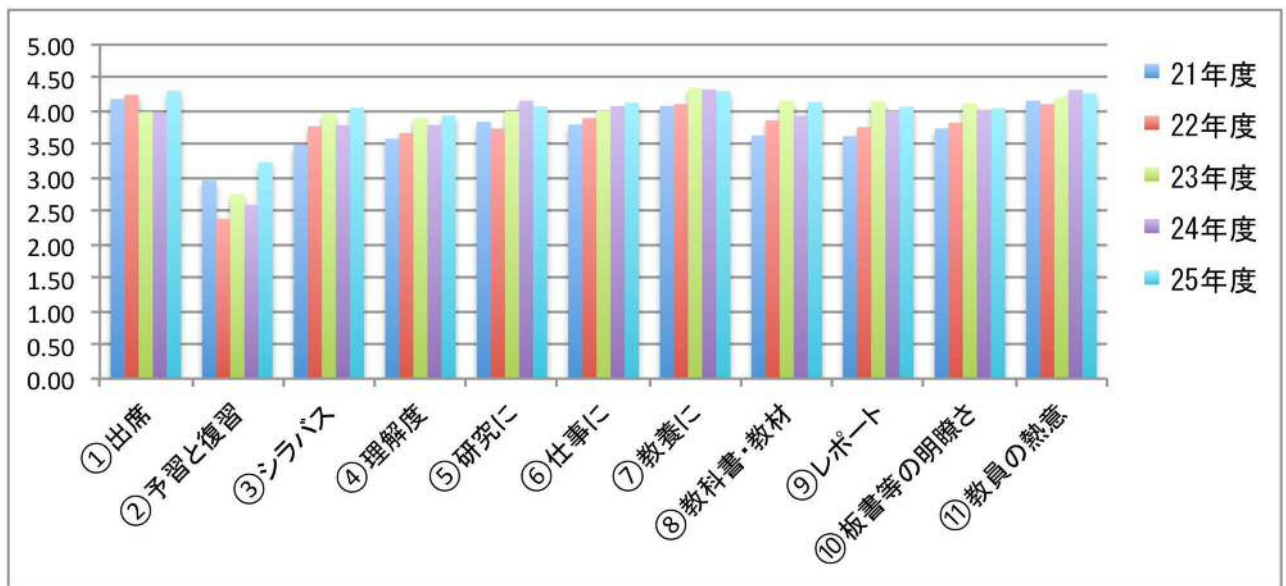


図 3.1.2(1) アンケート評価点平均値の比較 (理学系・前期)

後期開講の授業についても、「予習と復習」の項目を除き、4を超える評価点になっている。前期と同様に5年間をとおしてみると、全体的に評価点が上昇傾向にあり、授業改善の努力が受講生による評価に反映されている。

「予習と復習」の評価点は年度ごとの変化が大きいですが、前期、後期ともに他の項目と比べて一段階低い。これは、23年度の報告書に書いたとおり、多くの教員が大学院生が研究活動に使える時間をなるべく多くとれるように配慮して、予習復習をあまり必要としない形式の授業を行っていることによると思われる。日本の大学院教育における「研究成果重視」の傾向は今後も短期的には変化しそうにない。自習時間を多く要するような授業形態は受講生の負担を急増させる恐れがある。この項目についての改善策は慎重に検討する必要があると思われる。

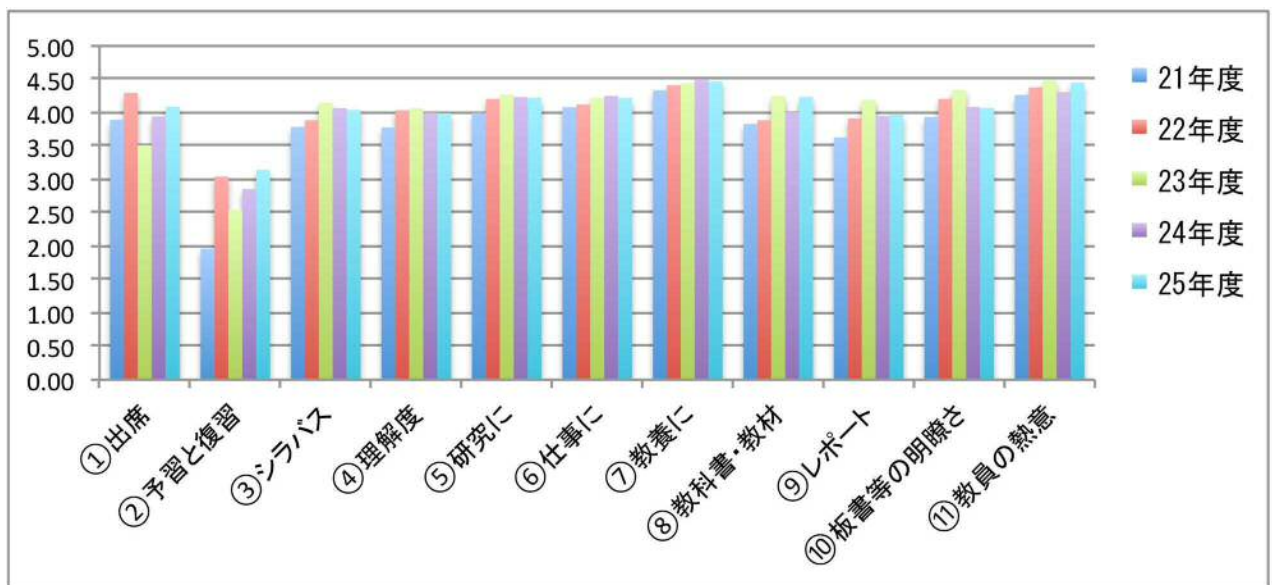


図 3.1.2(2) アンケート評価点平均値の比較 (理学系・後期)

表 3.1.1 理工学研究科 (理学系) 授業評価アンケートの結果 (平成 25 年度)

前期

項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
数理情報科学専攻	4.33	3.72	4.33	4	4.36	4.36	4.58	4.33	4.22	4.39	4.61
物理・宇宙専攻	4.18	2.91	3.73	3.57	3.59	3.66	3.86	3.98	3.86	3.61	3.89
生命化学専攻	4.28	3.46	4.13	4.16	4.31	4.39	4.54	4	3.99	4.09	4.55
地球環境科学専攻	4.45	2.86	4.03	4.03	4.03	4.1	4.24	4.24	4.21	4.1	4.03
理工学研究科(工学系)平均値	4.45	3.09	4.13	3.96	4.06	4.24	4.31	4.18	4.17	4.22	4.39
理工学研究科(理学系)平均値	4.31	3.24	4.06	3.94	4.07	4.13	4.31	4.14	4.07	4.05	4.27
理工学研究科平均値	4.31	3.24	4.06	3.94	4.07	4.13	4.31	4.14	4.07	4.05	4.27

後期

項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
数理情報科学専攻	4.37	3.26	3.79	3.53	3.74	3.84	4.05	3.84	4.05	3.58	4.11
物理・宇宙専攻	3.30	2.05	4.10	4.00	4.30	4.45	4.60	4.50	4.10	4.30	4.55
生命化学専攻	4.21	4.21	4.28	4.30	4.62	4.45	4.62	4.23	3.85	4.36	4.66
地球環境科学専攻	4.48	3.05	4.00	4.14	4.24	4.14	4.62	4.38	3.90	4.05	4.48
理工学研究科(工学系)平均値	4.15	3.14	4.22	4.08	4.22	4.35	4.45	4.38	4.20	4.32	4.51
理工学研究科(理学系)平均値	4.09	3.14	4.04	3.99	4.23	4.22	4.47	4.24	3.98	4.07	4.45
理工学研究科平均値	4.09	3.14	4.04	3.99	4.23	4.22	4.47	4.24	3.98	4.07	4.45

3.2 博士前期課程の各専攻科における授業評価アンケート分析結果

3.2.1 機械工学専攻（上谷俊平）

機械工学専攻の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す。この結果は、主なアンケート項目の評価点について 1 年間に開講された科目で平均した点の過去 10 年間における推移を示している。

平成 19 年度後期から理工学研究科 FD 委員会として新規にアンケートの実施を始めたことによるアンケート項目の変更があった。また、平成 21 年度にはアンケート項目の簡素化と精査が行われた。よって、過去のアンケート項目のうち変更のあった項目については、内容が同じと見なせる最新の項目に対応させて図に載せている。ただし、授業改善への取り組みの効果を、過去の評価点の推移から検討するためにはアンケート項目は変更されていないことが望ましい。以下では、アンケート項目の変更による影響はないものとして考察する。

図より、全体的には右方上がりではあるが、年度を追うごとに横ばいなる傾向が見受けられる。ただ平成 23 年度から平成 25 年度の 3 年間はほとんど横ばいであるもののそれまでの年度に比べて高得点となっている。高い水準を維持していることから、教員による継続的な授業改善への努力の成果が現れていると考えられる。また、学部で行っている授業評価アンケートの評価点と比べて全体的に高得点である。このことは、学部で開講されている授業と比べて、専攻で開講されている授業は専門性が高く、学生が興味をもって授業を受けているためと考えられる。

項目②の「予習と復習」について見ると、年々増加してきたが、平成 22 年度からはほぼ横ばいとなっている。本項目は、各項目の中で 10 年間にもっとも評点の平均値が上昇しており、教員がレポートを積極的に課すことで、学生に授業に関する勉強時間を確保するようになった結果であろう。

項目③の「シラバス」、項目④の「理解度」、項目⑤の「研究に（役立つ）」については、平成 19 年度～平成 20 年度でやや下降しているが、それ以降は上昇して高い点を維持している。年々、学生の学力が下がってきていることから、授業評価アンケートの結果がフィードバックされて、授業改善が継続して行われている結果であると推察できる。今後も継続的な授業評価アンケートの実施と分析が必要であるといえる。項目⑥の「仕事に（役立つ）」と項目⑦の「学力に（役立つ）」

については、役立つと考えている学生が多く、今後ともこの傾向を維持していきたい。項目⑩の「教員の熱意」についても高い点を維持していることが分かる。今後とも、教員だけでなく学生自身も熱意をもって授業を受けることができるように、授業評価アンケートを役立てていくことが重要である。

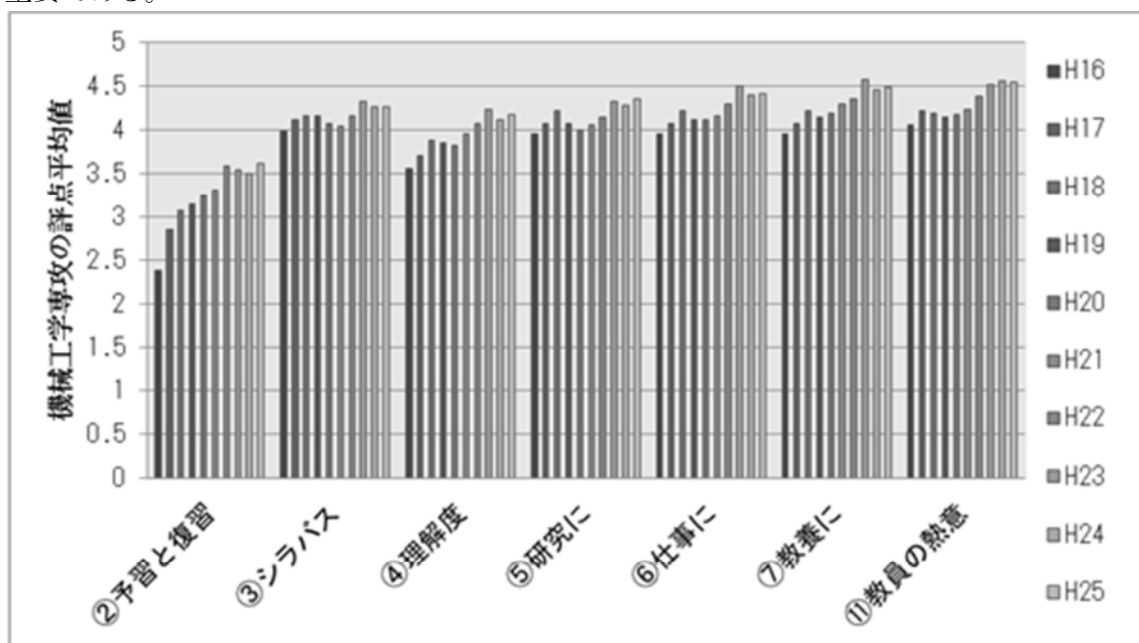


図 3.2.1 機械工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.2 電気電子工学専攻（川越明史）

図 3.2.2(1)、(2) 電気電子工学専攻の過去 7 年分（平成 18 年度から 25 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。ほぼ同じ講義科目で比較できるように、前期と後期をわけている。図 3.2.2(1)が前期を、図 3.2.2(2)が後期を示している。なお、両図において、平成 19 年度前期以前の旧授業評価アンケートについては、現行の授業評価アンケート項目に該当するもののみ記載している。平成 25 年度は全体的に例年よりも高い水準にあった。この結果は、前後期ともに担当教員の演習問題やレポート、発表方法等の改善に向けた継続的な熱意と努力によると考えられる。本年度の授業評価アンケート結果を総体的に見る限り、授業改善は順調に進んでいると考えられるが、さらに講義形式の工夫、演習課題・レポートの質と量の改善などを継続していく必要があると考えられる。

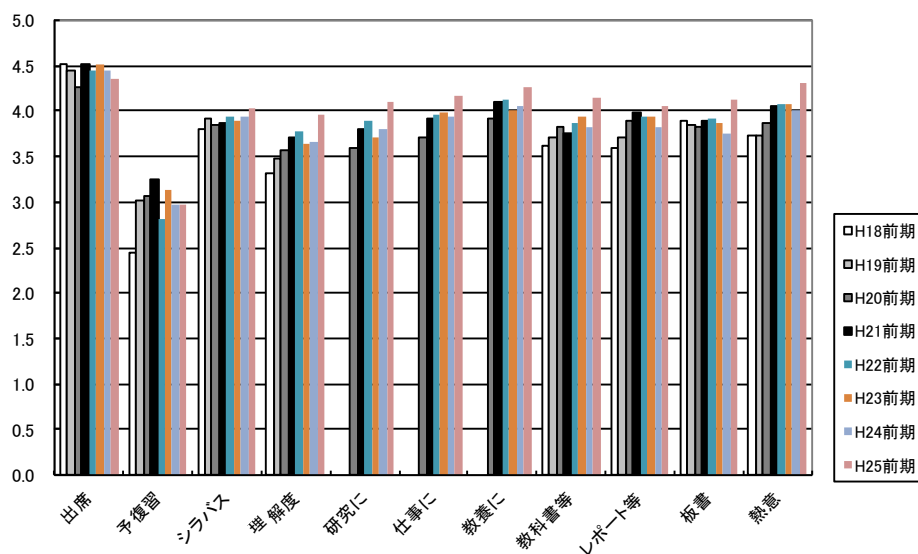


図 3.2.2(1) 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成25年度前期)

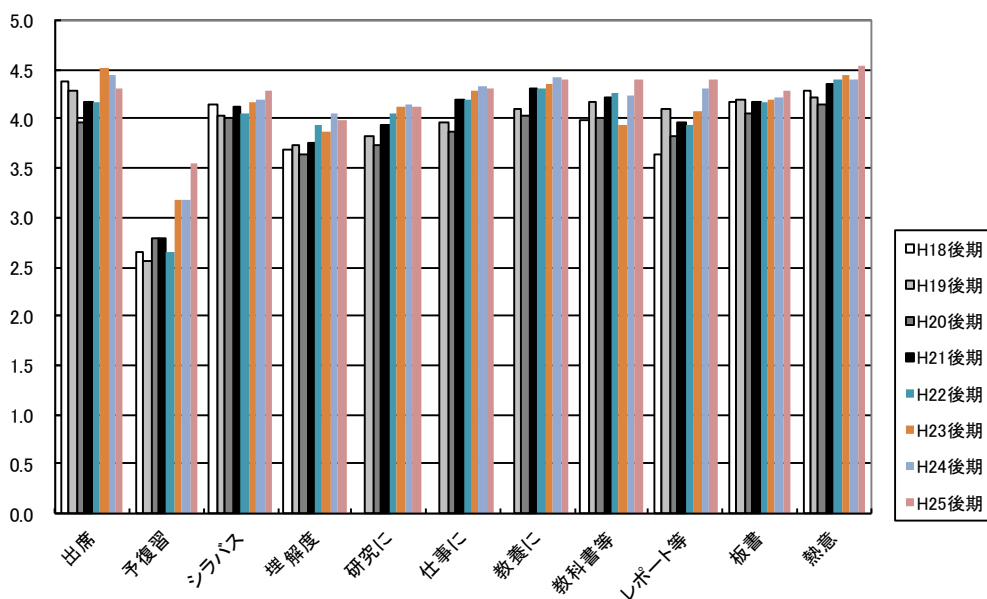


図 3.2.2(2) 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成25年度後期)

3.2.3 建築学専攻 (黒川善幸)

建築学専攻の平成25年度の授業アンケートについて、設問項目の平均を図4に示す。評点が高いのは、項目1の「出席」、項目6の「仕事に」、項目7の「教養に」、項目15の「教員の熱意」である。これは、コースワーク制度の充実と教員の授業に対する準備が整ってきたことによる効果と考えられる。これに対し項目4「理解度」が相対的に低い。専門分野に即した高度なレベルの授業内容を理解することが困難となっていることが考えられる。また項目5の「研究に」もや

や低いが、徐々に改善傾向にある。項目2の「予習と復習」は、相対的に低く、次年度以降の改善が望まれる。

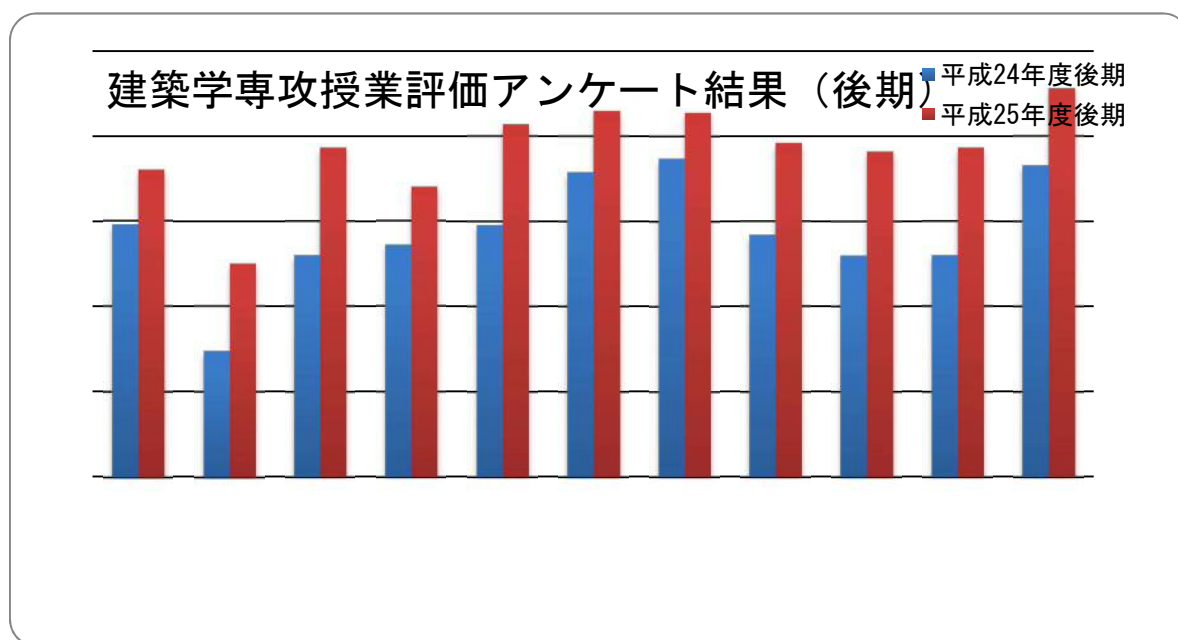
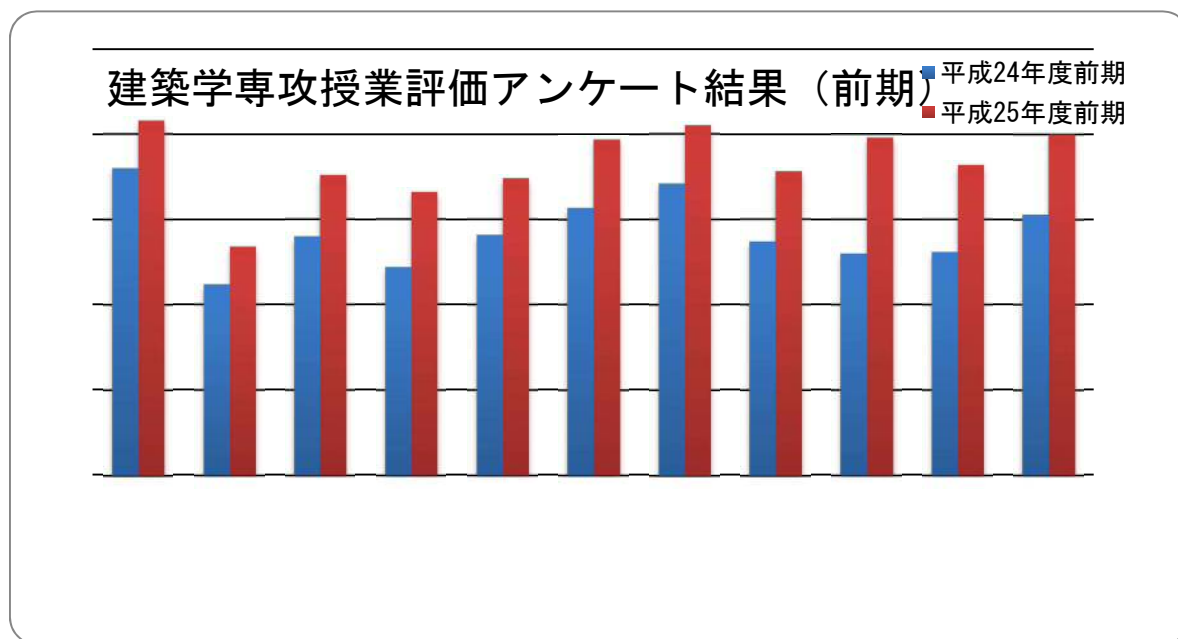
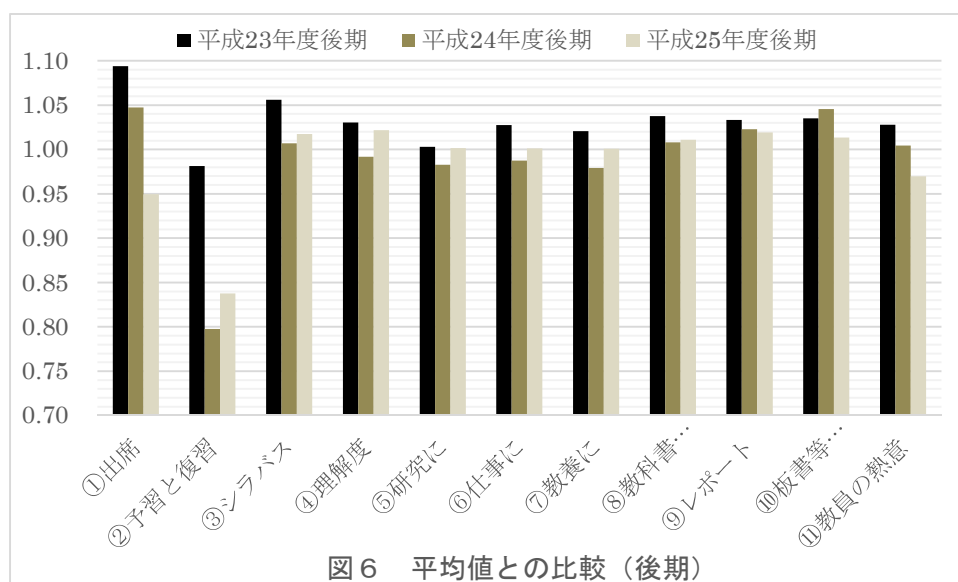
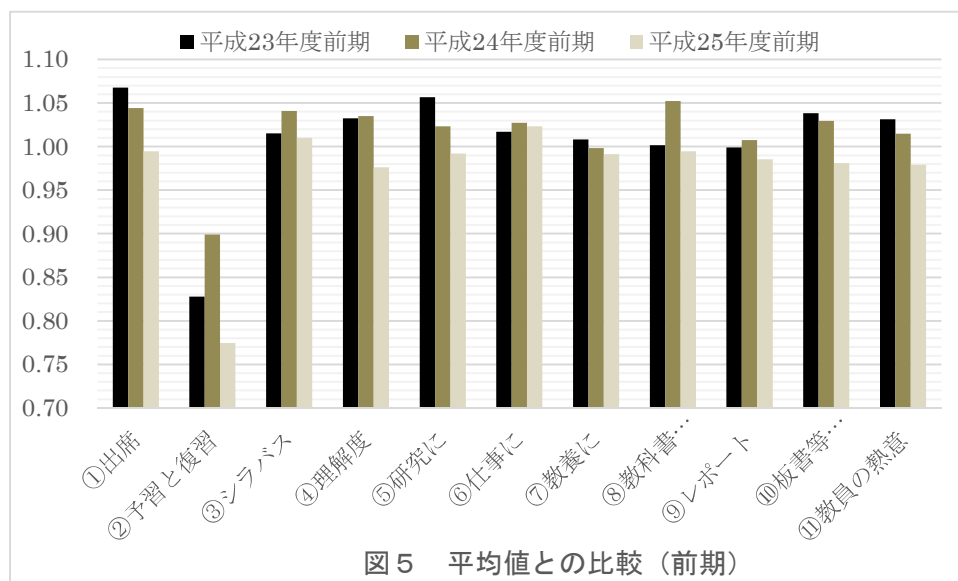


図 3.2.3 建築学専攻の25年度の講義科目の授業アンケートの結果

3.2.4 化学生命・化学工学専攻（高梨啓和）

化学生命・化学工学専攻の平成23～25年度の授業評価結果は、ほとんどの項目が4.0～4.5の高い評価となっており、概ね問題は見あたらない。各項目の経年変化を検討するために、平成22年度を基準として、各年度の値との比を算出した。その結果、図5、6に示すように、項目によってトレンドに差があるものの、大きく変動している項目は見あたらなかった。項目⑤や⑩の評価が下降気味に見えるが、前後期で担当教員が異なる場合が多いこと、項目①の低下が他と比較し

て顕著なことから、教員側ではなく、学生側の因子に起因する可能性がある。これを機に教員側がいっそう努力するとともに、経過を観察する必要がある。



3.2.5 海洋土木工学専攻（三隅浩二）

海洋土木工学専攻における過去5年間の授業アンケートの結果を表3.2.5.1に示す。この結果を見ると、ほぼ全ての項目において4程度ないしはそれ以上の評価が得られており、大学院の講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断される。特に、平成23年度～平成24年度の評価は全般に高くなっているようである。ただし、設問②「予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含まれます）」の評価のみが2.26～3.30となっており、他の設問の評価に比べて極端に低い評価点となっている。平成24年度前期の評価3.3より評点の減少が継続しているので何らかの対策が必要と思われる。

表 3.2.5 海洋土木工学専攻のアンケート結果

	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に
平成 21 年度前期	4.61	3.00	3.99	3.78	4.02	4.33
平成 21 年度後期	4.13	3.00	3.98	3.90	4.13	4.17
平成 22 年度前期	4.51	2.86	4.05	3.97	4.11	4.29
平成 22 年度後期	4.35	2.69	4.08	3.94	4.01	4.24
平成 23 年度前期	3.87	2.69	4.40	4.31	4.38	4.44
平成 23 年度後期	3.89	2.62	4.30	4.14	4.14	4.19
平成 24 年度前期	4.19	3.30	4.13	3.81	3.86	4.07
平成 24 年度後期	4.35	2.80	4.27	4.14	4.18	4.49
平成 25 年度前期	4.33	2.76	4.07	3.89	3.89	4.11
平成 25 年度後期	4.33	2.26	3.96	4.00	3.96	4.26

	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
平成 21 年度前期	4.40	4.13	4.05	4.14	4.44
平成 21 年度後期	4.19	4.06	4.13	4.06	4.40
平成 22 年度前期	4.38	4.10	4.03	4.20	4.43
平成 22 年度後期	4.25	4.31	4.20	4.18	4.39
平成 23 年度前期	4.44	4.31	4.09	4.33	4.60
平成 23 年度後期	4.35	4.32	4.30	4.32	4.68
平成 24 年度前期	4.20	4.00	3.95	4.11	4.43
平成 24 年度後期	4.53	4.45	4.31	4.37	4.65
平成 25 年度前期	4.15	4.06	3.96	4.19	4.39
平成 25 年度後期	4.41	4.52	4.00	4.44	4.56

3.2.6 情報生体システム工学専攻（加藤龍蔵）

平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり、5 年が経過した。情報生体システム工学専攻の FD 授業評価アンケートは平成 21 年度から 25 年度分の 5 年間のデータが収集されていることになる。ここではその 5 年間の経年変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと平成 25 年度の工学系専攻の平均値及び平成 25 年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。

平成 21 年度から質問内容に若干の修正が施されているが、比較対象となった項目は、

- ①出席
- ②予習と復習
- ③シラバス
- ④理解度
- ⑤研究に役に立つか
- ⑥仕事に役に立つか
- ⑦教養になるか
- ⑧教科書・教材は適切か
- ⑨レポート
- ⑩板書等の明瞭さ
- ⑪教員の熱意

の11項目である。

情報生体システム工学専攻の集計結果を前期および後期に分け、図3.2.6(a)及び図3.2.6(b)に示す。

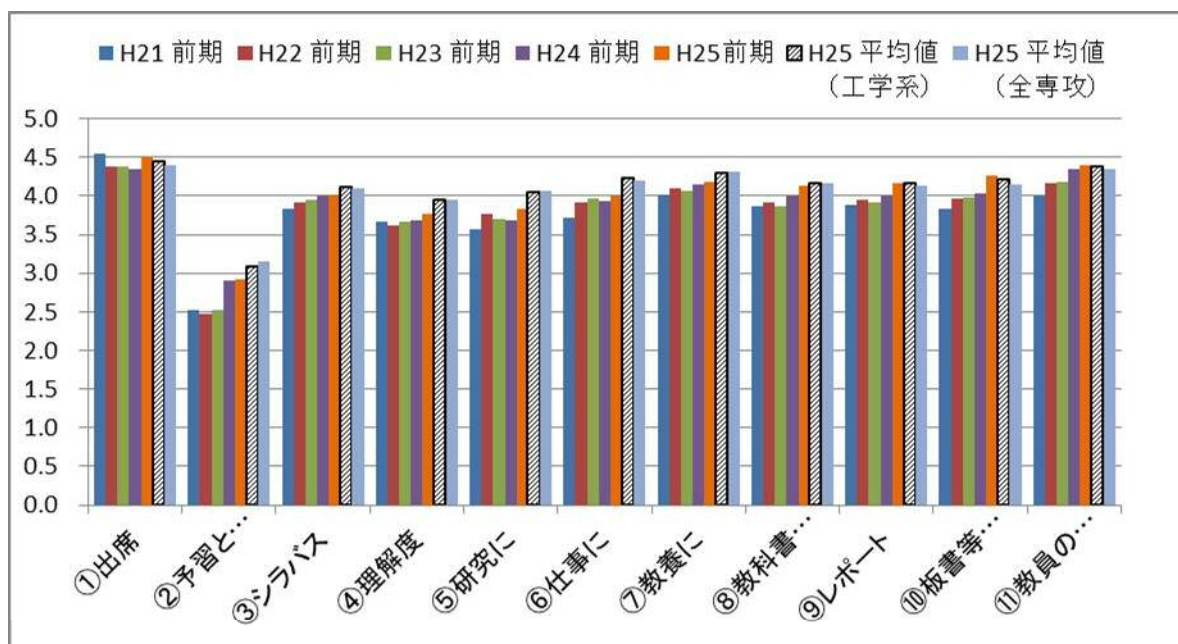


図 3.2.6(a) 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成21~25年度 前期)

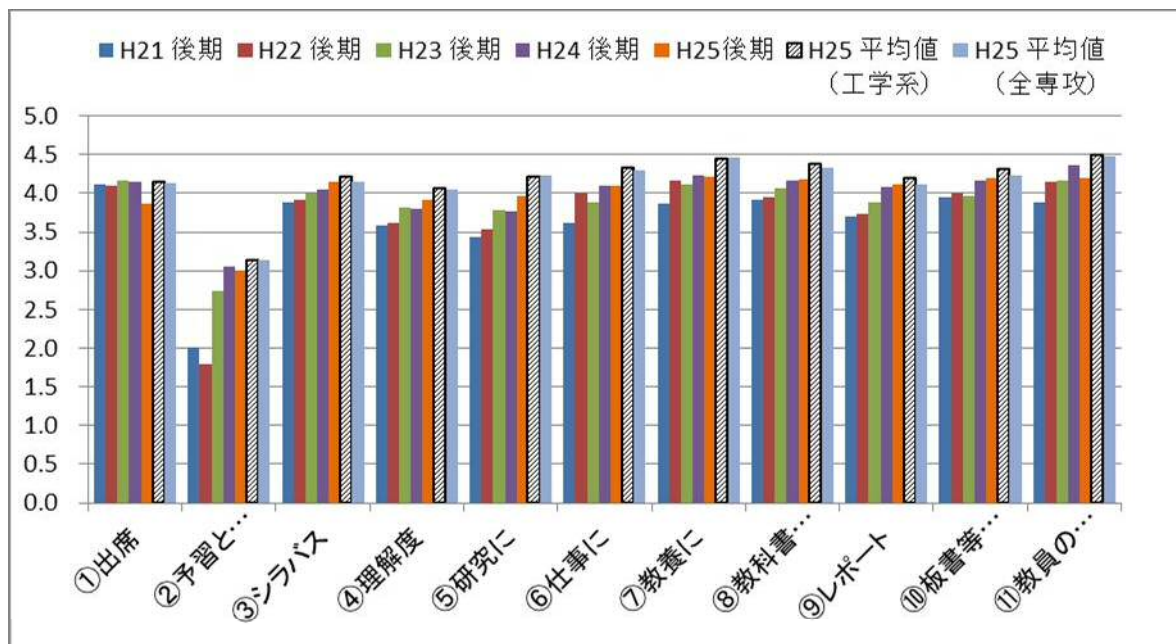


図 3.2.6(b) 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成21~25年度 後期)

情報生体システム工学専攻の平成25年度の評価は、前期は209枚の平均値であり、後期は87枚の平均値である。また、集計した科目数は、前期と後期のどちらも11科目ずつであった。

各項目の最高点は5.0であるが、5年間の推移を見ると、ほとんどの項目で右肩上がりの傾向となっている。各項目の評価は、「②予習と復習」以外の項目では、前期・後期とも3.5以上である。今年度も、ほとんどの項目の評価が向上しており、4.0に達しているかその近傍である。ただし、後期においては、平成25年度の4つの項目の評価が前年の評価より下がっており、その

中で「①出席」と「⑩教員の熱意」の2つの項目は、それぞれ、0.27 と 0.16 評価が下がっている。

平成 25 年度後期の「①出席」の項目の評価は、3.87 であり、4.0 を下まわった。全専攻の平均値でも前期の評価より低い、専攻の評価は全専攻の平均と比べても明らかに低くなっている。後期の出席には、就職活動による影響が考えられるが今後の推移を見守る必要がある。

平成 25 年度後期の「⑩教員の熱意」の評価は 4.20 であり、前期の評価 4.40 と比べて低い評価となったが、4.0 を超えており問題はないと考えられる。

「②予習と復習」の項目は、昨年度の評価とあまり変わりがなく 3.0 に達していない。また、「④理解度」、「⑤研究に役に立つか」、「⑥仕事に役立つか」の3項目は、専攻の平均値と比べて、評価が 0.19～0.26 低くなっている。これらの点は、次年度以降、改善すべき課題である。

3.2.7 数理情報科学専攻（青木敏）

数理情報科学専攻では、受講者がきわめて少数の講義を除くすべての講義で、授業評価アンケートを実施した。講義の担当教員は、授業評価アンケートに基づいて授業計画改善書を作成し提出した。授業評価アンケートの各項目の平均値を表 3.2.7 に示す。

表 3.2.7 授業アンケート結果

項目	平成 25 年度前期の平均値			平成 25 年度後期の平均値		
	数理情報	理系全体	研究科全体	数理情報	理系全体	研究科全体
①出席	4.33	4.31	4.39	4.37	4.09	4.13
②予習と復習	3.72	3.24	3.15	3.26	3.14	3.14
③シラバス	4.33	4.06	4.10	3.79	4.04	4.15
④理解度	4.00	3.94	3.95	3.53	3.99	4.04
⑤研究に	4.36	4.07	4.06	3.74	4.23	4.22
⑥仕事に	4.36	4.13	4.19	3.84	4.22	4.30
⑦教養に	4.58	4.31	4.31	4.05	4.47	4.46
⑧教科書・教材	4.33	4.14	4.16	3.84	4.24	4.32
⑨レポート	4.22	4.07	4.13	4.05	3.98	4.11
⑩板書等の明瞭さ	4.39	4.05	4.15	3.58	4.07	4.22
⑪教員の熱意	4.61	4.27	4.34	4.11	4.45	4.49

理学系全体、研究科全体と比較した専攻の評点に注目すると、まず、前期はどの項目も専攻評点が高い中、「②予習と復習」の評点が特に高い。この項目は前期の専攻評点の中では唯一の3点台であるが、過去4年間の研究科全体平均値はすべて3点未満であり、平成25年度の数値は突出している。前期の講義担当の教員が、今年度、特に力を入れて授業改善を行った項目であるといえる。また、前期は「⑩教員の熱意」の評点も高い。この項目も、過去4年間の平均値は研究科全体の平均とほぼ同程度であり、今年度に顕著な改善が見られた項目である。一方で後期に関しては、多くの項目で専攻評点が理学系、研究科の全体平均を下回っている中、「①出席」の評点が高い。この項目の過去4年間の平均値は、研究科全体平均と同じかそれよりやや低い程度であり、今年度、後期の講義担当教員が力を入れて授業改善を行った項目であるといえる。前期の「②予習と復習」の平均値を図 3.2.7(1)に、後期の「①出席」の平均値を図 3.2.7(2)に示す。

今後も継続して授業評価アンケートを行い、その結果を分析することにより、教員が授業改善を効率的に行い、全ての項目で改善が見られるよう、努力していくことが重要である。

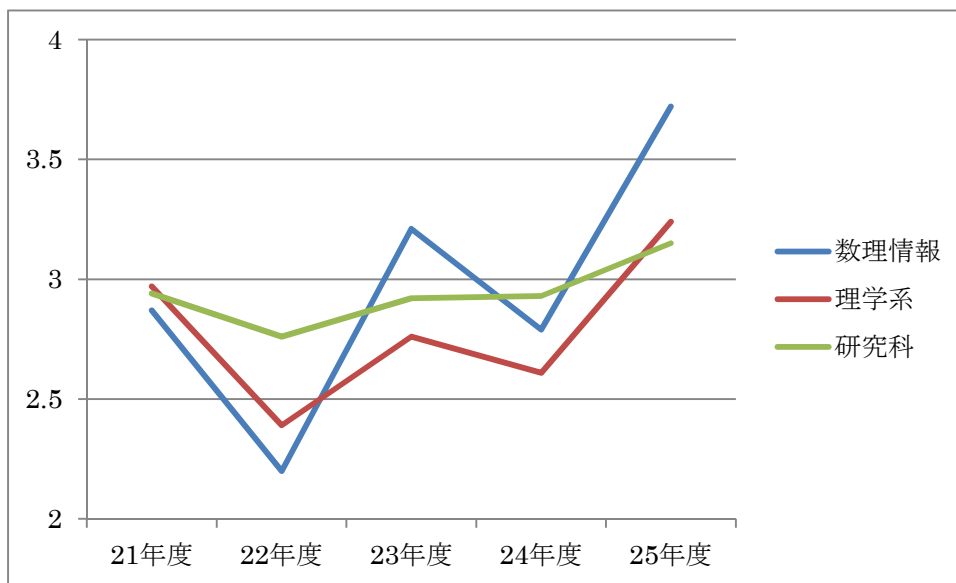


図 3.2.7(1) 「②予習と復習」の平均値 (前期)

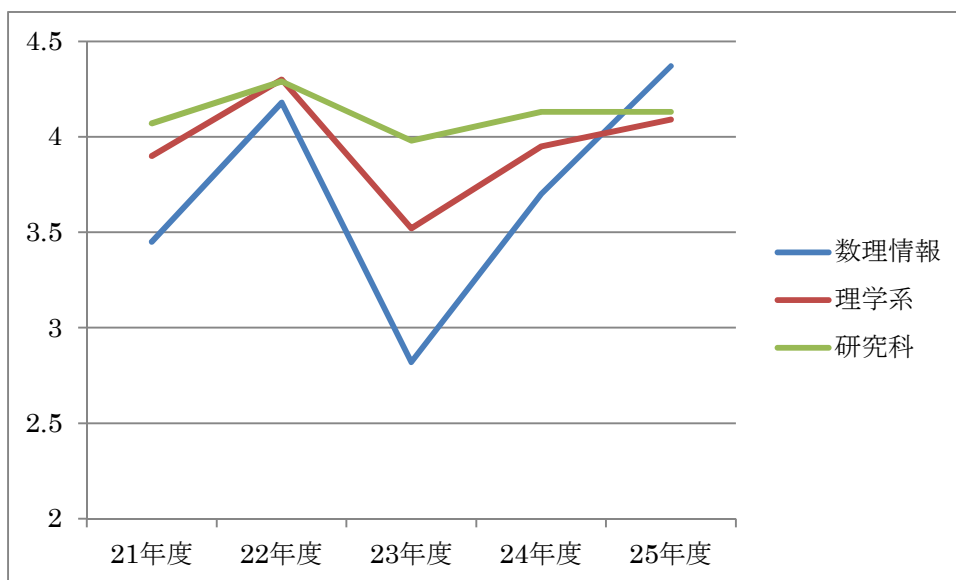


図 3.2.7(2) 「①出席」の平均値 (後期)

3.2.8 物理・宇宙専攻 (古川一男)

25年度、物理・宇宙専攻では、前期と後期の合計10科目でアンケートを実施し、のべ64人からの回答を回収できた。決して網羅的かつ十分とは言えないかも知れないが、大体の傾向は掴めるだろう。大学院の授業の性格上アンケート実施が困難な科目も多々あるが、もう少し回収の努力が望まれる。

グラフ3.2.3は本専攻における授業アンケート各項目の平均点の平成21年度後期からの年次推移である。参考までに、縦補助線より右端の3列には25年度全期の工学系平均値、理学系平均値、研究科平均値も挿入しておいた。設問①から⑩の内容の詳細については他頁に資料があるので参照されたい。なお数値についても24年度・表3.2.3に25年度分を追加したものを示す。

グラフ 3.2.8 物理・宇宙専攻における授業アンケート各項目の平均値（平成 21 年前期～平成 25 年）

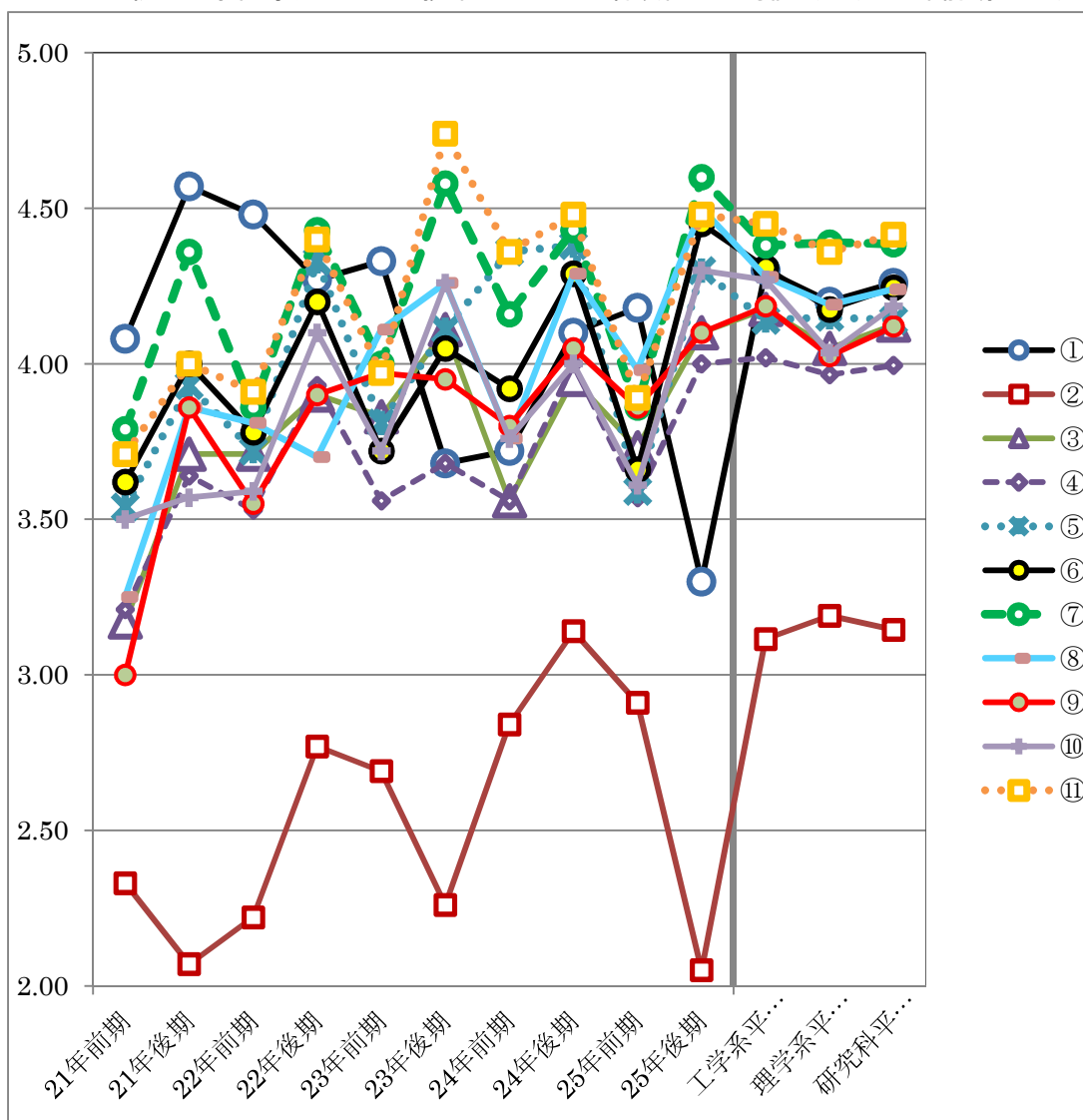


表 3.2.8 物理・宇宙専攻における授業アンケート各項目の平均値（平成 21 年後期～平成 25 年）

	25 年 後期	25 年 前期	24 年 後期	24 年 前期	23 年	22 年	21 年 後期
① (出席)	3.30	4.10	4.10	3.72	4.15	4.41	4.57
② (予習と復習)	2.05	2.91	3.14	2.84	2.57	2.41	2.07
③ (シラバス)	4.10	3.73	3.95	3.56	3.91	3.77	3.71
④ (理解度)	4.00	3.57	4.00	3.56	3.59	3.67	3.64
⑤ (研究に)	4.30	3.66	4.38	4.36	3.89	3.93	3.93
⑥ (仕事に)	4.45	3.86	4.29	3.92	3.81	3.92	4.00
⑦ (教養に)	4.60	3.86	4.43	4.16	4.16	4.05	4.36
⑧ (教科書・教材)	4.50	3.98	4.29	3.76	4.15	3.77	3.86
⑨ (レポート等)	4.10	3.86	4.05	3.80	3.96	3.67	3.86
⑩ (板書等の明瞭さ)	4.30	3.61	4.00	3.76	3.87	3.76	3.57
⑪ (教員の熱意)	4.55	3.89	4.43	4.36	4.19	4.08	4.00

後期の①と②の項目以外は、概して予測通り例年と同様の結果であり、この程度のバラツキは容認できる範囲内で特に心配される結果ではないだろう。グラフを一見して直ぐに気付くことは、例年後期の方が前期より高めになっていること、更に今年度後期の①（出席）と②（予習と復習）の項目が目立って低く変化していることである。学生の努力を期待すると同時に教員の側も予習復習を促すような授業形態の工夫も必要なのだろう。25年度後期に①と②が特に低くなった理由がよくわからないが後期には前期より学会や行事のスケジュールが過密であることも一因なのではないだろうか。

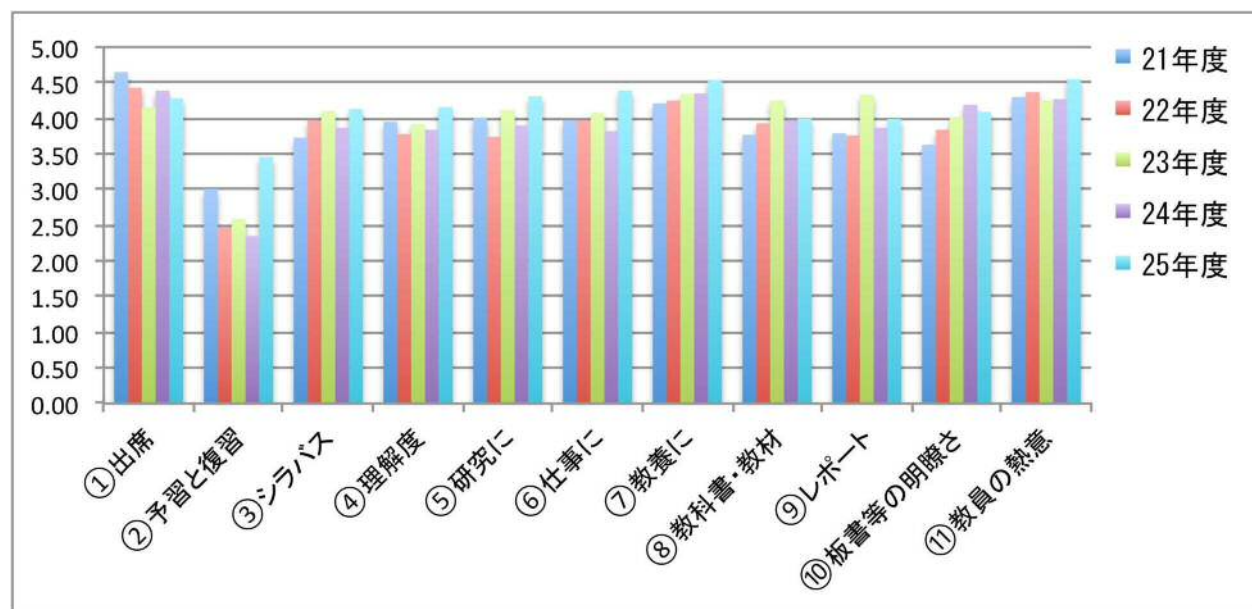
①②以外の項目については年度ごとのバラツキは十分理解出来るし長期的にみれば概して多少なりとも改善しているように見える。授業の質が向上してるとも読み取れるのではないだろうか。ただ極僅かではあるが本専攻の結果は他の三つの平均値より若干低めに推移しているが心配する程のことはないだろう。

さらに受講生にとっても講師にとっても最大関心事であろう④（理解度）が低めに推移していることは気がかりである。大学院の授業である以上、授業内容の程度を下げる事には抵抗もあろうが、受講生の学習歴・学力を考慮しての授業内容と方法に更なる工夫の余地はあるだろう。だけど⑤（研究に）⑥（仕事に）⑦（教養や学力に）⑪（教員の熱意）がしっかりと評価されている結果になっているので概していい授業が行われていると判断していいのだろう。

慣例としてアンケートの専攻全体の集計結果はFD委員に渡されているが、科目別の集計結果もFD委員にフィードバックされるようにしたらどうだろうか。気になる結果が出たときに専攻内での細かな検討と対応がしやすいと思う。

3.2.9 生命化学専攻（塔筋弘章）

生命化学専攻では今年度も授業アンケートを前期と後期について実施した。表3.2.9は平成21年度から平成25年度の結果を示している（上段：前期、下段：後期）。



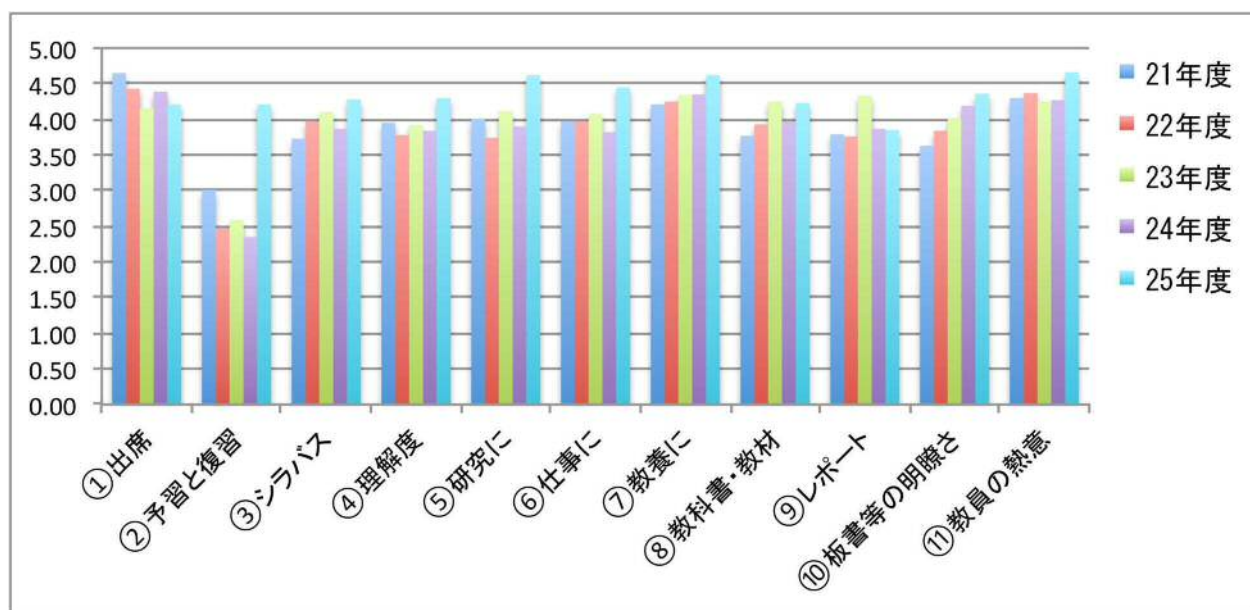


表 3.2.9 生命化学専攻の授業評価アンケート結果の推移

前期の「予習と復習」、後期の「レポート」以外の項目では4以上の高い評価値になっている。また、「出席」、「レポート」以外の項目の数値は、5年間をとおしてみると上昇傾向にあるといえる。24年度以前の「予習・復習」の評価点は前期、後期ともに他の項目と比べて、また、他専攻と比較しても著しく低く、改善すべき課題であったが、授業改善の努力が受講生による評価に反映され、25年度には前期、後期ともに大幅に上昇、研究科の平均値を上回った。

「出席」、「レポート」の2項目については、依然として評価は高いもののここ数年間下落しており、ただちに改善の必要があるレベルではないものの、注意すべき項目であると思われる。総合的に判断すると、教員側が授業改善に対して努力していると思われる。今後も継続的なFD活動を通して、勉学・研究がより良い方向に向かうことを期待する。

3.2.10 地球環境科学専攻（山本啓司）

平成21年度～平成25年度の前期のアンケート結果を図3-2-10-1に示した。「②予習と復習」を除くと各項目とも3.5以上であり、平成25年度前期に限れば4.0以上となっており、よい結果となっている。これは授業を受けている学生にとって満足のいく授業となっていると考えられる。特に「⑦教養に」の項目は4.0を超え、4.5に近い結果となっており、専門外の科目でも学生自身のためになる授業と認識されていることがわかる。「②予習と復習」は3.0を下回っている。修士論文を書き上げるために地球環境科学専攻では野外での観察や観測、室内での実験が必要であるが、観察に適切な季節があるなど自然現象による制約や実験機器の使用のスケジュールなど条件が学生自身によるものでなく、外的に決まる。そのため、予習復習の時間的負担に対して配慮がなされている可能性がある。

図3-2-10-2に平成21年度～平成25年度の後期のアンケート結果を示す。項目間の傾向は前期同様「②予習と復習」を除くと各項目とも3.5以上であり、よい結果となっている。また、年度を追うごとに点数が上昇しており、さまざまな面で授業改善が行われている結果と考えられる。前期よりもまして「②予習と復習」の時間が少ないが、入学して半年がたち、修士論文のための観測・実験にさらに時間を割く必要が生じるためと考えられる。このことは、前期同様授業の内容評価に関係する項目「⑤研究に」、「⑥仕事に」、「⑦教養に」の点数が高いことから、授業の内容を充実させるとともに修士論文を作成するための観察・実験・観測に配慮した授業が行われて

いることが伺える。

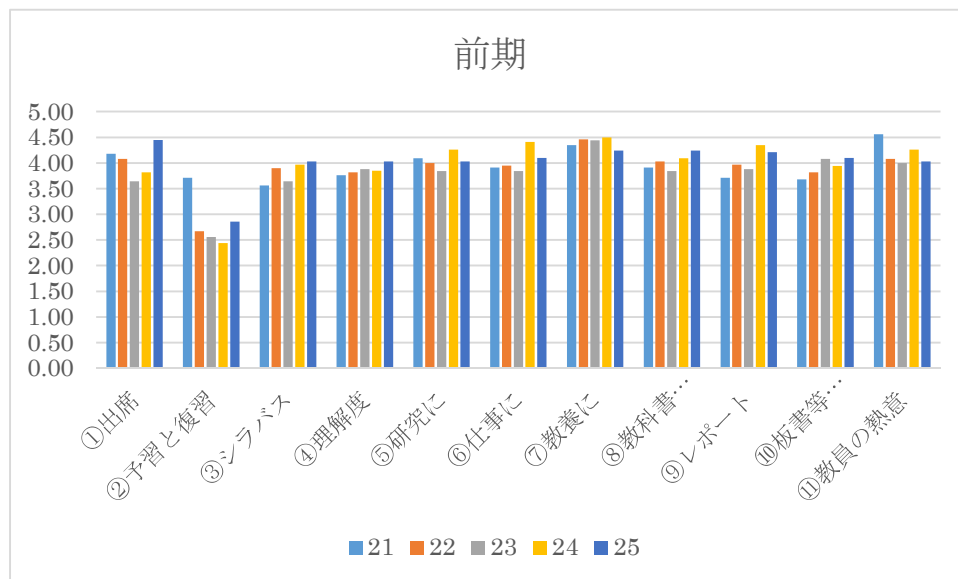


図 3-2-10-1. 平成 21 年度～平成 25 年度のアンケート結果（前期分）。

3.3 授業計画改善書の活用

（1）機械工学専攻

学部（学科）と同様に、専攻の FD 委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目 GPA とともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書は冊子と CD-ROM の形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

（2）電気電子工学専攻

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として理工学研究科 FD 委員が管理し、専攻 FD 委員会において授業改善に向けた活用方法等を議論している。

（3）建築学専攻

授業計画改善書に関して、全科目の評点を学科内で公開して問題点を共有することになっている。建築学専攻ではコースワーク科目など複数教員で担当する科目も多いため、それらの科目では授業アンケートの結果を複数教員で確認し議論した結果を授業改善に結びつけている。

（4）化学生命・化学工学専攻

授業計画改善書の作成により、各教員は継続的に改善を図っている。作成された授業計画改善書は、各教員と FD 委員が保管しており、FD 委員が情報を集約する際に内容を閲覧し、問題が無いことを確認している。問題が発見された場合には、専攻長と協議の上、対応を検討する。

(5) 海洋土木工学専攻

海洋土木工学専攻は、環境システム工学コースと建設システム工学コースという2つのコースに分けられている。コース毎に専門性や取得すべき必修科目が異なっているため、各コースで科目部会（環境システム科目部会と建設システム科目部会）を開催し、担当科目数のバランスや授業改善等について検討を行っている。また、授業アンケートに対して担当教員は授業計画改善書を作成し、本専攻の教育点検を継続的に改善するために活用している。これらの取り組みは、JABEE受審以降継続的に実施されている。

(6) 情報生体システム工学専攻

情報生体システム工学専攻では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能となるように管理している。各教員による授業改善への取り組み及び結果を教員全員で共有することで、情報生体システム工学専攻全体の教育内容への継続的な改善を試みる。

(7) 数理情報科学専攻

担当教員は授業アンケートに対して授業計画改善書を作成、提出し、保管は担当教員自身が行っている。特に、授業計画改善書には、昨年、一昨年の評点を記入する欄があり、各教員が授業計画改善書を作成する際に評点の推移を確認することが、継続的かつ効率的な授業改善につながる重要な要素となっている。授業アンケートおよび授業計画改善書を、専攻内の他の教員に公開するような体裁は、今のところとっていない。

(8) 物理・宇宙専攻

25年度は多数ではなかったが、授業アンケートを行った教員は、その結果を踏まえた授業計画改善書を作成し、各教員およびFD委員が保管している。しかし他の教員に公開することは今のところ行っていない。いちいち文書にされなかったとしても各教員は毎回授業計画改善の策を念頭に置き、次の授業に生かしている筈である。改善書の中には真剣な取り組みが盛られており、担当教員以外にも読んで貰って共有した方が良さそうなものもある。担当教員に了解を貰って公開も考えたらいいかもかもしれない。カリキュラム全体の把握と改善にも役立つものと思う。

(9) 生命化学専攻

授業アンケートを行った教員は、その結果を踏まえた授業計画改善書を作成し、各教員およびFD委員が保管している。この内容は今のところ公開していない。しかしながらアンケートの結果を真摯に受け止めて改善に取り組む旨の記載が多く見られることから、改善書の作成業務自体が自らの講義の問題点の把握と改善につながっていると考える。実際、前年度の低いポイントが、今年度大幅に改善された。

(10) 地球環境科学専攻

授業を担当した教員は授業計画改善書を作成し、FD委員に提出しており、各教員とFD委員が保管している。授業計画改善書をまとめることにより、各教員が担当授業を見直す機会をえることができ、次年度の授業への工夫や改善に役立っていると考えられる。担当教員は授業アンケートに対して授業計画改善書を作成し、それらをFD委員がとりまとめて保管している。改善書によると、各教員とも各自の授業を見直し、授業形態や教材などについて受講生の状況に応じた様々な工夫を試みている。授業アンケートの結果を受けての改善書作成という作業の流れが定着しつつあり、継続的に授業の改善が図られている。

第4章 学生の研究活動と教育成果（中尾茂、高梨啓和）

大学院生の研究発表の支援はFD活動の目的の一つであることから、その実績を把握するために調査を実施した（表7）。当該年度における在籍者数を表8に示す。また、論文・学会発表以外の特筆すべき成果についてデータを集めた（表9）。

表7 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械	電気	建築	化学	海洋	情報	数理	物理	生命	地環	合計
平成20年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	7	14	0	37	10	4	3	3	9	1	88
		国際会議以外	40	64	69	126	34	28	5	30	45	16	457
	論文	査読あり	21	28	11	46	18	18	2	16	16	3	179
		査読なし	4	16	64	25	24	17	5	2	1	1	159
平成21年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	9	5	1	34	6	1	1	2	16	7	82
		国際会議以外	31	67	46	125	42	32	8	28	35	15	429
	論文	査読あり	29	20	7	54	32	9	4	11	26	3	195
		査読なし	3	16	32	17	21	9	3	8	0	3	112
平成22年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	3	7	2	53	4	2	1	6	27	11	116
		国際会議以外	44	65	38	126	29	46	4	9	41	19	421
	論文	査読あり	19	12	3	39	17	19	1	4	29	2	145
		査読なし	7	30	26	20	2	36	0	6	7	2	136
平成23年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	1	5	1	49	2	6	0	3	8	11	86
		国際会議以外	15	60	38	135	34	35	1	14	26	26	384
	論文	査読あり	4	13	0	25	27	9	1	3	9	8	99
		査読なし	3	18	6	7	9	7	1	6	3	0	60
平成24年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	6	21	2	43	20	3	0	9	15	3	122
		国際会議以外	32	66	46	141	18	28	0	49	52	20	452
	論文	査読あり	10	30	9	36	11	11	0	8	7	4	126
		査読なし	4	38	0	9	5	7	0	10	6	0	79
平成25年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	9	27	2	40	8	15	0	2	10	4	117
		国際会議以外	80	78	32	104	15	50	0	17	34	8	418
	論文	査読あり	15	33	6	24	14	22	0	5	9	3	131
		査読なし	10	28	0	1	4	22	0	3	9	0	77

表8 在籍者数（博士前期課程）

専攻名	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
機械	111	115	109	116	116	99
電気	97	98	106	105	104	95
建築	42	46	46	52	52	43
化学	97	116	132	88	88	84
海洋	35	36	39	32	32	26
情報	78	80	85	89	89	84
数理	24	23	25	24	24	21
物理	38	32	30	28	28	32
生命	32	37	36	32	32	34
地環	42	38	36	30	30	33
合計	596	621	644	596	595	551

表9 受賞など

受賞者名	学年	受賞賞名等
小原裕也	D3	精密工学会九州支部宮崎地方講演会ベストプレゼンテーション賞
湯地輝	D3	日本コンクリート工学会 優秀論文賞
Anis Ur Rehman	D3	Graduate Travel Award, The 9th Asia-Pacific Conference on Vision (APCV 2013)
宮崎 誠生	D2	第66回日本生化学会大会 鈴木絃一メモリアル賞
宮崎 誠生	D2	鹿児島大学学長表彰
山本誠	D1	土木学会 優秀講演賞
内奈保子	D1	The 18th International Congress on Nitrogen Fixation, Young Scientist Award
金城七海	M2	日本フルードパワーシステム学会最優秀講演賞
二町健太	M2	SI2013 優秀講演賞
満永一武輝	M2	日本知能情報ファジィ学会九州支部 学生優秀講演賞 (2014.3)
岩崎健児	M2	電子情報通信学会九州支部 学術奨励賞 (2014.3)
星野裕志	M2	2013 九州・西部 - 釜山・慶南 高分子 (第16回)繊維 (第14回)合同シンポジウムポスター賞
田中華子	M2	2013年 日本水環境学会九州支部優秀講演賞
藤本 健司	M2	2013年 日本水環境学会九州支部優秀講演賞
川村宗範	M2	地盤工学会九州支部学生賞 (優良学生賞)
川村宗範	M2	平成25年度土木学会西部支部優秀講演者賞
前園裕也	M2	日本コンクリート工学会九州支部長賞
木佐真恵	M2	ベストプレゼンテーション賞, 情報処理学会数理モデル化と問題解決研究会
中田達也	M2	学生貢献賞, 電子情報通信学会 基礎・境界ソサエティ バイオメトリクス研究会
山口智嗣	M2	学生部門優秀賞, National Instruments グラフィカルシステム開発コンテスト
田畑亮	M1	日本鉄鋼協会学生ポスターセッション 努力賞
増田雄太	M1	日本鉄鋼協会学生ポスターセッション 努力賞
奥津智恵	M1	日本鉄鋼協会学生ポスターセッション 努力賞
奥津智恵	M1	日本金属学会・鉄鋼協会九州支部学生ポスターセッション 優秀賞
榑 裕翔	M1	平成25年度電子情報通信学会学術奨励賞
内田功哉	M1	日本知能情報ファジィ学会九州支部 学生優秀ポスター賞 (2013.12)
山口洋平	M1	日本知能情報ファジィ学会九州支部 学生優秀ポスター賞 (2013.12)
精松賢一	M1	The 3rd International Symposium on Advanced Magnetic Materials and Applications (ISAMMA2013) ベストポスター賞
精松賢一	M1	応用物理学会講演奨励賞
精松賢一	M1	鹿児島大学学長表彰
豊留慎也	M1	平成25年度電気学会論文発表賞B賞

海外実習報告として、平成25年12月15日から平成25年12月21日に、理工学研究科・海洋土木工学専攻の酒匂一成助教と加古真一郎助教および修士1年の2名が、学術交流機関であるインド・カルナタカ国立工科大学（マンガロール）を訪問した。教員および修士学生の計4名は、マンガロールの女性の国民教育学会主催のセミナーにおいて、災害対策に関する話題を英語で講演および質疑応答を行った。

また、カルナタカ国立工科大学の研究室ツアーに参加し、各セクションの研究者や学生らとの交流を深めた。

第5章 今後の理工学研究科FD活動への期待

理工学研究科は平成21年度からの部局化により新しい組織としてスタートした。大学院教育におけるFD活動は、「教員が授業及び研究指導等の内容・法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされている。大学院教育の共通の認識として、「はじめに」で述べたように、

- (1) どのような人材を入学させるのか
- (2) どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか
- (3) どのような学位を出すのか

のアドミッション、カリキュラム、ディプロマの3つのポリシーを明文化し、継続した点検を実施することが重要になる。

一方、中央教育審議会（平成23年1月31日）の答申「グローバル化社会の大学院教育 ～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」では、大学院教育の改善の方向性が示されている。この中では、明確な学位プログラムとしての大学院教育を確立し、学生の質を保証する体系の整備が重要なものとして指摘されている。学生の質を保証する組織的な教育・研究指導体制の確立に関して、FD活動に関連する項目としては次の事項があげられる。

- (1) FDの充実、ピアレビューの実施による教員の教育・研究指導能力の向上
- (2) 教員の教育業績や能力の評価の充実、人事や処遇への反映などの推進、教員の教育研究活動の評価に関する指標の開発推進

また、「教員の教育研究活動の適切な評価」に関しては、「教員の教育・研究指導能力を向上させるためには、組織的な研修体制の充実、学生に対する厳格な成績評価とともに、教員の教育研究活動を適切に評価する仕組みが一体となって機能することが必要である。その際、教員の教育研究活動評価においては、論文数のみではなく研究業績を適切に評価するとともに、授業の研究指導の実施状況、修了者の活躍状況など教育面の取り組みを可能な限り客観的に把握、可視化し、教育業績や能力の多面的な評価を充実させ、人事や処遇への反映せる工夫が必要である。」としている。

今後、大学院のおかれた環境は、益々厳しい状況になっている。理工学研究科の教育プログラムでは、グローバル化に対応した人材輩出を念頭にした語学教育を始め、コースワークあるいはコア科目によるカリキュラム編成によって「大学院と学生の量的増大」の中で「学位プログラム等を通じた大学院教育の実質化」が図られている。すなわち、理工学研究科においても、各専攻の独自の教育・研究指導の実績に加えて、コースワーク科目により広範囲の学習を可能にした教育プログラムが実施されている。大学院の学生数が増大しことにより多様な能力を有する学生の教育・研究指導に対応したような大学院教育の展開も必要になってきている。これまでは各教員の能力に大きく依存してきた大学院の教育・研究を研究科として点検して改善していくことが必要になる。FD活動に関しても、大学院教育の共通認識として前述した3項目の再確認を行ない教育・研究指導の点検を行うことで、理工学研究科の目標の実現を図ることができると考える。

このような観点からFD活動の一つとして、学生による授業評価アンケートの実施がある。学生の意見、考えの一端を汲み取ることで、高度の学習・研究能力の育成といった学習目標の到達度に対する評価を行うことができると考えられる。また、今年度も昨年度に引き続き、学生の質の

保証の一つとして研究発表の状況の調査を試みた。「どのような学位を出すのか」と言った要望に対して、本研究科の修了生の有する能力の評価の一つの指標なると思われる。単なる研究発表数だけでは、その質の評価になるのかと言った見方もあると思われるが、学外での評価を受けた指標の一つである研究発表数は、専攻による特性なども考慮することで本研究科の修了生の質の保証と学位水準の評価の指標の一つになるものと思われる。

FD委員会では、研究科として「どのような人材を入学させるのか」、「どのような教育プログラムを組むのか」、「どのような学位を出すのか」の課題に継続的に取り組むことで、中央教育審議会から示された大学院教育の改善の方向性にも対応できると考えており、今後も修了生の質の保証と学位水準の明確化に貢献できるようにFD活動を実施することが望まれる。

なお、次年度以降、大学院改革の一環として理工学研究科では、博士前期課程におけるグローバル人材養成の体制強化、博士後期課程におけるイノベーション人材養成の体制強化が打ち出されている。その一つのシステムとして、クォーター制導入による留年をしない短期留学・現地調査制度の確立、3専攻を1専攻としてコース制を導入し、従来の専攻を基幹コース群とし、新たな基幹コースにエネルギー科学コースを設ける。地域の発展寄与する人材育成に対して、地域コトづくりセンターの創設による機能強化が図られる。これらの改革推進には、各教員の教育研究能力のさらなる向上が求められ、理工学研究科所属教職員のFD活動がより重要にならざるを得ない。

参考資料 1

理工学研究科 FD 委員会は 2 回開催(第 1 回 H25.05.14, 第 2 回 H2603.11)された。議事要旨は、以下の通りである

平成 25 年度 第 1 回 理工学研究科 F D 委員会 議事要旨

日 時 : 平成 25 年 5 月 14 日 (火) 13:35~14:00

場 所 : 共通棟 203 講義室

委 員 : 1 号委員 ; 本間 (委員長)

2 号委員 ; 上谷、山本 (川越代理)、黒川 高梨、三隅、湊田 (加藤代理)、
青木、小山 (古川代理)、塔筋、中尾

3 号委員 ; 本間 (再掲)

4 号委員 ; 中村事務部長

委員外 : 上白石研究科事務課長、野頭理学系事務課長、上村工学系事務課長、
永徳総務係長、吉村大学院係長

議事に先立ち、各委員の自己紹介があった後、前回議事要旨が確認された。

議題

1 平成 24 年度研究科 F D 活動報告について

委員長及び総務係長から、資料に基づき平成 24 年度の活動状況等について、説明があり、委員長からか諮られ承認された。

2 平成 25 年度 F D 活動計画について

委員長及び総務係長から、資料に基づき、本委員会の活動は、前年度の 4 活動項目に沿って実施したい旨提案があり、了承された。

(1) F D 講演会の実施

(2) 海外実習報告

(3) 学生による授業評価

(4) 学生の研究活動と教育成果

また、委員長から、平成 25 年度 FD 活動・FD 経費予算要求について、資料に基づき説明があり、一部修正の上、承認された。

なお、他大学主催の F D 研修会についてメールで照会するので、積極的に参加するよう依頼があった。

3 委員の活動分担について

委員長から、4 活動項目における担当委員を理学系、工学系毎に推薦願いたい旨提案があり、承認された。推薦結果は次のとおり。

- (1) F D 講演会の実施：青木委員、加藤委員
- (2) 海外実習報告：古川委員、黒川委員
- (3) 学生による授業評価：塔筋委員、上谷委員
- (4) 学生の研究活動と教育成果：中尾委員、高梨委員

4 授業改善報告書のまとめについて

委員長から、研究科長と協議の上、案を提案したい旨述べられ、了承された。

配布資料：

平成 25 年度 第 1 回 研究科 F D 委員会	資料 1
平成 25 年度 F D 活動と F D 経費予算要求・配分方法についての基本方針	
	資料 2
平成 24 年度 委員会議事要旨(まとめ)	参考資料
平成 23 年度研究科 F D 活動報告書	参考資料
平成 24 年度研究科 F D 活動報告書	参考資料

平成 25 年度 第 2 回理工学研究科 F D 委員会議事要旨

日 時：平成 26 年 3 月 11 日(火)15:00～15:15

場 所：共通棟 2 階 203 ゼミ室

委 員：1 号委員；本間先生(委員長)

2 号委員；上谷先生、川越先生、黒川先生、高梨先生、三隅先生、加藤先生
青木先生、古川先生、塔筋先生、宮本先生(中尾先生 代理)

3 号委員；本間先生(再掲)

4 号委員；山本事務部長

委員外：田尻総務係長、小湊総務係員

議事に先立ち、委員長の挨拶後、前回議事要旨が確認された。

議題

1 平成 25 年度研究科 F D 活動報告書の作成について

委員長から、資料 1 に基づき、平成 25 年度研究科 F D 活動報告書作成の担当割り当てについて諮られ、決定した。また報告書作成に必要な、アンケート集計データ等を研究科総務係から委員宛メールで送付することとした。

なお、研究科 F D 活動報告書原稿締切日を 4 月 25 日(金)とした。

2 その他

委員長から、全学 F D 委員会の取組として、平成 26 年 3 月 26 日に開催される「平

成 2 5 年度学生支援研修会」について紹介があり、研究科 F D 委員で各専攻教員に声をかけていただき、参加希望者を平成 2 6 年 3 月 1 2 日までに研究科総務係へ連絡するよう依頼があった。

また委員より、アンケートを Web 上で実施出来ないか学科から意見があったことが紹介され、回収率低下の問題もあり、今後検討することとした。

配布資料：

- ・平成 25 年度第 1 回理工学研究科 FD 委員会議事要旨・・・・・・・・・・資料 1
- ・平成 25 年度鹿児島大学 FD 活動報告書の作成について・・・・・・・・・・資料 2
- ・平成 25 年度研究科 F D 活動報告書作成の担当割り当て（案）・・・・・・・・資料 3
- ・原稿作成要領見本・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料 4
- ・平成 24 年度研究科 F D 活動報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・参考資料

理工学研究科博士前期課程
学生による授業評価アンケート（平成25年度・前期）

鹿児島大学大学院理工学研究科では、授業の改善と理解度の向上を目指して、授業を受けた諸君の評価や意見を参考にしたいと思います。以下の各設問に対して、選択肢の中から一つだけ選び回答用紙の該当する番号欄に○印を記入し、また、記述欄に意見を記入ください。なお、このアンケートは統計的に処理され、個人名が出たりすることはありませんし、成績評価にも関係ありませんので、適切な評価や率直な意見を記入してください。

A（受講態度等について）

設問1 授業にどれだけ出席しましたか。

5. 全て出席 4. 1回欠席 3. 2回欠席 2. 3回欠席 1. 4回以上欠席

設問2 予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含まれます）

5. 3時間より多く 4. 2～3時間 3. 1～2時間 2. 30分～1時間 1. 30分未満

【自由記述A】その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

B（授業内容等について）

設問3 この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問4 授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうか。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問5 授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問6 授業の内容は目指す（職業上の）高度専門知識として役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問7 授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述B】授業内容全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。

C（授業方法等について）

設問8 使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。（教材等を使用しなかった場合には記入しなくて良い。）

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問9 レポートなどは授業の理解に役立った。（無かった場合には記入しなくて良い。）

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問10 板書などは明瞭だった。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問11 教員の熱意が感じられた。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述C】授業方法全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

6 授業計画改善書（平成25年度 前期 講義・演習用）

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して下さい。
3. この文書を9月24日（火）までに専攻のFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 平成 年 月 日

授業科目名： _____

授業担当者（代表者）名： _____

※ Pt. 8 ゴシックで記入して下さい。

※自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目	アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策	
	今回	前回	前々回		
(A) 受講態度について	①出席				
	②予習と復習	2.50	2.25	2.80	予習・復習の時間が1から2時間であり、本科目の内容を修得するためには不足しているので、課題を増やしたい。
	※自由記述				
(B) 授業内容について	③シラバス				
	④理解度	3.16	3.0	3.2	今年度は少し理解度を上げることができた。小テストなどで理解度の向上を図り、次年度は評点3.5となるようにしたい。
	⑤研究に				
	⑥仕事に				
	⑦学力・教養に				
	※自由記述				
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材				
	⑨レポート等	3.70	3.20	3.50	今年度は5回のレポートを提出させた。昨年度は3回（評点は3.20）であったので、少し改善することができた。次年度は評点4.0となるようにしたい。
	⑩板書等の明瞭さ				
	⑪教員の熱意				
	※自由記述				

登録者数 = 14名 : 受験者数 A = 14名 : 単位取得者数 B = 14名 : 比率 (B/A) = 100%

総括

- ・成績の評価基準：シラバスに従い、試験7割、レポート課題3割の割合で評価した。
- ・学習目標の達成：合格者の平均はC(78点)であり、大学院の成績としては、十分でない。レポート課題への取り組みが十分でないことが考えられるので、次年度は何らかの改善をしたい。
- ・その他（自由記述）

※フォントの色は青から黒にして変更して下さい。

※青字の箇所は参考例を示したものです。あくまでも参考です。

(記述欄不足の場合は、続紙を設けて記述下さい。)

医歯学総合 研究科

医歯学総合研究科 FD 活動報告

1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、大学院教育の充実、活性化を目的として、教育プログラム改善と学生支援を検討するための調査と情報提供、ならびに効果的な学習を行うための学習支援システムの普及をめざして活動した。本年度は新たに、将来の大学院生となる医学部歯学部の学生を対象とした意識調査を行った。

2. 授業公開

授業公開の主旨を「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」とし、これまで授業公開をしていなかった科目から昨年度の学生の授業評価結果を参考にして公開する授業を選考した。

医療・医人倫理学（博士科目） 有田 和徳（脳神経外科学分野 教授）

平成 25 年 11 月 19 日（火） 6 限目 テーマ：臨床研究における倫理について

参観者 教員 3 名

授業を公開した教員からは、良い機会になったと感想をいただいた。例年参加者が少ないが、本年は大学院の授業を持つ教員の他に、職員の参観もあった。

3. 国立教育政策研究所・平成 25 年度教育改革国際シンポジウム「TUNING-AHELO コンピテンス枠組の共有と水準規定によるグローバル質保証」

平成 25 年 12 月 10 日

場所：文部科学省講堂（後援 日本高等教育学会 協賛 日本技術者教育認定機構）

医歯学大学院係野村係長が参加した。コンピテンスにもとづく学位プログラムの体系化、国際的な学習成果アセスメントの役割、グローバル時代における大学教育の質保証について、Robert Wagenaar（Director of Undergraduate and Graduate Studies, Groningen University, Director Groningen International Tuning Academy）、Peter Ewell（Vice President, National Center for Higher Education Management Systems; Chair, AHELO Technical Advisory Group）、岸本 喜久雄（東京工業大学 大学院理工学研究科工学系長, AHELO Engineering Expert Group）らの講演とパネルディスカッションが行なわれた。

4. 学生による授業評価アンケート

実施方法の概要 現在、授業科目の評価アンケート、演習・実験科目の研究環境と研究指導に関するアンケートを日本語と同じ内容の留学生用の英語のアンケート用紙により実施している。大学院係がアンケート用紙を作成、対象学生に配布、回収して集計業務を行った。また集計結果は科目責任者にフィードバックした。

講義科目アンケート（図 1） 講義を主体とする科目アンケートは授業評価 7 項目、自己評価 2 項目、全体評価とし、無記名により各項目について 7 段階の評定尺度で回答し、さらに自由記載してもらった。13 科目 78 枚の回答が得られ、どの評価項目も概ね良い評価が得られている。フィードバックにより、さらなる改善が期待される。

演習、実験科目のアンケート 演習、実験科目についてのアンケートは後期に実施し、無記名で医系

歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導 3 項目、実験科目（研究指導）6 項目、研究中断の有無について回答を求めた。選択項目以外は、5 段階の評定尺度で回答した。

医系 44 枚、歯系 18 枚の回答が得られた。

医系（図 2）

入学年度は平成 17 年（9 年目）の学生が在籍しており、在籍期間が長い傾向が続いている。項目 7 で、「個人的理由以外での研究の中断」が 6 名（14%）となっており増加した。科目の有用性、教員の対応・支援は 8 割前後であり昨年度と同様の高い評価を得ている。自由記載では、

良かった点

- 論文を読んだり、研究の手順を学んだりできた。
- 質問等に即時に対応して頂けた。
- 研究指導については、論文（文献）の紹介や検索方法を丁寧に教えて頂き、また研究の行い方についても、メール等にて質問に答えて頂けた。
- メールによる問い合わせなどへ迅速に対応いただいた点。
- 熱心に指導してもらった。
- 英語論文を抵抗なく読めるようになったこと。
- 奨学金、RA などのおかげで、研究に専念する環境を十分に得ることができ、非常によかった。
- 倫理の講義は興味深かったです。
- プロフェッショナルになる励みになった。
- 私の実験は先生方に支持されて行われている。
- 良い環境です。
- 希望する実験と研究室で満足した。
- 私は、学部メンバーの実験の間に問題を簡単に検討することができ、適切な提案を得ることができた。

改善すべき点

- 社会人大学院生は研究費が頂けないのでつらいです。
- 電子ジャーナル(Cell と Science と Nature)を増やしてください。
- 実験科目に関して、研究の方向性が漠然として、学生自身どのように研究を進めていいのかわからなかった。具体的に実験計画を決定して、実験を進める事が出来れば、学生ももっと積極的に実験を進める事が出来たと思う。
- 授業科目は、実験面でいろいろ内容を増やしてほしい。
- シラバスが分かりづらかったです。
- 他教室で研究を行っている大学院生同士、もっと情報交換を行える機会を設けてほしかった。また、休講の連絡など、休講となっていることも度々あったのが良くなかった。
- 研究内容を倫理委員会に申請するときの手続きがわかりにくい。総論的な指導はあったが実際の内容について、どのように書いたらよいかわかりにくい、研究計画を立てたらスムーズに通過できるような仕組みがあれば助かります。
- 議論や抄読会をもっと英語でしてほしい。
- 研究者たちは、経験者に手がかりを与えている用途として必要な物事を Keep stocks しておくべきです。
- 時々私達は試薬の不足を長い間待たなければならなかった。試薬の十分な量を準備してほしいです。が上げられた。

歯系 (図 3)

学生の最長の在籍機関は8年間である。項目 4-6 は、7-8 割は良い評価であるが、一部は改善が必要と考えられる。自由記載では

良かった点

- 質問に対して、答えてもらえたことは、すごく嬉しかった。
- 論文や参考資料をたくさん読めたこと。
- 遠隔地での入学のため、配慮した対応をしていただき、有難いと思う。
- 私を教える先生や教職員は、私が私の実験をすることや私が学んだ多くの論議や参考文献をととても奨励してくれた。

改善すべき点

- さらに発展できる様なアドバイス等は欲しい
- 他科にある論文も自由にパソコンでアクセスできるようにしてほしい
- 出版物の管理の仕方や科学的な英語文献の下での書き方について知りたかったが上げられた。

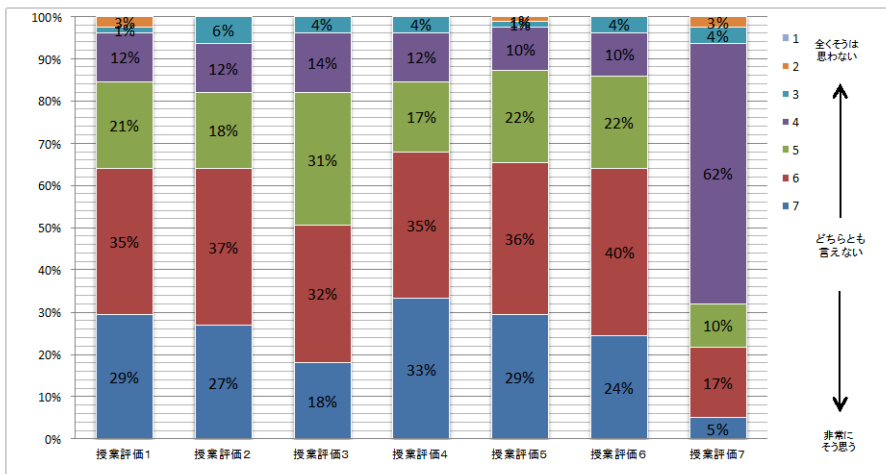
医系、歯系ともに、学生が現状に満足しつつもよりよい学習・研究環境を求めていることがうかがわれる。

医学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計(2014 後期)

集計 13科目 アンケート回収枚数 78枚

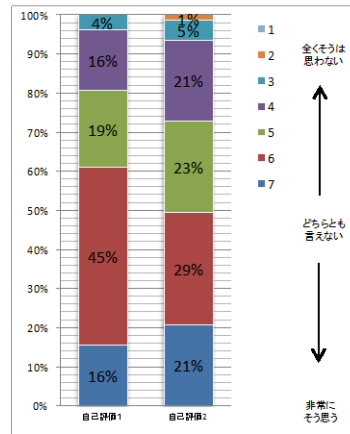
【授業評価】

- 1 この授業はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 講義内容や配付資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 6 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 7 講義時間は適切でしたか



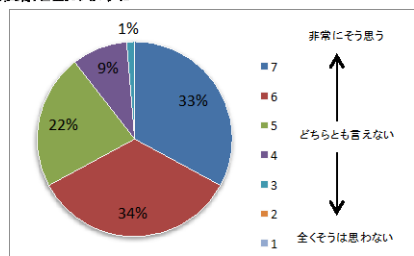
【自己評価】

- 1 この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業日は積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を勧めますか

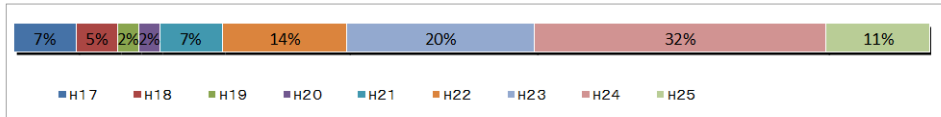


医 系

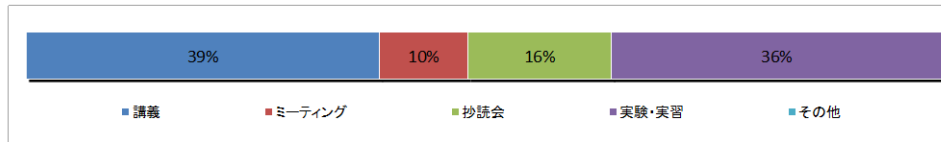
学生による授業評価アンケート(2014年 2月実施)

アンケート回収枚数(医系) 44枚

2 入学年度はいつですか



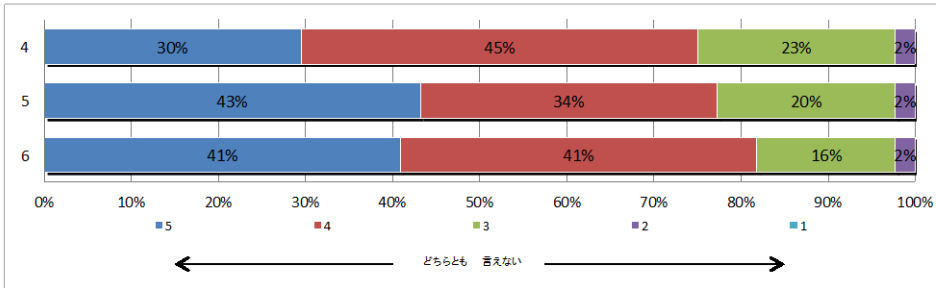
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることができましたか

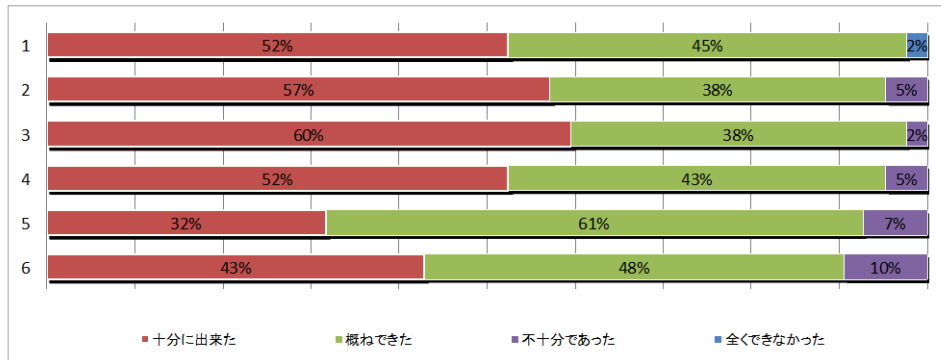
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

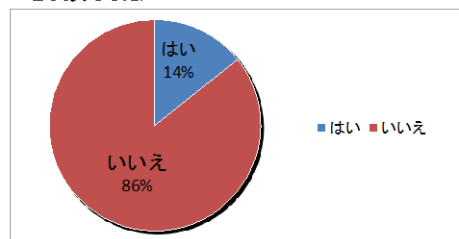
4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

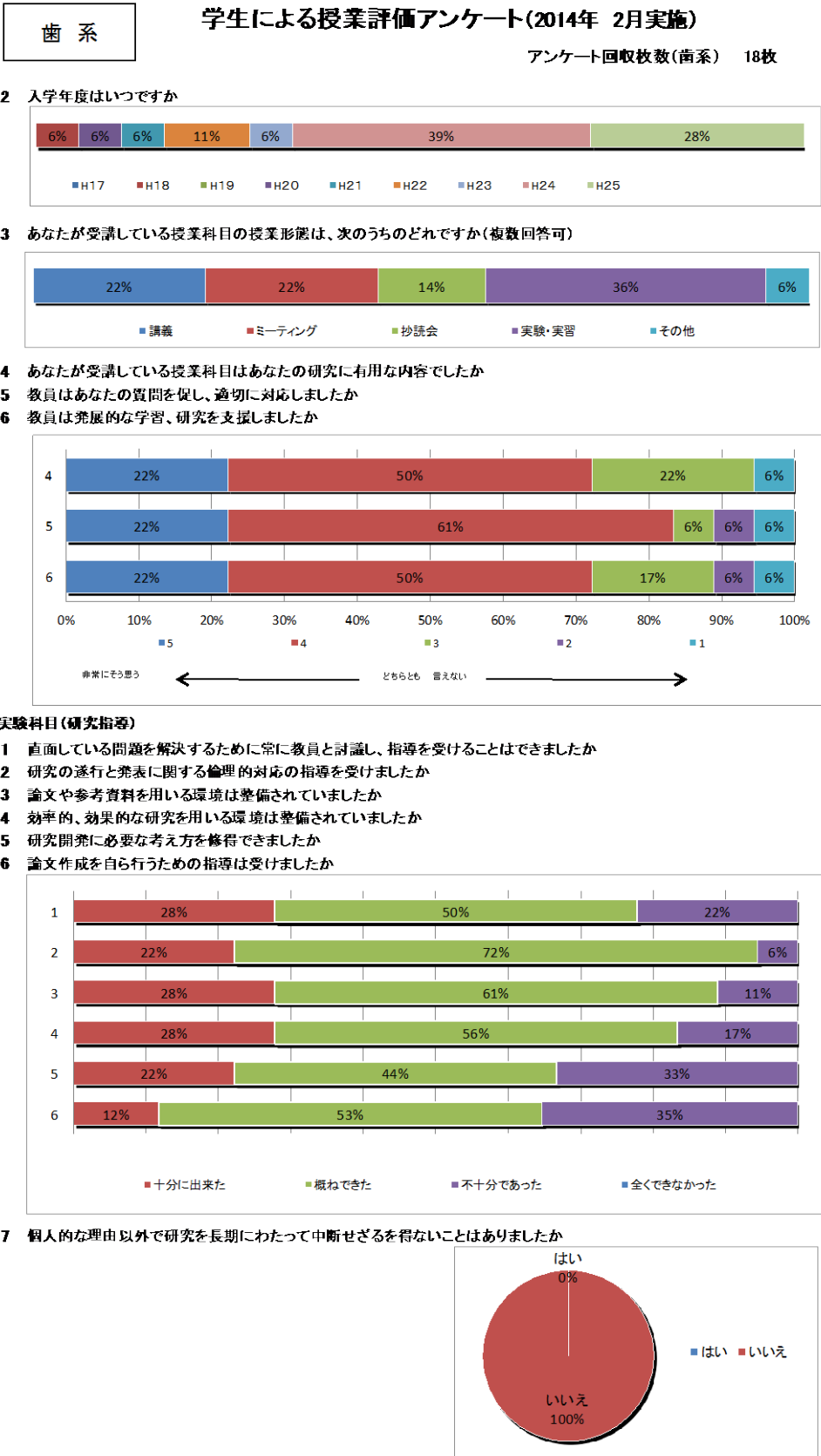
5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか



7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありませんでしたか





5. 学部学生を対象とした研究と大学院教育に関するアンケート

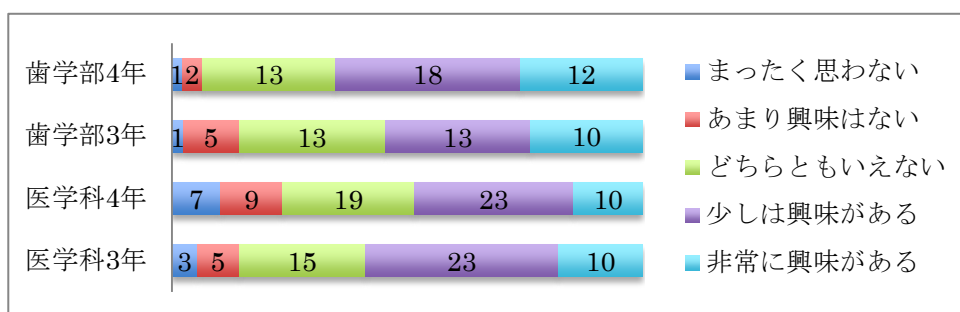
年度当初に計画した「学部学生との意見交換会」開催に代えて、医学部医学科、歯学部歯学科に在籍する3, 4年次生を対象に、卒業後に診療ではなく研究にどの程度関心を持っているか、また、研究に関連し、大学院進学に関する意識について調査するため、平成25年12月の3, 4年次の授業時を利用してアンケートを実施した。

各学部・学科の学年別回収率は下記のとおりであった。

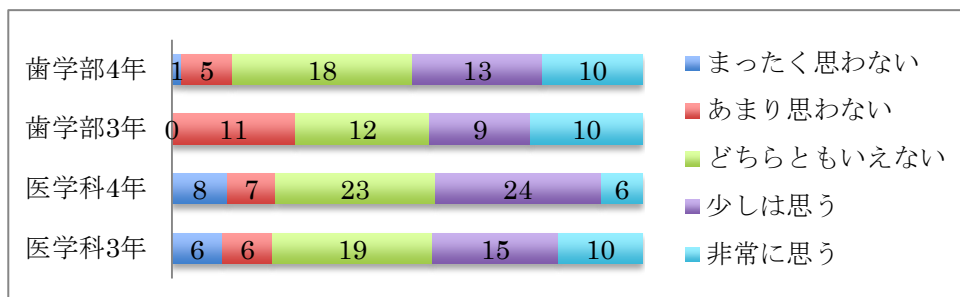
- ・歯学部歯学科4年 — 対象：47名 回収：47名 回収率：100%
- ・歯学部歯学科3年 — 対象：57名 回収：42名 回収率：73.68%
- ・医学部医学科4年 — 対象：85名 回収：68名 回収率：80%
- ・医学部医学科3年 — 対象：101名 回収：56名 回収率：55.45%

研究に対する関心

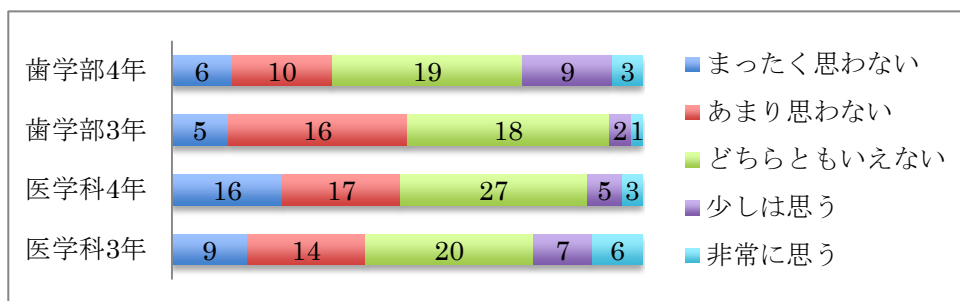
1 研究、先端医療の開発に興味はありますか？



2 将来、短時間でも研究・開発に従事したいと思いませんか？



3 将来、研究者として活躍したいと思いませんか？

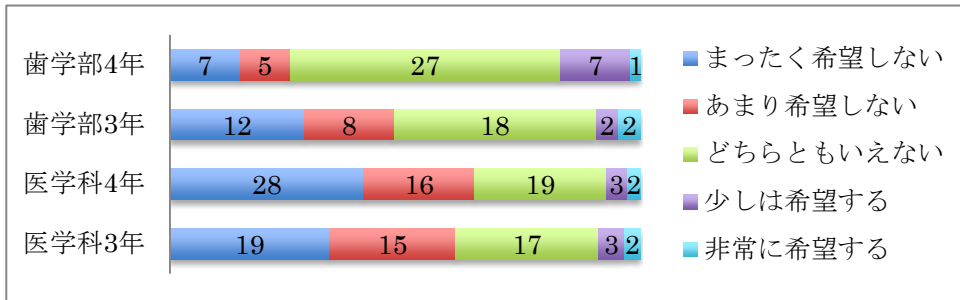


大学院進学について

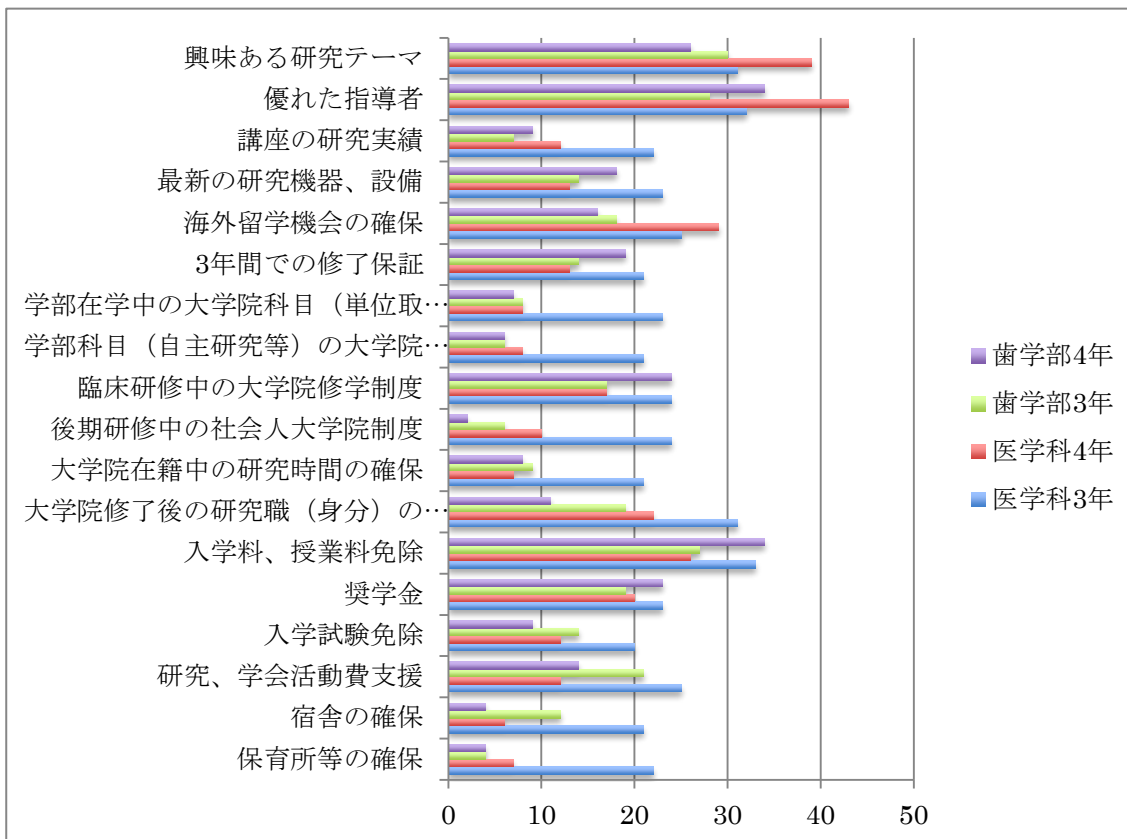
4 大学院進学を希望しますか？



5 鹿児島大学の大学院への進学を希望しますか？



6 どのような条件があると、大学院に進学しやすくなりますか？（複数回答可）



上記以外でどのような条件、支援を希望しますか（自由意見）

- ・ 学生対象の予算支援（医 3 年）
- ・ 国内・海外学会参加の補助（医 3 年）
- ・ 大学院進学を希望しておりますが、地域枠なので、入学が卒後 7 年以降になります。研究のスタートの遅れは、その後の進路にも影響すると思いますので、研修中もしくは卒後 3 年目から大学院の進学+医

局への入局という形ができればよいと思います。(医 3 年)

- 大学院修了後の臨床医としての勤務をある程度保証。(医 4 年)
- 設備にしろ、施設にしろ、それなりに世間から認識されれば自ずと人は増えてくると思う。(医 4 年)
- 大学の在る地域に根ざした研究、大学院に進むことでしか学べないことがある。(歯 3 年)
- 上記が必要だと思って条件として出しているなら、まずそれから取りかかるべきだと思う。(歯 3 年)
- 図書館のオープン時間 (24hrs など) (歯 3 年)
- 自分で生活できるだけの最低限の給料がもらえるバイトを保証してもらえると助かります。(歯 4 年)
- 宮崎大学医学部口腔外科が行っているような、働きながら大学院に通えるシステムがあればよいと思う。(歯 4 年)

研究者育成、大学院進学について自由なご意見をお書きください

- 大学院でどのようなことができるのか、どのようなシステムになっているかよく分かっていなかった中で、中身の薄いアンケート結果になってしまいすみません。大学院に行くという選択をした方をあまり知らないなので、自分で調べてみたいと思いました。(医 3 年)
- ノーベル賞クラスの業績を上げたい。(医 3 年)
- 現時点で、大学院がどのようなものであるかや、大学院進学によるメリット、デメリットがよく分からない。(医 3 年)
- 大学院進学について分からない点が多い。もう少しパンフレット配布や説明会などを増やして紹介してほしい。(具体的な講座内容、学費、単位制度など) (医 4 年)
- 臨床を目的に医学に進んできている人が多いなか、研究者を志すようになることは稀な気がします。(医 4 年)
- 研究に関する話題提供などが活発になればよいと思います。(医 4 年)
- 研究⇄臨床の移行をスムーズにできればいいのかなと思う。(医 4 年)
- 臨床でも研究はできるので。臨床を目的に入学した学生は、研究の方向にベクトルを向けることはほとんどない。少なくとも可能性は低い。手を打つなら入学前か。(医 4 年)
- 大事なことだと思うが、自分は早く臨床の現場に行きたい。(歯 3 年)
- 大学と大学院の違いがあまり分かっていないので想像しにくい。(歯 3 年)
- 今のところ、将来研究をしたいとは思いますが、例えしたくなくなったとしてもできないのが現状です。なぜなら家族(両親)が高齢なので、稼がなければならないからです。(歯 3 年)
- 大学院進学はお金がかかるので、他にバイトをしないと生活できないと聞きました。(歯 3 年)
- 院に行くことで、歯科医になるのが遅れ、他の人たちに後れをとることになるのではないかと心配(技術的に)。(歯 3 年)
- 行きたくても行けない人がいると思う。(歯 3 年)
- 周りの大学院生の話では、雑用ばかりさせられて自分の研究ができないと聞く。すべての研究室でそういうことはないと思うが、やはり指導教員や研究環境が大事だと思う。(歯 4 年)
- 大学院に行き、病院に勤め、専門医を取りたいです。(歯 4 年)
- 大学院進学、修了後、教員として大学へ就職できるようなシステムがほしいです。(歯 4 年)
- 大学院には興味がありますが、実際にどのような研究を行っているのか、他にも生活費など金銭面は学生と比べどうなのか、日々の生活に関して知る機会をもっと増やしてくれればもっと身近なものになるのではないかと思います。(歯 4 年)
- 興味はあるが、費用が気になる。(歯 4 年)
- 新しい研究分野で従事することによって世の中の役に立つことができると思えば進学してもよいと思える。(歯 4 年)

6. 桜ヶ丘キャンパス学習支援システムの活用

1) 講習会

日時	2014年1月30日(木) 16:30~18:00
主催	医歯学総合研究科 FD 委員会
共催	医学部 FD 委員会 医学科 FD 部会
会場	共通教育棟 6階 インテリジェント講義室
参加者	16名 (対象 研究科、医学部、歯学部授業担当者、附属病院教職員)
講師	村永 文学 (医学部歯学部附属病院 医療情報部)
概要	桜ヶ丘の教職員 16名が参加した。桜ヶ丘キャンパスで e-learning システムとして利用できる Moodle、学生の学習履歴書ともいえる e-portfolio システム、遠隔医療相談を実現する ITKarte システムの紹介の後に、参加者はテスト用の ID パスワードを用いて、Moodle システムを用いたオンラインでの教材の提供・レポートの収集・小テストの実施等、集合型対面教育の支援に役立つ機能を中心としたコース運営の実習を行った。事後アンケートでは、参加者は講習した機能を一部 (37.5%)、あるいは十分に使える (50.0%)、Moodle を用いた教育・研修を実施したい (75%) と回答し、講習会の成果が示された。

2) 学習者向けマニュアルの作成

今年度は医療情報部村永文学先生に桜ヶ丘 Moodle システムの学習者向けマニュアルを作成いただいた。また、昨年度作成した指導者向けマニュアルを修正した。

7. おわりに

昨年度の学外と大学院生を対象とした大学院教育に関する情報収集と、今年度の学内の学部学生を対象とした調査により、今後の大学院教育プログラムと学生支援を検討する上で有用な種々の情報が得られた。医歯学総合研究科での研究を希望する人材の確保と教育ならびに学生支援の改善に、これらの情報を活用することが期待されている。

保健学研究科

平成 25 年度 保健学研究科 FD 活動報告

1. はじめに

平成 25 年度の保健学研究科 FD 委員会の主な活動として

- 1) 学生による授業評価、
 - 2) 修士論文発表会への教員の参加と修士論文への評価
- を行った。以下にその概略を述べる。

2. 学生による授業評価アンケート

1) 対象科目と方法

対象となる授業科目は、博士前期課程では原則として受講者が 4 名以上の講義とし（3 名以下にあっては授業科目担当者の任意とする）、博士後期課程では全ての講義であった。評価方法は、アンケート調査であり、「あなた自身に関する項目」、「授業に対する評価」、「自由記載」から成り立っている。アンケートの中の質問項目 5 は、「0 回」「1・2 回」「3・4 回」「5 回以上」の選択肢から回答してもらい、その他の質問項目に対しては、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そうは思わない」「判らない」の選択肢から選び、回答してもらった。アンケート票は各授業終了までに学生に配布し、無記名で記入させたアンケートを学生に封筒に入れ、厳封の後に教務係に提出してもらうよう依頼した。

あなた自身について

- 1 この授業のシラバスを前もって読みましたか
- 2 この授業の予習又は復習をしましたか
- 3 この授業科目に関連する本（参考書や文献等）を読みましたか
- 4 授業中にノートをとりましたか
- 5 この授業を何回位欠席しましたか

授業に対する評価

- 6 授業はシラバスに沿った内容でしたか
- 7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか
- 8 授業内容に興味を持ってましたか
- 9 授業の進め方は適切でしたか
- 10 教員は授業に対する熱意がありましたか
- 11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか
- 12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか
- 13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか
- 14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか

この授業に対して、上記以外に考えたこと、良かった点、その他授業改善に役立つ意見があれば書いて下さい。

3) 学生による授業評価アンケートの結果

平成25年度は、前期開講科目13科目、後期開講4科目について実施した。アンケート調査の結果を前期開講分(表1)と後期開講分(表2)に分けて、以下に示す。

表1. 前期開講授業科目の学生による授業評価結果

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	120	28	15	10	2
%	69	16	9	6	1
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	80	48	34	16	0
%	45	27	19	9	0
質問項目	3 この授業科目に関連する本(参考書や文献等)を読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	95	44	22	16	0
%	54	25	12	9	0
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	138	30	8	1	0
%	78	17	5	1	0
質問項目	5 この授業を何回位欠席しましたか				
回 答	1	2	3	4	-
人 数	136	21	3	0	-
%	85	13	2	0	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	129	29	11	0	6
%	74	17	6	0	3
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	140	25	5	9	0
%	78	14	3	5	0

質問項目	8 授業内容に興味が持てましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	143	22	5	4	0
%	82	13	3	2	0
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	142	23	5	4	0
%	82	13	3	2	0
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	144	26	4	1	0
%	82	15	2	1	0
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	148	21	5	0	0
%	85	12	3	0	0
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	147	19	2	3	1
%	85	11	1	2	1
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	140	30	4	0	0
%	80	17	2	0	0
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	137	30	5	2	0
%	79	17	3	1	0

表2. 後期開講授業科目の学生による授業評価結果

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	21	10	0	3	0
%	62	29	0	9	0
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	8	16	7	2	0
%	24	48	21	6	0
質問項目	3 この授業科目に関連する本（参考書や文献等）を読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	14	16	5	0	0
%	40	46	14	0	0
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	29	4	0	1	0
%	85	12	0	3	0
質問項目	5 この授業を何回欠席しましたか				
回 答	1	2	3	4	-
人 数	17	12	0	0	-
%	59	42	0	0	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	21	11	1	0	1
%	62	32	3	4	3
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	24	8	0	0	0
%	75	25	0	0	0
質問項目	8 授業内容に興味が持てましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	27	7	0	0	0
%	79	21	0	0	0

質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	26	8	0	0	0
%	76	23	0	0	0
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	31	3	0	0	0
%	91	9	0	0	03
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	30	3	1	0	0
%	88	9	3	0	0
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	30	4	0	0	0
%	88	12	0	0	0
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	29	5	0	0	0
%	85	15	0	0	0
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	30	4	0	0	0
%	88	12	0	0	0

上記の表では「そう思う」と回答したものを1、「どちらかと言えばそう思う」と回答したものを2、「どちらかと言えばそう思わない」と回答したものを3、「そうは思わない」と回答したものを4、「判らない」と回答したものを5として表している。なお、質問項目5のみ、「0回」と回答したものを1、「1・2回」と回答したものを2、「3・4回」と回答したものを3、「5回以上」と回答したものを4で表している。

また、オムニバス方式で開講されている科目は、担当教官ごとに学生による授業評価を行ったため、回答数は多くなっている。なお、質問項目によっては、未記入の場合もあり、合計がこの数に満たないものもある。

4) 結果の解釈

平成25年度の学生評価では、「授業に対する評価」では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」

と回答している者が多く、概ね良好な評価が得られたが、「あなた自身について」の回答結果からは、シラバスの利用、予習・復習、さらに関連する文献等での学習の不足がうかがわれた。自由記載欄については、「為になりました」という記載の他に、授業改善に向けての学生からの積極的な意見・要望も散見された。

5) 学生による授業評価の教員へのフィードバック、

学生によるこれらの授業評価の結果は、当該科目の調査票と共に担当教員にフィードバックした。

3. 修士論文発表会への教員の参加と教員による学生論文発表の評価

各領域で、修士論文発表会に教員が参加し、学生が発表する論文について教員が質問し、意見交換を行った。発表時間は学生1人につき発表15分、質応答10分であった。また、学生の発表内容について教員が評価を行い、その結果を学務課に提出した。その評価項目は、

- (1) 発表の態度・仕方は良かったか
- (2) 発表の内容は良かったか
- (3) スライド等は良く整理され、分かりやすかったか
- (4) 質問に対して的確に答えていたか
- (5) 独自の発想で研究したことが感じられたか

であった。各項目について秀(5点)・優(4点)・良(3点)・可(2点)の4段階で評価した。また、それぞれの評価結果は、各指導教員にフィードバックされ、今後の学生への指導に活用された。

4. おわりに

学生による授業評価アンケートの結果はほぼ例年通りのものであった。返されたアンケート、特に自由記載事項について各教員が今後の授業に活かせるものとなることを期待したい。修士論文発表会へ教員の参加と教員による修士論文評価についてはこれまでよりもさらにより長い時間をかけて行うべきかと思われた。

(文責：医学部FD委員会保健学科部会長 藤野 敏則)

司法政策 研究科

平成 25 年度〈FD 活動〉報告書

(司法政策研究科)

1 組織体制

本学大学院司法政策研究科（以下、「法科大学院」という）における FD を企画・実施する組織として、鹿児島大学大学院司法政策研究科運営規則に基づき、教育活動点検評価委員会（以下、「FD 委員会」という）が設置されている。

FD 委員会の役割は、本学法科大学院の教育内容の点検・評価・改善に関すること全般にわたり、具体的な活動は、「教育活動点検評価活動の実施に関する申し合わせ」に基づいて、各年度の FD 委員会が定める活動計画によって決定される。毎年実施する活動としては、以下の各活動が挙げられる。

- ① 法科大学院における教育指針・到達目標の検討
- ② 学生による授業評価アンケートの実施
- ③ 学生による期末試験等に対するアンケートの実施
- ④ 教員相互の授業参観
- ⑤ 教員自身による映像での自己点検
- ⑥ 成績評価総括の取りまとめ
- ⑦ 授業改善のための取組みに関する報告・検討会
- ⑧ 教員の外部研修の推進
- ⑨ 外部の実務家による授業評価の実施
- ⑩ 法科大学院認証評価および国立大学法人としての各評価への対応
- ⑪ FD 報告書の作成

本学法科大学院における FD 活動は、すべての教員を対象として実施している。研究者教員と実務家教員の双方とも、専任教員及びみなし専任教員も含めて、FD 活動に参加している。FD 懇談会の開催は、学期の始めに非常勤教員に対しても案内されている。

授業評価アンケート、授業のビデオ録画、教員相互の授業参観については、専任教員の担当科目のみならず、非常勤教員の担当科目も含めた全科目を対象としている。

2 FD 活動の概要

平成 25 年度に行った FD 活動の概要は、以下のとおりである。

< 4 月 >

FD 委員会 (3 日、24 日)、FD 懇談会 (10 日)

(主な検討内容)

年間計画の作成、平成 25 年度前期中間授業評価アンケートの実施方法、平成 25 年度年度計画、等

< 5 月 >

FD 委員会 (22 日)、FD 懇談会 (15 日)

(主な検討内容)

授業評価アンケートの結果、授業ビデオ収録、実務家による外部評価結果の検証、等

< 6 月 >

FD 委員会 (11 日、26 日)、FD 懇談会 (12 日)

(主な検討内容)

認証評価現地調査の指摘事項対応、成績評価総括 等

< 8 月 >

FD 委員会 (28 日)

(主な検討内容)

平成 25 年度前期成績評価総括 等

< 9 月 >

FD 委員会 (25 日)、FD 懇談会 (11 日)

(主な検討内容)

授業評価アンケートおよび成績評価総括の様式等、学生と教員間の学修改善のための意識共有 等

< 10 月 >

FD 委員会 (30 日)、FD 懇談会 (9 日)

(主な検討内容)

平成 25 年度後期授業評価アンケート、等

< 11 月 >

FD 委員会 (27 日)、FD 懇談会 (13 日)

(主な検討内容)

平成 25 年度後期授業評価アンケートの結果、等

< 12 月 >

FD 懇談会 (11 日)

(主な検討内容)

授業評価アンケートの様式変更 等

< 1月 >

FD 委員会 (29 日)、FD 懇談会 (15 日)

(主な検討内容)

平成 25 年度後期授業評価アンケートの所感と対応、授業参観 等

< 2月 >

FD 委員会 (26 日)、FD 懇談会 (12 日)

(主な検討内容)

平成 25 年度後期の成績評価総括 等

3 FD 活動の内容

(1) 学生による授業評価アンケートの実施

教育内容や教育方法に対する学生からの評価は、①授業評価アンケート、②「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケート、③クラスワークによる担任との相談や懇談、④その他の方法を通じて実施された。

法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については、①授業中間アンケート(授業のおよそ半分を経過した、前期は5月、後期は11月)、②授業終了時のアンケートを実施している。講義終了時だけでなく、進行中の授業に対する学生の評価を把握し、開講中の講義の改善に当該学生の評価を活かすために行った。

「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケートは法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目について、期末試験が終了したのち、各科目の成績評価総括報告書が公開された時点で、学生に対するアンケートを実施して、①期末試験の出題が「基本的な法的知識や体系的理解」「法的思考能力」「事案の事実を把握し分析する能力」をそれぞれどの程度問うものであったか、②成績評価総括報告書に記載された「出題の趣旨／採点のポイント」が自身の答案を見直して復習するのに資するものであるかどうかを評価した。

上記すべてのアンケート結果は、授業で用いている電子シラバス・システムに掲載されることにより、当該科目の履修者のみならず、すべての学生に向けて公開された。また、最終アンケートについては、翌年度の担当教員が同一である場合は、翌年度のシラバス・システムの欄にも、参考データとしてアンケート結果が掲載された。

授業評価アンケート(中間・最終)の結果が通知されたのち、法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については、担当教員がアンケート結果に対する「所感と対応」の作成を行った。

(2) クラスワークによる担任との相談や懇談

クラスワークによる担任との相談や懇談では、学生を3名程度のクラスに分けて、これに対して1名の担任と1名の副担任を割り当てて、教員が学生の学修全般や学

生生活をケアした。

(3) 教員相互の授業参観

本学法科大学院においては、各教員はすべての授業を自由に相互参観することができる。また、学期ごとに最低でも1回は、他の教員による授業を参観した。

授業参観の感想・評価等については、各教員から報告書として提出され、報告書は、当該科目の担当教員に送付されると同時に、FD懇談会において回覧され、授業改善のための検討資料とされた。

(4) 授業のビデオ収録参観

授業を学期ごとに1回ずつビデオ収録し、ネットワーク上のサイトで随時閲覧できる体制を構築している。各教員は、自分自身の講義をこのビデオ映像で視聴して、改善点や成功している点を自ら点検するためのツールとして活用した。

(5) 外部研修等への参加とくに九州大学法科大学院に出かけて授業参観

教育連携を結んでいる九州大学法科大学院のFD活動への参加がある。九州大学法科大学院が実施する授業参観に参加し、他の法科大学院の授業の様子を見学して、FD懇談会で報告した。

(6) 外部による評価

平成25年5月に日弁連法研究財団による認証評価を受審し、授業や成績評価、カリキュラム等について評価を受けた。指摘事項については教務委員会と連携し迅速に対応している。また、独自の第三者評価制度として新たに実施した鹿児島県弁護士会所属の弁護士による授業評価の検証結果が提示され、研究科教員間で検証を行った。

(7) FD研修会の開催

平成26年3月に、京都産業大学法科大学院の草鹿晋一教授を招へいし、民事訴訟法分野に関するFD研修会を開催した。関連分野の教員をはじめ、多くの教員が参加し、法科大学院における学修の共通的な到達目標について理解を深めた。

(8) 成果に結びつかせるための方策・工夫

本学法科大学院のFD活動は、教員間の問題意識を共通化するとともに、その取組みを具体的な成果に結びつけるため、①情報伝達の双方向・多方向性、②日常的な意見交換の実施を重視している。

本学法科大学院におけるFD活動は、月例で開催されるFD懇談会を中核的な「場」として実施している。授業参観結果、授業評価アンケートの結果、授業評価アンケートに対する応答内容、各教員が参加した外部研修など、各教員がそれぞれに行っ

た FD 活動は、すべて定例の FD 懇談会の席上で全員に対して開示される。そして、懇談会では、各種報告書等の内容に基づいて、自由な意見交換が行われる。これによって、個々の活動を記録・蓄積するだけでなく、その成果を常に全教員がリアルタイムに近い形で共有し、即時に議論の対象とすることによって、個々の活動により得られた知見を多面的に検証し、共有している。

また、この懇談会を教授会と同頻度で定例化することによって、授業改善のための情報交換・意見交換を特別な「行事」に仕立てるのではなく、日々の教育活動や研究科運営と一体化した日常的な取組みとしている。懇談会では、FD 委員会が設定したテーマに限らず、各分野や各教員から授業や学生の状況に関する悩みや問題提起を自由に行う時間帯を設けている。

臨床心理学 研究科

臨床心理学研究科 FD 活動報告

1. はじめに

臨床心理学研究科 FD 委員会では、平成 25 年度 FD 活動として学生による授業評価アンケート、GPA による厳格な成績評価、教員による授業公開・授業参観ならびに FD 研修会を実施したので、その概要を以下に報告する。

2. 学生による授業評価の実施

(1) 実施時期

原則として、平成 25 年度前期第 1 回目が 6 月 3 日（月）～7 日（金）、第 2 回目が 7 月 23 日（火）～29 日（月）、後期第 1 回目が 11 月 25 日（月）～29 日（金）、第 2 回目が 1 月 20 日（月）～24 日（金）であった。

「臨床心理地域援助実習」（いわゆる学外実習科目）は、その科目の特殊性を考慮し、各 Semester 終了後の 1 回のみの実施とした。

(2) 各科目の評価項目

専門職大学院である本研究科では、幅広い領域で活躍する高度専門職業人養成に特化した授業科目を網羅し、それぞれ独自の質問項目を設定している。また、それらの質問項目は、必要に応じて、よりふさわしい評価項目への修正・改定が柔軟に行われることが望ましい。本年度は、「臨床心理実践研究」が新設されたこととともない、「臨床心理地域実習Ⅰ、Ⅲ」、及び「エスノグラフィック心理臨床論」の評価方法に変更が行われた。

現時点での評価項目を以下に挙げる。

<講義科目>

1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください。
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか（テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください）。
3. 授業の内容は理解できましたか。
4. 授業の内容に満足していますか。
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

<演習科目>

1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください。
2. 授業の内容は理解できましたか。
3. 授業の内容に満足していますか。
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
5. 授業を通して講義（理論）の理解や実習体験の理解につながりましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

＜実習科目＞

1. 実習を総合的に5段階で評価してください。
2. 実習での体験に満足していますか。
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか。
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか。
6. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

また、「臨床心理関連行政論」における評価項目は以下の通りである。前者は、担当教員の意向から従来の項目から若干の修正が行われた。

「臨床心理関連行政論」

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 授業の内容は理解できましたか。
3. 授業の内容に満足していますか。
4. 授業を通して臨床心理実践と社会システムとの関係に関心が高まりましたか。
5. あなたは授業を熱心に受講しましたか。

(3) 結果

結果は以下の通りであった。

表 1. 前期第1～2回目の講義科目における授業評価(3科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.7	4.4	5.0	4.0	4.8
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.3	4.5	5.0	4.0	4.8
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.7	4.4	5.0	4.0	4.6
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	2.0	4.2	5.0	4.0	4.7
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.3	4.7	5.0	4.0	4.9
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	4.0	4.8

(科目名)臨床心理学原論・臨床心理学入門・発達障害者心理臨床論

表2. 前期第1～2回目の演習科目における授業評価(1科目評価点)

(科目名) 臨床心理関連行政論	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.4	5.0	4.0	4.6
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.0	4.5
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	1.0	4.3	5.0	4.0	4.7
4. 授業を通して臨床心理実践と社会システムとの関係に関心が高まりましたか	5.0	3.0	4.6	5.0	4.0	4.7
5. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.6	5.0	3.0	4.7

表3. 前期第1～2回目の演習科目における授業評価(6科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.3	4.5	5.0	3.5	4.4
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.5	4.4	5.0	3.5	4.4
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.2	4.5	5.0	3.2	4.5
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	3.7	4.5
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.7	4.6	5.0	3.5	4.6
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.3	4.5

(科目名)臨床心理査定演習Ⅰ・臨床心理面接演習Ⅰ・臨床心理事例研究演習Ⅰ・総合的事例研究演習Ⅰ・学校心理臨床論・福祉心理臨床論

表4. 前期第1～2回目の学内実習科目における授業評価(4科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.8	4.5	5.0	3.5	4.5
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.0	4.5
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.3	4.6
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.5	4.4	5.0	3.3	4.6
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.3	4.7

(科目名)臨床心理査定・面接実習Ⅰ/臨床心理査定・面接実習Ⅲ/臨床心理実践研究Ⅰ/
臨床心理実践研究Ⅲ

表5. 前期第1～2回目の学外実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.8
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	3.5	4.7
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	(実施なし)			5.0	4.0	4.8
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	3.5	4.7
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.9

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅰ・臨床心理地域援助実習Ⅲ

表6. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価(4科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.8	4.5	5.0	3.8	4.7
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.5	4.7	5.0	3.8	4.8
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.3	5.0	3.5	4.5
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.8	4.5
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.5	4.7
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.8	4.7

(科目名)臨床心理面接学原論・臨床精神医学特論・遊戯療法論・コミュニティ心理学特論

表7. 後期第1～2回目の演習科目における授業評価(6科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.3	5.0	2.7	4.3
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.3	5.0	2.3	4.2
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	2.8	4.3	5.0	2.3	4.2
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.2	4.5	5.0	2.8	4.4
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.0	4.3
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.2	4.4

(科目名)臨床心理査定演習Ⅱ・臨床心理面接演習Ⅱ・臨床心理事例研究演習Ⅱ・総合的事例研究演習Ⅱ・エスノグラフィック心理臨床論・臨床心理実践研究Ⅳ

表8. 後期第1～2回目の学内実習科目における授業評価(3科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.4	5.0	3.0	4.5
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.0	4.4	5.0	3.0	4.5
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.7	4.6
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.7	4.5
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか	5.0	3.7	4.6	5.0	3.7	4.6

(科目名)臨床心理査定・面接実習Ⅱ/臨床心理査定・面接実習Ⅳ/臨床心理実践研究Ⅱ

表9. 後期第1～2回目の学外実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.6
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	3.5	4.6
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	(実施なし)			5.0	4.0	4.8
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	3.0	4.5
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.8

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅱ・臨床心理地域援助実習Ⅳ

3. 厳格な成績評価制度について

(1) 成績評価方法(表10)

成績評価方法は、表10の通りである。なお、この厳格な成績評価制度は、講義科目と演習科目に限られる。

表10. 講義、演習科目の評価基準

	評価	評価得点	
合格	A+	90点以上	特に優れた成績を示した者
	A	80～89点	優れた成績を示した者
	B	70～79点	合格と十分認められる者
	C	60～69点	合格と認められる最低限度の成績を示した者
不合格	F	60点未満	

(2) GPA (Grade Point Average) の計算方法 (表 11)

①GPA は、各科目の GP (Grade Point) に各授業科目単位数を乗じ、その総和を GPA 適合の履修登録科目総単位数で割って算出する。

②GPA 評価対象科目は受講生 10 名以上の講義、演習科目であり、受講生が 10 名に満たない授業ならびに実習科目は含まれない。

$$\text{例) GPA} = \{(\text{臨床心理学原論 GP} \times 2 \text{ 単位}) + (\text{臨床心理面接学原論 GP} \times 2 \text{ 単位}) + (\quad) + (\quad) \dots\} / \text{GPA 適合の履修登録科目総単位数}$$

表 11. GPA 適合科目 (講義・演習) の GP 配点表

	評価	評価得点	GP 得点	
合格	A+	90 点以上	4.0	特に優れた成績を示した者 (受講者の上位 20% までの人数につけることができる)
	A	80~89 点	3.0	優れた成績を示した者 (A+ と A の学生が、合計で 40% 以内の人数になるようにつける)
	B	70~79 点	2.0	合格と十分認められる者
	C	60~69 点	1.0	合格と認められる最低限度の成績を示した者
	不合格	F	60 点未満	0.0

※GPA の最高点は 4.0 であり、通常の 5 段階評価とは異なる。

4. 授業公開・授業参観

平成 25 年度の授業公開・授業参観は、臨床心理学研究科において喫緊の課題である DSM5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: Dsm-5) の改訂への研修を行った。「臨床精神医学特論 (担当: 土岐篤史准教授)」の授業において、ほぼ全員の教員・学生が参加して、土岐准教授に、改訂の要点だけでなく、歴史的背景も含めて講義いただいた。出席した教員・学生から、単なる解説ではなく、実践を踏まえての紹介であったために、よく理解できたと高い評価が示された。

以下の表 12 にて、平成 25 年度に実施された授業公開一覧を示す。

表 12. 平成 25 年度後期 臨床心理学研究科授業公開 (研究科内のみ公開)

科目名	担当教員	公開日時	講義室等名
臨床精神医学特論	土岐篤史	12 月 19 日 (木) 2 限	総研棟 1 階 101 講義室

5. FD研修会

平成 25 年度は下記の通り、25 年度後期第 2 回の授業評価アンケートを受け、その改善及び対応についての FD 研修会を開催した。とくに、学生諸君から出されたエスノグラフィック心理臨床論の授業としての位置づけ、学外実習の進め方といった点について、解決策が議論された。

平成 25 年度 FD 研修会

日時：2014 年 3 月 5 日（水）13:30～15:30

場所：法文棟 1 階小会議室

議題：①エスノグラフィック心理臨床論の位置づけについて

②実習オリエンテーションの進め方について

③実習年間計画の作成について

④学生とのコミュニケーションについて

⑤その他

6. 来年度に向けての課題

FD 研修会の結果、単にアンケートを実施するだけでなく、学生の授業への意見に対して、よりインタラクティブなコミュニケーションを図ることが共通の課題として教員間で再確認された。

そのために、具体的な改善として、学生の授業評価アンケートへの意見を活かすために、これまで第 2 回目のアンケートを 15 回目の授業終了時に実施していたが、来年度は 14 回目に実施し、第 15 回目には、学生の意見に対するフィードバックを行うこととなった。

7. その他

臨床心理学研究科では、授業評価アンケートの実施方法を平成 23 年度にそれまでの携帯電話などによる入力から、授業終了直後に学生による自筆の記入方法に変更を行った。その結果、学生の授業評価アンケートへの記入率が上がり、ほぼ 100%を達成し、FD 活動が確実に定着してきている。

文責：平成 25 年度 FD 委員長・安部恒久

連合農学 研究科

F D活動報告書

(平成 25 年度)

大学院連合農学研究科

平成 26 年 3 月

大学院連合農学研究科 F D 活動報告

1. はじめに

大学院連合農学研究科は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の3大学4研究科が連合した農水産学系の独立博士課程大学院で、高度な専門的能力と豊かな学識をそなえた研究者の養成を目的として、構成大学が連合し、多彩な教員組織を構築して、研究施設及び設備も連合しながら教育研究体制を整えて、社会・世界に貢献する博士を輩出することを目指している。

本研究科は、1989（昭和64年）に設立され、平成19年度宮崎大学の離脱に伴って、平成21年度に4専攻11連合講座を3専攻9連合講座に改組し、単位制導入の改革を行った。平成25年5月1日現在、日本人学生70名外国人留学生51名計121名が在籍している。

博士の学位は、12単位以上修得の上、学位論文の審査及び最終試験に合格して授与されるが、新カリキュラムとして職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成セミナーや国際農業概論などを創設することで大学院教育の実質化を目指している。さらに、地理的に離れた構成大学間の教育をスムーズにするために、年に一度連大生が一堂に会して行う農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）の実施や、多地点制御遠隔講義システムを用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。

また、本研究科では、学生1人に対し、主指導教員1人、副指導教員2人の計3人による指導体制をとっており、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課し、その達成状況の検証を実施している。

FD活動に関しては、平成19年度に代議委員会のサブ委員会としてFD委員会が設けられ、農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）を中心とした授業アンケートや修了生アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。

平成22年度は、3年に1度実施してきた自己評価・自己点検を行った。そして、さらにその自己評価書に基づき、平成12年度以来途絶えていた外部評価も受けて、21年改組後の連合農学研究科の教育システムや改善状況を把握することにした。平成24年度には、本研究科における学位の質の保証を確立し、研究者、技術者、教育者として地域社会及び国際社会に幅広く貢献できるリーダーを養成するために、3つのポリシーを策定した。

平成25年度のFD活動としては、FD委員会を4回開催し、「学生教育の改善及び教育体制の向上を図ること」をテーマに掲げ、本研究科における課題及びアンケートのデータ分析、それに伴う改善に向けた検討を継続して行った。

2. 連合農学研究科における3つのポリシー

(1) アドミッションポリシー（入学者受入方針）

農林水産学分野、すなわち生命科学に基づく食料生産や生物資源環境に対する興味と問題意識を持ち、学位取得に至るまでの熱意と能力を備え、課題解決と学理探究を目指す、学生および社会人を国内外から積極的に受け入れる。

(2) カリキュラムポリシー（教育カリキュラム・学習指針）

本研究科では、「生物生産科学」、「応用生命科学」、「農水圏資源環境科学」のそれぞれの専攻分野で、次に掲げる学位プログラム教育と高度人材養成教育を行う。

学位プログラム教育：農学に関連する幅広い学問と高度な専門知識・技能を修得させ、研究指導を通して諸課題を探索・解決する能力を向上させる。

高度人材養成教育：博士課程学生として確かな分析力・俯瞰力・説明能力を身につけさせるとともに、困難な課題に挑むチャレンジ精神やグローバルな視野の獲得など、実社会の発展に貢献できる能力を育てる。

(3) ディプロマポリシー（学位授与方針）

本研究科の定める所定の単位を履修するとともに、学術誌に発表した主論文に基づき作成した学位論文の審査及び最終試験に合格することが学位取得の要件である。なお、取得時においては以下の能力が具備されていることが期待される。

1. 「博士」として社会から期待される品位と高度な専門知識を持ち、農林水産分野の課題探求と解決に至るまでの研究を、自立的に遂行できる能力を具備していること。
2. 「研究者・技術者・教育者」として、地域社会から国際社会まで幅広く活躍できる能力とリーダーシップ精神が涵養されていること。



(多地点制御遠隔講義システムを用いた授業)

3. 「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」の開講と改善に向けたアンケート調査の結果と分析

本研究科では、3 構成大学（4 研究科）に配属されている学生が一堂に会し、3 日間の集中講義形式で「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」を実施しており、1 年次及び2 年次の2 回受講（2 単位）することを必須としている。

本セミナーは、全学生を対象として、個人の専門に偏らない幅広い農林水産学分野の知識の習得を目的としており、6 名の内外の講師による講義、全学生を4 班に分けて1 年生が各自の研究発表を行う専攻セミナー、2 年生全員（未発表の3 年生を含む。）が研究成果報告を行うポスターセッション（情報交換セミナー）で構成されている。

講義は、広範囲で専門的に高い水準のものであり、研究の視野が広がることが期待される。また、専攻セミナー及びポスターセッションは、学生にとっての発表訓練に役立つものであり、国籍を超えた貴重な交流の場でもある。

また、開設した当初から、受講生を対象にアンケート調査を行い、その集計結果の分析を参考に、授

業内容等の改善を図ることがFD活動の第一の取り組みになると考えている。

平成25年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科・農学特別講義 I (一般セミナー) 日程表

日付	時	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
11/6(木)												
								13:30	14:15	15:00	17:00	
		受 付		開 講 式 ・ 写 真 撮 影		専 攻 セ ミ ナ ー			交 流 会			
11/7(木)		9:00	10:30	10:40	12:10	13:10	14:40	14:50	16:20	16:30	18:30	
		受 付	セ ミ ナ ー A 「ナノ病原体の 植物寄生機構」 藤波 成任 東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授	休 憩	セ ミ ナ ー B 「バブアニューギニア高地社 会における「神秘的発見」 について」 梅崎 昌裕 東京大学大学院 医学系研究科 准教授	昼 食	セ ミ ナ ー C 「水田農業の環境動態 -モニタリングとモデリング の応用」 渡邊 裕純 東京農工大学大学院 農学研究科 教授	休 憩	セ ミ ナ ー D 「家畜の遺伝的改良におけ るゲノム情報の有効性」 鈴木 啓一 東北大学大学院 農学研究科 教授	休 憩	情 報 交 換 セ ミ ナ ー (ポ ス タ ー セ ッ シ ョ ン)	
11/8(金)		9:00	10:30	10:40	12:10	12:40						
		受 付	セ ミ ナ ー E 「魚類体内形成の分子 メカニズム」 越智 陽城 山形大学医学部 助教	休 憩	セ ミ ナ ー F 「バイオナノカプセルが拓く新し いDDS (薬物送達技術)、 ワクチン、診断薬の未来」 黒田 俊一 名古屋大学 大学院生命農学研究科 教授	閉 講 式						

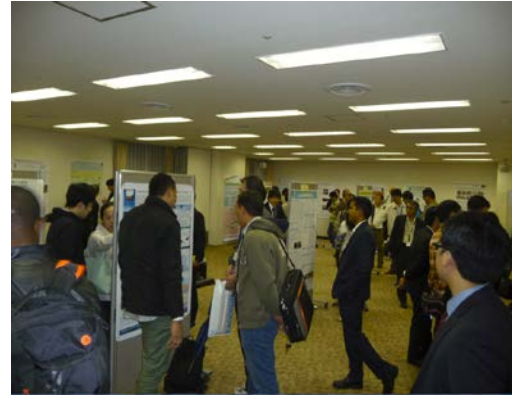
平成 25 年度は、鹿児島大学水産学部担当により、11 月 6 日～8 日の 3 日間の日程で開催され、学生 66 名、教職員 20 名の参加があり、外部講師を交えて連大教員・学生による交流会も併せて実施された。



平成 25 年度 大学院連合農学研究科 農学特別講義 I (一般セミナー)



「農学特別講義 I（一般セミナー）」の講義



ポスターセッション（情報交換セミナー）

「農学特別講義 I（一般セミナー）」参加学生から徴した平成 25 年度のアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：66 名 アンケート提出者：51 名 アンケート回収率：77.3%〕

セミナーの理解度について						
〔回答項目〕	セミナー A	セミナー B	セミナー C	セミナー D	セミナー E	セミナー F
ほぼ理解できた	23名 (45%)	28名 (55%)	24名 (47%)	15名 (29%)	26名 (51%)	13名 (25%)
半分程度理解できた	25名 (49%)	15名 (29%)	24名 (47%)	29名 (57%)	22名 (43%)	28名 (55%)
理解できなかった	3名 (6%)	8名 (16%)	3名 (6%)	7名 (14%)	3名 (6%)	10名 (20%)
セミナーの運営・企画等について				専攻セミナーについて		
〔回答項目〕	日程 (時期)	日程 (日数)	会場	〔回答項目〕	グループの分け方	
良い	46名 (90%)	44名 (86%)	41名 (80%)	良い	44名 (86%)	
悪い	3名 (6%)	2名 (4%)	6名 (12%)	改善すべき	7名 (14%)	
その他	2名 (4%)	5名 (10%)	4名 (8%)	無回答	0名	
専攻・情報交換セミナーについて						
〔回答項目〕	プレゼンテーション	ポスターセッション	交流会について			
意義がある	32名 (63%)	38名 (75%)	33名 (65%)			
少しは意義がある	16名 (31%)	11名 (22%)	9名 (18%)			
その他	3名 (6%)	2名 (4%)	9名 (18%)			
無回答	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)			

平成 25 年度農学特別講義 I（一般セミナー）アンケート調査結果

①セミナーの理解度について

・過去に実施したアンケートの学生からの希望により、平成 23 年度からほとんど日本語と英語の併用で実施したことにより、理解度が上がっていたが、今回は、併用がばらばらであったため、スライドと講義のどちらかを英語、日本語に統一して欲しいとの意見があった。

また、ほとんどの講義について、「非常に解りやすく、有意義なテーマだった。」「研究内容、研究成果、利用方法等興味深かった。」等の意見が見られたが、講義内容が膨大であったり、専門性の高いものがあったり、理解度が例年より低かったと思われる。

②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」「会場」については 80%以上の学生から「良い」との評価を得られているため、

今後も従来どおりの実施方法を考えている。

③専攻セミナー・情報交換セミナーについて

専攻別セミナーについては、意義が感じられないという意見（特に、2・3年生）が見られた。

情報交換セミナーについては、異分野の研究を知る機会が得られたり、自分の研究に役立つ情報があり有意義だったとの意見が多かった。

④セミナー全般について

- ・段取り、説明等がもう少しスムーズにいくように打合せが必要ではないか。
- ・せっかく構成大学の学生が一堂に会する機会なので、施設見学等現場の実態に触れる機会も設けていただければさらに有意義だと思う。

FD委員会において、アンケートによる意見等を踏まえて、次年度に佐賀大学当番で開催される本セミナーでは、専攻セミナーのあり方、講義における日本語と英語の統一性やコーディネーターの補助なども含めて改善していくことを確認した。

4. 人材養成学生支援セミナー I・II

平成 22 年度から、本研究科では、博士課程修了者が社会から何を求められているかを理解し、今後の修学姿勢及び社会へ出る際の心構え等の修得に役立てることを目的に、各方面の第一線で活躍する方々からより実践的な講演をしていただく機会として、「人材養成学生支援セミナー I」を開催している。

本セミナーは、選択科目であり、集中講義形式で行われ、1 単位となっている。

平成 25 年度は、佐賀大学担当のもと、8 月 1 日、2 日に 8 コマ 8 名の外部講師により、多地点制御遠隔講義システムを使用して各構成大学に配信して実施し、連大生 13 名、修士課程学生 7 名の参加者があった。

平成 24 年度から、連大学生だけでなく、研究者を目指す修士課程や学部の学生及び教職員の参加も推進しており、講師の方々の広い視野からの有意義な講話は、今後企業や研究機関の研究者を目指している学生にとって、大きな励みと貴重な教訓になったと思われる。学生のみならず、教員にとっても教育指導を考える上で、参考になるものが得られたのではないだろうか。

今後もより広い分野の講師を迎えて、多くの学生及び教職員の意識向上につながるよう実施していくとともに、より一層の協力体制を築けるように、企業及び研究機関の開拓に努力していくことも必要になってくると思われる。

FD 委員会及び代議委員会においても、来年度は、今後の改善に向けて、本セミナーの実施方法等の見直しを図るとともに各構成大学に就職活動支援担当者を置き推進していくこととしている。

また、10 月には、水産学部の練習船「新かごしま丸」に乗船して、我が国の国土とそれを取り巻く水圏に関する総合的理解を持った人材養成の一翼を担うことを目的とした「人材養成学生支援セミナー II（洋上セミナー）」を実施しており、平成 25 年度は、10 月 18 日～31 日（14 日間）の乗船により、フィールド及び寄港地高雄（台湾）での実践的な学習、高度な専門能力を涵養することを目指して、連大生 7 名が参加した。

人材養成学生支援セミナー I・II とともに継続実施し、地域社会、国際社会で幅広く活躍できる能力と意識の養成に繋がるよう、今後も整備していかなければならない。

平成25年度 鹿児島大学大学院連合農学研究所「人材養成学生支援セミナー I 2013」日程表

	8:50	9:00	10:20	10:30	11:50	13:00	14:20	14:30	15:50	16:00	17:40
1日目 8月1日(木)	開講挨拶	講義1 「大学における農業人材の育成」 下田 敏史 農研堂 取締役	休憩	講義2 「ストレスとストレスマネジメント」 原田 淳 県立広島大学 キャリアセンター長(教授)	昼食	講義3 「継続的なキャリア成長を考える: ライフプランという視点から」 川畑 弘 広島大学若手研究人材 養成センター 特任教授	休憩	講義4 「自分が主役となるキャリアパスって!？」 河野 廉 名古屋大学ビジネス人材 育成センター 特任教授	休憩	総合討論会 交流会	
2日目 8月2日(金)		講義5 「企業における先端研究とは? ~自らの経験から~」 水谷 悟 キリンKK 基礎技術研究所長	休憩	講義6 「博士課程修了者の就職活動と企業から求められる能力」 鐘ヶ江 靖史 元 文部科学省科学技術 政策研究所	昼食	講義7 「科学者・技術者と社会とのかわり の歴史」 奥井 陸雄 「博士の生き方」管理者	休憩	講義8 「日本における大学教育と留学生 のストレス~自らの経験から~」 李 應喆 佐賀大学農学部講師	閉講挨拶		

開催場所: 佐賀大学農学部1号館南棟1階学生演習室 / 各大学 SINET 設置教室(鹿児島大学連合農学研究所3階会議室 琉球大学: 農学部2階会議室)



人材養成学生支援セミナー I (佐賀市)



洋上セミナー (船上での漁獲試験後)

5. 英語論文作成指導セミナー

平成 23 年度から、学生の英語論文作成のための知識の習得・向上のために英語論文の作成法及び書き方などの指導としてのセミナーを、2 回に渡り、一部インターネットを使用して、多地点制御遠隔講義システムにより各構成大学へ配信して実施している。

本セミナーは、学生及び教員からも高評価を得ており、継続的な開催を希望する意見が多く、学位論文作成のみでなく、グローバル化に対応した、国際的に活躍できる人材を育成する上でも、実践的な教育として、今後も継続して開催していくこととしている。

平成 24 年度は、英語論文のみならず、研究者の「書く」能力の向上を図ることを目的として開催し、添削作業を取り入れ、より実践的な指導が行われた。

平成 25 年度においては、8 名の学生の参加があり、インターネット辞書利用により応用問題解説を取り入れ、的確な指導の基、高い評価が得られた。

6. 各種セミナーの開催

平成 24 年度に、琉球大学と鹿児島大学において、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的

として「分野別セミナー」を開催した。

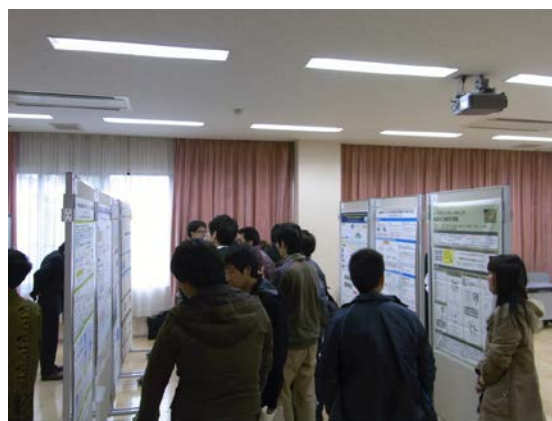
さらに、前年度好評を博したことから、平成 25 年度は、佐賀大学において農芸化学分野の分野別セミナーが開催され、外部講師による講演会、博士課程学生による口頭発表及びポスター発表が行われ、同分野に関わる工場及び研究所の見学を実施し、今後の博士論文研究の遂行と進路選択等に大いに役立つものと思われる。

なお、本セミナーには、学内外からの研究者、学生の多数参加があり、合計 35 名が集い、有意義なものとなった。今後も他の分野においても開催する機会を広げ、分野ごとに議論、研究・教育を行える環境を整備し、大学間及び地域と共同・連携した共同研究プログラムの推進にも繋がるものと期待するところである。

また、琉球大学においては、連大博士課程修了生に対するフォローアップセミナーが開催され、海外 15 名、国内 8 名の修了生及び学生・教職員 60 名の合計 83 名の参加があり、若手研究者の研究発表及び情報交換などのネットワークの強化が、今後の連大における教育研究の強化、発展に繋がるものと思われる。今後の課題として、定期的にこのような機会を設けることも視野に入れて、学生教育の向上に貢献できるよう取り組んでいきたい。



「分野別セミナー（農芸化学）」



「分野別セミナー ポスター発表」



平成 25 年度 フォローアップセミナー

7. 修了生を対象としたアンケートの実施

例年3月と9月に、修了生を対象としたアンケートを実施している。

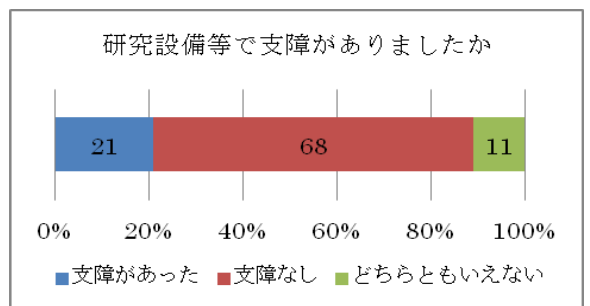
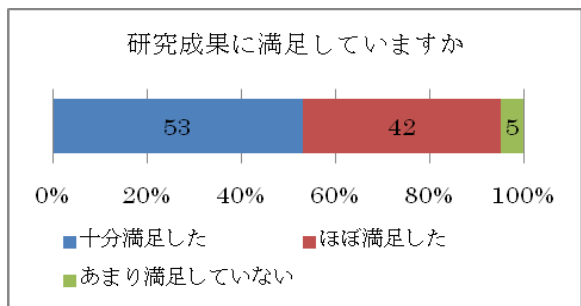
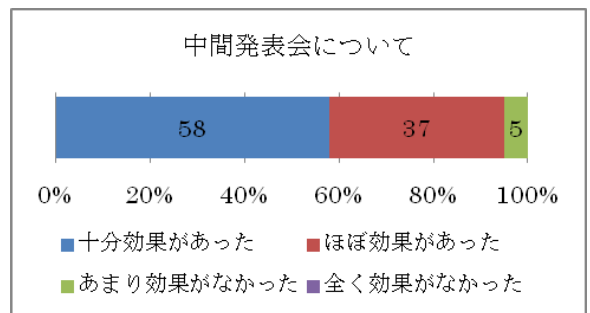
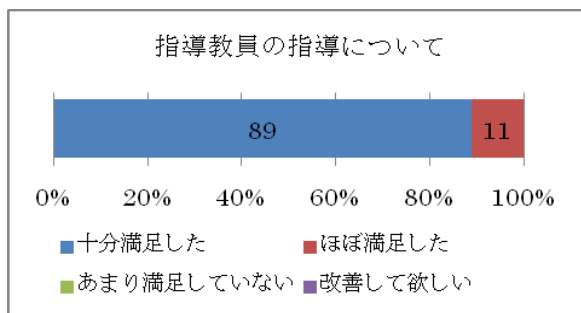
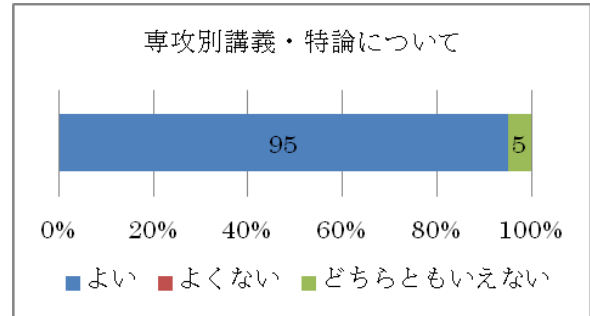
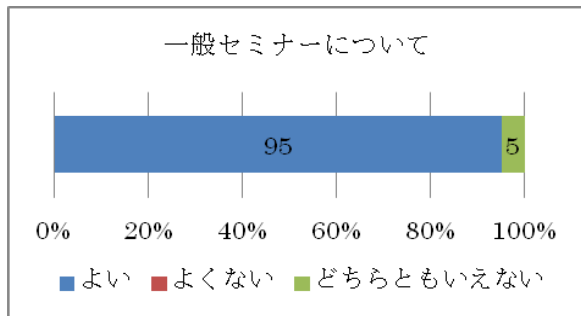
これは、自己点検・評価の参考とするため、平成18年4月に、平成11～17年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っており、平成24年度からは、アンケートシステムにより入力方式で行っている。

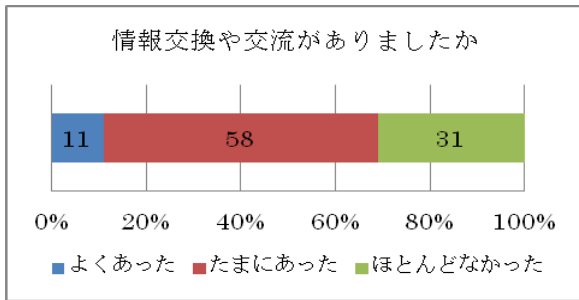
さらに、平成25年度から、在学生へのアンケートを開始した。これは、今年度の第1回FD委員会において、現在連大で学ぶ学生から一番身近な所で現場の声を聞くことが、より学生の声が反映されるのではないかとの見解から、実施を決定し、アンケート実施方法等について検討を重ね、3月実施に至ったものである。これに伴い、修了生アンケートについても開始から初めて見直しを行い、アンケート項目等の改善を図った。

平成25年度の修了生アンケートの集計結果

H25年度修了生29名中（H25.9、H26.3）、回答学生24名（日本人12名、留学生12名）であったが、アンケート項目の見直しを行ったため、今回は平成26年3月分を掲載する。

22名中19名の回答（日本人8名、留学生11名）回答率86.4%





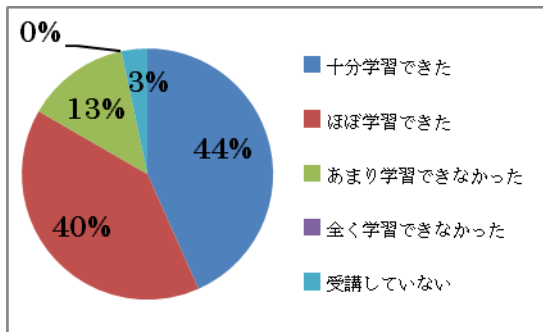
各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等への評価が高い中、他の構成大学間の情報交換や交流については、あまり交流が図れなかったとの意見があり、他の大学の学生とのコミュニケーションを深める機会を望む声が多かった。今後は、平成 24 年度に開始して大きな成果を収めた分野別セミナーの継続などを視野に入れて、構成大学間、日本人学生と留学生間の学生交流の機会の必要性を検討していくこととしたい。

また、コメントには、フィールドワークを希望する声、研究成果と社会のニーズとの関連性・情報分析などへの対応能力を修得したい、高度な研究設備があるが有効的に活用できていないなどの意見があり、平成 25 年度における FD 活動の一環として反映させるようにしたい。

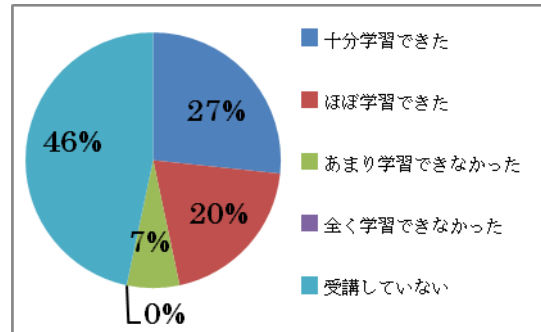
平成 25 年度学生アンケートの集計結果

対象学生 (2 年生) 35 名中、 回答学生 30 名 (日本人 18 名、留学生 12 名) 回答率 85.7%
 在籍 (佐賀 3 名、琉球 14 名、鹿児島(農)8 名、鹿児島(水産)5 名)

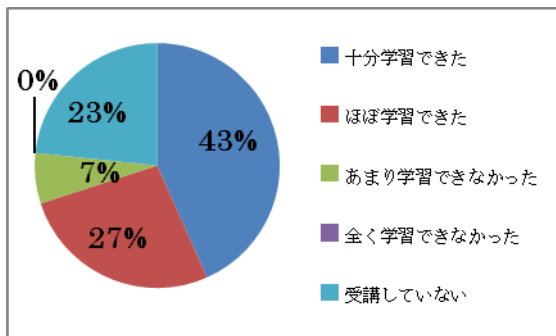
1-1 農学特別講義 I (一般セミナー)



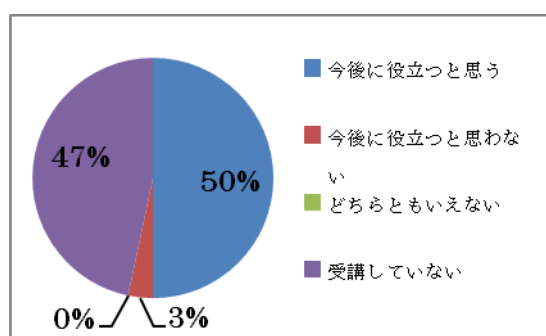
1-2 農学特別講義 II



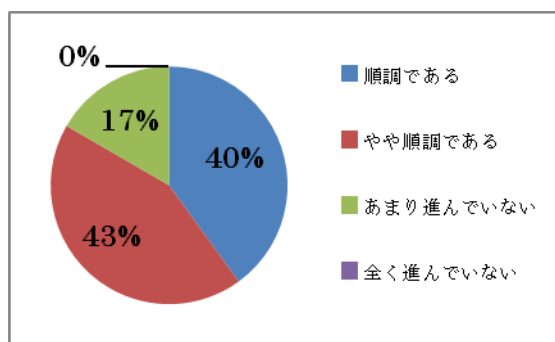
1-3 専攻別特別講義・特論



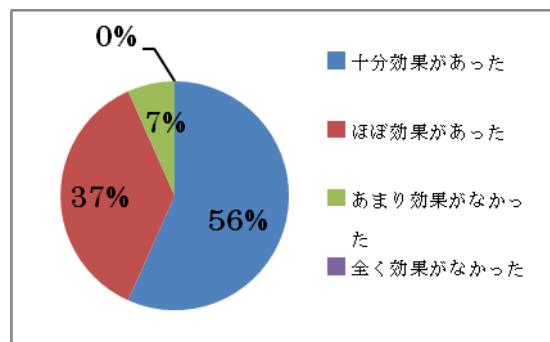
1-4 人材養成学生支援セミナー



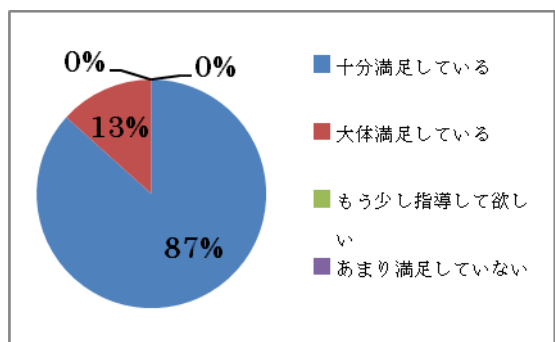
2-1 研究の進捗状況について



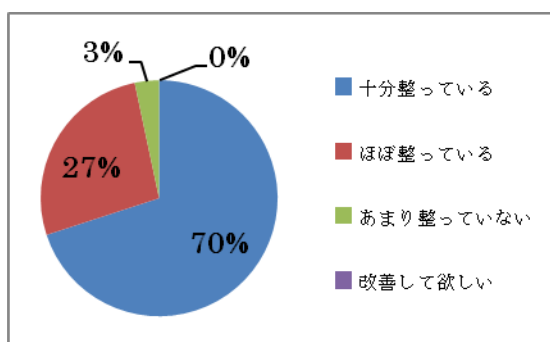
2-2 中間報告会及び中間発表会について



2-3 指導教員の指導について



2-4 研究設備・環境等について



各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等に関しては、ほぼ満足している回答が多かったが、一般セミナーでの日本語と英語の統一性や専門用語に対する補助、専攻別講義での共通項を生かした授業など、講義の実施方法への要望も見られた。

また、平成 26 年度から取り組むこととしている英語教育の向上（英語による授業拡大）については、日本語のフォロー、日本人と留学生への対処法の工夫等を望む意見があり、研究において必要とする文献、ジャーナル等及び設備に対する具体的な意見も見られ、今後 FD 委員会を中心に検討し、FD 活動の一環として反映させていきたい。

これらのアンケートについては、今後も継続して実施し、年度ごとの比較も含めてデータ分析を行い、FD 活動の源として本研究科の教育研究の将来に役立たせていきたいと考える。

8. その他の FD 活動

①ティーチング・アシスタント制度による活動実態把握

ティーチング・アシスタント (TA) 制度は、大学院学生の処遇の改善とともに、指導者としてのトレーニングの機会提供を目的として実施しており、平成 18 年度から TA 業務に従事する連大生を対象にアンケート形式の「TA 活動実施報告書」を提出させ、さらに平成 19 年度からは TA の指導を受けた学生を対象にしたアンケート形式の「TA 活動評価調査」を実施して、その内容を分析することにより TA 活動の実態把握に努めている。

また、平成 21 年度から、TA 採用学生及び当該学生の指導教員を対象に、「大学の教育理念と TA の心構え」「TA 業務に関わる注意事項」「安全衛生」を指導することを目的とした「TA 研修会」を構成大学毎に実施して、TA 活動に携わる学生への事前指導を遂行している。

今年度の報告書では、指導教員と学生との調整不足が挙げられており、今後は、TA に求められること、TA に何が必要かを見極めて、TA 学生の研究指導能力の向上に繋がるよう、教員からの指導改善を

図っていくこととしたい。

9. おわりに

本研究科のFD活動については、平成18年度末から平成19年度にかけて、FDに関する規則や委員会の整備を行い、教育研究のより一層の充実に向けた体制が整ったといえる。各種アンケートを実施し、その集計結果に対してFD委員会で意見交換を行い、次年度に反映できるようFD委員会及び代議委員会において早急に検討し、改善できる部分については、見直しを図ることができつつあると思われる。

今後は、本研究科でのFD委員会を含むさまざまなFD活動を、いかに今後の教育力、特に博士課程学生に対する研究指導能力の向上に反映させていくかが検討課題であると思われる。

現在、本研究科では標準修業年限内での学位取得率が低下しており、これまでも学位取得率向上対策の一環として、1年次に中間報告、2年次に中間発表会を義務化させ、主指導教員から1年次終了時点で「研究指導報告書」を、2年次終了時点で「研究経過の『中間報告会』終了報告書」を提出させ、研究の進捗状況を確認するシステムを導入していた。この制度をさらに有効化するために、平成23年度からは、2年生対象の「中間発表会」は、多地点制御遠隔講義システムを利用して、専攻ごとに合同で行い、お互いに相対的な進捗状況等を把握できるようにした。さらに、平成24年度からは、関係講座にかかわらず、学生及び教員ともに他の講座の発表にも参加するように推進し、自己研鑽の要素となり、研究の推進に繋がることを目指している。

また、平成25年度から在学生にもアンケートを実施し、ニーズを把握するとともに問題点などを改善していくこととしており、今後も、標準修業年限内での学位取得率の向上も含め、学生及び指導教員双方を意識した取り組みの推進を図りたい。そして、「大学院博士課程におけるFD活動とは何か」という原点に立ち返り、教育研究力向上のための一層の努力をしていきたいと考える。

平成25年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科FD委員会委員

委員長	杉元康志	研究科長
委員	山本淳	副研究科長
委員	稲岡司	(佐賀大学)
委員	野間口眞太郎	(佐賀大学)
委員	外山博英	(琉球大学)
委員	川満芳信	(琉球大学)
委員	岡本新	(鹿児島大学)
委員	西野吉彦	(鹿児島大学)
委員	板倉隆夫	(鹿児島大学)